

戦姫絶唱シンフォギア 王龍の力

(´・ω・`)しょんぼりくん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうもしょんぼりです（ゝ・ω・ゝ）

他のやつだしてていっぱいかもしいのに、書きたい衝動が押しさえられなかつたお馬鹿さんです（ゝ・ω・ゝ）

まず見ていただく上にいくつか説明をしたいと思います

- ・この作品はオリ主×響ですがこの二人が会うのはかなり先です
- ・戦闘シーンは初めて書きますのでおかしな所があったらごめんな

さい

目次

無印編

彼の日常	1
キャラ紹介	12
彼女たちの日常	15
覚醒を見たもの	23
覚醒の鼓動	29
シンフォギア	37
お人好し	44
心の不安	53
気まぐれ	60
流れ星	71
ネフシユタン	83
訓練	91
デュランダル	103
彼女の覚悟	116
黒幕	127
後ろでうごめくもの	143
旧友	155
男子会	166
平穏な日々	174
抗争	183
黒幕	190
奥義	201
黄金の塔	209

司波家	480
二人の魔術師	469
世界は広く	456
怒龍	441
悪の前に巨悪が訪れる	431
分ならず屋	418
謎の多い日	402
ヤクザの娘	393
怪物	384
謎の女性セレナ	371
アンノウン	355
来栖VS峰	346
蹴り技と無手勝流	333
謎の老人 暗躍者	316
取り立て依頼	304
再転のフィーネ	288
開幕	273
第二部	
???	270
後日談	254
残った疑問	247
嵐の後	243
最終決戦	232
強者	225
第二ラウンド	217

サブストーリー

サブストーリー No. 1. 司波道場 峰

496

サブストーリー No. 43 不運な少年

500

サブストーリー No. 50 予測不可能

505

サブストーリー No. 63 鬼の未来

515

無印編

彼の日常

響「なんで！今さら何しに来たの！」

龍士「お、俺は響が心配で」

響「嘘言わないでよ！」

雨が降り続ける中二人の人がいた、一人は女性でもう一人は屈強な体を持った男性だ、そんな雨の中、全身に水が叩きつけられているのに女性が男性の方に罵声を浴びせる

響「そんなこと言って一番に離れたくせに何いってんの！」

龍士「あ、あれは両親が」

響「うるさい！あんたなんか嫌いだ！」

龍士「・・・」

響「どっかいつちやえ！」

龍士「は!?!」

その男は夢を見ていた、目が覚めるとそこにはカーテン越しに入ってくる光と布団だけだった

龍士「はあく最悪だ」

男はそう言うのと布団から出ようと上に乗っかっているものをどかし寝室を出ようとした

その男の背中には複数の龍の顔がこちらを睨んでいた

彼の名前は司波龍士、古東会と言う所に所属しているヤクザだった、その大きさは170はあるもう身長にボディビルダーに匹敵しそうな筋肉を持っていた、だが顔みると少し不自然だった、こんな屈強な人間だからどんな顔をしているかと思えばまるで青年のような顔立ち、顔は黒く少し後ろに伸びており前髪は眉毛に届く位の長さであり、瞳は黄色、しわも少なく少し幼い顔をしている

龍士「さて、とつと行くかね」

彼はそういうとスーツを着て、支度をし、家の玄関から出つていった

山下「あ、兄貴、おはようございます！」

龍士「よお」

こんな敵つい人に声をかける人間がいた、髪は短髪で服装は古いスーツを着込んでいていかにもカタギじゃない人だった、彼は山下友野 龍士の子分適な立ち位置だ

山下「相変わらずはやいっすね」

龍士「当たり前だ、予定した時間より前にきた方がいいからな」

山下「それもそうっすね」

龍士がタバコを取り出し口に加えライターで火をつけようとした、だがそれよりも早く山下のライターが龍士の目の前まで持つていかれた

龍士「別にいいのによお」

山下「俺がしたいんですよ、いいでしょ？」

山下がそういうと彼は火をつけ龍士が加えているタバコに火をつけた、山下も自分のタバコを加え自分で火をつけた、龍士はそれを吸いながら今日の依頼のことを考えていた

龍士「今日はどんなのが来てるんだ？」

山下「回収依頼が一つ、内のシマでばかやってるやつがいるんでそいつをしめるやつが来てます」

龍士「そいつらからいくら切り取るんだ？」

山下「回収依頼の方は500ですね、馬鹿の方はよくわかってないんですけど、被害を受けたやつを考えて300か50位ですかね？」

龍士「おお、以外とでけえな、さてどうする？」

バブル時代にとって、500万でもはした金だったが、そこから落ち続けた日本では500万は大金だった

山下「え？何がですか？」

龍士は一回タバコを吸い、それを吐くところ答えた

龍士「早めに終わらせるんだつたら二てに別れた方がいい、けど安

全な方をとるのなら二人で一つづつ潰した方がいい、どうする？俺はどっちでもいいが？」

山下「なら二てに別れやしよう、そうした方がいいでしょうし」

龍士「そうか、んじやあお前どっちにする？」

山下「もちろん馬鹿やってるやつをしめるやつで」

龍士「おいおいいいのか？回収依頼の方が上がりがでけえぞ？チャンスなんじゃねえの？」

ヤクザは下積みが長い、でかいシノギをすればそれは少し多く積み上がる

山下「いいんすよ別に、それに兄貴に小さい仕事してほしくないんです」

龍士「かあく馬鹿だねえくお前」

山下「なんとも言うってください」

ヤクザの癖にへんなやつだ、普通はこんなこと考えないのに、：けど駄目だな

龍士「・・・一緒に回ろうか、時間かかるが」

山下「え、別いいですって」

やっぱりよくわかってねえなヤクザのことが、まあ俺もだけどよ

龍士「お前もこの仕事するんだつたら自分のこと考えな、他人の為に優しくするってのはこつちじやああんまり向かないぜ」

山下「で、でも」

龍士「二人でやった方が少しは覚えもめでたくなる、お前いつもデカイやつだけ俺がやってお前はその後始末や小さいシノギだけやって俺の腰巾着みたいに言われてんだぞ」

この業界に入った以上こう言うのを続けてたら多分コイツはやって行けなくなる、それを防ぐ為にも言うっておかなきゃならなかった、二てに別れるやつを言ったのは山下にデカイやつをやりたいと自分で言うて欲しかったのだ

龍士「おめえが俺のためにでかいシノギをくれるのは俺も嬉しい、でもな、お前がそれでこの仕事やって行けなくなるかもしれない、だからお前にもでかいシノギはやって欲しいんだ、それに」

少し間をおきこういった

龍士「お前にもでかいやつになって欲しいんだ」

龍士は真剣な表情をしながら山下を見ていた、自分のためになることをして欲しいと言う彼なりの言葉でもあった

山下「・・・わかりました」

龍士「別にいいって」

山下「いえ、この業界のことをちょっと甘く見えましたすみません」

龍士「わかってくれたんならいい」

龍士は携帯灰皿を取り出しタバコをそこに押し込めてこう言った

龍士「よし、行くか」

山下「はい！」

彼は目的地に向かって歩きだした、まずはシマで馬鹿やっているやつだ

龍士たちはもう1つの仕事は終わらせていた、相手の手口はわかっておりどうすれば誘き出せるかわかっていたのだ、相手が使っていた商売道具を上を持ち上げぶらぶらさせながら歩いている

龍士「にしてもこんな手に引つかかるやついるのかよ、塩を麻薬とか嘘言つて売るなんてよ」

山下「まあでも、引つ掛かった連中は麻薬買ったと思つたら塩だつたて警察にも駆け込めませんか、一応効果はあるでしょう」

龍士「まあそいつはお前がしめたしここらへんじゃもうやらねーだろ、次やったらわかんねえけどな」

そう笑いながら歩いて行くところある古いビルにたどり着いた

龍士「ここか？」

山下「ここっすね、名前も間違いないです」

龍士「んじゃ入るか」

山下「はい」

そういうと俺たちはビルの中に入って行つた

龍士「どうも」

社長「これはどうも、宮元組の方ですね？」

事務所の中に入ると真ん中の机に老けたおっさんが座っている、うちから金を借りたやつだ

龍士「金の方は？」

社長「それが申し訳ないんですが渡せないんですよ」

山下「はあ？どういうことだ？」

社長の男がそう言うと二人が入ってきた入り口から6人のガラの悪そうな男が手にバットや鉄パイプなどを持ってきて入ってきた

龍士「・・・なんのつもりだ、これ？」

社長「あんたらに返す金なんてないんですよ」

山下「てめえ、言ってる意味わかってんのか！」

山下が大声をあげて社長に言う

龍士「内もなめられたもんだな」

社長「今帰るのでしたら素直に通してあげますよ、けどまだ返せと
言うのだったら、・・・わかってますよね」

龍士「なら返してもらおうか？」

即答だった、龍士の心の中には焦りよりも安心の方が大きかった

社長「この人数相手に勝てるだけでも？」

龍士「余裕でしょ、コイツらチンピラばいし」

男1「ああ？なんだとてめえ！」

龍士は6人の男たちを見ても顔色一つ変えなかった、それは山下も同じだ

龍士「こんな狭い所で長物のやつ持つてきているだけで素人だ、広い場所や一対一ならいざ知らずこんな場所じゃかかってくるにしても一人か二人ぐらいしかこれない」

男1「う、うるせえ！」

ナイフとかだったらやりすぎとか考えてたんだろ、あまいやつだ、こんな状況でも龍士は観察していた、15歳だと言うのにまるで大人のような落ち着きだ

龍士（少し多いな、仕方ない任せる気だったが二人でやるか）

男1「もういい！お前らやっちまえ！」

龍士「山下、お前は左だ」

山下「わかりました」

喧嘩が始まった、龍士が予想していた通り二人ぐらいしか来なかった、龍士は左足を後ろにやり、右手を前に突き出し、左手は顎を守るように体の中心らへんに持っていていき構えた、男は鉄パイプを振り上げそれを龍士目掛けて振り下ろしたが龍士はそのパイプにあわせて自分の右手を軽く当て軌道をずらすと、その右手を引き相手の顔面に向けて拳を放った

龍士「おらあ！」

男2「ぶっ!？」

男は固まっているチンピラの所にぶっ飛んでいった、龍士と男たちには間があるのにまるでボールのようにぶっ飛んでいき男は壁にぶつかり気絶した、仲間はそれを信じられないような光景を見て固まっていた

男3「う、嘘だ?!」

その隙を逃すまいと、龍士は一瞬で距離をつめ男の腹に向かって蹴りを放った

男3「うがあ、おえええ」

男は腹を押さえ自分の腹から出てきそうになりうめき声をあげていた

山下「そら！」

男5「ぶう!？」

山下の方は一人を片付け龍士と同じように黙って見ていた男に向かって飛び蹴りをはなつ、すると男は壁に激突、目を回しながら気絶した

男6「嘘だろ、これ？」

男1「・・まじかよ」

4人が倒れるまで一分どころか30秒もたっていない、しかも二人は息1つ乱してない、彼らの実力が見てとれた

龍士「なんだ？かかってこないのか？」

男1「い、いや、その」

龍士「くるなら来てみるよ」

男「ひい」

龍士は顎を下げ相手を睨み付けるために目に力をこめる顔が綺麗なためかそこまで怖くはないが、男たちにはそれだけで十分だった

男1 6「ひい!ご、ごめんなさい!」

社長「お、おい!待ってくれ!」

社長はそういつて引き留めようとしたが男たちはかなわないとみて逃げ出してしまった

龍士「さてと」

社長「ま、まってくれ、俺が悪かった、か、金なら返すよ」

社長は自分の命がおしいのか金の入った封筒を取り出し龍士たちの前につきだした

社長「だ、だから、その」

龍士「ちようどいいところにあるな」

社長「な、何が?」

龍士「お前が」

龍士はそういうと社長の股間めがけて蹴り上げを軽くおこなった

社長「はふ!」

情けない声をあげながら股を押さえそこに縮こまった、龍士はその縮こまった社長の顔面に向けて前蹴りをはなつ

社長「んが!」

社長はぶつ飛び後ろにある机に激突した、社長が机の上に乗っかっている形になり鼻が折れたのか血が吹き出している

龍士は社長が落とした封筒に近づくとそれを拾い上げその封筒を社長に見せつけるように目の前でぶらぶらさせている

龍士「んじや、約束の金だ」

社長「ひ、ひい」

龍士はニコニコしながら最後に睨んでこういった

龍士「文句ねえよな?」

龍士がそういうと鼻を押さえながら首を縦に何回もふった

山下「いや、さすがは兄貴つすね、完璧でした」

龍士「言い勉強になったろ？お前もこれぐらいはできるようになつとけよ、この次はお前に任すからな」

山下「へい！にしても、なんであの馬鹿素直に金渡さなかつたんですかね？」

龍士「多分釘原組がからんでんだろ」

山下「どういうことですか？」

龍士「内とシマ争いしているから俺らに恥じをかかせたかつたんだよ、それと同時に金をとれば十分だからな、めんどくせえことしやがって」

山下「でもよかつたつすね、無事に終わって」

龍士「むこうも一枚岩じゃなかつたってことさ」

彼がそういうと腕時計を見ていた

龍士「ちよつと遅くなつちまつたな、行くぞ」

山下「へい！」

龍士が素晴らしい歩きだと山下がそれについていった

彼らが向かったのはある建物だった、その建物は自分が入っている組の事務所だった、彼はいつも通りに入り口から入り階段を上り、ある部屋に顔を出した

龍士「カシラすんません、今戻りました」

勝又「おう、ご苦労」

そこには顔に銃弾で撃たれたような後があり龍士よりすこし小さいが、ただならぬオーラを感じる男がいた、髪は茶髪でまとめている、

勝又 翔 宮元組の若頭だ

勝又「今日はどうだった？いいのを任せてたんだが」

龍士「まあ少し反抗されましたけど、無事回収しました」

中身は確認済み、後は渡すだけだ

龍士「今月分のシノギです、お納めください」

勝又「おう、二人ともご苦労だったな、ほれ」

勝又はそういうと自分のポケットから封筒を取り出し二人に渡した、多分お金だ

勝又「これでいいもんでも買え」

山下・龍士「ありがとうございます」

勝又「お疲れ様、もう帰っていいぞ」

龍士「へい」

龍士はそういうと二人は部屋を出ていった

山下「今日はお疲れ様でした、兄貴」

龍士「お前もな」

山下「俺、今から用事があるのでこれにて失礼します」

龍士「おう、お疲れ」

山下「お疲れ様でした」

山下はそういうと後ろを振り向き町の方に走っていった

龍士「んじやあ俺も行くかね」

彼はそういうと何処かへ歩いていった

日も落ちた頃、彼が向かった先は小さなラーメン店だった、彼はそ

の店の入り口の取っ手に手をかけ扉を開けた

峰「らっしやい！あれ？龍士じゃん」

龍士「よお、来たぜ」

龍士はそういいカウンターの椅子に座った

峰「ご注文は？」

龍士「いつもの豚骨特盛だ、後酒をくれ」

峰「わかった」

峰はそれを受け酒をだしラーメンを作り始め、他愛もない話しを始めた

龍士「儲かってるか？」

峰「それなりにね、まあまだ開いたばかりだからあまり来ないけど」

龍士「上手いんだ、そのうち来るって」

峰「だといいいんだけどね、ここらへんノイズの被害結構大きいからノイズ、一種の災害とも呼ばれている物、人間じゃ触れることができず逆に触れてしまうとノイズと共に炭になってしまふ、時間経過で自壊するらしいが、何処に現れるかわからないため、ノイズの自壊よりも出現地の人と共に全滅することが多い

龍士「殴ることもできねえんじや仕方ねえ、逃げるしかないのさ」
峰「お前でも駄目なの？」

龍士「前会ったが攻撃避けんのはそれほどでもねえな、そんなに速くないし」

峰「・・・お前だけだよそれ」

そういうと峰はラーメンを龍士の前に置いた、かなりデカイ

龍士「いい匂いだ、いいいただきます」

龍士はそういうと箸を手にとり食べ始めた

龍士「んゝこの濃い味がたまらん」

峰「そりやどうも」

酒を飲みながら食べていると峰が口を切りだした

峰「・・・今日未来ちゃんが来たよ」

龍士「・・・そうか」

龍士は食べながらこう聞き返した

龍士「元気してたか？」

峰「ああ、元気だったよ、いつも相方さんに困ってるらしいけど」

龍士「まだあいつボケやらかしてんのか」

龍士は少し寂しそうに言葉をはなつた

峰「なあ、会わねえのか？」

龍士「・・・」

峰「あの時はタイミングが悪かったんだ、今ならいけるって」

龍士「いや、それはねえよ」

龍士は少しつらそうな表情をしながらこういった

龍士「あいつは俺と自分の父さんのことは許していない、多分これからかわらねえだろ」

峰「でも」

龍士「いいんだよ、このままで、それに」

少し間をおきこういった

龍士「俺がこうなっちまった以上会うわけにはいかねえんだから」
ガラスでできたコップの中にある透明な酒を寂しそうに見つめなが
らそういった

龍士「わりい、こんなこと話して」

峰「いや、俺も悪い、客として来たのに失礼だった」

龍士は酒を飲みほし席を立った

龍士「勘定たのむ」

峰「わかった」

龍士は金をだし釣りを貰い店の玄関にむかった

龍士「おいしかった、またくるぜ」

峰「おう、ありがとうございます！」

峰が大声をだしそういうと龍士は店から出ていき、タバコに火をつ
け歩きだした

龍士「・・・元気にしてたらそれでいいさ」

彼はそう呟き夜の町に消えていった

キャラ紹介

主人公

しば

りゆうじ

階級 古東会 宮元組 若衆 《司波龍士》

血液A B 歳15 身長176 体重98 誕生日 5月16日

あることがきつかけで東京を離れたが両親が亡くなり孤立、あることをするために東京戻った、だがお金がなくなり路頭に迷っていた所を、古東会の三次団体の組長に拾われた、彼は趣味で格闘技を覚えたらしくそこら辺には詳しい上、その巨体に技術も持っているためかなり強いらしい

見た目はかなり厳ついがこれでも15歳

立花とは友達だったそうだが

ちなみに背中には刺青があるらしい

ヒロイン

ガングニール装者 《立花 響》

血液O型 歳15 身長157 体重? 誕生日9月13日

私立リディアン学校に通う元氣一杯な女の子、人出すけが趣味でよく首を突っ込むことが多い

龍士と何かあつたらしいが

オリキャラ

ののみや はじめ

《野々宮 一》

血液 B 歳 20 身長165 体重 65

ツヴァイウイング事変の時に謎の力を使い奏を助けた言う人、それ以来あまり使うことができならしく今はマネージャーの補佐をしている

さいとう まもる

《斎藤 護》

血液 O 歳 19 身長168 体重74

謎の力の持ち主、ツヴァイウイング事変の時に近くにおいてその力を
使いノイズの被害を食い止めていたらしい

力のことが二課にばれてしまい、仕方なく二課に協力する形になっ
た

みね たかし

《峰 孝》

血液 A 歳20 身長168 体重67

小さなラーメン店を開いている人でたまに未来たちが食べに来る
ことがある、それ以外にも龍士とは仲が良くよく来るらしい、何か隠
していることがあるらしいが

かぜかみ まさむ

《風神 真沙武》

血液 AB 身長170 歳26 体重76

風鳴家の関わりあいがある家系で彼はその三男、昔よく翼と遊ん
でいたらしく翼が遊びにきたときはよくからかうことが多い、戦闘は
あまり得意じゃなくどちらかと言うと裏方の仕事向けの人

ヒロイン

ガングニール装者 《天羽 奏》

血液 O 身長169 体重?

ツインボーカルユニットツヴァイウイングの一人でありガング
ニールの装者でもある、よく野々宮を連れ出しては買物に付き合わ
せたりしている

天羽々斬装者 《風鳴 翼》

血液 B 歳18 身長167 体重?

ツヴァイウイングの一人で天羽々斬の装者でもある、歌は綺麗だか
家事は恐ろしくできない

《小日向 未来》

血液 A 歳16 身長156 体重?

響の幼馴染で同じ学院に通っている少女、二人で行くときはお好み

焼きのフラワーと言う場所に行ってるが一人の時は峰のラーメン店に行っている、なにやら峰に会うとよく顔を赤らめるらしい

その他

二課 司令官《風鳴弦十郎》

二課の司令官、恐ろしく強いが、その強さの秘訣はよく解っていない

い

シンフォギア開発者 主任 《櫻井了子》

シンフォギアを作った人、研究者だが人には明るく接することが多

い

ツヴァイウイングマネージャー《緒川慎治》

ツヴァイウイングのマネージャーをつとめている人、二課にも入っ

ておりなんでも忍者の末裔らしい

ヤクザ

みやもと たいせい

古東会 宮元組組長 《宮元 大青》

血液 A 歳 69 身長 168 体重 72

古東会の三次団体の組長をやっている、三次団体でも結構大きい組

で組長も昔はかなり強かったらしい

背中には亀が入っている

かつまた しょう

宮元組 若頭 《勝又 翔》

血液 B 歳 48 身長 172 体重 86

宮元が組を立ち上げたときからいる、顔には銃弾で撃たれたような

後があり今でもかなり強いらしい

背中には鷹が入っている

やました ともや

宮元組 若衆 《山下 友野》

血液 O 歳 23 身長 168 体重 82

龍士を兄貴と読んで仕事のサポートをしている組員、以外に喧嘩は

強く暇な時に龍士から教わっているかららしい

彼女たちの日常

野々宮「奏さん、こんな所きてホントに大丈夫なんですか？」

奏「大丈夫だって、ちゃんと変装してるだろ？」

野々宮「いや、サングラスかけてるだけですよね？」

ある喫茶店にいる二人がジュースを飲みながら話をしている、片方は男性、茶髪で髪が少し伸びており、瞳は赤く、少し茶色や緑を合わせた渋い服を着ており、もう片方は女の子で、特徴的なオレンジ色のロングヘアーをしており、女の子らしい服装だが、サングラスをかけておりそのオーラは普通の人が出すものではない

野々宮「髪型とかそのままじゃないですか、ばれたら大変ですよ？」

奏「む、貴様、この素晴らしい髪型をいじれだと、失礼な」

野々宮「外出るときはいつもそうしてますよね?!なんで今日は違うんですか!?!」

奏「心配しようだなく野々宮は、大丈夫だって」

野々宮「うう、どうしたらわかってくれるんだ(;▽;)」

彼の名前は野々宮 一 向かい側に座っている女の子、あの有名なボーカルユニット、ツヴァイウイングの一人 天羽 奏であり、彼はそのマネージャーの補佐をしているものだ

野々宮「うう、緒川さんにばれたら怒られる」

奏「大丈夫だ、そのときは私も一緒だから」

野々宮「そういう問題じゃないんですよ」

まと外れなことを言いながらジュースを飲む奏、彼女のそんな行動を見てため息をつく彼、どうやらマネージャーには黙って出てきたようだ

野々宮「て言うか何で俺なんですか、友達とかと遊びに行けばいいのに」

奏「いいじゃん私がそうしたいんだから、あの時助けてくれたしき」

奏はあの光景が脳内にちらつく、周りを囲まれ、絶望的な状況を

野々宮「まあ、あれはその場の勢いとかだったし」

奏「それでも助けてくれたことには変わりはない、感謝してるんだ」

彼女はジュースに付いてあるストローで中身を回しながらあの光景を思いだし、それに懐かしさを感じながら答えた

野々宮「感謝してるのなら人の休日を勝手に潰さないでくれます？」

奏「こんな美人とデートしているのに不満があるのかきさま」

ちよつとふてくされながらジュースを飲む

野々宮「まあ嬉しいですよ、美人さんと遊ぶのは、でもつれ回される身にもなつて欲しいなーチラ（ω・／）」

奏「そんな目で見てもやめんぞ」

野々宮「なんでですか」

奏「楽しいから」

野々宮「ええ・・・」

ため息をつきながら頭を抱える野々宮、どうやらまだやめないらしい、けど

奏「・・・」

変装しているときはなにかしらはりつめた顔をしているのに、いまは楽しそうだ

野々宮「ふふ」

奏「？どうしたの？」

野々宮「いえ、何も」

野々宮（奏さんは嬉しそうだしいいかな？）

やはり女性は笑つてたほうがいい、そう考えていると誰かに声をかけられた

斎藤「こんな所にいたのか」

二人に声をかける男がいた、髪は赤く短髪で、帽子を被っており、瞳は黒い、その男は奏と同じくらいの身長だが、体はがっちりしている

斎藤 守 彼女たちの知り合いだった

斎藤「緒川さんが終わったら説教だつてさ、特に奏は」

奏「ええくなんでさ」

野々宮「お、俺は止めたんだよ（ハ、一一一）」

斎藤「言い訳すんなら緒川さんに言え」

二人はガクツと頭を下げ買い物や遊んでから帰った

ここはリディアン音楽院の地下にある二課本部

案の定説教された二人は野々宮の方は終わったが奏は外出するのはいいがもう少し隠してから行って欲しいとか当たり前のことで説教を受けていた

早めに解放された野々宮は齋藤と話をしていた

齋藤「お前はともかくとしてなんで奏はサングラスかけてるだけなんだよ、目立つだろ」

野々宮「俺もそう言ってるんだけどね、全く聞いてくれない」

野々宮はそう言いながらため息をついている、緒川もそうだが野々宮も大変そうだ

齋藤「ちゃんとやってやれ、そろそろ緒川さんの胃に穴が空くぞ」

野々宮「ちゃんとやってるよ、でもなんでか俺の時だけあまり聞かないんだよ」

齋藤「なんでだよ？」

野々宮「わからん(・ω・)」

二人は齋藤はそれを聞くとため息を吐いた、これはいつか何かが起こりそうだ

野々宮「そう言えば翼さんは？」

齋藤「知らん、何か野暮用とか言ってたけど」

野々宮「野暮用？翼さん何か興味あることあったの？」

齋藤「お前以外に失礼だな」

マネージャーの補佐とは思えない言葉だった

翼はある古い建物に来ていた、この建物はだいぶ前にあるらしく、たまに政府の人がでいりしたりすることがある、この家に住む人は昔から風鳴家と関わりあいがある人間がおり、翼が来たのはある人物に会うためだった

真沙武「ん？翼じゃないか、今日はどうしたんだ？」

翼「真沙武さん、おじやましてます」

建物の奥から人が出てきた、黒髪で髪は後ろに結んでおり、瞳も黒い、風神 真沙武、風神家のもので、風神家は情報調査や、政府の情報を一時記録をする係である、真沙武は記録をする係であり昔、よく翼と遊んでたらしい

翼「これ、おじさまからです」

翼はそういうとチップを取り出し真沙武に渡した

真沙武「これはどうも、すまんね」

翼「いえ、気にしないでください」

真沙武「それにしてもでかくなつたな、あの頃が懐かしい」

翼「もうあれからかなりたっています、時代の流れと言うものです」

真沙武「はは、そうだな、今ではたまたまに防人語を話すからわからんときがあるな」

真沙武は昔を思い出しながら今の翼がどう変わったのかを少し言葉にだす

翼「よ、よいではありませんか、昔とはもう違うのですよ」

真沙武「仕方ないじゃないか、あの頃の翼は可愛かったんだから」

翼がそれを聞くと目を見開き顔を赤く染めてしまった

翼「かわ、そ、そういうことはあんまり女の子に言うものではありませんん！」

真沙武「そうだったな、今でも可愛いか」

翼「で、ですからく／＼／＼」

真沙武はそうからかいながら翼が恥ずかしがるのを楽しんでいた

真沙武「ははは、悪かった、今暇か？お菓子でも食うか、丁度菓子があるぞ」

翼「おじさまから少し遊んでこいと言われたので、お言葉に甘えさせていただきます」

そう真沙武は言う二人は奥に消えて言った

響「はあく疲れたく」

疲れたような顔をした女の子が歩道を歩いている、その横には黒髪の女の子もおり、その子は隣にいるのを少しあきれ目で見ている

未来「まったく、ちゃんと勉強しないからだよ？そんなに難しい問題でもなかったでしょ？」

響「未来にとってとは簡単でも私にとっては難しいの」

どうやらテストがあったそうだが、響は少し頬を膨らましながら言葉を返していた

未来「次からはちゃんと勉強する？わかった？」

響「はくいい、未来先生」

響はため息をつきながら今日の夕飯のことについて考える

響「今日はなに食べよつかな〜フラワーは昨日行つたし別のを食べたいなく、何かある未来？」

未来「そうだね、だったら峰さんの所にする？」

響「大賛成、あそこ美味しいもんね〜」

未来「こら汚いよ響」

響はそれを聞き頭の中で峰のラーメンの味を思い出す、それで出てきたよだれに指摘をする未来、二人はさつそく峰のラーメン店に行くことにした

響「おっじやっましま〜す」

未来「お邪魔します」

峰「らっしやい！よくきたね二人とも」

響が先に扉を開けその後に未来が続き店に入っていく、二人はいつものようにカウンターに座り注文をする

響「峰さ〜んいつもの塩豚骨大盛で、後餃子とチャーハンもお願いします〜す」

未来「私はしょうゆを一つください」

峰「かしこまり、ほら、紙エプロン」

未来・響「ありがとうございます」

峰が紙エプロンを渡した、たまに学生や汚れを気にする人がいるのでその人には紙エプロンを渡しているのだ

峰はまず餃子とチャーハンを作り始めた、そのにおいが店に充満していく

響「いいにおいジュル(???)」

未来「こら響、汚いよ」

峰「相変わらずだね、響ちゃんは」

響はよだれをだしながらキラキラした目で峰を見つめている、そんな様子を見ながらまるで母親のように注意する未来、そんな光景を見ながら料理をしていた

峰「はい、チャーハンと餃子おまち、ラーメンはちよつと待ってね」

響「いったきまーす」

そういうとチャーハンにがつつく響、峰は他に客もいないので会話をしようとした

峰「未来ちゃん今日はなんかかわったことあった？」

未来「あ、聞いてください峰さん、響つたらまたテストで居残りさせられてたんですよ」

響「み、未来、それは言わないでよー」

峰「またか、これで何回めなのよ響ちゃん」

いったんチャーハンを食べるペースを落とし、返答する

響「だ、だって、難しいかったんですもん」

未来「言い訳しないの、大変だったんだから」

響「こ、ごめんなさい(´・ω・｀)」

峰「一生頭はあがりそうにないなこりや」

峰はそういつつラーメンの準備ができ彼女たちに持っていった

峰「塩豚骨大盛としようゆおまちどうさま」

響「来たー(☆▽☆)」

未来「こら響はしやぎすぎ、峰さんすみません」

峰「いいよ、今日はあんまりこないし」

未来「すみません、それじゃあいただきます」

未来と響はラーメンを食べ始めた

響「んくおいしい、やっぱラーメンと言ったらここだよね」

峰「そう言ってくれたらありがたいよ」

響「それにしても、やっぱあまり人がいないですね」

峰「うう」

響の素直な感想で心を傷つけられた峰、少し苦い顔をしている

未来「こら！響失礼でしょ」

響「ご、ごめんなさい」

峰「いや、いいよ、ほんとのことだしね」

峰「最近ホントに人が来ないんだよね、だから少し遠くに行こうかな？とか思ってるだ」

ため息をつきながら話していた

未来「そ、そんな」

響「えーいやですよ、こんなおいしいラーメン店他にないんですから」

未来「そ、そうです、こんなおいしいんですからきつと客も増えますよ」

峰「でもね、どんなにうまくても、客がこないと家も困るんだよね、ここら辺ノイズがでるからあまり人がいないしさ」

峰はため息をつきながら店のことを考えていた、響は仕方ないのかなと思いつつ餃子を食べており、未来は困った顔をしていた

未来「そ、それじゃあ」

峰「ん？」

未来「友達も連れてきます、後ここの店の噂も広めます、そしたら客も増えますよね？」

峰「まあ増えるとは思うけど学校からちよつと離れてるここにわざわざ来るかな？それに女の子ってラーメンより甘い物が食べたいだろうし」

峰はそう答える、女子の中には体のことや健康のことを考えている子が多い、それに高校生だ、大学生ならいざしらずわざわざここに来るだろうか

響「未来、仕方ないよ、峰さんだって店のことがあるんだから、そのときは多少遠くても、暇を使って食べに行こ？」

未来「で、でも」

峰「・・・」

確かに場所を知っているのなら休日使って食べに行けばいい、だが

未来は帰りの僚から近いこの場所がいいのだ未来は峰さんにできるだけ遠くに行つて欲しくないのだ

未来は寂しそうな顔をしていると峰が未来ちゃんの頭に手を置きその柔らかい髪をあまり崩さないように撫でた

峰「仕方ないな未来ちゃんは」

未来「ご、ごめんなさい」

峰「そこまで言うのなら未来ちゃんが卒業するまでここにいようかな？」

未来「ほ、ホントですか!？」

峰「ホントホント、引越はその後でもいいでしょ」

響「やったじゃん未来!」

響はそう喜び二人でハイタッチをする、未来も嬉しそうだ

峰（もう大丈夫かな？）

そう考えて手を頭の上からどかす

未来「あ・・・」

峰「?どうしたの？」

未来「い、いえ、あの」

未来は顔を下に向けながら目を上に向け恥ずかしそうにしながらこう言った

未来「もう少し、撫でてくれませんか？」

峰「別にいいよ」

未来「ん・・・」

峰はそう言うのとふたたび手を頭の上に置き撫でる

響「それじゃあ私もお願いしま〜す」

峰「はいはい」

そう言うのと空いてる手の方で響の頭を撫でる、二人とも嬉しそうな顔をしていた

覚醒を見たもの

アナ『昨日、○○地点でノイズが発生したとの情報がありました、ですが自衛隊の迅速な活動により被害は最小限に抑えられたとのことです』

龍士「またこの手の話か、最近多いな」

山下「仕方ないっすよ、この町ノイズがでるの何か多いようですよ」
そう山下が言う、彼はシノギを終えステーキ店で夕飯を食べていた、いつものスーツ姿で山下はステーキ一つだけなのだが龍士は体がかいたためかステーキ大を4つも食べていた

龍士「別のやつが愚痴ってたな、シノギをする場所がノイズのせいで潰れたって」

山下「内の組も被害を受けるときがあります、でももつとひどいと組員がノイズに襲われるって場合もあるらしいです」

龍士たちは食べ終わり金を払って店の外にでた、龍士はタバコを取り出し口に加え山下が火をつけた

龍士「仕方ねーよ相手は触れば終わりの特攻野郎だからな、しかも攻撃が効かないと来たもんだ、むしろなんで自衛隊の連中あまり死なねーんだらうな？」

山下「さあなんででしょうね、何か秘策でもあるんでしょうか」

龍士「あつたらそれを教えてもらいたいね」

山下「まあどうせ機密がうんぬんかんぬん言われるだけでしょうけど」

龍士「違うない」

龍士たちはそういうと事務所の方に歩きだした

シノギの金を渡し、勝又から褒美をもらった龍士は、山下と別れて帰宅の途中だった

龍士「さて、峰の所でも顔だすかね」

龍士は峰の店まで行くことにした、町中を歩いていると妙な違和感が出てきた

龍士（なんだ？夕方にしても人が少なすぎるような）

今は夕方車道を通る車どころか歩道を歩く人影すらもない、いやそもそも周りからあまり人の気配がしない

龍士（まさか、この感覚は）

以前にもあったのだ、周りから気配が消え、襲われることがあった、それと同じだ、嫌な予感がして近道で裏道を通り帰ろうとした、そして表に出たとき

周りに少し積もっている炭があちらこちらに散らばっていた

龍士「ちっ、ノイズか」

龍士がそう呟くとまっていたと言わんばかりに周りから警報の音が聞こえてきた

龍士「とりあえず逃げるか」

こんな所には長いできない、そう考え行動しようとしたとき？「うええええーん!!」

龍士「っ！」

後ろの方から子供の声が出た、声からして多分男、距離はそんなに遠くなく、多分表の歩道にいるのだろう

龍士「ちっ！仕方ねえな！」

龍士は振り返りその声の元にむかった

龍士（いた！）

思ってたとおおり、歩道の方で小さい男の粉が泣き崩れている、龍士は目線を合わせるように座り声をかける

龍士「おい！大丈夫か」

男の子「う、ひっく」

龍士「父さんと母さんは？」

男の子「さっきまで、一緒にいたんだけど、はぐれちゃって」

龍士「よしわかった、とりあえずシェルターまで行くぞ」

男の子「う、うん!?お兄ちゃん後ろ！」

龍士はその言葉を聞いて嫌な予感がして振り向きたくはなかった

が、その言葉を聞き反射的に向いてしまった

そこには変な形をした生き物がいたカエルのようなやつや人と似たような形をしているのもいる、しかし体は透けており体越しに向こうの風景がかすかに見えた

龍士「っ！」

男の子「お、お兄ちゃん!？」

龍士「俺の服何処でもいいから掴んでろ!!」

男の子「わ、わかった」

龍士は即座に子供を背中に乗せ指示をだした

龍士「いいか!今からお前を背負って逃げてやる!一秒たりとも手から力抜くんじゃねえぞ!死ぬからな!」

男の子「う、うん!」

龍士「いい返事だ」

龍士は即座に頭を回転式させた

龍士(目の前にいるのは20、多分他にもどっかにいやがるはず、ここからシエルターまで少し遠いが走っていけば問題ない、けど子供の体力じゃもたないはずだ、途中で車を拾うか)

龍士は即座に行動をする、まずノイズとは反対の方向に逃げる、するとノイズはこっちにむかって走ってきた、だが龍士のほうが走るのが速く、とてもノイズが走って追い付ける速度じゃない、順調に離れていっているとノイズが何体か立ち止まり細長い棒見たいな形に変化してこっちに突っ込んできた

龍士「ちっ」

龍士は少し速度を落とし後ろを見ながら回避を優先した銃弾のように小さかったらあまり避けれないが元が大きいのとある程度見えるので避けるのはそんなに難しくなかった、しかし回避をしていたら少し先にもノイズが現れた

龍士「っ！」

男の子「うわ!？」

龍士は即座に90度左に曲がり建物に向かって走りだした

龍士は脚に力を入れジャンプをした、5〜6mぐらい飛び上がりそ

の建物二階のフェンスに足をかけさらにジャンプした、そして屋上に
あるフェンスに掴まり逆上がりの要領で回転し途中で手を離し着地
した

男の子「す、すごい」

龍士「喋んな舌噛むぞ！」

龍士はまた走りだし建物から建物へと移り移動して行った、ある程
度移動すると龍士は下とその周りを確認、ノイズがないことを確か
めおりた、そして車の窓を壊し鍵を開け中に入った

龍士「鍵はあるな、燃料も問題なし、ちゃんと教育がいい証拠だな」
だいたい車両関係の免許を持つとき災害時には車両の鍵は刺した
ままにするのが義務付けられている、龍士は少年を助手席に座らせ
シートベルトをつけさせ自分は運転席に乗りシートベルトをつけ車
にエンジンをかけた

男の子「お兄ちゃん運転できるの？」

龍士「一応な、この体格だから歳誤魔化しやすいからな普通車は運
転はできる」

そう言う龍士は目的の場所まで車を走らせた、しかしその進路上
にノイズが道路を塞いでいた

龍士「しつげえな！おい！ちよつと荒くなるから掴まってろ！」

男の子「う、うん！」

龍士はそういうと歩道の方に突っ込んで行った、幅が狭いため車に
は物がぶつかり傷付いてしまいが構ってられなかった、ノイズたちを
追いつくとノイズはまた体を変化させてこちらに突っ込んで来た

龍士「ちつ！」

龍士はなんとかハンドルを左右にきりながら運転し当たらぬよう
にして回避した、そして途中で右折し橋を渡りシエルターまで急いだ

しばらく車を走らせているとノイズたちが追って来なくなった、追
うのを諦めたのだろう、日はもう暗くなり、あたりが一面暗くなって
いて、所々に光がある、どうやら停電はしてないようだ、龍士はシエ
ルターから少し離れた所に車を止め隣で寝ている少年を起こした

龍士「おい起きな」

男の子「ん、着いたの」

龍士「一応着いたよ」

少年がシートベルトを外し、助手席を降りた、龍士も同じように降りて少年に目線を合わせ話をする

龍士「いいか、坊主、ここから少し進んだ所にシエルターがある、その前には警察の人がいるからその人たちに保護してもらおうんだ」

男の子「お兄ちゃんは？」

龍士「俺は少し用事があるからいけねえ、その人たちに保護してもらった後、落ち着いたら親を探してもらえ、いいな？」

男の子「うん」

龍士は優しく声をかけ少年はシエルターに向かって歩きだした、途中で少年が立ち止まりこちらに振り向いた

男の子「お兄ちゃん！ありがとう！」

龍士「おう」

少年はそう言うのとシエルターの方に歩いていった

龍士「さて、俺もどつか隠れるかね、シエルターには入れないし」
車を運転しながらそう言った

龍士がシエルターに入らないのは理由があった、ヤクザがシエルターの中になんて入ってきたら中の人たちに追い出されてしまう、だからヤクザたちはどの位置でノイズが現れた場合、何処に隠れるのかをある程度決めているのだ、龍士はとりあえず知り合いの安否を確認するためにスマホをだした

龍士「すいません、おやじですか？」

宮本『龍士か？無事だったようだな』

電話越しに酒焼けした声が聞こえる、宮本 大青、龍士が入っている宮本組の組長だ

龍士「おやじも無事で何よりです、今何処に？」

宮本『今勝又と一緒に車にのって〇〇らへんにいる、お前は？』

龍士「俺も今そっちに向かってます」

宮本『そうか、周りには目を配っておけ、いつ現れるかわからんかな』

龍士「わかりやした」

龍士がそう言ったら宮本が電話を切った、龍士も車を走らせ目的地に向かおうとしたときに左から光が見えた

龍士「なんだあれ？」

工場地帯らへんから一筋の光が立ち上っている、その光景に目を奪われそうになりながらも優先事項を思い出す

龍士「今はおやじと合流すんのがさきだ」

龍士はそう言い聞かせ車を走らせた

覚醒の鼓動

響「大丈夫、大丈夫だからね」

少女「うう」

響はあの警報が鳴った地域にいた、その後避難しようと思ったが、龍士と同じで子供を助けていたのだが、身体能力が高すぎる龍士と違い、響では子供を守りながらノイズから逃げるのは無理だった、とうとう追い詰められ、万事急須かと思われたとき、響はある言葉を思いだした

? 「生きるのを諦めるなあ!」

響「そうだ、私は生きるのを諦めない!」

その言葉を思いだした響は決意し子供を逃がそうとした、そのとき胸から沸き上がってき歌を唄った

B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o
n

そのとき響の体から光が出てきた、その光でその一面がオレンジ色の光で照らされていた、響もそれに驚いていたが彼女の体に変化が起きた

響「あがつ、があ、ああああ!!」

突如響の背中から機械のようなものが飛びだしてきた、そのとびたして来たものは響の中に戻るように引っ込んでいき、そして再び出てきた、それを繰り返ししていると響の体にライダースーツのようなものが着せられ、腕と脚に白とオレンジ色でこうせいされたアーマー見たいなものが着いていた

響「はあ、はあ」

光が消え謎の現象も静まった

少女「お姉ちゃんかっこいい!」

響「かっこいいって、うわ!?なにこれ!」

どうやら今気づいたようだ、響は変化についていけず混乱していた響「な、なにこの姿、いや、それよりもこの子を」

響は少女を腕に抱き抱え、どうするかを考えているとこちらにノイ

ズが突っ込んできた

響「私に掴まってて！」

少女「う、うん！」

響はそういうと脚に力を入れノイズとは逆方向から飛んだ、すると響「え!?!」

自分が予想していたよりも数倍飛び上がってしまった、そのせいでタンクよりも高い位置から落下するはめになった

響「うわあああー!!」

そのまま脚で着地し、終わったかと思っただが

響「あ、あれ？」

なんともなかった、あの高さから落下しなんともないのだ

少女「お姉ちゃん後ろ！」

響「!?!」

響はその事に驚いていると後ろからノイズが近づいてきた、至近距離でノイズかこちらに手を振りかざしてきた

響「こんのおお!!」

響はノイズに向けて腕を振り抜いた、すると当たったノイズは炭となり消えていった

響「た、倒せた」

普通はありえないことだ、ノイズに触れば死ぬのにノイズだけが炭となった、響は何が起こっているのかよくわからずに混乱していた、そんなことを考えているとノイズの群れがこちらに近づいてきた

少女「お、お姉ちゃん」

響「大丈夫、お姉ちゃんがついてるから」

そんなことを言ったものの数が数だ、正直守り切れるわけがない、どうするか考えていると後ろからバイクの音が聞こえてきた、響が後ろを振り向いたらそこにはバイクに乗ってこちらにむかってくる人がいた、そのすぐ後ろにはもう一人乗っている、その人たちがバイクから飛び上がった、バイクはノイズの方に突っ込んでいき衝突すると爆発した

Imyuteus amenohakiritron
Croitzalronzell Gungnir zizzl

バイクから飛び出した二人は歌を歌った、すると彼女たちも光を放ち姿を変えた、一人は青と白のインナースーツでもう一人は響きと同じ色で二人とも所々にアーマがついている

翼「惚けない、死ぬわよ」

響「は、はい！」

翼「あなたはその子を守ってなさい」

奏「後は私たちにまかせな」

二人がそう言うのと駆け出した、翼は剣を取り出し、奏は腕についてあるアーマーを槍に変形させノイズと交戦した、翼は洗礼された動きで敵を倒し、奏は多少荒々しいがどンドンノイズを倒していく

響「す、すごい」

斎藤「ぼーとすんなって言われたろ？」

突然後ろから声をかけられた、そこには赤髪で帽子を被っている人と隣にはスーツを着て何か機械のような物を構えている

野々宮「仕方ないよ、多分状況わかってないだろうから」

斎藤「まあ、そうだな、と言うか俺らいるか？」

野々宮「まあこの子を守ればいいでしょ、俺は撮っとなきやだけど」

斎藤「んじゃ俺ここにいるから頑張れよ」

野々宮「でもすぐ終わりそうなんだけどな」

野々宮はカメラを持ちながら奏たちの戦闘を撮影していた、斎藤は特に何にもすることがなくただ響の隣にいただけだった

響「あ、あの」

斎藤「ん？どうした？」

響「なにがどうなってるんですかね？」

斎藤「それは後で、まあ嫌でも聞かされるとは思うけど」

そんなことを話していると翼が大型ノイズに止めをさそうと自分の剣を巨大化させた

翼「はあああ!!」

剣を巨大化させそれを蹴るようにして大型ノイズにむかつていった、直撃した大型ノイズは炭となり風に流されながら消えていった

響「か、かつこいい」

野々宮「はは、そうかもね」

野々宮が響に近づき話しかけた

野々宮「えくと今から政府の人たちがくるから一緒に来てもらえな
いかな?」

響「ええ!?なんでですか!私なんもしてせん!」

野々宮「まあ、その、今君が着ているもので話があつてね」

響「は、はあ」

響は落胆し野々宮は少し申し訳なさそうだった

ノイズの騒動のあと、黒いスーツを着た人たちが来て周りの後処理
をしている、響はどうしていいかわからずその場に立っていると後ろ
から声をかけられた

友里「あの」

響「あ、はい」

そこには制服をきた女性が立っておりその手にはコップがあり湯
気がたっている

友里「あつたかいもの、どうぞ」

響「あつたかいもの、どうも」

響はそれを口に運んだ、少し冷えた体が温かくなっていく

響「はあく美味しいくて、あれ!」

味を堪能していると響が纏っていた鎧が消え、いつもの制服に戻っ
た、そのことに驚いてしまい後ろに倒れそうになった

響「はわわわ!」

奏「おっと」

奏がそれを受け止めた

響「あ、ありがとうございます!」

奏「どうも、どうかした？」

響は礼を言おうとしたが奏の顔を見て固まった

響「奏さん!? ツヴァイウイングの!?!」

奏「そ、そうだけど」

響「私です! あの二年前の時に助けてくれましたよね?」

奏「二年前?」

奏が考えていると他から声がかげられた

野々宮「覚えてない? あのとき奏さんが絶唱歌おうとしたとき守つてた女の子」

奏「ああ! あのときの、よかったあくちやんと生きててくれたんだな」

響「はい! 奏さんのおかげで今まで生きてこれました、ありがとうございます!」

響はそう言うのと頭を下げた、奏は少し困った顔をしながら見ていた

野々宮「あのく響ちゃん?」

響「はい?」

野々宮「色々と説明したいことがあるので一緒に来てもらえないかな?」

響「や、やっぱり行かないですか?」

野々宮「うん」

響は少し迷ったがああ現象のことを聞きたかった

響「わ、わかりました、お願いします」

野々宮「よし、それじゃあ車に乗ってくれる?」

そう言うのと彼は黒い車をさした、響は後部座席にのり響を挟むように黒い服を着た人が座った

響（あれ? なんか悪い人を護送しているような感じが）

響はそれを感じたが逃げられない、車は発進し、そのまま行ってしまった

響「え! ここつてリディアン!?!」

車がついたのは響が通うリディアン音楽院だった、黒服の人たちと

響たちは中に入り廊下を歩いていった、そしてエレベーターにたどり着き乗り込む、男が端末をエレベーターにかざすと扉がしまった、それと同時に取ってみたいなものが出てきた

響「あのくこれは？」

斎藤「取って、掴んどいたほうがいいぞ」

響「え、はい」

響が取ってを掴んだ瞬間いきなりエレベーターが急降下した

響「うわあああああああああ?!?!」

急に落ちたので間抜けな声をだす響、少したつとそのスピードにもなれキョロキョロあたりを見渡した

響「あのくここから何処にいくのでしょうか？」

野々宮「それは行つてのお楽しみかな？」

翼「愛想は無用よ」

響「え、はい」

野々宮が優しく声をかけてくれたが翼にあつさり蹴られた、するといきなり奏が翼の頬を引っ張った

翼「?!いひやいいひやいかひやで！」

奏「つくばくさ、こういう時は優しくするもんだよ」

翼「わかつひやわかつたひやはなして！」

翼がそう言うとき奏は手を離れた、翼は奏につねられた頬を押さえながら涙目になっていた、そのことを見てみるとエレベーターの景色が変わった、周りには古代文明が残したような壁画があった

響「うわく」

斎藤「相変わらず変な所だ」

野々宮「なんでこんな風になったんだろうね」

そんなことを話しているとエレベーターが止まり扉が開いた響たちは中から出て廊下を歩きある扉の前についた

響（こ、この扉の向こうにはなにが）

響は唾液を飲みながら翼たちにつられて扉を開けはいった、しかしいざ入ると最初にクラッカーの音とパーティーグッズの音が鳴り出した、その上には「熱烈歓迎！立花 響様！」と書かれた垂れ幕もある

弦十郎「ようこそ！人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へ！」
声がする方に目をやると赤いシャツを着た男がシルクハットを被りながら拍手をしていた

響「・・・え？」

斎藤「俺たちの時もなかったか？」

野々宮「懐かしいね、俺たちとまったく同じ反応してるし」

響はその光景に驚き、斎藤たちは何処か懐かしんでる、するとメガネを掛けた白衣の女性が響に近づき自分に抱き寄せ片手にスマホを掲げる

櫻井「お近づきの印にツーショット写真を1枚」

響「え、あ、はい」

響が苦笑いしながらスマホのボタンが押される、音がなり女性が離れた、響は垂れ幕を見て頭から離れていたことを聞いた

響「ちよつと待ってください、なんで私の名前知ってるんですか!？」

赤いシャツの男がステッキを持ちながら答えた

弦十郎「我々二課の前身は、大戦時に設立された特務機関なのでね。調査などお手の物なのさ」

櫻井「ふふーん♪」

男はそう言うのとステッキから花を咲かせた。さつき一緒にスマホで撮影した女性が響の鞆を持ち出し笑っていた

響「それって、私の荷物じゃないですか!？」

響が少女を助けるために途中で置いてきた物だ

響「なくが調査はお手の物ですか!?!勝手に人の物あさったくせに！」

斎藤「だからやめとけって言ったのに」

響はそれに怒りながら頬を膨らまかした、赤いシャツの男は一回咳をし気持ちを切り替えた

弦十郎「では改めて自己紹介だ、俺は風鳴弦十郎、ここの責任者をしている」

その次にメガネを掛けた白衣の女性が自己紹介をした

櫻井「そして私は、出来る女と評判の櫻井了子、宜しくね☆」

そう言いながらウインクする

斎藤「斎藤ってんだ、よろしく」

野々宮「野々宮って言います、よろしくね」

響「こ、こちらこそ」

弦十朗「さて、君をここに呼んだのは他でもない、協力してもらいたいことがあるんだ」

響「協力?・・・あ」

響はあの謎の力について思い出した

響「あの、教えてください、あの力はなんなんですか?」

櫻井「それを説明する前に2つほどお願いがあるの」

櫻井「今日の話は誰にも内緒、そしてもうひとつは取り敢えず脱いでもらいましょうか」

響「はい?」

両腕を掴まれ少し持ち上げられた

響「え、いや、あの」

櫻井「それじゃ、行つてらっしゃい」

響「いやあああああ!!」

そのまま引きずられていった

シンフオギア

響「うう、もうお嫁にいけない」

斎藤「こいつ以外と余裕あるな」

響は涙目になりながらも軽いジョークを言い、斎藤以外の周りは少し申し訳ない顔をしていた

櫻井「メデイカルチェックの結果は後日わかると思うからそれまで待っててね」

響「そ、そうですか」

弦十朗「初戦闘での疲れもあるだろう、今日の所は取り敢えず帰り、休んでくれ」

響「わ、わかりました」

弦十朗「それともうひとつ、君に言っておきたいことがある」

響「はい？」

弦十朗は真剣な顔つきになりこう言った

弦十朗「今回起こったことは誰にも言わないでくれ」

響「え、誰にも、ですか？」

弦十朗「ああ、そうだ」

響「それがたとえ、友達でも？」

弦十朗「もちろんだ、もしこのことで君の友達にも危険がおよぶ可能性がある」

響「き、危険」

弦十朗「俺たちが守りたいのは機密じゃない、人の命だ、強制するわけではないが、考えておいてほしい」

響「わ、わかりました」

弦十朗「翼、緒川、彼女を送ってくれ」

翼「わかりました、ついてきて」

響「は、はい」

翼と緒方についていき響は出ていった

弦十朗「・・・調査した所、彼女は二年前の事件に」

野々宮「はい、奏さんが守っていた女の子です、病院に搬送された

んですが、まさかこんな風に出会うなんて」

櫻井「精密な調査がわかるのは後日だけど、二年前の事件で彼女の体に埋め込まれたのは、ガングニールの破片だと思うわ」

奏「そんな・私のせいで」

奏がそのことを聞き顔を下にむけた、その頭に野々宮が手をおき優しく撫でた

野々宮「奏さんのせいじゃありませんよ」

奏「野々宮・」

野々宮「もし奏さんがあのときいなかったらあの子は死んでました、そんな顔をしないでください」

野々宮「それにあの子も言ってたじゃないですか、奏さんのおかげで今まで生きてこれたって」

奏「・そうだな、ありがとな」

野々宮「どういたしまして」

奏は顔をあげ少しだけ微笑んだ

野々宮「あ、そうだ」

野々宮は何かを思いだし櫻井に近づいた、ポケットの中からチップみたいな物を取り出し櫻井に私た

野々宮「これ、今回の戦闘データです」

櫻井「ごろうさん、いつもありがとね☆」

櫻井がそう言うとう自分の胸に野々宮の顔を抱き寄せた

野々宮「ん!?んくく!」

櫻井「これは少しばかりのご褒美ですよ」

奏「ああ!ちよつと何してるんですか!」

奏はその事にご立腹のようだ、櫻井から無理やり引き剥がし今度は奏の胸に抱き寄せられた

櫻井「んもくせつかくご褒美あげていたのに」

奏「そういうのは私がやりますんでいいんです!」

奏は頬を膨らませながらぐいぐい胸に押し込んだ、野々宮は幸せと言うより息が苦しそうだ

野々宮「んくく!?!」

斎藤「相変わらず何してんだあの二人」

弦十朗「いいじゃないか、楽しそうだ」

斎藤たちはその光景を見て苦笑いをしていた

響「・・・」

響は寮の部屋に戻り未来と一緒に寝ていた、響の頭の中は今日起こった出来事と弦十朗のあの言葉が残っている

弦十朗『もしこのことで君の友達にも危険がおよぶ可能性がある』

弦十朗『俺たちが守りたいのは機密じゃない、人の命だ、強制するわけではないが、考えておいてほしい』

響「・・・」

響はどうもその言葉が引つ掛かり寝つけなかった、隣で寝ている未来にこのことが伝えられず隠し事をしているためどうすればいいのかわからなかった

未来「響、どうしたの？」

響「な、なんでもないよ」

結局何も言えずに寝てしまった

弦十朗「すまないな、放課後なんかによびだしてしまっただけ」

響は今ある部屋にいた、横の壁にはモニターがあり床には椅子やテーブルなどか置かれている

響「いえ、かまいません」

櫻井「それでは先日のメディカルチェックの結果発表さ」

するとモニターが起動しそこにはメディカルチェックで撮ったレントゲンや様々なデータが出てきた

櫻井「初体験の負荷は若干残っているものの、体には以上はほぼ見られませんでしたさ」

響「ほぼ、ですか、よかったです」

響はそれを聞くと心配していたのか軽く息を吐いた

響「あの、それよりも教えてくれませんか、あの力のこと」

響はあの力のことが気になりそれを早く知りたかった、それを聞く

と弦十朗は翼たちの方に目をむけた、それを合図にと翼たちの首にかけてあるペンダントを取り出した

響「これは」

弦十朗「翼の天羽々斬、奏のガングニール、第一、第三の聖遺物だ」

響「聖遺物？」

響がそれがなんなのかよくわからず、了子がそれに答えた

櫻井「聖遺物とは、世界各地の伝承に登場する現代では製造不可能な異端技術の結晶のことよ、多くは遺跡から発掘されるんだけど、経年による破損が酷くて、元の状態で見つかるのは本当に希少な」

斎藤「天羽々斬は日本の伝承、別名草薙の剣とかよばれている、ガングニールは神殺しの槍ガングニルで、その破片を使ってペンダント状にしたのがあれだ」

櫻井「欠片にほんの少し残った力を増幅して解き放つ唯一の鍵が、特定振幅の波動なの」

響「特定振幅？」

弦十朗「つまり歌だ、歌の力によって、聖遺物は起動するんだ」

響「歌？」

響はあの戦闘のことを思い出していた

響「そういえば私あるとき、心の底からというか、胸の奥から歌が思い浮かんできて、それを歌っていたような」

櫻井「歌の力で活性化した聖遺物を、1度エネルギーに還元し、鎧の形で再構成したものが、響ちゃんたちが見に纏うアンチノイズプロテクター、つまりシンフォギアなの」

弦十朗「聖遺物を起動させ、シンフォギアを纏う歌を歌える人間を、我々は適合者と呼んでいる」

響「私が、適合者」

櫻井「どうかしら、あなたの目覚めた力にいて、少しは理解してもらえたかしら？質問はどしどし受け付けるわよ」

取り敢えずある程度の説明が終わり、響の気になることを聞くことにした

響「あの！」

櫻井「どうぞ、響ちゃん！」

響は真っ直ぐ腕をあげ、櫻井はやけのテンションが高かった

響「言ってること全然わかりません！」

斎藤「まあわかるわけないか」

野々宮「俺たちも実際わかってないしね」

堂々とわからない発言をする響、専門用語や難しい言葉もあつたためついていけないのは仕方ない

櫻井「いきなりむずかしい過ぎちゃいましたね、だとしたら、聖遺物からシンフオギアを作り出す唯一の技術、櫻井理論の提唱者が私であることは覚えて置いて」

響「さ、櫻井理論？」

斎藤「了子さん、そんなこと言ってもわからないよ」

響がその言葉を聞き頭に？を浮かべ、斎藤はため息を付きながら指摘した

響「で、でも、私聖遺物なんて持ってません、それって聞く限り貴重な物なんでしょう？」

奏「っ！」

翼「奏・・・」

奏はそれを聞き顔を曇らせる、翼はそれを心配し、響の答えに答えるため画面のモニターが切り変わった

弦十朗「これが何なのか、君には分かる筈だ」

モニターに映っていたのはレントゲンの写真、心臓付近に異物が混じっていた

響「はい、よくしってます、これは二年前、あのツヴァイウイングのライブの時に負った傷です」

櫻井「心臓付近に複雑に食い込んでいるため、抽出不可能な破片、調査の結果これは奏ちゃんの纏っているガングニールの破片だと言うのがわかったわ」

響「奏さんの・・・」

奏「・・・ごめんな、響」

奏が響に近づき謝罪した、自分のせいでまきこんでしまったと、そ

う考えているからだ

響「奏さん・・・」

奏「私があのととき守ってやれば、こんなことには・・・」

響「だ、大丈夫ですよ、あのととき奏さんが守ってくれなかったら私死んでました」

奏「っ！でもそのせいでお前の体に！」

響「仕方ないです、それにこれのおかげで私はあの子を守れました」

響は自分の胸に手を当てながら答える

響「私嬉しかつたんです、自分が誰かを護ることができて、だからきにしないでください」

奏「響・・・」

響「あの話って私のことだけじゃありませんよね」

響はそう言うのと弦十朗が答えた

弦十朗「ああ、君にも協力してほしいんだ、ノイズを倒す仕事を、もちろん無理にとは言わない」

響「やります！誰かを守ることが出来るのなら」

響は決意を決め二課に所属することになった

響「そう言えば何で二人はシンフォギアを持っていないのに戦えるんですか？」

響が斎藤たちにそれを聞く、彼は戦ってはいなかったが昨日の戦闘の時に戦えるようなことを言っていたので気になったのだ

斎藤「それがよくわからねえんだよ」

響「と言うと？」

野々宮「何でかノイズに触れる上に倒すことも出来る、さらに、体に不思議な力があって、それを使うと超人的なことが出来るんだ」

斎藤「でも問題はそれがなんで出来るのかわからないんだ、レントゲンや色んな検査をしてもいたって普通の人間の体だし、ホントなんでだろうな」

響「聖遺物とかの可能性は？」

野々宮「それはない、そしたら体から聖遺物の反応が何処かしらか

ら出てくるはずなんだ」

不思議な話だ、普通の体をしている人間がノイズを倒せるなんて

齋藤「まあ野々宮は二年前から調子が悪くなって今は戦闘データの収集係やマネージャ―補佐を主にやってるけどな」

野々宮「まあいいじゃない、ノイズと戦える人がいるだけで、響ちゃんもわからない所があったら人に聞くんだよ」

響「はい!」

響は元氣よく返事をした

お人好し

あの後無事に組と合流ができた龍司はそのまま夜を越し警報が解除されたので峰のラーメン店に来ていた、龍司が座っている席には空になったラーメンの皿と酒の入ったガラス瓶とコップがあった

龍司「無事でよかったぜ」

峰「まあちゃんと避難していたしね、にしてもいいの？こんな所で油売ってて」

龍司「今他の連中が後処理してる、俺はカシラから情報集めろって言われたからね」

峰「情報？なんの？」

龍司「他の組の連中だよ」

龍司が酒を飲みながら言う

龍司「俺たちヤクザは裏仕事を生業としているからな、それで恨みを持つやつもいてたまにノイズの騒動に紛れてどつかの組の事務所で恨み持った人間が組の金盗むとか馬鹿やらかすやつがいるんだよ」

峰「ふええ命知らずだなく」

ヤクザにそんなことをするとは、ノイズ慣例の火事場泥棒は普通の家でもたまにあるのだ

龍司「まあそれ以外にも、家主がいなくなった家を探して買い取ったり、壊れた家を内の組で直したり、色々あるんだよ」

峰「買い取るって、それやばくないか？」

本来その家主が死んだら親族権がどうのこうのでもめるはずだ、だが龍士はそれは大丈夫なようだ

龍士「大丈夫だよ、ちゃんとその親族と話あって、いるかいらないか決めて、それで内と少し話してから買うか買わないか決めてるんだ、それで買い取ったやつは店にするかそこの土地まとめてどっかに売るんだよ」

峰「へえ、んじや俺にこの店持たせてくれたのは？」

峰がこの店を持ったのは龍士のおかげだ、ノイズで親を亡くして困っていた所をヤクザになっていた龍士にこの店を任されたのだ

龍士「んま友人が野垂れ死ぬのを見たくないのもあるがせっかくうまいラーメン作れるんだから任せただよ」

峰「でも俺ケツモチで金払ったことないぜ？」

酒を一口飲み笑いながら言う

龍士「おめえは客にうまい飯作つてればそれでいいんだよ、金なんぞいらねえ」

峰「でもヤクザつてそこら辺厳しいんじゃ」

龍士「大丈夫だよ、建築とか漁船で稼げばいいんだから」

峰「ならいいけどよ」

峰は少し間を置いて質問した

峰「なあ、まだやってんのか、あれ」

龍士「ああ、あれか、まあ俺の癖みたいなものだし」

峰「あれつて、本来政府がやることなんだが」

龍士「あんなんやくにたたねえよ、上の判断待っているようなボンクラじゃな」

龍士は少し顔にシワよせ答えた

龍士「さて、そろそろいくぜ、勘定頼む」

峰「へいへい」

龍士はそう言うのと立ち上がり勘定を済ませ店から出ていった

龍士「家主がいなのは2件、家が壊れたのは1件、後その他もろもろだな」

町中にある適当な椅子に座つて情報を整理していた

龍士「まだ確認できてないが他の組の組員が何人かいないらしいな、もしノイズに襲われてたら炭になっちゃってるから特定できないんだよな」

ノイズと共に炭になった人間は誰が誰なのかわからない、血液どころか骨も残らないので特定できないのだ

龍士「また棺の中に誰も入ってないのかね」

ノイズに襲われた人の式をあげるとき遺体がないので空の棺かその人が持っていた物かで埋められ埋葬される

龍士「嫌なもんだ、何も残せないのは」

「とことん嫌な存在だと思おう、そんな風に考えていると何かの鳴き声が聞こえてきた」

龍士「ん？何だ？」

龍士はその声のしたほうに向いた、そこには

龍士「あん？なんであのガキがいるんだ？」

龍士がノイズから助け出した少年だった、少年は地面に膝をつき大声を上げながら泣いていた、近くを通る人はそちらに目をやるが助けるのが嫌なのかすぐに向き直りそのまま通り過ぎていった

龍士「・・・はあ、たく、カタギなんだから助けるよな」

龍士は悪態をつきながら少年の方に向かった

龍士「おいガキ」

少年「うう？あ！お兄ちゃん！」

少年はこちらに振り返ると嬉しそうに笑顔を向けた

龍士「ああ、というかなんでこんな所にいるんだ、両親は？」

あの後送り届けた後警察に保護されたはずだ、少年はその事を聞くとなを見ながら答えた

少年「あの後、お兄ちゃんが助けってくれた後、シエルターに入ったんだけど、その後両親探そうと思ったたら何か僕と同じ人がいっぱいいて」

龍士「それで？」

少年「探してもらおうと思ったんだけど、何か後にされて、それで待つてたら警察の人がいなくなつてて、それで僕でお父さんたち探してたら迷子になつてて、それで」

少年はその事を話していると目に涙が溜まっていた、龍士は少しイラつきながらも顔には出さず少年に声をかけた

龍士「・・・はあ、しょうがねえーな」

少年「ごめんなさい」

龍士「おめえが悪い訳じゃねえーよ」

龍士（たく、表ではデカイ顔しやがる癖に、自分たちが危険になつたら縮こまりやがつて）

龍士は心で文句を言いつたが、取り敢えず少年は助けることにした
龍士「おう、ちよつと顔上げろ」

少年「ふえ？」

少年はそう言われ顔を上げた、すると龍士は少年の方にスマホを向け写真を撮った

少年「な、なに？」

龍士はスマホほ操作した後、スマホを耳に近づけた、どうやら電話をするようだ

男『はいもしもし、〇〇新聞の者ですが』

龍士「ああ、俺だ」

男『あれ、龍士さんじゃないですかどうしたんです？』

龍士「少したのみごとあるんだが、かまわねえか？」

取り敢えず落ち着かせるために自分が座っていた椅子に座らせた、まだ顔は泣きそうだが落ち着いたようだ

龍士「今知り合いに頼んでお前の写真使って探してもらっている」

少年「だ、大丈夫かな？」

龍士「それはわからん、生きてるかもしれないし生きてないかもしれない、今は祈るしかないな」

少年「そ、そんな」

あんまり下手な希望は抱かせちゃいけない、あの場にいたんだ、ノイズに殺されてもおおかしくはない

少年「お兄ちゃんは、なんで助けてくれるの？」

龍士「まあ・・昔からある癖みたいなものだ」

少年「癖？」

龍士「・・何でか人が困つてると助けたくなるんだよ」

龍士が昔からやっていることだ、体が勝手に動いてしまう

少年「か、かっこいい、僕もお兄ちゃん見たいになりたい」

龍士「よせ、俺はヤクザだ、そんな立派なものじゃねえよ」

少年「ヤクザ？ヤクザってなに？」

それには少ししいずらそうに答えた

龍士「まあ悪いことをしている人たちの集まりだ」

少年「お兄ちゃんは何でそこにいるの？」

龍士「・・・ヤクザに助けられたからだ」

下を見ながら答えた

龍士「今まで守ってきたもんが急に無くなってな、なにもせずにボケーとしていたところを助けてくれたんだ」

龍士「まあ最初はきつかったけど、今は何とか生きていけてるのが現状かな」

少年「お兄ちゃんはヤクザやるのいやじゃないの？」

子供らしい素直な意見だ、その言葉を聞くと胸が少し絞められた感じがした

龍士「・・・いやじゃねえさ、俺は俺なりに生きていけるんだから」

そう龍士は答えた、少年は不思議そうな顔をしている

そんな時また声が聞こえた

女「ちよつと、離してよ！」

少年「？」

龍士「ん？」

声のしたほうに向くとちよつと裏路地が見えそこにはチャライ男三人が女を囲って何かしている、女性の方は困っているようだ

チャライ男1「いいじゃん、ちよつとくらい俺らと遊ぼうよ」

チャライ男2「そうそう、そっちの方が楽しいよ」

女「だから私は用事があるっていつてるでしょ！」

チャライ男3「そんなんよりこっちの方が楽しいって」

どうやらナンパのようだ、こんな白昼堂々やるのは逆にすごいことだ、他の人は裏路地から聞こえるのだがあまりかわり合いたくないようだ

少年「お、お兄ちゃん」

龍士「はあくつたく、内のシマで勝手なことしやがって」

龍士はそう言うのと立ち上がりナンパしている現場に向かっていた

チャラ男3 「おい、誰かこつち来るぜ」

チャラ男1 「あ？」

龍士「・・・」

龍士は少し距離を置いて止まった、お互い睨みあっている

チャラ男1 「なんだよ兄ちゃん、俺らに何かよう？」

龍士「ああ、こちら辺で変なことすんじゃねえ」

チャラ男1 「はあ？」

龍士「こちら辺は内のシマなんでな、あんまり変なことされると困るんだよ」

チャラ男1 「内のシマ？あんたヤクザなの？」

龍士「そうだが？」

チャラ男はそれを聞くと急に笑いだした、他の連中もそれに釣られて笑っている

チャラ男1 「いや、ヤクザってホントにいたんだ、しかもこんな体のバランスが悪いやつ初めて見た」

チャラ男2 「確かに頭と体合っていないよな」

チャラ男たちはそう言いながら笑い続ける

龍士「ヤクザってわかってんのなら早くやめといた方がいいぜ、大怪我する前にな」

チャラ男1 「あ？んだとてめえ」

龍士「だからやめろって言ってるんだよ、時代遅れの格好しやがって」
チャラ男たちはそれを聞くと龍士の周りを囲み始めた

龍士「大人しく帰った方がいい、怪我するぞ」

チャラ男1 「んだとてめえ！」

チャラ男3 「おいやつちまえ！」

――チンピラー――

チャラ男1 「死ねえ！」

そういうと前のチャラ男が右腕を振り上げ殴りかかってきた、龍士はそれを左手を使い右に流した

チャラ男2「おわ!？」

それが他のチャラ男にぶつかりそうになりチャラ男はそれを避けた、龍士はその隙に左にいるチャラ男の顎目掛けて左手で裏拳をかます

チャラ男3「あ」

チャラ男はそれを喰らうとその場で膝を崩した、脳を揺らされたのかあんまり動く気配がない

チャラ男1「てめえ!」

チャラ男はそれを見ると怒り左手を振り上げ殴ってきた、龍士はその拳に合わせて頭突きを喰らわす、チャラ男の指が何本か折れた

チャラ男1「あぁっ」

チャラ男は左手を右手で掴みその場に崩れた、龍士はその崩れたチャラ男の頭目掛けてかかと落としを喰らわせる

チャラ男1「っ!？」

チャラ男は地面に叩きつけられぴくりとも動かなかった

近くにいたチャラ男はそれを見ながら啞然としていて、龍士はその啞然としていたチャラ男の顔目掛けて上段蹴りを喰らわした

チャラ男2「ぶうっ!？」

体が浮きある程度進んだ所で地面に叩きつけられる、ほんの数秒でチャラ男全員を倒した

龍士「け、準備運動にもなりやしねえ」

龍士はナンパされていた女の方に向いた

龍士「見てないで早く行っという方がいいで」

女「は、はい」

女性の方は怯えながら走り去っていった、龍士はその背中を見届けると裏拳をかました男の髪を掴み無理やり持ち上げた

チャラ男3「いててて!」

龍士「お仲間にもよく言っつけ、そこら辺で余計なことはするなって、今回は手加減したが」

龍士は眉間にシワをよせ目を尖らせた

龍士「次はねえからな」

チャラ男3「は、はいいい、おいいくぞ！」

そう言うのとチャラ男たちは気絶した人を運びながら去っていった

龍士「・・・少し派手にやっちゃったな」

あんまり人が通らない所でナンパしていたおかげで目撃者があまりいないのが幸いだ、そんなことを考えているとスマホから震えだした、ポケットから取り出し電話にでる

龍士「もしもし」

男『あ、龍士さんですか、頼まれたやつなんですけど』

龍士「ああ、どうだった？」

男『見つかりました、今〇〇公園で待たせてるんですけど、どうします？』

龍士「わりいなそこまでしてもらって」

男『いいいえ龍士さんの頼みですから』

龍士「今からガキ連れてそっちに行く」

男『わかりました』

そういうと電話は終了する、耳からスマホを離しポケットに入れる
龍士「さて、行くかね」

少年「父ちゃん！」

父「こうじ！」

少年が父親に向かって走っていく、父親はそれを受け止め抱き締めた、母親も隣にいて息子の様子を見て安堵している、龍士は知り合いと一緒に遠くから見守っていた

龍士「悪いな、こんなこと付き合わせちまって」

男「いいんですよ、それよりまだやってたんですね、人助け」

龍士「仕方ねえだろ・・・何か困ってるよ、手えだしちまうんだよ」

男「はは、龍士さんらしい」

龍士は頬をかきながら恥ずかしそうに答え、記者の方は笑いながらそれを見ている

男「にしても会わなくていいんですか？」

龍士「いいんだよ、ヤクザとつるむつてのはさすがに嫌だろ」

男「俺は別に気にしませんけどね」

龍士「ちったあ気にしろ馬鹿たれ」

龍士はそう言うのとタバコを取り出し火をつける

男「15歳でタバコ吸うの駄目なんですよ？」

龍士「ヤクザは見栄はらねえといけねえ、俺は顔は駄目だから少し

でも見せなきゃな、足りない部分は腕でカバーだ」

そう言い吸い続ける、記者の方は諦めたように顔を振り笑っている

龍士「何か食うか？俺のおごりだ」

男「え、まじですか、食います食います」

龍士たちはそう言い公園を振り返り町の方に歩いていった

心の不安

響「おりやああああ!!!」

響がノイズに向かって拳を振り下ろす、ノイズは炭となり消えていった

響「はあく終わりました〜」

斎藤「お疲れ様」

そう言い皆が集まってくる、響がノイズと戦闘し初めてから少したった、まだ動きが荒いがそれでも少しずつ綺麗になっている

響「何か毎日出てるような気がします」

野々宮「ごめんね、学校があることはわかっているんだけど非常事態なので」

野々宮が頬をかきながら謝罪する

響「うう、後で未来に謝つとかなないと、そろそろ未来レベルが上がってしまう」

斎藤「なんだよ未来レベルって」

野々宮「多分怒りの具合じゃないかな?」

響「そうですね! 怒ると怖いんですよ!」

奏「私もたまになるな〜」

そう言い奏はチラチラ野々宮を見る、野々宮は以外そうに声をあげた

野々宮「え、そうだったんですか?」

奏「そうだよ、私と言うものがありながら他の女とイチャイチャと頬を膨らましなから言う」

野々宮「イチャイチャじゃないですよ、友達と話しているだけですよ」

奏「友達?」

野々宮「はい、たまに助けた人と遊ぶ時があるので、奏さんもそんな感じじゃないですか」

奏は少しこめかみがピクつとなる、つまり奏は友達に見られていると言うことだ

奏「・・・野々宮、後でお仕置き」

野々宮「ええ！なんで!?」(口。；／)

奏「ふん」

響「は、はは」

翼「相変わらずね」

女の子二人は笑いながら見ている、そこに斎藤が横やりしてきた

斎藤「そう言えば翼、風神とはどうなんだよ、いい感じになってんのか？」

翼「な!?!いい感じだなんで、そ、そんなことにはなりません!」

斎藤「そうか、あいつも気になっていってると言ってたんだがな」

翼「え、そ、そうなんですか？」

斎藤「ああ、らしいぞ」

翼「そ、そうですか」

翼は胸に手を当て頬を赤くしながら笑顔を浮かべている

斎藤「くくっ、純粋なやつ」

斎藤はそう笑いながら呟いた

響「・・・」

響の方はなんだか寂しそうな顔をしていた、何処か羨ましそうな感じもする、そんな風に考えているとある一人の男性が思い浮かんだ

響き「っ!」

顔は幼く体は屈強な男性、響がよく知る人間だ

斎藤「・・・響ちゃん？」

響「あ、はいなんですか？」

斎藤「どうした難しい顔をして」

響「いえ、ただもつと頑張らなきゃな〜と思って」

翼「大丈夫だ、前よりも動きはよくなってる、ゆっくりならしながら行こう」

野々宮「そうそう、あんまり急ぎすぎると駄目だからね」

響「は、はい」

会話をしていると上空にヘリが見えた、どうやら迎えのようだ

奏「お、おっちゃんたちが来た、早くいこうぜ」

それを聞くと全員ヘリの着陸地点に急いだ、響はまだ心の中で気に

していた

その後、全員は本部で解散、野々宮は奏に引きずられ、翼は風神の所に、響は少し考えながら行ってしまった、斎藤はと言うと町の公園におり誰かを探しているようだ

斎藤「あ、いた」

どうやら見つけたようだ、その人は女性のようで白い髪で一つにまとめている

斎藤「クリスわりい、まった？」

クリス「べ、別に、まってねえよ」

女の子、名前はクリスと言う、ちなみにここに来たのは十分くらい前だ

斎藤「よし、んじゃ行こうぜ」

クリス「お、おう」

そう言い二人は町の方に歩きだす

斎藤「さて、何処行きたい？」

クリス「私はこちら辺はよくわからねえ、お前が決めてくれ」

斎藤「んじゃそうだな、ゲームセンターとかどうよ」

クリス「ゲームセンター？」

斎藤「なんだそんなことも知らないのか、まあついてから説明するよ」

そういい二人で歩き続ける、さつきから普通に話している二人だが何故こんな関係になっていたのかと言うとクリスをナンパから助けだし、仲良くなり今こうしてたまに遊ぶようになったらしい、彼女はなんでかあんまり常識と言うものをあんまり知らない、そのため斎藤が案内する形で見て回っているのだ

斎藤「ほれ、こんな風に色々なゲームがあるんだ、なんか気になるのあるか？」

クリス「ん、あれなんだ？」

クリスが指をさしたのはクレーンゲームだった、可愛らしい動物のぬいぐるみなどが入っているタイプだ

斎藤「お、意外と可愛い所あるじゃん」

クリス「な!?急に变なこと言うなよ!ただ気になっただけだ」

斎藤は少しからかいながらクレーンゲームに近づく、クリスは顔を赤らめながら反抗し斎藤についていく、そうしながらクレーンに格闘しているクリスがぬいぐるみがとれずついにねをあげた

クリス「・・・うがああ!!取れるかこんなもん!!」

斎藤「おいおいでけえ声だすなよ、お隣さんの迷惑だろ?」

クリス「ふざけんな!面白くねえじゃねえか、金返せ!」

斎藤「んな無茶な」

そんなことできるわけがない

クリス「そんなに言うんだったらお前がやれよ!」

斎藤「へいへい」

クリスが操作盤を斎藤に明け渡しやり始めた

斎藤「こういうのはちゃんと取りやすいやつを選ぶんだよ」

斎藤は頭のデカイ猫のぬいぐるみに狙いをつけた、そして頭のデカイイことを利用しアームに引っかけ持ち上げた

そしてぬいぐるみは落とされ取り出し口に出てきた

クリス「はあ!?!嘘だろ!」

斎藤「へへ、こう言うのは頭を使うんだよ、あ・た・まをな」

クリス「うせえ!一発で取ったらかと言って調子にのんなよ!次だ次!」

斎藤「へいへい」

クリスはそう言い他のゲームを探す

クリス「これは?」

斎藤「お、ガ○ダムのやつじゃん」

クリス「よし、これだ」

斎藤「よしわかった」

数分後

クリス「うわ！何か変な動きしたぞ！」

斎藤「クリス、それ変形してる！」

更に数分後（CPU戦）

クリス「喰らえフルオープンだああ!!」

斎藤「馬鹿俺いるんだぞ!!」

クリス「ああ！おめえに当たったせいだ相手無傷じゃねえかなにしないでんだ！」

斎藤「なんで俺が怒られるの!？」

更に数分後（対戦）

クリス「こつちくんおまえ!!」

斎藤「そうしなきや俺攻撃できないでしょ！」

クリス「くそおまたコンボ喰らった!!」

斎藤「おしや!!勝った！」

クリス「くそおお！もう一回！」

二人は仲良くゲームを続けていった

斎藤「いやくやつぱりお前といると楽しいな」

クリス「は、はあ!?急になにってんだお前！」

斎藤の真つ直ぐな言葉を聞くとクリスは顔が赤くなる

斎藤「ほんとほんと、こんなに楽しいの初めてだよ」

クリス「そ、そうか」

クリスは頬を赤く染め嬉しそうな顔をする、斎藤もそれを見ると嬉しそうな顔をした

斎藤「いい時間だしそろそろ帰るか」

クリス「あ、ああ、そうだな」

クリスは少し寂しそうな顔をする、斎藤はその頭を手をおき優しく撫でる

斎藤「大丈夫だって、また遊んでやるから」

クリス「べ、別に寂しくなんかねえ！」

クリスはそう言うのと走りだした、少し間を開けるとこちらに振り向いた

クリス「・・・またな」

斎藤「おう」

そう言うときクリスは歩きだし帰っていった

斎藤「さてと、俺も帰りますかね」

斎藤はそう呟くと自分の家に向かって歩きだした

クリス「・・・」

クリスはある屋敷にいた、広い部屋に綺麗なテーブル、豪華な装飾品、まるでお金持ちの屋敷のような感じだ

そこにいたのはクリスだけではなく金髪の女性もいるようだ

フィーネ「監視は順調？」

クリス「あ、ああ」

フィーネ「そう？なんだかんだ楽しそうだったけど」

クリス「あ、あれはあいつの遊びに付き合っただけだ、別に深い意味はねえ」

フィーネ「・・・そう、ならいいけど」

フィーネはそう言い椅子に座りながらグラスに手をかけお酒を飲む

クリス「・・・」

クリスは少し申し訳なかった、彼に近づいたのはフィーネから監視しろと言われたからだ、もちろん彼はそんなことは知らない、なんだから悪いことをしている感じがして嫌だった

クリス（・・・あいつとは戦場で会いたくない）

二課とフィーネたちは敵同士だ、だがそうなっている以上会うのは避けられない

クリス（・・・会いたくないな）

クリスは夜空に広がる星を見ながら、心の中で呟いた

響「・・・はあ」

響は寮の部屋にある机の上で顔を伏せたため息をついていた、理由は

あの時脳裏に一瞬通ったある男性のことだ

響「っ！」

それを考えるとまた思い浮かんだ、歳に似合わないあの体、だが顔は幼さを感じるあの顔を

響（・・・なんで今さらあいつのことなんか）

額にシワを寄せている

響（私を置いて真っ先に逃げたあいつ、あのツヴァイウイングの事件の時になにもしてくれなかった、未来がいてくれたおかげでなんとかあったけど父さんも龍士君もなにもしてくれなかった）

響はそう心の中で言う、それでも言わないと気がすまないからだ

響「・・・もう寝よう」

早く忘れたくそう言い聞かせ寝ることにした

気まぐれ

男「さっさと金だせ!!」

ひ弱な男性「ひいい!」

龍士「はあ、またかよ」

誰もいなさそうな町外れの小道で龍士は襲われている場面に出くわした、何故か最近多い、とりあえず見てられないので助けることにした

龍士「おい」

男「あ!?!」

龍士「そこら辺にしとけ、弱いものいじめはよくねえぞ」

男「うるせえよお前には関係ねえ」

龍士「関係ないけど首を突っ込みたいやつなんでね」

男はそれを聞くとこちらに向きを変え近づいてきた

男「だったら、後悔すんなよお!!」

——チンピラー——

男はこちらに向かってパンチしてくる、左のストレート、以外に速い、顔を狙っていたので左に避け左のジャブを放つ、相手は拳を戻し体を後ろに傾け回避する

龍士（格闘技経験者、動きはボクサーのライト級だな、だが動きが荒い）

男はすぐさま右を放ってきた、龍士はそれを避けると構えを変えた、左足を前にだし右手は顔より少し後ろに、左は前にだし、手は開いた状態にした

男「・・・なんだ、お前も格闘技してるのか」

龍士「趣味だよ」

男「は、趣味ね、そんなんで俺を倒せるのか?」

龍士「倒せるさ、なんたって手加減してんだから」

男「へえくその言葉、もう戻せないぜ!」

男が拳を振り上げる、それにあわせて龍士はゆっくり右手を引く、そしてあいての拳が来る前に相手の顎目掛けて手の拳紋を喰らわせる

男「があ!？」

男はそれを喰らいぶつ飛ばされた、男は何をされたのかよくわかっておらず困惑した顔で見てきた

龍士「・・・見えなかった？」

男「があ、クソツ」

龍士「言つたら、手加減してるって」

男「うるせえええ!!」

男が素早いラツシュを仕掛けてくる、龍士はかわし、いなし続ける、そして相手の大振りに合わせスウェイでかわした後右のボディープローを喰らわせる

男「があっ」

それにより相手が少し前のめりになる、龍士はその顔目掛けて左のアッパーをかます

男「ふんがあ!？」

男はそれを喰らうと真上に飛び上がり頭から落ちてきた

龍士「これでわかつたら、さつさと帰りな」

男「く、くそお」

男は鼻を押さえながら離れていった

龍士「・・・あいつ、なんか抱えてんな」

ひ弱な男性「あ、あのく」

龍士「あ？」

龍士は声をかけてきた相手に威圧をかける

ひ弱な男性「ひい、そ、その、助けていただき、あ、ありがとうございます
ざいます」

龍士「・・・あつそ」

龍士はそう答え歩き出した

龍士「さて、さつきのやつは何処にいるのかな」

龍士はさっきの男を探していた、戦ってみてわかったのだが相手はボクサー、多分初めてから少したつたぐらいだろう、なんでか知らないが相手はカツアゲをしていたので何故したのか気になったのだ
龍士（金がないって言うのもあるだろうが一番は憂さ晴らしほかったな）

龍士がそう考えているときっきの男が公園の椅子に座っていた

龍士「お、いた」

龍士はその男に近づく、男もどうやら気付いたようだ

男「・・・なんのようだよ」

龍士「お前さんのことが気になってね」

男「は？」

龍士「さっきのあれ、金より憂さ晴らしがしたかったんだろ？なんであんな真似したんだよ」

男「・・・お前には関係ねえ」

男はそれを聞くと顔を合わせたくないのか下を向いている

龍士「言ってみろよ、少しは軽くなるぜ」

男「・・・うるせえ」

龍士はとりあえず色々言ってみることにした

龍士「お前ボクサーなのか？」

男「・・・前はな」

龍士「へえ、それはすごい、今でも続けてんのか？」

男「・・・してねえ」

龍士「なんでよ」

男「っ！お前には関係ねえって言ってるだろ!!」

それを聞くと相手は怒鳴り声を上げた、どうやら地雷を踏んだようだ

男「お前に何がわかんだよ！」

龍士「何も話さないのに何をわかれってるんだ」

男「うるせえ！どっか行ってる！」

龍士「何か力になれるかも知れねえぜ、話してみなよ」

男「うるせえ！俺にかまうな！」

男はそう言うのと荒く立ち上がり立ち去ろうとした、その時
？「よおく神崎、探したぜ」

神崎「ち」

龍士「ん？」

声がる方に振り向くとそこにはスーツを着た男たちがいた
男「こんな所でなにしてんだよ、ちゃんと金は貯めたのか？」

神崎「うるせえないちい言いに来んなよ」

男「そうはいかない、俺も仕事だからね」

龍士「なあ、あいつは？」

神崎「村上 宏、こちら辺で金貸しやってるやつだよ」

龍士「何処の町だ？」

神崎「なにいつてんだよ、ここつて言ったら〇〇町だろ」

龍士「はあ？そんな金貸し知らねえぞ？」

神崎「なに？」

龍士「おい、お前ら」

村上「なんだよ」

龍士「お前金貸しだよな、ケツモチは何処だ」

村上「釘原組だよ」

龍士「・・・どうして釘原組がこんな所いるんだ、こちら辺は内のシ
マだぞ」

村上「俺らが何処で商売しようが勝手だろうが」

龍士（・・・釘原の野郎）

どうやら知らぬ内のシマにちよつかい出していたらしい

龍士「・・・後で親父に言っとくか」

村上「ていうかお前どけよ、俺らの仕事の邪魔すんなよ」

龍士「そうはいかねえんだよ、俺のシマで勝手なことされちゃ困る
んだよ」

村上「痛い目見る前に帰った方が良いつて」

龍士「大丈夫、たいしたこと無さそうだし」

男「んだとっ」

神崎「おいやめとけつて、相手五人だぞ！」

村上の取り巻きがイラつき始めた、村上のやつも少しだがイラついている

村上「んじゃ痛め付けられても文句ないよな」

龍士「お、痛め付けで終わらせてくれんの、金貸しの癖に優しいんだね、でもそういう中途半端な奴って金稼ぐの下手なんだよね、君ら懐寂しくない？」

村上「もういい黙れ、お前らやるぞ」

村上たちが懐から警棒を取り出した

神崎「おいやべえって」

龍士「まあまあ見てなよ、お前のスタイルで戦ってやるから」

神崎「はあ？」

村上「やつちまいなあ！」

――金貸し――

――村上 宏――

二人が突っ込んで来た、二人は少しずらしながら突っ込んでくる、どうやら多少はやったことはあるようだ、最初に来たのは左の方、縦の下ろし、それを左にに避け右のやつは攻撃がこないようにする、次に来たのは左から右にかけての真横のスイング、それはウービングで避け腹に目掛けて左のブローをかまし、のけぞった顔に右フック、まともに喰らいぶつ飛び地面に叩きつけられた、動く気配がない

男3「やろお！」

男が警棒を振りかざしながら迫ってくる、龍士は相手が振り下ろす前に懐に入った、相手が慌てて振り下ろした攻撃を左で止め右のジャブを喰らわせる、それにより少し相手が引き左が自由になった所で左のフックを顔に喰らわせる

男3「んが!？」

ボクサー特有の高速パンチ、相手は反応出来ず倒れていく

村上「へ、へえくやるじゃん以外と」

龍士「ぼさつとしてねえで早く来いよ」

村上「な、なめやがって」

そう言うのと村上たちが突っ込んでくる、龍士は最初は攻撃を避けることに専念し三人の攻撃をスウェイとウィービングで避け続ける

村上「ちよこまか動きやがって!」

龍士「どうしたく当ててみるよ」

村上「こんのクソガキ!!」

何度も攻撃したが当たらずそうしていくと相手がどんどん疲れてきた、その疲れなためか一人が龍士に当てようとした攻撃が仲間にあたってしまった

男4「いつてえ何しやがる!」

男5「わ、わざとじ」

男が言い終わる前に龍士のパンチが飛んできた、顎にヒットしそのまま倒れ次に惚けている男に向かってストレートを顔に喰らわせた

男4「があ!」

それを喰らいぶっ飛んでしまう、残りは一人、その一人は引け腰になりながら警棒をこちらに向けていた

村上「ま、まじかよ」

神崎「す、すげえ」

龍士「・・・まだやるのか?」

村上はその言葉を聞くとその威圧に押されバランスを崩し倒れてしまった

村上「ひい」

村上は情けない声をあげながら逃げていった

龍士「ばくか、内のシマで勝手なことするからだ」

神崎「・・・」

神崎はさつきまでの光景を脳内で再生していた、攻撃の速さ、重さ、そして回避のうまさど立ち直りの速さ、どれもこれも完璧すぎてとても趣味でやっているようには見えなかった

神崎「あんたすげえーな!今のなんだよ!まるでプロの動きだった

ぜ!!」

龍士たちは取り敢えず公園の椅子に座り直して話をしていた、神崎はよほどよかったのかさつきから興奮しっぱなしだ

龍士「へへ、それほどでもねえよ、ただテレビや資料見て覚えたことをやったただだよ」

神崎「ど、どんな番組みるんだよ」

龍士「ボクシングと言えば、○○マッチや●●対戦だろ」

神崎「それ俺も見てるんだよ、なあ!誰を参考にしてるんだ?」

龍士「俺の体格だからだいたいヘビー級のグレン・バーグスやラチエル・フォックスだ」

神崎「あのヘビー級の人たちか、すげえな」

龍士「後は飛鳥 成信のあの動きかな」

神崎「確かに、あの人のウィービングとスウェイの動きすごいよな、どうやってんだろ」

龍士「あれは重心運動と立ち直りの速さだ、あの人はそれがうまいからあの動きが出来る」

神崎「へえ」

いつのまにかボクシングの話をしていた、心なしか神崎は嬉しそうだ

龍士「・・・やっぱり、ボクシング好きなんだな」

神崎「ああそうだよ」

龍士「・・・なんでやめたんだよ」

神崎「・・・ノイズのせいだよ」

龍士「ノイズ?」

神崎「俺プロボクサーになるのが夢でさ、それで仕事の間使ってジムとかに通って練習してたんだけどさ、その仕事している所にノイズが現れちまって、それで俺だけはなんとか生き延びただけだよ、何か意味のわからねえ迫害受けちまって」

龍士「・・・」

神崎「そのせいで仕事が決まらずいよいよ貯金がつきかけた、それで金貸しに借りちまって今のざまさ」

龍士「・・・はあ、まだ続いてたのか」

神崎「え？ 続いてたって？」

龍士「まあ、俺も似たようなことだからな」

神崎「え？」

龍士は少し間を置き、話した

龍士「・・・二年前に起きたツヴァイウイングの事件、知ってるか？」

神崎「ああ、あの大事になった事件だろ、かなりの被害者が出たって聞いたけど」

龍士「・・・俺はそんなときの生き残りだったんだ」

神崎「・・・まじで？ よく生き残ったな」

龍士「まあその後が最悪だったけどな」

神崎「・・・」

龍士「あの事件の後、俺は病院に運ばれたらしい、それでそこに1ヶ月入院してたんだけどよ、急に移動になったんだ」

神崎「ど、どうしてよ」

龍士「お前と同じだよ、わけのわからん迫害を受ける前に両親が病院を変えてくれたんだ、そのお陰で俺は受けずにすんだよ」

神崎「・・・」

龍士「けどよおしつこくつてさあ、迫害は来ちまったんだよ、両親もそのせいで死んだ、らしい」

神崎「・・・」

龍士「それでよ、俺は施設預りになってたんだけどよその時俺にはどうしてもやらなきゃならねえことがあったんだ」

神崎「やらなきゃいけないこと？」

龍士「俺の馴染みも・・・迫害を受けてたんだ」

神崎「・・・まじか」

龍士「俺は、そのことが気になって施設抜け出して金振り絞ってここまで来たんだ、でもそこには幸せそうなあいつの顔があった」

神崎「・・・大丈夫だったんだ」

龍士「ああ、安心したよ、それで俺はそいつに大丈夫だったのか聞いたんだ、けどきたのは拒絶だったよ」

神崎「・・・まじかよ」

龍士はため息をついた、よほど辛かったようだ

龍士「どうやらそいつもあれからかなり苦労したらしい、その時に父親も逃げて行ってそれと同時に俺もいなくなっただ、多分その事が重なっちゃったんだろな」

龍士「そのせいで俺は行く宛を失い、路地裏でボケーとしてた所を、親父、組長が拾ってくれたんだ」

龍士「そこで俺はヤクザになって今こうしてるわけだ、まあ人生どんなことあんのかわからねえから仕方ないのかねえ」

神崎「・・・お前も大変だったんだな」

龍士「そこはお互い様だよ、それよりお前金に困ってんだろ？」

神崎「あ、ああ困ってるけど、それが？」

龍士はニヤリと笑いだし提案した

龍士「いい仕事紹介してやるよ」

龍士「てな訳なんだけど、出来る？」

男「任せて下さい」

神崎「よ、よろしくお願いします」

神崎の目の前には龍士位のデカさで屈強な体をしている男性がいた、どうやら工事現場の担当のようだ

龍士「ちゃんと働けようこの人厳しいからな」

神崎「ま、まじかよ」

監督「大丈夫だ、ちゃんと考えて働かせてやる」

龍士「にしても物好きだねあんた、仕事紹介する人間からボクシング習いたいって」

神崎「いいだろ、諦めかけたけど今からなら間に合うからな」

龍士「まあ、暇な時に付き合っつてやるよ、家はここで大家には話通してるから」

神崎「ああ、悪いな、何からなにまで」

龍士「んじや後は頑張れよう」

龍士「何するかね、特にやることないし」

龍士は腕を組なにをするのか考えている

龍士（遊ぶほうにもそんな気分じゃない、友達もいないから遊びにもいけないな）

龍士は心の中で思う、自分で思ってたんだが寂しくなってきた、店の鏡で反射して写った自分の姿があった

龍士「・・・そうだな、こんなにだけ俺は本来は高校生なんだよな」

龍士は15歳、本来だったら高校に行っているはずなのだが、あのツヴァイウィングの事件でどん底まで落ちてしまいヤクザになってしまった、そんなことを考えていると部活帰りの学生たちが友人と話ながら歩道を歩いていた

学生1「いや、疲れたく相変わらずコーチきつすぎんだよ」

学生2「仕方ねえよ、来月には試合だしな」

学生3「また朝から部活か・・・サボろうかな」

学生2「んなこと言ってサボったこと無いくせに」

学生3「いや、何か休んじや負けかと思ってる」

学生1「何に負けるんだよ馬鹿じゃねえーの？」

学生3「んだと馬鹿はお前のほうだろ！」

学生1「な、なんだとお、おめえよりましだ！」

学生2「おいおいやめろよ二人とも」

そんな会話をしながら帰っていった、龍士はその後ろ姿を寂しそうにながめていた

龍士（・・・あの事件がなかったらよかったのにな）

あの事件さえなければ龍士は普通の生活を送っていただろう、学校に行き、授業をうけ、友達としゃべり、そして夢を探す、龍士も本音はそうしかかった

龍士「・・・なに考えてんだか、出来るわけないのに」

自分に言い聞かせる、ヤクザになると決めた以上仕方のないことだ

龍士「とつとと帰るかね」
龍士はそう呟き自分の車に乗り走らせていった

流れ星

響「んう・・うう」

響は未来と一緒に寮にいた、未来はパソコンを使って何かを調べており響の方はなにやら紙になにかをまとめているがこのごろ出撃が多かったのかなんだか眠そうになっている、その様子を見ていた未来は心配そうに見ている

未来「響、寝ちやつたらレポート提出、間に合わなくなるよ」

響「んう、ふあああ」

未来の一言で少し目を覚まし紙に目をやる、どうやらレポートを書いていたようだ

未来「それさえ提出しちやえば追試は免除してくれるんだから頑張らなきゃ」

響「うん・・」

未来「だから、寝ちや駄目なんだって」

響は返事をしたものの眠たそうに顔を伏せた

響「寝てないよ起きてるよお、ちよっと目をつぶってるだけえ」
言葉は返ってくるもののいつものような元気がない、よほど眠たいようだ

未来「最近何か疲れてるみたいだけど、どうしたの？」

響「大丈夫う、へいき、へっちゃらあ」

未来「へっちゃらじゃないよ」

未来が心配そうに返す、そんなやり取りをしていると響のスマホがなり始めた、響はすぐにスマホをとり画面を覗く、そこには二課からのミーティングの時間が書かれていた

響「うわあ」

未来「なに？まさか、アラームをセットする時間を間違えたとか？」

響「いやあ、そのお」

響が言いづらそうに頭をかく

未来「こんな時間に用事？」

響「ははは・・はい」

未来「夜間時間とか門限とかは私で何とかするけれど」

未来はパソコンを回転させ画面をこちらに向けた

未来「これだけは何とかしてよね」

その画面には流れ星が流れていく動画があった

未来「峰さんと私たちで一緒に流れ星見に行く約束したでしょ？山のようにレポート抱えてちや行けなくなっちゃうよ？」

響「うん、な、なんとかするよ、…ごめんね」

未来「もう」

響はそう言うのと立ち上がり着替えを始めた

響「すいません！遅れましたあゝ」

響がそう言いながら二課の部屋に入ってくる、そこには奏たちがおりそのなかには見知らぬ男性がいる

響「あのおくそちらさんは？」

真沙武「あ、そうか、自己紹介してなかったな」

真沙武「俺は風神真沙武、情報管理が仕事だ」

弦十朗「今日はちよつとした調べをしてな、彼の情報と照らし合わせていたんだ」

風神は響に近づき響をじつと見た

響「な、なんですか？」

真沙武「んゝこの子が奏ちゃんのシンフォギアをねゝ、ちよつと気になってたんだ、前から聞いてただけどどんな人物かと思ったら」

真沙武「以外と可愛いじゃん」

響「あ、ありがとうございます」

風神が真つ直ぐな意見を言う、さすがにそんなことが飛ぶとは思ってなかったのだろう響は、顔が赤くなっている

真沙武「にしてもシンフォギアって美人さんばかりだよなゝ」

齋藤「…そこら辺は割りとどうでもいいのでは？」

風神「なに言ってるんだ齋藤君！可愛いと美しいは正義なんだぞ！」

真沙武「は、はあ」

風神の勢いのある答えに斎藤が少し押されながら返す、そのやりとりを見ていた櫻井が手を叩いて止めた

櫻井「さて、そろそろいいかしら？」

そう言うのと部屋にある大きいディスプレイが起動し地図を表示した、こちら辺の町の地図だがいくつか赤い丸のようなものが展開している

弦十朗「響君、これをどう思う？」

響はその画面を見て一言

響「・・・一杯ですね」

その素直な感想に何人か笑いだした

弦十朗「ふはは！まったくその通りだ」

弦十朗「これはこれまで起きたノイズの発生地点だ」

櫻井「ノイズの発生は国連での議題で上がったのは13年前なんだけど、観測はかなり昔からあったのよ」

真沙武「世界各地で確認されている神話や伝承は、ノイズ由来の物が多いんだ」

斎藤「だがノイズの発生率はそんなに多くない、10年に一回か二回ぐらいしかこないはずなんだ」

響「え？でも最近かなり多いですけど？」

響がこのごろ眠たそうにしているのはノイズの出現率が多いからだ、今の話を聞くとどうもおかしい

野々宮「そこなんだ、ノイズの発生率はそのぐらいのはず、なのにこんなに多いということは、誰かが意図的にやってる可能性が高い」

響「意図的に？そんなの誰が？」

翼「中心地はここ、リディアン学院の近くに現れるのが多い、もしかしたらデュランダルを狙っているのかもしれない」

響「あのおのくデュランダルって？」

あおいがそれを聞くと操作盤を動かしてそのデュランダルをディスプレイに表示する

響「これが・・・」

真沙武「フランスの叙事詩に出てくる、英雄ローランが持っていた

とされる伝説の剣」

あおい「ここらからさらに地下深くなあるアビスと呼ばれる場所に保管してある完全聖遺物のことよ」

奏「二課は日本のお偉いさん方からデュランダル研究や保管やらを任されているんだ」

響「か、完全聖遺物？」

野々宮「聖遺物が歌を使ってシンフォギアを纏うことができるとうことは説明したよね」

響「は、はい」

野々宮「聖遺物はだいぶ昔からあるから風化が激しくて破片ぐらしかみつからない、そのため特定の人物の歌を使って力を解放するんだけど、完全聖遺物は誰でもが100%使えるんだ」

櫻井「それが私が提唱した櫻井理論、けど起動させるにもそれ相應のフォニクゲイン値が必要だけどね」

響「ん〜？」

奏「さすがにいきなり難しすぎたか」

響はそれを聞きよくわからないのかシワを寄せ上を向いたり下を向いたりしている、弦十郎がその説明が終わるとソファーから立ち上がった

弦十郎「あれから二年、翼たちの歌ならあるいは」

奏「っ」

翼「・・・」

奏たちは顔にシワをよせ悔しそうにしている

あおい「そもそも、その起動実験の許可は降りるんですか？」

さくや「それ以前の話だよ、安保を盾に、アメリカが再三デュランダル引き渡しを要求してきているらしいじゃないか、起動実験どころか、扱いに関しては慎重にならないと、下手を打てば国際問題だ」

あおい「まさかこの件、米政府が糸を引いてるってことは？」

弦十郎「調査部からの報告によると、ここ数ヶ月に及ぶ本部へのコンピュータへのハッキングを試みた痕跡があったそうだが、アクセスの出所は不明、完全に米国のせいだとは言えない」

真沙武「一応その件についてはたどらせてるよ、でも中々わからないんだよねえ〜これが」

緒川「すみません皆さん、ちよつといいですか?」

弦十朗「ああ、そろそろか」

よくわからない会話をかわす二人、どうやらなにかあるようだ

緒川「今晚はアルバムの打ち合わせが入っています」

響「ふえ?」

緒川「表の顔はツヴァイウイングのマネージャーをやっております」

そういうと緒川はメガネをかけ名刺らしきものを渡してきた

響「うわあ〜名刺貰うなんて初めてです、こりや結構な物をどうも」

緒川「では行きましょう」

奏「OK」

翼「わかりました」

真沙武「じゃあなく翼、ちゃんと可愛く撮ってもらえよ〜」

翼「だ、だから、こんな人がいる前で変なことを言わないで下さい!!」

真沙武「何いってんだ、可愛いのは今に始まったことじゃないだろ」

翼「で、ですから、そう言うのはやめていただきたいのです」

真沙武「わかった、次からは綺麗と呼ぶ事にしよう」

翼「だ、ダメに決まっています!!」

野々宮「はは、相変わらずだ」

奏「ほら行くよー」

そう言うのと四人は部屋から出ていった

響「私たちを取り囲む脅威ってノイズだけじゃないんですね」

斎藤「そりや仕方ない、力を持っている以上、こうなるのは必然だからな」

めんどくさいが仕方がない、人間とはそう言うものだ

響「何処かの誰かがここを狙っているなんて、あんまり考えたくありません」

櫻井「大丈夫よ、なんてつたつてテレビや雑誌で有名なこの櫻井了

子が設計した、人類守護の砦よ、悪いやつらなんか寄せ付けないんだから」

響「よろしくお願いしまーす」

ミーティングが終わった後皆は一旦休憩室に来ていた、響の隣には櫻井が座っており、他の人たちはたっている

響「どうして私たちを、ノイズだけでなく、人間どうしで争っちゃうんでしよう」

櫻井「それはきつと、人類が呪われてるからじゃないかしら」

櫻井は響の耳元に近づきその耳を甘噛みした

響「ひつやああああ?!?!」

櫻井「あらく於保恋わね、誰かの物になっちゃやう前に私の物にしやうかしら」

真沙武「なるほど・・・ああやってからかうのもありか」

斎藤「もしかして、翼にそれするつもりですか?」

真沙武「そうだけど?」

斎藤「・・・やめた方がいいですよ、多分ビンタが飛んでくるんじゃないんですか?」

真沙武「大丈夫だ、抱きつけば止まるから」

斎藤「・・・止め方凄いな」

響「人類は呪われている!!」

響「むしろ私が呪われている」

そんなことをいいながら大声で叫ぶ、学校の庭のような所で響は何かをかき隣にいる人達は両手が塞がっている響にご飯をあげている

未来「お馬鹿なことやってないでレポート書く、今日が締め切りなんだから」

響「だからこうして、限界に挑んでいるんだよ」

弓美「まあアニメじゃないんだし、こんなこととしてはかどるわけないしねえ」

「そう言いながら立ち上がる

響「ええ！手伝ってくれるんじゃないの？」

寺島「まあこれ以上お邪魔するわけにもいかないので、屋上でバドミントン何かどうでしょう」

安藤「賛成、未来はどうする？」

未来「響に付き合う、レポート付き合うって約束しちゃったから」

響「おお、さすがは未来く」

弓美「そ、んじゃあたしら行くね」

響「ありがとね、未来、一緒に流れ星、見ようね」

未来「うん！」

未来「どうだった？レポート」

響「壮絶に字が汚いつて」

未来「そうじゃなくて、ちゃんと出せたの？」

響「今回だけは特別だつて！いえー」立花！廊下ではしやがない！」

職員室から声がした、どうやら聞こえていたようだ

響「流れ星、見られそうだね」

未来「響はここで待ってて、教室からカバン、取ってきてあげる」

響「別にいいよく」

未来「ちゃんと最後までやれたご褒美、ここで待ってて」

そう言う嬉しそうに駆け出していった

響「未来は速いなく、さすがは元陸上部」

さて、流れ星が楽しみだ、そんなことを考えていると自分のスマホから音が鳴り出した

響「っ」

スマホの音が放課後で静かな廊下で響いて行く、仕方なく出ることにした

響「・・・はい」

斎藤「響か？ノイズが出た、今行けるか？」

響「・・・はい、大丈夫です」

斎藤『・・・大丈夫そうに聞こえないが、どうした』

心配そうに斎藤が聞く、響は少し寂しそうに言った

響「・・・ずっと前から流れ星見る約束しちゃって、今日が、その日なんです」

斎藤『・・・そうか』

いけないいけない気持ちを切り替えなくては、取り敢えず場所を聞くことにした

響「直ぐに行きます、場所を教えてください」

斎藤『・・・嫌、そう言うのなら来なくていい、こっちは任せろ』

響「え、でも」

斎藤『最近お前に無理ばかり頼んで申し訳ないからな、今日は俺らに任せろ』

こちらとしてはありがたいが少し申し訳ない気もする

響「で、でも、大丈夫、何ですか？」

斎藤『大丈夫だ、奏の方は直ぐ動けるから俺らで動けばなんとかなる、だから行ってやれ』

響「・・・すいません」

斎藤『じゃあな』

未来「取ってきたよく、どうしたの？」

響「い、いや、何でもない」

未来「そっか、それじゃ行こう、峰さんが迎えに来てくれるらしいし」

響「・・・うん」

響は胸に残った物は未来には言うわけにはいかなかった

地下鉄行きの階段の前に斎藤たちはいた、斎藤はスマホをポケットの中に入れた

野々宮「よかったの、そんなことして？」

斎藤「可哀想じゃねえか、約束してるのに、出来ないなんて」

野々宮「後で司令に、怒られるよ」

斎藤「それでもいい」

我ながら甘いとも思う

奏「まあいいじゃん、そんなに数は多くないようだし」

取り敢えず気持ちいを切り替え階段の方を向いた、そこにはノイズが発生していた

斎藤「よっし！やるか」

奏「おうよ！」

C r o i t z a l r o n z e l l G u n g n i r z i z
z l

奏が斉唱を歌い鎧を纏う、そして奏から歌声が聞こえてきた

斎藤「くらええええ!!」

ノイズに向けて拳を放つ、ノイズは炭となり消え斎藤は次を狙い前蹴りを喰らわせる

奏「おらあああ!!」

奏はアームドギアを槍状に変形させ戦う

奏「野々宮！後で私の歌の感想聞かせろよ！」

野々宮「な、なんで？」

奏「そう言うのはあんまり気にしない！」

斎藤「仕事なんだが？」

相変わらず仕事なのによくわからないことを言う人達だ

弦十朗『奏！中に大きな反応がある！』

奏「了解！」

奏たちはそれを聞き奏は階段をかけ下りる、そこにはノイズがいたが一回り大きなやつがいる、頭に大きなブドウのようなものを着けていた

野々宮「奏さん！あいつです！」

斎藤「俺が援護する！突っ込め!!」

斎藤ぎそう言い突っ込む、目標のノイズまでの一本道ができ奏が駆け出した、しかしそのノイズが頭についている物をこちらに飛ばしてきた、だが奏は器用にかわし距離を詰める、ノイズは天井に当て脱出

路を作り逃げようとする

奏「そんなの読めてんだよお!!」

アームドギアを起動させる、槍の回りに風がおき始めそれが大きくなっていく、それを纏い脱出しようとするノイズ目掛けて突っ込む

奏「くらえええ!!」

M E T E O ∞ S T R I K E

空中にいるノイズに直撃、ノイズは炭となり消えていった

奏「ふう、いっちょあがり」

野々宮「お疲れ様です」

奏「ま、私にかかればこんなもんよ」

得意気な顔をする奏、取り敢えず野々宮は司令に状況報告をすることにした

野々宮「司令終わりました．．はい、はい!？」

斎藤「どうした？」

野々宮「の、ノイズがまた現れたって」

奏「なに!？」

野々宮「しかも響ちゃんたちの所に!!」

斎藤「くそがつ、直ぐに向かうぞ!!」

三人は駆け出す

未来「み、峰さん」

峰「くそ、何でこんな場所に」

峰たちは森の中を走っていた、途中まで流れ星を見ていたのだが急にノイズが現れたのだ、突然のことで驚いて途中で響と離れてしまった、峰が未来の手を引き逃げている、だがノイズとの距離は中々離れない

未来「峰さん．．」

峰「大丈夫、絶対助けるから」

峰（くそ、こんなとき龍士がいれば!）

まきはしたがこのままではいづれか捕まる、せめて未来だけでも逃

がそうとするが、中々いい方法が思いつかない、そんなことを考えて走っている目にもノイズが現れた

峰「な!？」

二人はその場で立ち止まったがノイズが未来に向かって突っ込んできた

峰「っ！こんちくしよおお！」

峰は決死の覚悟で未来を庇うように出てきた

未来「峰さん!？」

ノイズが峰に触れた

峰（あくあ、やっちゃまった）

死を覚悟し目を瞑る

峰（いい嫁さん、見つけたかったな）

心の中でそう思う、背中に伝わる熱があるが、まるで氷のような冷たさが体を覆う

だが炭にはならなかった

未来「み、峰さん？」

峰「・・・あれ？未来ちゃん？」

峰が目を開ける、痛みどころか何も感じない、体も炭になる気配がない、だが後ろを振り向くとノイズがこちらの背中に触れていた

峰「ど、どうなって」

響「峰さん！離れてください!!」

峰「え？」

すると峰の目の前に何かが通り過ぎた、そこにはシンフォギアを纏った響の姿があった

峰「ひ、響ちゃん？」

未来「響なの？」

響「二人とも逃げて！早く！」

峰「っ！未来ちゃんこっち！」

未来「え、でも」

？「おつとそうはいかねえぞ」

峰の前に何かを通り過ぎる、その物体は木に突き刺さった、ピンク色に染まっているクリスタルのようなものが長い棒のように真っ直ぐに伸びている、その根元を辿っているとそこには白い鎧を来た謎の人物がいた

？「融合例のオマケがまさかアンノウンとはな、手間が省けるもんだぜ」

峰「あ、アンノウン？」

響「だ、誰なの？」

謎女「んなあこたあどーでもいい、お前ら、捕まえさせてもらうぜ」

ネフシユタン

響「あなたは、誰なの？」

響がそう聞く、明らかにおかしいのは確かだ、それに謎の女が着ているのはシンフォギアだ

謎女「それをお前に言う必要はねえ」

そう言うとき彼女は手に持っている変な杖みたいな物をこちらに向けた、するとその杖にあるクリスタルの部分からノイズが現れた

響「っ、もしかして、ノイズがここに現れたのって」

謎女「ああ、私がやった」

響「どうしそんなことをするの!？」

謎女「私の目的がお前だからさ」

響「わ、私？」

私がないで？そう響は困惑する

謎女「ああそうだ、融合例第一号、そいつを捕まえるのが私の仕事だが」

謎の女は視線を響から峰に移した

謎女「アンノウンが付いてくるとは、こりやあ一石二鳥だ」

響「融合例？」

峰「あ、アンノウンで、俺のこと？」

謎女「さくて話は終わりだ、とつとと捕まえさせてもらうぜ」

響「なんで戦うの!?!同じ人間なんだよ!?!」

謎女「こんな戦場の最中でなに甘いこと言ってるんだ？」

謎女「そっちがその気じゃなくとも、あたしはその気だぜ！」

女は腕に持っているクリスタルでできた鞭をこちらに振り下ろし

た、響はそれを腕で受け止める、戦闘が始まった

響「くっ！」

ネフシユタンの女はもう片方の鞭を真っ直ぐに投げる、体を貫こうとする鞭を体をひねってなんとか避ける、次に最初に投げた鞭を揺らし波を作り響の顔に当てる

響「うっ！」

その隙に片方の鞭を戻し横になぎはらうように投げる、響はそれを防げず腹にまともにくらい吹き飛ぶ

響「っ！」

謎女「なんだ、やっぱりたいしたことねえな」

そして両方の鞭をいったん自分の所に戻し響に向かって叩きつけた

響「ぐう！」

謎女「おらおらどうしたあ!!」

何もできない響に鞭の雨が降り注ぐ、防御を崩した後腹に向かって鞭を叩きつけた

響「っ!?!」

それをまともに喰らい吹き飛ぶ響、謎女は一旦自分の方に鞭を戻し様子を見ている

謎女「どうしたんだあ？何もしてこねえな」

響「私たちが、戦う理由なんて、ない」

謎女「まだそんなこと言うのか」

謎女「だったらその口聞けなくしてやるよ！」

女はそう言うと言ったその先端にエネルギーでできたボールを作る

謎女「くらい「おい」っ!?!」

女が後ろに振り向くとそこには峰がいた、峰は女に声をかけこちらに振り向くと同時に正拳突きをする

女「があ!?!」

それが腹に突き刺さり腹を押しさえながら後づさる、峰はそれに向かって前蹴りを放つが女は体を横にして回避する

峰「さつきから黙って見てたらさあ、なに俺の友達に手えだしてんの？」

とてもあの峰からは考えられない低くドスの聞いた声だ

謎女「こ、こいつ！」

女は鞭を真つ直ぐに投げた、それと同時に峰は駆け出しそれを避けると同時に距離をつめる、女は鞭の一部を硬化させ短剣状にしそれを切り上げるように攻撃しようとした、だが峰はその鞭を持って腕を右手で掴み止め走ってきた勢いを乗せ右膝蹴りを喰らわせる

謎女「うぐう！」

まともに喰らい倒れる女、だが直ぐに立ち上がり先に投げた鞭を横に揺らしながらこちらに引き寄せる、峰は屈むようにして避けると女がもう片方の鞭を峰に向かって振り下ろす、峰は横にずれ回避した

謎女「くっそがあ、強かったのか、お前」

峰「知り合いにやけに強い年下の友人がいてね、そいつから空手やらなんやら習ったのさ」

峰は響を見る、顔も汚れ体には傷が出来ている、そしてそんなめに合わせた張本人に視界を戻す

峰「何がどうなつてんのかよくわからないけど、とりあえずお前が敵だつて言うのはわかった」

右脚を前にやり右を上げ左は下げ手を開いた状態にし構える

峰「来いよ、相手してやる」

謎女「は、不意討ち喰らわせてもうそのつもりかあ？」

峰「むしろ不意討ち喰らうほどボーとしてる癖に勝てると思う？」

謎女「まぐれだからなあ!!」

女が鞭をこちらに叩きつけてきた、峰はそれを避けると接近する、だが女は直ぐに鞭を戻し片方を横に凧ぎ払うように投げる、峰はそれをジャンプして回避するが女はそれを待っていたかのようにこちらに真つ直ぐに鞭を投げてくる、空中でいる状態では避けられない

響「峰さん!!」

響がそう声を上げる、峰は空中を蹴るように動き攻撃を避けた

女「なに!？」

峰は前に手をつき少し荒く着地すると直ぐに体制を立て直し女に接近する、後少しだが女が鞭を地面に叩きつ土煙を上げた

峰（接近戦は避ける気か）

峰が思っていたとおりの女が距離を置いたために後ろに跳んだ、また振り出しに戻った

峰「ち、こつちにも何か遠距離の武器ないんかね」

謎女「こういう奴は距離を取るに限るからな」

峰（どうすつかなく多分龍士ぐらいだったら勝てると思うんだけど）

戦うのはかなり久しぶりだ、今まで宮本組が守ってくれたから争いはあんまり起こって来なかった、だから空手を使う場面が少なかった
峰「さて、どうすつかね」

相手は距離置く戦法とっている、近づこうにも相手がそれを許してくれない、しかもまだやっては来ないが木の陰には未来がいる、もし相手がノイズを召喚し未来を襲うようにしたら守りきれない

峰（どうやるかね）

その時

斎藤「おらああああ!!」

謎女「!？」

峰「え!？」

横から叫び声が聞こえた、その声の主は謎女の方に突っ込んでいった

斎藤「おらあ！」

謎女「くっ！」

斎藤が右腕を振り上げる、謎の女は当たる前に後ろに大きく飛び避けた、お互いに距離を取り様子を伺う、そうすると翼と野々宮が到着した

謎女「・・・もう来やがった」

斎藤「大丈夫か？」

峰「え、ああ、大丈夫だけど」

野々宮「機動部二課の者だ！そこを動くな!!」

謎女「くっ！」

斎藤「おい待てえ!!」

女が駆け出した、斎藤たちは追いかけてしようとしたがノイズをバラバラに召喚しながら逃げていった

斎藤「くそ！」

翼「取り敢えずここ周辺のノイズを倒す、立花！手伝え！」

響「は、はい！」

女のことは気になるが響たちはノイズの対処に当たることにした

奏「わりいな、時限式は限界があるから」

野々宮「しかたないですよ、少し休んでいてください」

奏「・・・わるい」

ノイズを倒した後、後処理をおこなっていた、峰と未来は二課の方で説明を受けていた

峰「今から、ですか？」

緒川「はい、あなたのことについてちよつと説明することがあるので本部までご同行お願い出来ませんか？」

峰「未来ちゃんも？」

野々宮「はい」

峰は未来の方を向く、未来は響と話している

未来「・・・それじゃ今まで忙しいとか言ってたのって」

響「ごめんね未来、他の人に話すと危険だって言うから話せなくて」

未来はそれを聞くと顔を横にふった

未来「こつちこそごめんね、今まで知らなかったのに少し当たっちゃって」

響「み、未来は悪くないよ、私が悪いんだから」

未来「響・・・」

お互いに自分を攻める、その間に斎藤が入ってきた

斎藤「話の所悪いんだがそろそろ行こう、あいつが戻って来ないなんてかぎらないからな」

響「はい」

未来「わ、わかりました」

野々宮「そう言う訳です、峰さん、ご同行お願いします」

峰「どうせいやつて言ったら無理やり連れていくんだろ？」

野々宮「すいません、機密事項なので」

峰「…わかった」

峰はしぶしぶついていくことにした

未来「し、シンフォギア？」

峰「え、なに、俺の力についてはわからないの？」

峰たちは本部で説明を受けていた、最初に峰の力について、その次に響が着ていた物についての説明を受けていた

緒川「はい、色々な精密な検査の結果、何も以上はありませんでした」

先に峰の体を調べたが特に以上はなく一般的な結果が出たため問題はなかった

峰「ちよつと待てよ、問題がなかったらノイズに触れられないだろう？」

斎藤「それらについてはよく俺らもわかってない、一応調べてはいるんだけど、中々見つからなくてね」

弦十郎「危険だから説明できないと言うよりかは何もわかってないから説明のしようがないって言うのが現状だ」

峰「…まじかよ」

未来「み、峰さん…」

未来が心配そうな顔でこちらを見ている、峰は少し頭が混乱してたが落ち着かせ未来の頭に手を置き安心させた

峰「…大丈夫だよ未来ちゃん、死にはしないから、それにしても」
峰が響の方を向く

峰「まさか響ちゃんがこんなことをやってたなんて、にしてもどうして二課に入ったの？」

響「な、なりゆきと言うか、なんと言うか」

未来「響く隠し事はなしだからね？」

響「だ、大丈夫だよ未来、後でちゃんと話すから」

未来が響に詰め寄り響が押されぎみに返す、どうやら未来は調子が戻ったようだ

弦十郎「峰君、さつきまでのことを踏まえて我々に協力してくれないだろうか？」

峰「協力？」

現状で戦えるのは装者三人と斎藤たちだけ、だが奏は時限式とい、あまり長時間は戦うことはできない、野々宮の方も力が弱くなっているらしく前線にはあまり出せず、新入りの響はまだ戦いかたをよく知らない、そのためほぼ翼と斎藤に頼ることが多いため弦十郎はそれを心配していた

弦十郎「ノイズを倒せる人は一人でも多い方が心強い、どうだろうか、何か協力できることがあるなら言ってくれ」

それに峰は空手も習っている上に強い、ネフシユタンの女を一時的にだが退くほどの実力だ

峰「… まあノイズは俺も嫌いだし、やらない理由はないし」
頭をかき少し照れ臭そうにこう言った

峰「誰かを救いたってのは俺も同じだからね」

弦十郎「すまない」

峰「いいんですよ」

二人がそうやり取りしている間、斎藤たちの方でも話し合っていた
斎藤「… まさか俺ら以外にもまだいたなんてな」

野々宮「一体なんなんだろうか、この力は」

ノイズに触れることができる上に超人のような力をはつすることができる、しかも少しづつだが強くなっていく感じもする

斎藤「さあな、だが、普通ではなさそうな感じがする」

斎藤（それにしてもネフシユタンの鎧着ていた女、何処かで見たよ
うな）

斎藤はあのときのことを思い出した、ネフシユタンの女を攻撃しようとして接近したときになんだか何処かであったような感じがしたのだ

斎藤「… 気のせいかな」

斎藤はそう呟き流すことにした、自分の知り合いだとも知らずに

訓練

龍士「んくやっぱり冠肉の焼き肉は最高だな、うまい」

そう言い肉を食べる、テーブルの金網肉が焼けていく音が聞こえそのテーブルには男が三人、肉を食べていた

神崎「ここもあんたたちのシマなのか、いったいいくつあるんだよ」

山下「両手じゃ数えきれない位さ、だいたいカシラが仕切ってるが一部は兄貴が仕切る所もあるんだ」

神崎「カシラ？」

龍士はいったん食べるのをやめその疑問に答えた

龍士「お前、組の構造知ってるか？」

神崎「いや、知らないけど」

龍士「一番上が組長、二番目が若頭、次は舎弟頭、その次が若頭、舎弟頭補佐、一番下が若衆になっている」

龍士「俺らがさつきからカシラって言うてるのは若頭の勝又 翔だ、下のもんは若頭をカシラ、組長にはおやじって言うのが常識、まあ少し簡単に言えば家族構成みたいなもんだ」

山下「俺たちヤクザはおやじから盃を貰うことでその組に入れるヤクザで言う組はだいたいが親子の契りを交わした人たちである、他にも一家の組長は総長、まとめやくの本部長などがあつたりする

神崎「へえく以外と複雑なんだね」

龍士「まあ最初はそんなもんさ」

神崎「：：にしてもどれだけ食うの？」

神崎は目の前の光景を見ていた、大きな皿と小さな皿がいくつ積み上げられていく

龍士「お前ももつと食えよ、ボクサーは筋肉は必要だぜ？」

神崎「あんた見たいにゴリラにはならなくてもいいでしょ……」

龍士の体格は15歳にしては破格の大きさである、身長180近く、体重は100キロ以上、プロレスラー並みの体格をもっている

龍士「失礼なやつだな、いいだろうが別に、ふう、食い終わった」
そう言う龍士は立ち上がり他の二人も同じく立ち上がった

龍士「ごつそさん、勘定たのむ」

従業員「えつと、全部で7万8000円になりまゝす」

神崎「7万!？」

だいたい焼き肉を三人で食べる値段はだいたい三万か二万ほどだ、だが後半は龍士がほとんど食べていたのでこの値段になった

龍士「ほい」

龍士は財布から金額通りの金を出す

従業員「ありがとうございます」

神崎「：あんたのその金、どつからきてんだよ」

龍士「ほとんどが俺が自分で稼いだ金さ」

龍士のシノギは組から任されている物もあるがだいたい稼ぎは漁業や工事での力仕事での稼ぎだ、そのため上納金を納めてもあまりある程の金を持っている

神崎「へ、へえ」

山下「それじゃ兄貴、これからどうします?」

龍士「そうだな、これから：ん?」

突然龍士のポケットから音が鳴り出した、どうやら電話がきたようだ

龍士「峰から?」

龍士「もしもし?」

峰『あ、龍士か? 悪いな急にかけて』

龍士「別にかまわねえよ、用件は?」

峰『実はさ、また空手を教えてくんないかな?』

龍士「別にいいけど急にどうした? まさか、釘原のやつがまたちよつかい出したのか?」

龍士が峰の店にケツモチをさせたのは釘原組がちよつかいをだしたからだ、それ以降宮本組が面倒を見ている

峰『いや、それとは別件なんだけどよ、せつかく空手教わったのにあんまり使わないのもなくと思ってよ、それに最近客がこないからストレス溜まつちやつてさ体動かしたいんだよね』

峰『だからさたまにでいいんだ、また色々教えてくんないかな?』

龍士「：：別にいいよ、断る理由はない、今からか？」

峰『まあその、出来れば』

龍士「よし、んじやいつもの場所にこい」

峰『わかった』

電話を切り終了する、そして山下たちの方に振り返った

山下「峰さんからはなんと？」

龍士「組み手に付き合えつてさ、んじやまたな」

山下「お疲れ様です」

ここで解散することにした

龍士はある道場に来ていた、ここは今は使われずにいた道場を宮本組が拾い、今は龍士が複数管理している道場の一つ、龍士は格闘技を教えており本丸の道場では師範だ、中にはサンドバッグやトレーニング器具が置いてある

峰「よおお久く」

龍士「よお、以外と早かったな、店はもういいのか？」

峰「大丈夫、この時間帯はどうせ誰も来ないからさ」

龍士「おいおいそんなんで店持つのか？」

峰「大丈夫だって、そんなことより早くやろうよ」

龍士「おう、何かリクエストあるか？」

峰「取り敢えずまた基礎からやりたいんだけど出来る？」

龍士「いいぜ、早速やろうか」

龍士が構えた

峰「おいおい、基礎からっていったら？」

龍士「その前にお前がどれだけやれるのかを見たい、いいだろ？」

峰は頭をかき少し嫌そうな顔をするが、自分から頼みこんどいてさすがに断るわけにはいかない

峰「：：お前強いからなるべくやりたくないんだけどな」

峰も構える

峰「さて、やろうか」

先に峰が仕掛けた、まず首に目掛けての右の手刀、龍士はそれを左で止め、直ぐ様左で殴ってきた、峰はそれを顔を横にずらし避け胸に目掛けてアッパーを放つ、だが龍士は左肘を合わせてぶつけてきた

峰「い!?!」

指が折れそうになる、直ぐ様離れようとするが龍士は右の正拳を胸に放つ

峰「かあ!?!」

一瞬息がつまる、龍士はその隙を逃さず前のめりになっている体の背中目掛けて両手を合わせ振り落とした

峰「っ!」

龍士「痛いと思ってもちやんと相手を見る、そんなんじやあつさりやられるぞ」

峰「いっつうう、わかったよ」

峰は背中をさすりながら立ち上がる、

峰「よし、いくぞお!」

峰が距離をつめた、まず右の正拳、左手で止められ次に左の前蹴り、同じく左腕で抑えられ顔目掛けて左の裏拳が飛んできた、それを左手で受け止めそれをこちら側に引き寄せその勢いをのせた右のフックぎみの肘撃ち、龍士は右に避け捕まれてる腕を解放させ峰の左腕を掴み回してひねりあげる

峰「いてててっ!?!」

そしてひねった腕を元に戻す勢いを利用すると同時に脚払いをし両腕で投げる

峰「いってえ、合気使うなんて汚いぞ!」

龍士「別にどうでもいいだろうが、ほら早く立つ」

峰「こ、こんちくしょお!?!」

峰「ぜえぜえ、し、死ぬう」

龍士「まあこんぐらいか、やることはわかったな」

あの後には結局龍士にボロボロにされ疲れはてて倒れてしまった、龍士の方はさっきの組み手で何がたりないのかを見つけてそれを埋めるためのトレーニングを考えている

龍士「確かに基礎からやり直した方がいいな、後いくつか新しいの教えてやるか」

峰「だ、だろお？だから言ったんだよお」

元気がない声が道場に響く、峰から柔らかい空気を感じるが龍士は少し違った、眉を細め少し真面目な雰囲気を出している

龍士「：：：なんで急にこんなこと言い出した」

峰「だから、ストレス発散だって」

龍士「違うな」

龍士「お前はそんなことがあれば自分ですませるやつだ、ストレス発散ならお前の好きな魚釣りをすればいい、前に言ってたろ？」

峰「：：：」

そう峰は店の稼ぎが少なかったりした時には魚釣りをして気分をまぎらわしているのだ

龍士「どちらかと言うと自分の実力上げるのが目的だろ？だが相手はあの釘原じゃない、もっと別のやつだ」

峰「：：：」

龍士が気になったのはなぜ空手をまた教わりたい本当の理由はなんなのか、それを知りたかったのだ、組み手をしたのはそれを見るためだ、ストレス発散ではなくどちらかと言うと強くなるのが目的、だが今の実力なら釘原たちは特に問題なく処理出来るはず、なら相手はおそらく今の峰クラスの強さははずだ、だが龍士はそんなやつは聞いたことはなかった

龍士「お前、余計なことに首突っ込んでるじゃないだろうな？」

となると何かあったのだ、峰が急にこんなことを言い出した原因が

あるはず、出来ればそれは聞きたかった

峰「：やっぱりばれちゃうか」

峰「そうだよ、どちらかと言うと強くなるのが目的だ」

峰「ある敵に出会ってな、そいつ相手にあんまりまともに戦えなかった」

龍士「：：：」

少し寂しそうな顔をしながら続ける

峰「隣には知り合いがいてね、もし長期戦だったら怪我させてたかも知れない」

峰「多分これからもそいつみたいなのやつに会うかもしれない、その時に力不足だったら悔しいんだ」

峰「俺はそんな後悔はしたくない、だから強くなりたいんだ」

龍士は息を吐き、苦笑いしながら答える

龍士「：：：以外と単純な理由なんだな」

峰「単純だけど、今の俺に必要なものだ」

龍士「その理由は聞かせてくれないか？」

峰「：：：悪い、これだけは話せない、俺がやらなきゃならないことだから」

龍士はそれを聞いたため息をつき頭をかく

龍士「：：：俺と同じで余計なことに首突っ込むよな」

峰「へへ、お前と同じでそういう性格だったから」

龍士「：：：そいつ、どんな戦いかたをするんだ？」

峰「へ？」

龍士「特別だ、お前が戦うやつと同じやつで戦ってやる」

峰「え、いいの？て言うか出来るの？」

龍士「さあ、それは聞いてみないとわからんな」

取り敢えず教えることにする

峰「一応、鞭を使うんだけど」

龍士「ほお、鞭か、先端は鎌か？それとも何も無いのか？」

峰「えっと、一応先は尖ってて、短剣のような使い方もしてたな」

龍士「蛇腹剣か？どんな形状だ」

峰「えつと、クリスタルで出来た鞭？」

龍士「……えらい豪勢だな」

そういうと龍士は近くにある扉を開き部屋に入っていった

龍士「たしかこの辺に、あった」

龍士は取り敢えず長い紐と短い木刀をもち出てきた、紐に木刀をくくりつける

龍士「さて、久しぶりだな」

取り敢えず軽くコンビネーションをしてみる、その動きは早くそして正確な動きだった

峰「す、すげえ」

龍士「うん、鈍ってないな」

峰「相変わらずどこで習ったのか」

龍士「……そうだな、自分で習いに行っただって所かな」

峰「はい？」

龍士「よし、とつとと始めるぞ」

峰「ちよ、ちよつと待てよ、やるって言っただってどう戦えばいいのかわからねえよ」

さすがに初めて戦うので取り敢えず基本的なことを教えることにした

龍士「鞭って言うのは伸縮性を利用した武器だ、そのため動きは読みにくく感じるがそれは鞭ばかり見てるからだ」

峰「え、でもそうしないとわからないだろ？」

龍士「確かにそうだが先に見るのは相手の動きだ」

峰「相手の動き？」

龍士「鞭の動きは操者と同じ動きなんだ、鞭より先に動くのは人、それに連動するのが鞭、だからどっちかかって言うと相手を見て、次に鞭がどのように動くのかを予想するんだ」

峰「出来るかな」

龍士「それは実際にやらないとな、他に言うことがあったらやりながら教えてやる」

峰「よし、やってやる」

龍士「そのいきだ」

少しにやけながらお互い構える、どれくらい出来るのか楽しみだ

――峰 孝――

龍士「いいか！鞭の動きは操者に連動するんだ、だから鞭の動きは遅れてくる、そのため接近戦は避けるはずだ！」

龍士「もし目眩ましか何かさされたら鞭がどのようなに動いたのかわかる！連続で同じ動きが出来ないはずだ！そこを狙うんだ！」

峰「わ、わかった！」

そう終わるなり龍士は鞭を横に振るってきた、峰はそれを見て突っ込み避けながら接近する、当然それを許すはずもなく一旦鞭を戻し戻した勢いを利用し縦に降ってきた、それを見て横に回避するが直ぐ様戻し横に飛ばした、とつさに腕でガードするが長いせいかわ鞭の先端が顔に直撃した

峰「いてえ!？」

龍士「言っただろうが！よく見て動け！」

峰「やっぱりいきなりは無理だつて！」

龍士「大丈夫だ、最初はそんなもんだがいつれかなれる！まだ鞭の攻撃になれてねえだけだ！いくぞお!!」

峰「ちよ!？」

龍士はそう言いながら鞭を振り回しながら突っ込んでくる、ある程度距離が近づくと龍士は振り回している鞭に腕をいれ紐を巻き付けリーチを短くしてきた

峰「まじ!？」

峰はさりげなくやった技に驚きながらもちゃんと相手を見る、龍士は横に腕を降ってきた、峰はそこから予測し頭をかめると頭があつた所に木刀が通りすぎた、そして龍士は腕を一回転させ足元掛け斜め横にふってきた、直ぐにジャンプし回避し次に逆側の方から飛んできた、ギリギリで頭を屈めて回避したがその間を逃がさず鞭をまた逆に回し下から上げるように振るってきた

峰「っ！」

またギリギリで横に避ける、そして右の正拳を放つ、すると龍士は一端鞭を止め木刀を右手に持ち剣の甲で一回受け止めた後胸の近くまで軽く引き防ぎ峰の腕に滑らせながら顔目掛け切りつける、峰は左手で手首を掴み無理やりはがし膝蹴りをかまそうとするが横に避けられ右腕で相手を押すように力をいれバランスを崩させた

峰「まず!？」

直ぐ様足をつき踏ん張るとその状態から右のハイキックをする、龍士はそれを鞭をはり受け止めその脚に鞭を巻き付け腰を捻りながら自分の右後ろに引き上げる

峰「この！」

峰は両腕で床をつきそしてその引かれた勢いを乗せ左後ろ蹴りをかます、龍士は後ろに後退すると同時に引つ張り体をつかせると脚に絡ませていた鞭をとき背中に叩きつけようとした

峰「っ！」

峰は後ろを確認し飛んできた木刀を右足で蹴り上げ直ぐ様立ち上がり龍士の足元目掛け右のローキックを放つが、蹴りあげられた木刀を直ぐ様右手でキャッチしローを左手で防ぎ木刀を顔に突きつける

峰「うわ!？」

峰はそれに驚いてしまった、龍士は右手で軽く押し峰を倒すと腹に乗った

峰「ちよつとまって、お、重い！」

龍士「……まあ最初はこんなもんか」

峰「ど、どけて、マジで重い！」

龍士は峰の腹からどける、峰の方は疲れと腹の圧迫もあったのだから少し息があがっている

龍士「まあ雑だか少しは出来たな」

峰「ぜえつぜえ、そりやどうも」

峰は肩で息を吸いながら大事なことを思い出した

峰「て言うか俺が相手したやつと全然戦いかた違うんだけど！」

龍士「あ？そうなのか？」

峰「なんだよ！腕に巻き付けてリーチ短くするって、バリバリ接近戦出来るじゃねえか！」

龍士「それでも次に動くときは鞭の勢いはあまり殺せないから一回転はさせないと次に動けねえんだよ、まあ木刀があったからしたんだけど」

それに下手に動くときと鞭に絡むので龍士はあんまり好きじゃない

峰「にしてもあんな攻撃あつたなんてな、鞭って言うのも以外と深そうだ」

龍士「まあ俺がやってたのは鎖鎌なんだがな、て言うか格闘技や武術全般に言えることなんだが」

龍士「まあいいや、次は遠距離重視で相手してやる」

峰「まだやるの？」

龍士「当たり前だ、取り敢えず後二時間は続けるぞ」

峰「ええ」

それから二時間ちよつとやり続けきりのいいところで終わり休息に入っていた、龍士の方は無傷だが峰の方はまるでタコ殴りにされたような顔になってしまった

峰「いてて、もうちよい手加減しろよな」

龍士「手加減なんぞしたら意味ないだろうが」

峰「だからと言っていきなりやるかよ」

龍士「最初は言葉で説明した後はなれさせる、そこから細かく解説を挟む、おれが道場でよくやることだろうが」

峰「そうだったね」

そう言い持ってきたスポーツドリンクを飲む、そして少しきになることを聞いてみた

峰「なあ龍士」

龍士「なんだ？」

峰「お前さ、これからもヤクザ続けるのか？」

龍士「そうだが、それがどうかしたのか？」

峰「その、やめようとはしなかったのか？」

龍士「……どういうことだ？」

峰「だつてさお前工場や漁業行ったりとかしてるから一人で生きていけるだろ？なんでヤクザをやめないのになつて」

はつきり言つてヤクザを続けていく必要がない、まっとうな仕事をして金を稼げる上に道場の師範を勤めているのでそれでも食つていけるはずだ、それなのになぜヤクザを続けているのか知りたかつた

龍士「……親父に救われたから、なのかな？」

龍士は伏し目になり寂しそうな目で床を見る、古い建物なので汚れが目立つ床が見える

龍士「あの時親父に救われていなかったら今の俺はなかった、多分それもあるんだ」

龍士「俺にとつて親父は大事な人だ、けど多分俺がヤクザやってる理由はそれじゃない気がするんだ」

龍士「なんでかな？気がまぎれるんだよ、喧嘩やってると、それもあるか？」

自分でもよくわからない、ただ喧嘩をしたいのか恩を返したいのかよくわからない

峰「……」

龍士「まあたとえやめようとはしてもやめられねえよ、俺はまだ返しきれてないからな」

一度ヤクザになったからにはまともに表には出れないとわかつている、だからもう戻ることもできない、そう覚悟を決めてヤクザになることにしたのだ

峰「そうか、わりいな変なこと聞いて」

龍士「平気さ、おめえの方も頑張れよ」

峰「おう」

未来「こんにちは……て何ですかその傷!？」

峰「あ、いらっしやい、この傷？いや〜そこらへんで喧嘩しちやつたのよね」

未来「何で手当てしてないんですか!？」

峰「いや〜ほっといてもいいかな〜なんて」

未来「駄目に決まつてるじゃないですか!？ちよつとこつち来て下さい!！」

峰「え、いや別に…」

未来「いいいから 来て下さい」

峰「はい(´・ω・｀)」

未来「もう、無茶しないでください」

峰「いててごめんって、ほら頭撫でてあげるから」

未来「んっ」

峰「そう言えば響ちゃんは?」

未来「修行だそうです、なんでも司令さんがやつてくれるそうで」

峰「え、あの人強い?」

未来「強いらしいですよ、なんでも生身でシンフォギアと立ち会える位の力量だそうです」

峰「え、まじ?」

未来「まじです」

デュランダル

峰「移動させるんですか？」

弦十朗「ああ、問題が発生してな」

峰はいつもの仕事をしていたら急に呼び出しをくらった、内容はデュランダル移送についての会議だそうだ

弦十朗「先日、防衛大臣が殺害された」

峰「はあ!？」

あまりにも唐突なため耳を疑った、防衛大臣と言えばかなりの大物だ

峰「え、誰に？」

弦十朗「米国のものたちだ、目的は今の所不明、もつか搜索中だが上から任務を預かっている」

弦十朗「防衛大臣から預かった機密資料があり、その任務を遂行する」

すると司令室の大きな液晶画面にここの地図が出てきた

藤暁「でも移送するつたつて何処に保管するんですか？ここ以上の防衛システムなんて何処にも」

藤暁が答える、ここは櫻井が設計した本部だ、そのため守りには申し分ない

弦十朗「永田町最深部にある特別電算室、通称記憶の遺跡、あそこで保管することになった」

弦十朗「どのみち俺達が木っ端役人である以上、御上の命令には逆らえないさ」

上からやれと言われた以上やるしかない、頭をかきしかたなさそうにため息をつく

弦十朗「デュランダルの予定移送日時は、明朝の0500。詳細はこのメモリーチップに入っている」

そう言いチップを見せる

弦十朗「各自それまで休息をとり明日に備えてくれ、では解散」
奏「了解」

響「わ、わかりました」

取り敢えず休息をとることにした響は施設内を回っていた、するとそこには難しい顔をした野々宮が椅子に座り下を見つめていた

野々宮「……」

響「どうしたんですか？難しい顔をして」

野々宮「いや、自分ここにいてもいいのかなーと思って」

響「え？」

いきなりの言葉でどう返したらいいのかよくわからなかった、手を重ね野々宮は続ける

野々宮「あの日からどんどん力は使えなくなってきた、だから戦闘には参加できずただカメラ構えて戦闘を撮るだけ」

野々宮「別にそんなことしなくても施設のシミュレーション部屋があるしなにより別に自分が撮らなくてもドローンの方が効率がいい」
野々宮「奏さんが何故だか自分にそれを任せた、多分きいつかわれただらうね、情けなくってさ」

響「そ、そんなことないですよ！きつと何か理由があるはずですよ！」

野々宮「でもそれを聞いてもはぐらかされるだけなんだよ」

響「そ、そうなんですか」

野々宮「多分奏さんにとつては俺は恩人的な立ち位置なんだよ、だからきいつかって俺に仕事くれたんだ」

野々宮「ただフリーターやるだけだった俺にね、それに比べて何もしてやれなくってさ」

響「野々宮さん……」

どう言葉をかけていいのかよくわからなかった、すると後ろから足音が聞こえてきた、振り向くとそこには奏が眉間にシワを寄せ野々宮を睨み付けている

奏「……」

野々宮「か、奏さん？」

すると奏は無言で近づき野々宮の頬を引っ張る、野々宮は急にされたので何が何やらわからなかった

野々宮「い、痛い痛い！なんですか急に！」

そう言う手手を離し口を開く、少し怒っているようだ

奏「私そんなんで野々宮に任せた訳じゃない」

少し不機嫌そうにこう言った

奏「：ただ私の側にいて欲しいだけ」

野々宮「え？」

奏「あんたが後ろにいるから私は戦いたくなる、あんたがいたから現場での対応も早かった」

奏「野々宮がいる理由なんてたくさんある、だから自分をそんな過小評価しないで、もし野々宮がいらなとか言うやつがいたらそいつ殴るから」

どうやら奏は野々宮が自分を過小評価していたのが気に入らなかつたようだ、そのことについて聞いた野々宮は下を見てうつ向いている

奏「こんどまたそんなこと言ったら、怒る」

野々宮「：すいません」

奏「わかればよろし」

それを聞き直ぐ様笑顔に戻りいつもの奏に戻る、野々宮は何か気になることがあつたため口を開いた

野々宮「そう言えば側について欲しいってどう言うことですか？」

奏「あ」

別に言うつもりはなかつたのだが勢いで言ってしまった、それを思い出すと顔がどんどん赤くなり熱くなつていく

野々宮「いつも側にいるじゃないですか」

奏「ば、な、何言つて」

いきなりの言葉にてんぱる奏だが、それは次の言葉で打ち消される野々宮「いつも奏さんに振り回されてるじゃないですか？それがどうしたんです？」

奏「：：：」

奏の顔にこめかみが浮かび上がった、するとまた野々宮の頬をつねる、またもや急にされたので野々宮はまた何が何やらわからないよう

だ

野々宮「痛い痛い！なんですか!?!何かしました!?!」

奏「この朴念仁めえ！今の言葉聞けばわかるだろお!?!」

野々宮「ええ!?!だってそう言う意味じゃ」

それを聞くと奏は野々宮を叩き出した、野々宮はそれが何故されているのか見当もつかなかったのだ、本人にとってはだいたいだが

奏「返せ！私の勇気を返せ!」

野々宮「な、なにをかえ、ちよ、や、やめてえ!」

響「は、あはは」

響はそれを黙って見届けることにした

野々宮「奏さん、ごめんなさいって、許してくださいよ」

奏「プイ（#?3?）」

斎藤「な、何があったんだ?」

響「まあその、色々あります」

あの後奏は機嫌が悪いまま帰り、そして作戦開始の今日デュランダ
ルを輸送するため櫻井の車に乗り翼と峰は緒川の車に乗っていた、昨
日の一件もあつてかまだ引きずっているようだ

野々宮「もういいじゃないですか許してくれても」

奏「んじやきさま、あのときの私の言葉、どう思っている?」

野々宮「え、だから、いつも振り回されているって」

それを聞き目を細め少しため息をつき質問をする

奏「：んじやなんで振り回してると思う?」

野々宮「友達だから（#o。∇。）||○。3。）∴」

奏の気にさわったのか、その瞬間、野々宮の頬に奏の渾身の一撃が
もたらされた

奏「こんのやろお!!」

そこから追撃、子供のようなぐるぐるパンチだが顔を叩かれてい
る、そのため守ろうと自然に手が動く、昨日とほぼ同じ構図だ

野々宮「いたいたい！ぽかぽか叩かないで!」

奏「うるさい！馬鹿！アホ！にぶちん！」

なんて罵倒すればいいのか思いつかず、取り敢えず出てくる言葉を口から出す、このにぶちんには教えてやらねばと言う気迫を感じる
奏「こうなったらあ！」

野々宮「うえ!?!」

すると奏が野々宮を押し倒し自分の胸に野々宮の顔を押し付ける
奏「どうだ！これならわかるかあ!?!」

野々宮「ふがっがあ!?!」

腕で頭を掴み押し付けている、朴念人は苦しそうだ

斎藤「……教授、早く行つてくれませんか？何か夫婦漫才始まったので」

櫻井「ごめんなさいね！まだまだ先なのよ」

目的の場所に行くには橋を渡る必要があるがまだその橋にすら
いつていない、それまで後ろの漫才を聞き流すのはちよつと辛い

斎藤「はあ」

斎藤がため息をつき取り敢えず寝ようとしたその時、後ろにいた護
衛車が何かに吹っ飛ばされた

奏「っ!?!」

野々宮「な、なに!?!」

斎藤「下からだ！」

するとまた護衛車が吹っ飛ばされた、その護衛車の下には水柱が
立っている

斎藤「司令、これは」

弦十朗『どうやら下水道をノイズが通ってきているらしい、きをつ
けろ!?!』

その言葉が終わると同時にまた護衛車が水で突き上げられた

野々宮「ご、護衛車が」

斎藤「教授！飛ばしてください！」

櫻井「ok、行くわよお!!」

櫻井はそれを聞きペダルを踏む、スピードが増し突っ切ろうとする
響「うわあ、上から何か降ってきてますよお!?!」

櫻井「忙しいわね！」

上からも何か降ってきた、下水道にあつたゴミとその下水道を閉じていた蓋だ

櫻井「弦十朗君、ちよつと不味いわよ、この先にある薬品工場で爆発なんか起こつたらデュランダルは…」

弦十朗『わかっている！さつきから護衛車を的確に狙っているのはデュランダルを損傷させないためだ！』

弦十朗『デュランダルの確保が狙いなら、敢えて危険な地域に滑り込み攻めてを封じるって算段だ！』

櫻井「勝算は？」

弦十朗『思い付きを数字で語れるものかよ！』

野々宮「え！思いつき!?!」

齋藤「はあ、まじで？」

櫻井「皆！掴まってて！」

櫻井はそれを聞き薬品工場に入る、するとノイズの攻撃が来なくなつたが

野々宮「教授！前！」

その変わりに前にはノイズが待ち構えていた、ノイズは護衛車に飛びかかり護衛車はそのまま壁に激突してしまう

野々宮「最後の護衛車が！」

齋藤「ち！」

翼『私と峰さんがいく！後は頼んだ！』

後ろから来ていた車から翼と峰が飛び出しノイズと交戦する、だがノイズはこちらにも飛んできた、櫻井は何とかかわし続けるが前にノイズが立ちはだかつた

櫻井「っ！」

何とか急ハンドルをかけノイズには接触しなかったがそのせいで車が横転してしまった

齋藤「おわあ!?!」

響「いてて」

奏「の、野々宮！」

野々宮「へへ、大丈夫見たいですね」

斎藤たちの方は大丈夫だが窓側の席に座っていた奏を守るため野々宮が守っていたのだ

野々宮「いてえ」

奏「大丈夫か!?!」

野々宮「へ、平気です」

そう返事を返し中から出てくる、周りにはノイズ、急がなければ逃げられなくなる

響「涼子さん、早く行きましょう!」

そうデュランダルを入れてあるケースを持ち答える、この場に入るだけでも危険だ

櫻井「でもそれ重そうだし、ここに捨てて行きましょう?」

奏「駄目に決まってるじゃないですか!?!」

櫻井「それもそうよね」

そうジョークを言うが相手は待つてはくれなかった、ノイズの大群が攻撃をしてきた

斎藤「クソツタレ、多すぎんだよ!」

奏「くそお、これじゃ変身できない!」

斎藤が頑張っているがとてもじゃないが変身できる状態じゃない、シンフォギアを纏うためには歌を歌う必要があるのだがその途中はほぼ無防備に近い、いつもは安全な所で歌い纏っているが今は敵の目の前だ、逃げるので精いっぱいだった

響「ど、どうすれば」

すると響が逃げていた所の近くにあつた薬品工場が爆発を起こした

響「きゃ!!」

そして目の前にはノイズがいた、ノイズは形をかえ響に突っ込んでいった

響「っ!」

思わず顔を背け目をつむる、だが痛みも何も来なかった、目を見開きノイズの方を見ると櫻井が手をかざしバリアのような物を展

開していた

響「え？」

櫻井「しかたないわね、あなたのやりたいことを、やりたいようにやりなさい」

何故だかよくわからないがチャンスだ、響は立ち上がり歌を歌う前に櫻井に返事を返した

響「：はい！」

B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o
n

歌が終わると体に変化が起こりシンフォギアを纏っていた

響「よし！」

そして弦十朗との修行を思いだし構えをしようとするが問題が発生した

響「っ！」

シンフォギアのだいたいいにはヒールがついているのだ、格闘家にとっては邪魔でしかない

響「ヒールが、邪魔だ！」

そう言いヒールを折り構える、中国拳法

ノイズが一体突っ込んでくる、響は構えると腕を回すように動きそこから拳を出す、ノイズは直撃し炭になり、次に後ろからきたやつには後ろ回し蹴りを放つ、二体がずらして突撃をしてきたため最初いきたやつに掌底を放ち倒し、次に正拳を放ち倒す、以前と比べてはるかに動きがよくなった

謎の女「あいつ、戦えるようになってやがる！」

峰「よお」

謎の女「!?」

峰「：この間はどうも」

謎の女「お前は、あのときの」

峰「いや、護衛車吹っ飛ばされたけど、ある程度片付けたし、もう翼さんだけで大丈夫でしょう」

峰「まあ挨拶は抜きにして」

峰は構えた

峰「始めようか」

謎の女「ち、お前の相手してる場合じゃなっ!？」

峰は膝蹴りを放つ、女は後ろに避け峰はそこに左フック更に後ろに下がったところに、あびせ蹴りが飛んできた

謎の女「ぐう!？」

何とか防ぐ、お互いに距離を置き様子を伺う

峰「この前とは違うぜ」

謎の女「こんのお」

――謎の女――

女は鞭を振ってきた、峰はそれを避けながら進む、そして女は右は立てに振り下ろしてきた、それを横に避け次は横に振るう、それをスライディングで避け近づいていった

謎の女（こいつもだ、動きが全然ちげえ!）

女は鞭を短剣にし対応する、ストレートを放ちそれを避けられ次は左の前蹴り、それを避けると女は短剣で切り下ろしてきた、峰はその間に腕を置き止めそのまま腕を掴み後ろに投げる

謎の女「く!」

女はなんとか着地するが峰に足払いをされ直ぐに体制を崩す、そこに下段突きがくる、それを何とか避け立ち上がった

謎の女「ち!」

鞭を横に振るうが拳で殴り上げられ軌道をずらされた

謎の女「な!？」

そしてその空いている脇腹に渾身の正拳が放たれた

謎の女「かはっ!？」

女は吹っ飛ばされたが脇腹を押さえ立ち上がる、峰は右手で喉を突こうとし女はそれを避ける、次に左のストレートが来てそれは手のひらで防ぐ、すると峰は左手でその手首を掴み自分の方に引きながら空き

の顎に目掛けて右の肘打ちを喰らわす

謎の女「ぐう！」

峰「あいつの鞭に比べたら楽なもんだな」

謎の女「なめんなあ！」

鞭をしなければ波を作り、それを峰に飛ばす、だが峰はそれを避け、防ぎ、いなしながら接近する、すると鞭を使い女が峰の脚に絡めた

謎の女「とったあ！」

女はそう言いこちらに峰の脚を引っ張り引き寄せた、そしてバランスを崩した峰に向けてもう片方の鞭を振り下ろす、峰は掴まれてる方の脚を曲げ無理やり姿勢を真っ直ぐにし片方の足で地面に着地、そして絡まっている鞭を張り、その振り下ろした鞭を防いだ

謎の女「っ!？」

そして絡まっている脚を軸にしその場で回転し鞭を解いた後その鞭を引っ張りこちらに引き寄せた

謎の女「なっ！」

そしてその顎に目掛けて掌底を放つ

謎の女「があ!？」

峰「：：『ストリートファイトは、発想が命だ』」

謎の女「な、なんだと？」

峰「俺の師匠からの教え、まあようはその場でどんな動きができるのかが大事ってことさ」

峰の頭に浮かぶ年下の巨漢、こちらも訓練の効果はあったようだ

謎の女「ち」

峰「さて、そろそろ終わりかな？」

前とは形成が逆転したが突然横から何かが飛び出す音がした

峰「あれは!？」

なんとデュランダルが空中に浮遊している

謎の女「デュランダル!!」

峰「あ、くそ、おいまてえ！」

謎の女「誰が待つかよ！」

女はそう言う杖を使いノイズをばらまき時間を稼ぐ、そしてその

間に自分は飛び腕を伸ばしデュランダルを掴もうとする

謎の女「取っ！」

斎藤「させるかあ!!」

斎藤が間に入り止めた、そしてその隙に

斎藤「響い!!」

響「どつりやあああああ!!」

響がノイズの群れから飛び出しデュランダルを掴む、するとデュランダルに変化がおき欠けていた剣が新品どうように欠けておらず色もあせていない黄金の剣がそのてにあつた

謎の女「な!？」

響「取ったあ！」

そしてその場で無事に着地、だが響に変化が起こる

響「っ!？」

なにか不思議な感情が心の中に入ってくる

響き「あつがあっ!!」

コワセ コワセ コワセ

響「がああああ!!」

嫌な感じが体をめぐっていく、すると響の体が真っ黒に染め上げられた、赤い目をぎらつかせながら叫び声をあげている、さらにデュランダルから光が放たれそれが剣のような形で形成されていた

響「がああああああああ!!」

すると響はその手に持っている剣をノイズ目掛けて振り下ろした、デュランダルから発せられる光に飲まれ、その光は薬品工場切り裂いた

斎藤「な、なんだ!？」

峰「ひ、響きちゃん!？」

奏「おいどうなつてんだあれ！」

奏たちはその光景を見ていた、本来の響なら絶対にするはずはない行動に全員が驚きを隠せなかった、そして女の方はその光景を見ると急に苦虫を噛むような表情をしていた

謎の女「っ！そんな力、見せびらかすなあ!!」

すると女が先端にエネルギーの球体を作り出しそれを響に放った

響「がああ■■■■!!!」

響はデュランダルを振り下ろしそれをかき消す、それだけでとまるはずもなくそのまま女を包み込んだ

謎の女「お、お前さえ倒せば、私は！」

そしてそのままふっとばされた

斎藤「お、おい！くそお」

斎藤は直ぐ様吹っ飛ばされた女を助けるためそちらに駆け出した、すると響はその動きにつられ斎藤にデュランダルを振り下ろそうとした

峰「ち！」

斎藤「み、峰さん!？」

峰は響に近づく、すると響は峰にも振り下ろそうとしている、それが振り下ろされる前に峰はその剣を掴み一回捻り無理やり下ろし掴みにくい持ち方になったら最後に勢いはよく上に投げる

峰「あ、あぶねえ」

響が元の姿に戻ると同時にデュランダルが落ちてきた、そのまま地面に突き刺さり元の欠けた剣に戻った

野々宮「響ちゃんは？」

峰「大丈夫だ、気を失っているだけだ」

その場で全員が集まり沈黙がくる、それを破るような音がする、弦十郎が乗っていたヘリが近づいてきた音だ、全員がその場で固まり動かずにいた

斎藤「何処だ？」

斎藤はさっきの吹っ飛ばされた女を探していた、瓦礫を飛び越え辺りを見回す、すると倒れている白い鎧が見えた

斎藤「おい、だいじょうぶ……」

斎藤が顔を覗きこむするとそこには斎藤がよく知る人物がいた

斎藤「く、クリス？」

クリス「うう、ん？」

するとクリスが目を覚ましたようだ、クリスは細い目でしばらくそのままでいたがバイザーが割れていることに気づいた

クリス「!?」

直ぐ様顔を隠し見えないようにする

斎藤「な、なあ、クリスだろ？な、なんでそんなの着てるんだよ」

クリス「み、見るなあ」

斎藤「く、クリス？」

クリス「見るなああああ!!!」

そう叫び声をあげ後ろをむき走った

斎藤「ま！」

斎藤はその場で固まっていた、今まで戦っていたのが自分の知り合
いだと知らずにいたのだ

斎藤「な、なんでクリスが」

その言葉は風に消えていくだけで、誰も答えてはくれなかった

彼女の覚悟

響「すいません、ご心配をおかけして」

あれから翌日響は検査を受けていた、あの後気絶していた響と落ちていたデュランダルを回収したのち一度二課本部に戻った、デュランダルはまたアビスに保管されている

峰「体は、大丈夫なの？」

響「はい、大丈夫です」

峰「ならよかった」

響「あの、翼さんたちは？」

峰「多分仕事、野々宮は一応怪我してたからここにいる」

野々宮の方はどうやら腕を痛めたらしいので今回はついていけなかったらしい、奏は一緒にいたいと駄々をこねて抜け出そうとしたが緒川に見つかり引っ張られていったそうなの

響「それじゃ斎藤さんは？」

峰「そういえば見てないな」

あの一件以来斎藤の姿を見ていない、どうやら外出が増えたそうだが何かあったのだろうか？

峰「まあ、今日は早く帰りな、送ってあげるから」

響「それじゃ、お言葉に甘えまして」

響「はあ、疲れた〜」

峰に送られた後部屋のベッドで寝っ転がり疲れをとっていた
未来「お疲れ様、色々あったみたいだね」

響「ほんとだよ〜」

デュランダルでの襲撃、そして自分の暴走、そんなことをしてしまった自分の不甲斐なさに

響（アームドギア、早く使えるようにならなくっちゃ）

これも自分の心の弱さだ、一瞬とは言えあれに飲み込まれてしまった、なら強くならなくては、そう心に言い聞かせ目の前で拳を作り力を入れる

響（けど、どうしたら使えるんだろう）

使おうとは思いたいのが切っ掛けなのはわからない、一応奏からヒントみたいなのは聞きはしたがあんまりわからなかった

奏『自分のやりたいこと、それを強く思い浮かべるんだ、それがお前にとってのアームドギアになる』

響（うくんするようにはしてるんだけど、中々思い浮かばないけど、だ何かがたりない、そんな感じがするのだ）

未来「どうしたの？」

響「なんでもなくい」

そう返答するが顔はとても顔はそうは言っていない、未来はそんな響の事を心配しある提案をする

未来「ねえ響、明日公園に行かない？」

二人は近くにある公園に来ていた、自分たちの寮からは少し遠いが自然が多くゆつくりしたいときな最適な場所だ、二人は池にかけてある橋の上におりそこから周りを見回す

響「相変わらず綺麗だね〜ここ」

未来「そうだね、けどこうして響とゆつくりするのも久々だね」

最近は一課の仕事で忙しく中々時間が取れなかったのだ

響「ごめんね、最近出勤が多くて」

未来「そこは仕方ないよ、響の助けを待ってくれてる人もいるんだもん」

自分では出来ないことだ、ただ見守ることしか出来ない、ただ帰り

を待つてやるしかない、ただそれだけしか出来なかった、だから友人の悩みぐらいは聞きたかった

未来「……何かあった？」

響「え？」

未来の方を見る、少し寂しげな顔をしながらこちらを見ていた

未来「昨日から浮かない顔してる」

響「……やっぱ気づいちゃうか」

そう言うのと下を見てうつむき自分の不安をこぼした

響「……前の任務の時、聖遺物の輸送の護衛をしてただけどき、それが襲撃されて奪われそうになったときにその対象の物に私それにふれちゃって、そしたら急に目の前真っ黒になって……気づいたら病院にいた」

真っ白い天井が見えた、そして視界が明けてくると二課の皆が心配そうな目でこちらを見ていたのだ

響「その時に私が何をしたのかはつきり覚えてる、私とその聖遺物を使って暴れちゃったことも」

どす黒いものに飲まれてあんなことをしでかしてしまった、峰さんや皆は気にしなくていいと言っていたがやっぱり自分がしてしまったことには責任を感じてしまう

響「私の心弱かったからああなっちゃったんだって、私が奏さんたち見たいにアームドギアを使えれば制御できたんじゃないかなって」皆はゆっくりやっていけばいいと言っただけだがそれがあのぎまだ、結局は皆に甘えていただけだったのだ、自分が未熟だったせいでああなってしまった

響「もつと私が強ければ……」

未来「ううん、響は強い」

響「未来……」

未来の方を見る、真剣な眼差しでこちらを見ていた

未来「響は誰かを助けるためにいつも無茶してる、それはあの二年前の事件がきっかけなんですよ？」

あのツヴァイウイングの事件、皆が不幸になってしまったあの時、

響はあの時、自分の力のなさを恨んだことはない

響「うん、もうあんな思いたくない、したくない、誰かの苦しむ姿は見たくない、私は皆には、笑顔でいて欲しい」

あんなのもうたくさんだ、何故何にも関係のない人があならなければいけないのか、そんな所は見たくない、聞きたくもない、だから自分は人助けをしている

未来「ほら、自分の言った事をどんな形であれ実現しようとしてる」
未来がこちらを見ながら話を進めていく、だが途中で少し暗い顔をして目を下に向けて話しずらそうにしていた

未来「私はね、あの時の事後悔してるんだ、響の事を置いていっちゃって、自分だけ安全な場所にいっちゃってごめんね、もっと前に謝れたらよかったんだけど」

本人が望んでいたことではなかったが響を置いて逃げてしまったのは事実、未来はその事について謝りたかった、響はそれを聞くと返答する

響「そんな！私そんなこと気にしてないよ！未来がいてくれたから、私は今まで生きてこれた！未来が私を守ってくれた、だから今の私がいる」

そう、未来は響の事が心配で帰ってきたのだ、同じ学校、同じ部屋に住み響と一緒にいた、そのため響は孤独と言うのはあまり感じなかったのだ

未来「ありがとね、そう言ってもらえると、助かるかな」

そさてまた響の方を見て答える

未来「響、あなたがやってることは正しい、その優しさや心の強さがあるから、あなたは人を助ける事ができる、私はそんな響が友達だったのが誇らしいの」

そして響の手を握りお互いに見つめ直す

未来「確かに、何かのひょうしで間違えることもあると思う、けどだからといって自信をなくさないで？その失敗を乗り越えなくちゃこれから響がしたいこと出来なくなっちゃうから」

未来「響が皆で笑顔でいて欲しいと思うように私も響には笑顔でい

て欲しい、響は私にとって太陽なんだから」

響「……うん、ありがとう」

何を悩んでいたんだろうか、だけどどこかげで迷いが晴れた、自分のやりたいことはただ一つ、困っている人を助けることだ

未来「何か困ったことがあったら相談してね」

こんなにも自分の事を思ってくれている人が隣にいるのだ、何を悩んでいたんだろうか？

響（そうだ、私だけが人を助けてる訳じゃない、こんな風に言葉で人を助けてくれる人がいる）

奏さんたちがそうだ、歌で人々に笑顔を与えてくれている、助け方は何も力だけじゃないのだ

響（私は、人を助けたい、自分の手の届く範囲ならてを伸ばす、そして最短で、真っ直ぐに助け出したい）

そう心に言い聞かせた、だが不思議と心地がいい、未来の方を見ると風であおられた髪を押さえながら池の方を見ていた

響（ありがとね、未来）

そんなことを思っていると響のスマホが鳴り出した

響「っ！」

直ぐ様取り出し応答する

響「はい、何でしょうか？」

弦十郎『そこ近辺にノイズが発生した！向かえるか？』

それと同じタイミングで警報が鳴り出した、けたたましいサイレンが周りに響く、だが不思議と嫌な感じはしなかった、もう迷いはないのだから

響「はい！今の私は元気百倍です！すぐに向かいます！」

弦十郎『頼む』

そしてスマホをポケットに入れる、未来の方を見るとすべて察つした顔をしたいた

未来「またお仕事？」

響「うん、ごめんね未来、せつかくゆつくり出来たのに」

それを聞くと横に首を降る、そして響の方を見た

未来「気にしないで、ほら、早くいかなきゃ」

響「うん！」

そう言うのと目的地に向かって走り出した、未来はその背中をしばらく眺めシエルターに急ぐのだった

斎藤「おらああああ!!!」

そう叫びながら目の前にいるノイズに前蹴りを放つ、だが一向に数が減らない、むしろさつきついたときの倍はいる

斎藤「かあくそお、多すぎんだよ！」

斎藤はここしばらくクリスを探していた、何故彼女があんなことをしているのか、それをどうしても聞きたかったのだが見つからず路頭に迷っていると司令からノイズの対応をするように言われて飛んできたのだ、ノイズがいるのなら多分いるはずだ

？「やつぱり、来ちゃったか」

斎藤「その声は!?!」

声のする方に振り向く、そこにはネフシユタンの鎧を着たクリスがいた

クリス「よお」

そう挨拶をかわす、出来ればクリスであってほしくなかった

斎藤「やつぱり、クリスなんだな？」

クリス「ああ」

斎藤「どうしてこんなことをするだ！」

斎藤はまずそれを聞聞きたかった、遊んでいる時に見せたあの優しい表情から考えてとてもクリスがやっているかと認めたくなかったのだ

クリス「お前には、関係ない」

斎藤「ある！友達がこんなことするの黙って見てろってのか!?!」

クリス「今回の狙いはお前じゃないんだ、あいつを、あいつさえ捕まえば、私は」

そう下を見て呟き始めた、それを心配した斎藤は声をかける

斎藤「く、クリス？」

クリス「斎藤、引いてくれ」

そう彼に提案する、だが彼がそんなことだ引き下がる訳がなかった

斎藤「いやだ！」

クリス「なら無理やりどかしてやる!!」

そう言うのと鞭を振りかざしてきた、斎藤はそれを避け懐に入ろうとした所にもう一本の鞭が振り下ろされそれを両腕で受け止めた

斎藤「く！」

――雪音 クリス――

クリス「おらあ!!」

鞭を上から叩きつけてくる、それを横に避け接近する、クリスは鞭を短刀にして応戦する、それを刃が当たらない様に避けながら打ち合っていく、そして斎藤が腕を掴むとそれを無理やり下ろさせクリス問いかけた

斎藤「駄目だクリス！これ以上やったら戻れなくなるぞ！」

クリス「うるせえ！」

それを振り払うと鞭の先端にエネルギーボールを作り出しこちらに投げてきた

クリス「くらいなあ！」

NIRVANA GEDON

斎藤「うわ!？」

それを腕を十字にさせ何とか防ぐ、だが防いだはいいものの吹っ飛ばされてしまった

斎藤「かあ、いつてえ」

思わず腕を見る、怪我はしてはいないが服が破れてしまっている、そうしているとクリスの追撃が飛んできた

斎藤「おま！」

それを横に移動して回避し次にきたやつも何とか避ける、そのせいかお互いにまた距離が開いてしまった

斎藤「くそ」

響「斎藤さん！」

悪態をつきながら立ち上がろうとすると響が到着した

斎藤「立花!？」

響「大丈夫ですか？」

斎藤「あ、ああ、大丈夫、服が少し破れたぐらいだ」

クリス「来たな！融合例第一号！」

響「私はそんな名前じゃない！」

そう大声をだしクリスに向かって何故だか自己紹介を始めた

響「いい!?!よく聞いて！私は立花 響！15歳！誕生日は九月の十三日で血液型はO型！身長はこないだの測定では157cm！体重はっ……もう少し仲良くなったなら教えてあげる！趣味は人助けで好きなものはごはん&ごはん！あとは……」

その時にうつすらと脳裏に何かが横切った、自分と同じ年なのにもってプロレスでもしているかのような体格を持った幼馴染みが、それが完全に思い出す前に自分で書き消した

響「っ！彼氏いない歴は年齢と同じ!!」

斎藤「こ、こんな所で自己紹介って」

クリス「な、なに言っただこいつ」

まったくその通りであるが彼女の目的はこれにあった

響「私たちはノイズと違って言葉が通じるんだから、ちゃんと話したい！」

クリス「んの悠長な事を！」

そう言い鞭で攻撃するが避けられる、ろくに攻撃を防げなかったと言うのに上達したものだ

クリス（ち、やっぱり動きがよくなってやがる、だが）

まだ荒い所がある、一撃一撃を大きく避けているのがそれだ

響「話し合おうよ！私たちは戦っちゃいけないんだ！だって言葉が通じれば人は！」

その言葉を聞いた瞬間クリスの中で何かがきれた

クリス「ああうるせえ！さつきからピーチクパーチクと偉そうに言いやがって！」

クリス「んなもんで分かり合えるかよ人が！そんな風に出来ているものか！気に入らねえ、気に入らねえ気に入らねえ気に入らねえ!!わかつちやいないことをペラペラと知った風に口にしやがって」

クリス「お前を引きずって来いって言われたがもうどうでもいい！

お前だけは私が潰す!!」

斎藤（！やっぱり誰かの指示か!?!）

そしてクリスは鞭の先端にエネルギーの球体を作りこちら響に投げつけた

N I R V A N A G E D O N

クリス「おらあああ!!!」

紫色の球体が響に迫る、さつき斎藤をぶっ飛ばしたやつだ

斎藤「立花！」

響「ふん！」

だがそれを響は腕を十字にして受け止めた

斎藤「受け止めた!?!」

クリス「ならっ！」

するとクリスはまた球体を作り出し響に投げつけた

クリス「持ってけ！ダブルだ!!!」

それが響に当たると爆発した、周りが煙に包まれ見えなくなった

斎藤「立花！」

だが霧がはれると響は立っていた、そして手を胸の近くまで持つていき少し間を開ける、するとそこに光が出始めた

響（集中しろ、集中）

そう、この感覚だ、胸の内にあるこれを形にできれば！

クリス「あいつ！この短時間で!？」

クリスはアームドギアを生成しようとする響に驚く、だが途中でその光が爆発してしまい吹っ飛ばされてしまう

響「うわあ!？」

地面に倒れたが直ぐに起き上がり気持ちを切り替えた

響「エネルギーはあるんだ！アームドギアに出来ないのなら!!」

その時、響の腕にあるパーツがスライドした、そして中にあるドリルのような物が回り始める

響「この分のエネルギーを、ぶつければいい!!」

クリス「しやらくせえ!!」

その様子を見ていたクリスが鞭を叩きつけてきた、それに合わせて響は拳をぶつけた、するとパーツがスライドしたとたんまたぶつかるような音がすると鞭の勢いが相殺された

クリス「な!？」

思い出せ、司令が言っていた言葉を！

響「雷を!!」

こちらに鞭を引っ張り引き寄せる

響「握り潰すようにいいいい!!」

そして手を離し自身のブースターで加速する、そしてハンマーパー

ツをおこす

響「最速でえ！最短に！真つ直ぐにい！！一直線にいいい！！」

響「胸の響をつ！この思いをおおお！！」

そしてさらに加速してクリスに近づいていく

クリス（く、くそ、空中じやうまく引っ張れっ!?!）

響「おりやああああああ！！！！」

我流 激槍衝打

クリスの腹に向かって拳をぶつける、さらにハンマーパーツをスライドしてさらに衝撃がくる

クリス「がはっ!?!」

それをまともに受けたクリスはそのままだま吹っ飛ばされてしまった

黒幕

クリス「がふっけほっ！」

土煙の中クリスが立ち上がる、響の攻撃をまともに喰らい吹っ飛ばされたのだ、当たった所は鎧が欠けてしまい素肌が剥き出しになっている

クリス「ふ、ふぎげやがって」

話し合いだの仲良くしようだの気に入らない事ばかり言っていた、何もかも知った風な口で喋るあの口も黙らせたかった、そんな事を考えているとネフシユタンの鎧が再生を始める、だがそれがクリスに負荷を与え体に痛みがはしる

クリス（くそ、食い破られる前にかたつけないと）

クリスは土煙から出て響の方を見る、響は静かに歌を歌いながら目を閉じその場でじっとしていた

クリス（や、野郎！）

まるで何もかもわかったようなたたずまい、自分の攻撃を避けられると思っているのか？

クリス「お前馬鹿にしてるのか、私を、雪音クリスを!!」

すると響は待ってましたと言わんばかりに瞳を開いた

響「そっか、クリスちゃんって言うんだ」

クリス「あ」

口元を隠すがもう遅い、響の目的である話し合いに一步近づいたためか距離をつめようとした

響「ねえこんなこともうやめよう？ 私たちはノイズと違ってわかりあえるはずだよ？」

クリス「ああもおお!!」

気に入らなかつた、何もかもが、その怒りをぶつけるために響に蹴りを喰らわせる

クリス「くせえんだよお前！くせえくせえ、青くせえ!!」

クリス「ぶっ飛べ！アーマーパージだ!!」

そう言うとなフシユタンの鎧が弾けた

響「うっ！」

斎藤「おわ!？」

辺りに鎧の破片が飛び散っていく、木を貫き地面に突きささったりした、辺りが煙に包まれているそんな中歌が聞こえてきた

K i l l t e r I c h a i v a l t r o n

響「え?」

斎藤「こ、これは！」

クリス「見せてやるよ、イチイバルの力を！」

弦十郎「イチイバルだどっ!？」

そう司令室で弦十郎が驚く、そして画面にはアウフバツフェンの波形が写し出される

友里「アウフバツフェン波形、始動！」

「過去のデータとも照合完了、間違いありません、コードイチイバルです！」

弦十郎「失われた第二聖遺物まで敵にわたっていたのか」

そしてクリスが纏い終えた、赤を中心としたカラーリングで所々に黒が入っている

クリス「歌わせたなあ、私に歌を歌わせたなあ!？」

クリス「教えてやるよお……あたしはな、歌が大っ嫌いなんだ!!!」

そう言うとクリスは歌を歌いながらパーツを变形させボウガン状の物を取り出すとそれをこちらに向けて撃ち始めた、響は横に走りそれを避け続けるがその場から跳び先読みをして放ち響の足を止めた、そして響の前に着地し蹴りを当てぶっ飛ばした

響「かはっ!？」

斎藤「立花！」

斎藤「おいクリス!もうやめるんだ!!」

クリス「うるせえ!!」

そしたらこちらにも攻撃し始めた、斎藤はそれを避けながら近づ

く、だがクリスはボウガンを変形させた、ガトリングのような形状になつておりさらに腰のパーツがスライドしたと思つたらそこにはミサイルが詰まっていた、そしてガトリングを撃ち始めた

B I L L I O N M A I D E N

斎藤「なあ!？」

さすがにガトリングでは弾幕が厚すぎるので近寄れない、さらに止まっている足にミサイルが飛ばした

M E G A D E T H P A R T Y

斎藤「やば!？」

ガトリングの弾を避けながら何とかミサイルも避ける続けるが、目の前にミサイルが爆発し吹っ飛ばされてしまった

斎藤「ぐう！」

そこに追撃のミサイルが飛んでくるさすがに避けきれず腕を十字にして何とか受け止める姿勢をとった、そしてミサイルが爆発し煙が実現し斎藤の姿が見えなくなった

クリス「はあっはあっ」

飛ばしすぎたのか肩で息をし始めた、斎藤のまわりの土は焼け焦げ木も粉微塵に吹っ飛ばされている

響「斎藤さん!？」

クリス「……」

響は驚きそちらを見るが中々煙が晴れず安否が確認出来ない、だが

クリスの方は何か気づいたようだ

クリス「なんだ？」

白く縦に青い線が入っている壁が見える、まるで彼を守るかのよう
に実現したような

クリス「盾？」

翼「違う、剣だ！」

声がする方を向くとそこには剣の上に翼が立っていた

響「翼さん！」

翼「すまない、遅くなった」

奏「おらああああ!!」

クリス「!?」

STAR DUST∞FOTON

クリスがいたところに無数の槍が降り注ぐ、それを銃で撃ち弾きながら回避する、奏の方は響の方に着地し守るように前に槍をおく、それと同時に野々宮が現れる

奏「大丈夫？」

響「は、はい」

野々宮「こつちに」

響が誘導しその場から離れる、すると奏の隣に翼が降りてくる、そしてそこに弦十郎からの無線がきた

弦十郎『翼！彼女からは色々聞きたいことがある、捕らえるだ！』

翼「わかりました、奏」

奏「あいよ」

クリス「ち！」

まずは奏が行く、突きからの切り上げ、それを避け銃を撃つ、それを槍で防ぎながら上に飛び上がり跳び蹴りを放つ、そしてそれを避け

るために下がった所に翼の攻撃がくる、胴切りからの切り上げ、さらに袈裟切りを繰り返す

クリス「こんのお！」

何とか避け銃で応戦する、それは奏が受け止め翼は横から出てくる、すぐさま翼に照準を向けたその時、奏が槍を降りかざしてきた、それを銃で受け止めるがその次に翼の剣が迫ってくる

クリス「くう！」

直ぐ様腰のパーツを展開してミサイルを地面に放つ、辺りが煙で包まれた、奏と翼は直ぐ様その煙の中から離脱しクリスを探す、クリスは煙が出ている所から少し離れている所にいた

奏「さて、どうする？これ以上続けるのならやるけど？」

翼「大人しくしなさい、出来れば手荒なまねはしたくない」

クリス「け、どいつもこいつも甘い事で」

お互いに構え様子を伺う、すると斎藤がクリスに向かって走た

奏「え!？」

クリス「馬鹿が！」

クリスは銃を斎藤に向ける、斎藤の方は何だが焦っているような表情わしてこちらに近づいていた、すると斎藤が口を開く

斎藤「クリス！あぶない！」

クリス「え？」

すると斎藤に向けて構えていたアームドギアに何か被弾して破損してしまった、クリスは上を確認するとそこには飛行型のノイズか数体いてそれがクリスに体を丸めて突っ込んでいった、クリスはそれを信じられないような表情をしながらその場で動けずにいた

斎藤「くそ！」

斎藤は直ぐ様クリスを押しその攻撃を回避する

斎藤「大丈夫？」

クリス「あ、ああ」

斎藤はそれを聞くと安堵する、それを見たクリスは少し嬉しかった？「まったくあなたは、命じた事もろくにできないのかしら？」

突然横から声が聞こえてきた、そちらを見ると黒い服と帽子を着て

いる金髪の女性がいた

クリス「フィーネ!?!」

翼（フィーネ? 終わりの名を持つもの?）

クリス「こんなやつらいなかったって戦争の火種ぐらいは私一人で消してやる! そうしたら、あんたが言うように戦争のない未来が作れるんだろ!?!」

フィーネ「……もうあなたにようは無いわ」

クリス「……え?」

そういうと自分の目の前に手を出す、すると森林内で散らばっていたネフシユタンの鎧が光となってフィーネの手に集まっていく、それが終わると立ち去ろうとする

奏「まちな!」

奏が接近し捕まえようとする、するとフィーネはクリスが持っているノイズを召還する物をノイズを動かした、奏に行くかと思いきやその後ろにいる野々宮にむかっていった

野々宮「な!?!」

奏「野々宮あ!!」

とつさの事で最初は避けたがその後突っ込んできたノイズの攻撃はまともに喰らってしまった

野々宮「かふっ!?!」

吹っ飛ばされ地面に叩きつけられた、よく見ると腹の辺りに血がついている、その光景を見た奏は眉間にシワをよせ目を大きく見開きフィーネに罵声を浴びせる

奏「なにしてんだてめええ!!!」

LAST∞METEOR

直ぐ様槍にエネルギーを集めそれをフィーネにむかつて振り下ろす、そのエネルギーは竜巻となってフィーネに襲いかかろうとするがその直前にフィーネは飛んで避け遠くへ消えていった

クリス「待てよ、フィーネえ!!!」

斎藤「おいクリス!!」

クリスがファイネの方に走っていき斎藤もそれに続く、そして奏も続こうとする

響「ちよつと!?斎藤さん!」

翼「奏!落ちていて!」

奏「だけど!」

野々宮「じ、自分は大丈夫です、早く追った方が」

口ではそう言ってるがかなりつらそうだ、その様子を見た奏は野々宮に近づき手当てをすることにした、しかも響の方に異変が起きた、何故だかうまく走れない、それだけじゃなく視界もグラグラし始めた

響「あ、あれ?」

翼「立花、大丈夫か!」

倒れそうになった所を翼が支える、響は心配させないように少し苦笑いをして元気を出そうとした

響「平気です、けど足が何だが」

翼「いきなりのアームドギア使用による負荷だろう、少し休んでおくといい」

響「は、はい、でも斎藤さんは?」

翼「心配ないだろう、それに今から追っても間に合うまい」

クリスのイチイバルの反応が消えた、これ以上追うのは無理だろう、翼たちは医療班と事務処理班が来るのを待つことにした

奏「大丈夫?」

野々宮「だ、大丈夫です、腹に穴空いただけですから」

野々宮「いて」

奏「大丈夫じゃないじゃん、医療班が来るまで大人しくしてな」

野々宮「は、はい、そ、それはそれとして」

奏「ん?」

野々宮「この状況はいつたい……」

今野々宮が置かれている状況は奏に膝枕されている、奏の顔を見る

と少し嬉しそうな顔をしている

奏「床で直接寝るよりはいいだろ？」

野々宮「で、でもこの状況は」

女の子に膝枕をされるのは男の憧れだ、特に奏ほどの美人となると嬉しいのだがかなり恥ずかしい

奏「駄目？」

普段の奏から出ない弱気な声が聞こえる、しかも目が少しぼやけながらこちらをみていて何だが泣いてしまいそうだ、それを見た野々宮は諦めたようなため息をついた

野々宮「……いいですよ」

奏「よし」

その場が何だがほわほわする雰囲気を出している、一方翼は響を近くにあったベンチに寝かし先に事務処理に来ていた真沙武と話しかけていた

翼「真沙武さん知っていますか、彼女の事を？」

真沙武「彼女、クリスちゃんはギア装者候補の一人だったんだ」

真沙武「二年位前に行方不明になってそれっきりだったんだ、まさかこんな形で会おうなんて」

どうやら消息事件もあのフィーネと言う奴が絡んでいそうだがクリスはいないし齋藤は後を追ってしまった、ここは齋藤に任せるのが打倒かもしれない

翼「そうだったんですか」

彼女にそんな過去があるとは思わなかった、あんな事を言っていたのを考えると周りの環境はよくなかったのだろう、そして響の方は上を見て齋藤の身の心配していた

響（齋藤さん……）

翼はああ言っていたがやはり心配だ、太陽が隠れてしまった空を見てその不安は強くなった

クリス「くそ、何でだよ、何で」

クリスはあるの後フィーネの屋敷に行ったが攻撃され追われる身となってしまうた、理由がわからず目的もないまま歩き続けた、そんな時後ろから声をかけられる

斎藤「クリス！」

クリス「な!？」

斎藤であった、あの後探し回ったのか肩で息をしている

斎藤「はあつはあ、やっと見つかった」

クリス「お、お前、どうして」

斎藤「急に森の中で消えたと思つて探してみたらでっかい屋敷を見かけてさ、そこに行こうとしたらクリスがそこから飛び出していくのが見えたから」

クリス「……」

クリスは後ろを向きうつむく、何でだろうか斎藤の顔が見辛いのだ
斎藤「なあ、クリス、お前これからどうするんだ？」

クリス「ふん、私がやりたいことは変わらないさ」

斎藤「戦争の火種を無くすつてやつか？」

クリス「そうだ」

斎藤「何でだ、あいつに言われてしてたんじや」

クリス「フィーネとはあくまで意見が一致してただけだ、それにこれは私が望んだ事だ」

斎藤「クリス……」

斎藤はどうしたら止められるかわからなかった、クリスの目は少し不安そうな感じがする、多分自分でもわかっているんだ、もうそんな事をして意味がないと、取りあえず説得を試みようとしたとき何処からか誰かの泣き声が聞こえてきた

クリス「？」

斎藤「ん？」

斎藤「こんな夜中に子供？」

声のする方に行くとベンチの所に女の子が座つて泣いておりそれ

を男の子が慰めている、斎藤は子供たちに近づき事情を聞くことにした

斎藤「おい、どうしたんだ？」

男の子「それが、親とはぐれちゃって」

斎藤「そうか、んじや俺たちが探してあげるから、一緒に行こう」

男の子「う、うん」

子供たちの手を取り取りあえず町に行こうとするがクリスの方をじつと見ている

クリス「ちよつと待て、まさか私も探せとか言わないな!？」

斎藤「え？クリスは探さないの？」

クリス「んなのお前がやればいいだろ!？」

斎藤「二人でやった方が効率いいだろ？それにまだクリスと話したいし」

クリス「ふざけんじやねえ、あたしは帰る!」

その場で振り返り何処かへ行くこうとした時女の子と目があってしまった、今にも泣き出しそうな目でこちらを見ている

クリス「わかった!やりやいいんだろ!?!そんな目で見るんじやねえ!」

あの後一緒に探すことになり子供たちの手はクリスが繋いでいて斎藤は子供たちから聞いた特徴とそれっぽい男性を目を凝らしながら探していた

クリス「くくくくくく」

突然綺麗な歌が聞こえる、どうやらクリスが歌っているようだ

クリス「な、なんだよ」

斎藤「いやさ、綺麗な歌だなんて」

女の子「私も!お姉ちゃん歌好きなの?」

それを聞くとクリスは顔をしかめ不安そうな目をしながら否定する

クリス「歌何か嫌いだ、特に壊すことしか出来ない、私の歌は」
自分でも何でこんなことやってしまったのだろうと後悔している、
自分が一番嫌いな奴らと同じやり方をしている自分が不思議でしよ
うがなかった

クリス（は、結局意味なんかなかったのかな？）

フィーネから言われたこと、自分が消した火種が新たな火種を生む
だけだと、そんなことに気づけなかった自分が馬鹿らしく思えた、そ
んな難しい事を考えていると齋藤がシリアスな空気をぶち壊す変な
ことをいった

齋藤「そうかな、俺結構クリスの事好きだぞ？」

クリス「は、はあ!? な、な、なにいつてんだお前!」

頬を赤く染め齋藤を見る、齋藤の方はキョトンとしながら当然よ
うに言い放った

齋藤「何って、優しい所とか、笑顔が可愛い所とかさ、それにこん
な綺麗な歌を歌えるんだ、俺はそこら辺を含めてクリスが好きだな」
素直に誉めてくれてしばきなくなるが、子供たちの目の前だ、ここ
は少し落ち着き返すことにした

クリス「ふ、ふん、勝手ばつか言いやがって」

目をそらし頬をかき小言を言う、すると誰かから声をかけられた

男「よお、ちよつと兄ちゃんたち？」

男2「わお、すげえ美人」

男3「しかも子供連れだぜ」

いかにもチンピラらしい奴らが齋藤たちを囲み始めた、子供たちは
それに怯え齋藤の後ろに隠れる

男「ねえねえこれから俺らと遊ばない、いい場所知ってるんだ」

そうクリスに手を出そうとする、だが途中で齋藤に止められた

齋藤「悪いけど俺らは人を探してるんだ、ナンパはよそでやってく
れないかな？」

男「お前には聞いてねえよ」

その場空気が冷たくなっていく、お互いににらみ合うそんな中また
誰かに声をかけられた

？「おい」

男「あ？」

？「何してんだ？そろそろと」

齋藤（誰だ？）

短髪のガタイのいい男だ、多分日本人で身長は齋藤と同じくらいだが齋藤が目引いたのは彼の筋肉だ、無駄がなくガタイにみあった大ききさだ

齋藤（すげえ）

自分も鍛えてはいるがあんな洗礼された体は作れない、あれはゆつくり時間をかけてしあげるものだ、多分かなりつよいだろう、その証拠に根を上げた男が彼の名前を滑らせた

男「か、神崎さん」

どうやら神崎と言うらしい、そう呼ばれ神崎は男たちの方を睨む

神崎「お前らまさか、無理矢理ナンパとかしてないよな？」

その様子を見ていた男たちは言い訳を述べた

男「い、いや別に、ただ道を聞かれただけで」

男「そ、そうですよ、嫌だなく神崎さんは、心配しすぎてすって」

男「そ、それじゃ俺らはこれで」

神崎の気迫に押されたのかそそくさと帰って行ってしまった、しばらく彼らを睨んでいたが姿が消えると子供の方を見て笑顔を向けこちらに歩みよってきた

神崎「大丈夫か？」

そして子供の目の前にくると腰を下ろし視線を合わせる、子供たちは怯えながらも礼を言った

男の子「あ、ありがとう」

神崎「どういたしました」

そう言うのと立ち上がりこちらを不機嫌そうな目で見てきた、それを見た齋藤は一応いつでも動けるように警戒した

神崎「おいあんた」

齋藤「な、なんだよ？」

龍士「こんな時間に子供を出すな」

クリス「し、仕方ねえだろ、迷子なんだからよ」

神埼「え？お前らのガキじゃないの？」

それを聞いたクリスは顔を真っ赤にして否定した

クリス「が、がが、そんなわけねえだろ!？」

神埼「何だ、てっきりあんたらの子かと」

クリス「ちげえよ!!」

頬がさつきより赤くそまり否定する、斎藤の方はなんだか照れ臭そうに頭をかいていた

斎藤「な、何か、ちよつと恥ずかしいな」

クリス「何でだよ！」

斎藤「いや、ちよつとクリスと俺の子供を、想像しちやって」

クリス「な、なななななな」

なんて事を言うんだこの馬鹿者は、クリスは耳まで真っ赤にさせし
ばらくうつむいてしまったが直ぐに斎藤を睨み腕を上げる

クリス「馬鹿!!!」

斎藤「ぶべえ!?!」

そして顔に思いつきり拳を放ちくらわせる、これは斎藤が悪い

クリス「お前!まだそういうのははや、じゃなくて、その……ああ
もう変なこと言うなよ!!!」

膝をつき殴られた所をおさえながら膝をくずしている斎藤に向
かってクリスが説教をしていた、神埼はそれを見ると少しはにかむよ
うな顔になる

神埼「仲がいいことで」

そして振り返り何処かへ去ろうとした、だが何か思い出したのか途
中で立ち止まりこちらに顔だけ向けた

神埼「さつき近くの交番で男性が子供を探してたらしいぜ、まだい
るかもよ」

斎藤「そ、そうか、ありがとう」

神埼「んじや」

顔を戻しそのまま歩き続け夜の町に消えていった、斎藤はそれを聞
き立ち上がり近くの交番まで行こうとする、だがクリスが何だが立ち

止まっておりこちらにくるきがない

斎藤「早く行こうぜ？」

クリス「い、言われなくても行ってやるよ！」

そして少し小走りをして斎藤たちに追いつき交番を目指した

交番を目指した、目の前に来たところ確かに男性がいた、あたふたしながら何かを探しすようにキョロキョロしているが子供たちを見た時嬉しいような顔をしてこちらにかけよった

男の子「お父さん！」

父「お前たち、何処にいつてたんだ!？」

女の子「お姉ちゃんたちが迷子になってくれたの」

男の子「違うだろ、一緒に探してくれたんだろ？」

それを聞いた父親は礼を言った

父「どうもすいませんでした、ほら、お姉ちゃんたちにありがとうは言ったのか？」

女の子、男の子「ありがとうございました！」

クリス「い、いいんだよ、成り行きだし」

子供たちは親と会えて嬉しいのかお互いに抱き合い嬉しがっている、クリスはその光景を少し不思議に思えた

クリス「仲良さそうだな」

クリス「……なあ、どうやったらそんなに仲良くなれるんだ？」

男の子「わからないよ、いつも喧嘩してるし」

女の子「けどそのたびに仲直りするから良くなるの！」

よくわからない、自分にはそんな人いなかった

クリス「仲良く、か」

斎藤はクリスの顔を見て少し心配そうな顔をして見ていた

あの後子供たちとはわかれ二人は二人きりになった、わかれてから何だが顔が合わせられず最初と同じになったしまった、だが以外にも先に口を開いたのはクリスだった

クリス「なあ」

斎藤「ん？どうしたの？」

クリス「さつきはその、ごめん」

斎藤「何が？」

クリス「いや、何か当たっちゃって」

どうやら強く当たったのを気にしているみたいだ、だが斎藤はそれよりもクリスの事が心配であったため別に気にしてなかった

斎藤「仕方ないよ、クリスが一番辛いだろう？」

クリス「でもよ」

斎藤「こんなのただ仲直りすれば解決する、けど今のクリスはこのフィーネとか言うやつに見捨てられて辛いはずだ」

斎藤「俺で良ければ助けてやる、だって友達だろう？」

真剣な顔をしてこちらに助け船を出した、クリスはそれを聞き少し嬉しそうにする

クリス「……助かる」

斎藤「そういえば家とかどうするんだよ」

クリスは多分フィーネの所にいたはずだから戻れないだろう、となると古びたビルかアパートを借りるのだが、クリスはお金持ってなさそうだし古びたビルもあまり衛生上よくないはずだ

クリス「そ、それは、野宿？」

やはりそこまで考えてなかったのか少し苦笑いをしながらこちらを見て答えた、だが斎藤の方はそれをあまりよくおもってなかった

斎藤「女の子にそれさせるの何か気が引けるんだけど」

クリス「仕方ねえだろ、これしかないんだから」

確かにそうだがクリスにそんなことをさせたくない、どうしたらいいか考えるとある一つの提案をクリスに出した

斎藤「……よかつたら家来る？」

クリス「へ？」

斎藤「いやよ、俺の家結構でかくってき、二人位余裕で住めるぜ？」
クリスはそれを聞きしばらく固まっていたが直ぐに罵声を浴びせ
た

クリス「な、何いってんだ！お、おお男の家何か行けるわけないだ
ろ!？」

斎藤「でも野宿とかさせたくないし、それにクリスだって嫌だろ？」

クリス「う、た、確かにそうだけど」

斎藤「俺だって恥ずかしいけど、こっちの方がお互い楽じゃない？」

クリスはそれを聞きしばらく考え込む、ちらつと斎藤の方を見ると
何だが譲らなそうな雰囲気を出していた、クリスはため息をつき答え
た

クリス「……世話になる」

斎藤「よろしく」

クリス「ただし！変なことすんなよ！したらぶっ飛ばすからな！」

斎藤「しねえよ!!」

クリス「……」

斎藤「いて、なにすんの!？」

クリス「ふん」

脚を軽く蹴る、それはそれで何かムカついたクリスであった

後ろでうぐめくもの

龍士「ち、無くなってやがる」

商店街の飲食店前で自分の手にあるタバコケースを見て舌打ちする、中が空でこれでは吸えそうにない

龍士「後で買つとかねえとな、ついでに酒でも買つとくか?」

確か家にある酒も無くなりそうだったはず、なら後で買い出しにいかないといけないかも知れない、まずはタバコを買おうと動き出そうとしたとき山下がこちらに駆け寄ってきた

山下「兄貴」

龍士「おう、どうした?」

今日はシノギはなかったはず、何のようなのだろうか、山下がすぐ近くに来た、そして周りをキョロキョロ見てこちらに向き直り話しかけてきた

山下「いやそれが、気になることがあります」

龍士「なんだ?」

どうやら何か掴んだようだ、山下が龍士の隣来て話しを続ける

山下「何か変なやつらが妙な物を密売してるらしくて」

龍士「家のシマでか?」

山下「はい」

龍士「歩きながら話すぞ」

そう言い歩調を合わせて歩きだした、今日は昼頃なので少し人が多いようだ

龍士「どんなやつだ」

山下「それが、外国人みたいらしくて」

龍士「外国人?」

龍士はそれを聞くと目を細める

龍士「服装は?」

山下「黒いスーツ着て、黒いサングラスをしてて」

龍士「言語は?」

山下「多分英語かと」

それを聞くと急に止まり顎に手を当て何かを考えている

山下「何かここ辺りでも？」

龍士「ああ……ちよい待ってろ」

すると山下に後ろを向けスマホを取り出し操作し耳に当てた

龍士「カシラですか？」

勝又『ああ俺だ、どうした？』

龍士「山下から変なやつらが家のシマで商売をしていると」

勝又『最近うちのシマで動いている外国人か』

どうやら何やら知っているようだ

龍士「おそらく、どうします？」

勝又『ちよつと山下にかわれ』

そう言われスマホを耳から離し山下にやる

龍士「カシラからだ」

それを受け取り電話を続ける

山下「はい、変わりました、はい、そうです………はい、わかりました」

そう言い終わり電話を切りこちらに渡す、それを懐にしまい山下を見る

龍士「何だって？」

山下「調べてくれと」

龍士「わかった」

難しい顔をして何かを考えている、下をじっとみていたが山下に視線を戻す

龍士「そもそも情報の出所はどこだ」

山下「知り合いのつてからです、うちの所で変な動きをしていたらこつちに知らせがくるようになってます」

龍士「いつからいるんだ？」

山下「つい最近、一週間前から」

龍士「人数は？」

山下「8〜11人ぐらいかと」

龍士「何をしているのかわかるか？」

山下「それが、何やら古いものを買っているらしくて」
龍士「古いもの？」

てつきり麻薬やら銃やらと思っていたのだがまさか買う方だったとは以外だった

山下「昔の道具の破片とか、博物館に飾ってそうなものです」

龍士「何だ？そいつら美術館でも建ててるのか？」

正直こんなノイズだらけの所で美術館何ぞ開いてもあんまり稼げそうには思えない、それに何故こんな所で探しているんだ？

龍士（大したもんねえはずなのに）

ノイズによって壊された美術館や博物館なので品が流失するとうことはあるのだがだいたいそんなの裏の市場で売られたりするものだから直ぐにばれる

龍士（買って何するんだ？）

正直そんなの持っていた所で宝の持ち腐れだ、正規ルートで手に入ったならまだしもここそと集めている時点で胡散臭い、それに買った所で飾れもしないし見せることも出来ないのでは価値もなくなる

龍士「……まあいいや、そいつらが買ったやついくらするんだ？」

山下「流石にそこまでは……」

何をしたいのかまったくわからない、だが怪しい以上は見過ごすことは出来ない、ヤクザのシマで好き勝手されたら面子がたたなくなる
龍士「……取りあえず、そいつら知ってそうなやつを探すか」

山下「また聞き込みですか？」

龍士「そうだ、やるぞ」

山下「はい」

素晴らしい目撃された場所に向けて歩きだした

龍士「結局お前が教えてくれた情報以外有力なの聞けなかったな」

あの後探しはしたが見つからず適当な公園の椅子に座り情報交換をしていた、収穫はなく地域の人からは見かける程度だと言うことしかわからない

山下「はい、やっぱり表で聞くのにはちよつと相手が」

だが表になにもないと言うのは裏の仕事をやっている可能性もある、それさえわかれば判断出来るのだが

山下「どうします？相手の事務所に話に行きますか？」

龍士「馬鹿行けるわけねえだろ、怪しい連中だがわかったのは美術品を買っているってだけ、白か黒かもわかねえのに俺らが会えるわけねえだろ」

そんなことしたら通報されて終わりだ、法律が厳しくなってから大門を掲げるだけで通報される位にヤクザとして生きていくのには厳しいのだ

山下「ですよね」

龍士「けどカシラの話じゃたまに裏の仕事をしてるらしい、そこがわかればただの美術品買うやつらだから無視してもいいんだがな」

龍士（……けど、あの件がある以上見逃せない）

目を細めシワがより難しい顔になってしまふ、ふと山下の方を見ると心配そうな顔をしてこちらを覗き込んでいたので直ぐに切り替えた

龍士「ま、こんなこともあろうかとあいつに頼んでたんだが」

山下「あーもしかして、裏の酒場のマスター？」

宮本組の情報の拠り所、町中の大きな酒場、あそこは色々な人間がくる、表の超有名な政治家、資産家などが裏の仕事を依頼するときがあったり、それにつられて裏の人間が来たりすら、普通の酒場としてもなったりするので普通の客も来るときがあり表と裏の情報が集まるのが早い、そのマスターは情報屋で家の組がそこを守っている

龍士「あそこは裏の情報を拾うのが早い、内のシマのだいたい事ならわかるだろうよ」

そう言い立ち上がり歩を進める山下がそれに続く

龍士「ほれ、行くぞ」

山下「へい」

町中に入り歩道を歩いていく、そして奥に進んでいくうちに少しずつ狭くなっていつてある店の前に立つ、BOITと書かれている看板が目に入り相変わらず酒場の名前か？とそれを見てちよつと笑いそうになる、中に入ると階段がありそれを下つていくとまた扉があった、それを押して開く、中は大理石が中心でカウンターの近くでマスターらしき人がこちらを見ていた

龍士「よーマスター、元気にしてる？」

マスター「和哉じゃねえか、最近見なかったから寂しかったぞ」

カウンター前の席に座り山下も隣に座る

龍士「スコツチを」

マスター「何がいい？」

龍士「ハイボール」

マスター「お前さんは？」

山下「えつと、焼酎を」

そう言うとマスターが後ろの棚にてを伸ばしグラスに注ぎだした、龍士は席に座りタバコを加える、いつも通り山下が火をつけそれを吸い本題に入る

龍士「それで、頼んでおいたもん何だけだよ」

マスター「ああ、あの外国人関係の？」

龍士「そ、何かわかった？」

マスター「まあ少しは」

マスター「あいつらがここに入って来たのはだいぶ前、半年か下手したら一年前だ」

山下「そんなに前に？」

マスター「ああ、ここに来て仕事場を探していたらしい、そしてあそこのビルを買い取って最初は銃やら麻薬やら売買してたらしいが

それから3ヶ月後ぐらいに摘発くらっておじやんになったらいい、それから動きはなかったんだが最近では美術品を買っているらしいぞ」
酒を龍士たちの前に置く、龍士はそれを一回飲み続ける

龍士「昔の古くさい物か？」

マスター「ああ、だが妙でよ、摘発くらって稼ぎが無くなったやつにしては買うやつ値段が高いんだ」

龍士「いくらだ？」

マスター「えくと、最高額で3億ぐらいってところか」

山下「は、3億!？」

摘発を喰らってそこまで時間が立っていないのにそんな金用意できるわけない、しかもおそらく複数買っているはずなのに

龍士「とてもじゃねえが金欠野郎が払える額じゃねえな、バックにデカイやつがいる、けど何かしらの理由ででられないから路頭に迷ってたやつに仲介人として買わせてるって感じか？」

マスター「ま、おおむねそんな所だろ、けどこれはでけえ事だぜえ」
龍士「ああ、こりやパスだな」

さすがにバックにいる人間が怖すぎる、三次団体が首を突っ込んでいい案件ではない

龍士「こりやうちの直系の黒澤組の出番かな？」

古東会直系、黒澤 骸が率いる黒澤組、親父が前いた組、裏の仕事を中心としていて組長の黒澤は元格闘家だ、身長は俺より少しでかく体格は俺より小さいがそれでもその大柄な体を生かした力技の達人、特にあの人の後ろ蹴りが恐ろしくまともにくらったら体がへこむ程の威力らしい

山下「さすがにこれはうちらじゃちよつと無理ですね」

龍士「そうだな、カシラに連絡しよう」

山下「はい」

山下がスマホを取り出そうとしたと店の扉が開いた、中に入ってきたのはスーツ姿を着た外国人たちだ

龍士「外国人？」

するとマスターがカウンターを軽く叩きこちらに顔を出してきた

マスター「おい龍士あいつらだぜ、お前さんらが追っている外国人ってのは」

龍士「なに？」

龍士は外国人を見る

龍士「ここには来んのか？」

マスター「いや初めてだ、けど真ん中のやつは何か他と違うな」

龍士「ああ他は少し身なりが汚いがあいつはちゃんと整ってる、S P見たいだ」

他の客も不気味がつている、すると、外国人たちはこちらに近づいてきた

？「お隣よろしいでしょうか？」

龍士「……どうぞ」

適当に返し隣に座ってくる、山下が立とうとするが龍士が目をやりそれを、とめる

？「マスター、ウイスキーの水割りを」

マスター「あいよ」

マスターがそれを聞き用意する、外国人はそれを飲みただ前を向いているだけ、お互いにしばらく沈黙が現れたが龍士が先に切り出した

龍士「……何か言いたげだな」

？「そうですね」

？「あなたに少し提案があるのですが」

少し驚き外国人を見る、相変わらずただ前を見るだけだがこちらは笑みを浮かべている

龍士「……へえ、なに？」

？「あなたの組長と合わせて欲しい」

龍士「は？」

それを聞いた龍士は目を見開いた、何故親父が出てきたのか不思議だが取り敢えず聞き出す事にした

龍士「何故？」

？「少し組長さんに、用事がありましたね」

龍士「どんなだ？」

？「実はあなたの組長さんが、実に珍しい物を持っているらしいので、それを譲って頂きたいのです」

龍士「……ほおー」

どうやら自分に近づいてきたのはこれが理由らしい、それが何なのかはよくわからないが断った方がよさそうだ、だが外国人が懐から封筒を取り出しそれをカウンターに置きこちらの前にやってきた

龍士「……この金は？」

？「あなたが話をつけてくれればこれをお譲りします、もしご不満ならもつと出しますよ、どうですか？」

顎に手を当て目を細め外国人を見る、相変わらず笑みを浮かべるだけで何ら変わらずこちらを見ていた

龍士「……その前に聞いていいか？」

？「はい、何でしょうか？」

龍士「お前さんらは随分と高価な物を買っているらしいな、何処で買ってたんだ？」

？「それはもちろん、正式なオークションですが？」

龍士「3億で落札された美術品とかこちら辺で聞いた事がねえんだよ、それにこちら辺で落札はやらねえ、だってノイズが出没するところだからな」

それに正式なオークションだったらちゃんと誰が買ったか記録が残るしたまにテレビにでも出される、だが龍士たちが調べた所、ここ最近でそんなのを聞いたこともなかった

龍士「こちら辺はノイズのせいで潰された家や店何かが腐るほどある、それを俺らヤクザや不動産が買うわけ何だが、全部は買えきれねえ、なんとたつて多すぎるからな」

龍士「その買えなかった場所で好き勝手やるやつもいるんだよ、たとえば、何かを売買するところとかな」

外国人「……」

外国人の表情でが少し固くなる、龍士は構わずに続けた

龍士「お前らが買った所、どうせ裏カジノだろ？」

山下「う、裏カジノ？」

龍士「変な噂を聞いたんだよ、最近ここら辺で裏カジノをやっている所があるらしい、場所はわかんねえけどそのVIPになるとあるオークションに参加できるんだ」

龍士「何でも昔話に出てくる遺物なんかを売っている、呪いつきの道具やらな、確かそこは二課のやつらに目えつけられてるって話だけど」

山下「聞いたことあります、確かそいつら昔の遺産何かを回収したりとかするやつらでしょ？」

政府の警察にはそれぞれの役割を担当する課が存在する、一課は言わばエリート集団で殺人事件を中心に活動し二課は知能犯罪、三課は盗難、四課は暴力団の相手などに別れているがどうやらその二課に謎の組織が出来ているようなのだ

龍士「そうだ、けどかんじんの場所がわからねえ、人でたどろうにも誰が参加してるのかわからねえから出来ないんだ」

龍士「二課のお偉いさんが目をつけてそうなやつに、手え貸すと思うか？」

? 「……」

そもそもヤクザが親に見知らぬ人を会わせるわけがない、そんな事をしたら殺されるし死なずにすんでもエンコ案件がいいところだ

龍士「それだけじゃねえ、俺たちがあんならに興味持つてるのは別にあるんだよね」

龍士が灰皿にタバコを押し付け火をもみ消しす、酒を一回のみその酒を見ながらしゃべり続けた

龍士「実は二週間ぐらい前に組員が死んだって話があったんだ、死因は頭蓋骨損傷による脳内出血が原因」

龍士「けど妙なんだよ、頭のへこみが数ヶ所あったんだよ、まるで殴られたように、最初に数ヶ所へこみがあつてその後でかい痕があるが最初のやつで死んでいたらしい」

? 「それが我々どう関係が？」

少し震え気味の声が出てくる、それを聞いた龍士は少し笑いそうになるがこらえる

龍士「そいつはなんでもある物を手に入れたらしい、ノイズに潰された博物館に忍び込んで手に入れた昔の遺物、そいつはそれが金になるとわかり裏を通して売ろうとしたんだが、その前日に殺されその遺物が奪われた」

龍士「何でも交渉していたら相手は金を出さずに奪おうとした、殺されるかと思って録音してあったスマホに記録されていた、その中にあったんだよ、怪しげな黒いスーツを着た外国人の写真がな」

？「言いがかりもほどがありますよ、ただ外国人の写真があつたつてだけじゃないですか、私たちが彼と交渉したと言う事実はない」

写真はこの外国人ではなく別の人間だったのだ、この外国人のように身なりはよくはなく四〇五人程度の人数が写っていただけ、盗撮なので後ろ姿のため顔は見えなかった

龍士「んじやこれは知ってる？」

龍士「博物館に忍び込んだのは二人いたんだよ」

それを聞いた外国人は驚いてしまい目を見開く

龍士「そいつはしががない泥棒さんで同じ目的で金になるものを探していたが先に見つけられた、それを奪おうと機会を伺った、その時見てたらしいぜ、あんたらと交渉している組員の姿はな」

龍士「そいつはそれを記者にでも売ろうと写真をとり報道の方に駆けつけようとしたがその翌日組員が殺された、もしこの写真を広めてしまつたら自分の命が危うい、だからそいつはそれを記者には届けなかった」

龍士「けどその泥棒さんうちのとこから金を借りててね、それを渡す代わりに借金チャラにしろって条件を出してきた、まあ相手はヤクザだから守るきなくて脅して奪われたんだけどね」

？「……………」

もはや笑みはなく少しシワがよっている、龍士の方は笑いを止め外国人を見る

龍士「………単刀直入に聞こうか」

そして睨み付けた

龍士「何で殺した？」

？「はて、なんの事やら」

龍士「とぼけるのは違うんじゃない？」

？「……我々には関係のないことです」

額に汗を出しながら否定する、龍士はそれを冷たい目でみていたが視線を変え酒に目を移す

龍士「……そう」

そして酒を飲みほし立ち上がる

龍士「マスター、勘定」

マスター「ああ」

懐から金を取り出しカウンターに置く、そして去り際に隣の外国人に忠告をしておく

龍士「ま、ヤクザに喧嘩売ったんだから、覚悟しとけよ」

？「……」

相手は無言のままこちらを振り向かずに行った、それに気にせず龍士は店から出ていった

山下「いいですか？このまま逃がして」

龍士「下手に手は出せん、バックに何かいるのかもわからん、それに以外とデカイ事だから俺らが勝手に動くわけにもいかん」

にしてもたかがあれ位の殺気で怯えていたのが不思議だ、そういう仕事をしてるのだから慣れているかと思っただが、意外と楽かもしれない

龍士（だがうまく誘われた、考えたのはバックのやつのか？）

龍士たちと問題なく接触するように仕向けたのだろう、あの酒場が情報源と言うこともしつてそうだ

龍士（一応マスターには警戒してもらおうか）

龍士「山下、カシラにさっきの会話をのこと知らせろ」

山下「へい」

龍士「さて、どう動くかね？」

そう言い残し余計な事が起きる前にすぐに町から立ち去っていった

? 「そうですか、駄目でしたか」

? 「はい、申し訳ございません」

ある施設の中で誰かが会話していた、片方はさつき龍土が脅した外国人でもう一人はよく顔は見えないが声からするに男のようだ

? 「構いませんよ、ですが聖遺物は多い方がいい、なるべく早くお願いします」

? 「わかりました」

返答し施設の扉を開け出ていく、残った謎の人物は不気味な笑みを浮かべていた

? 「はあ、あれではあまり期待しない方がいいですね」

あれではこちらがなめられて当然だ、やはり人材を選ぶのはけちらなかった方がよかったと後悔した

? 「まだ少し続けますか、餌は多い方がいいですから」

そして彼は施設の奥に入り消えていった

旧友

何故だろうか懐かしい夢を見ていた、茶髪の女の子と黒髪の女の子と遊んでいる夢を、楽しそうだった、笑っていた、いつまでもこの関係が続けばいいと思っていた、そして普通の日常を送ればよかった

もう終わったことなのに

龍士「……またか」

ベットから起き上がりそのままの姿勢で毛布を見つめる、その視線は何処か寂しそうだった

龍士「ほんと、よく見るよな」

あの日、親父に拾われヤクザになった辺りからだ、やはりまだ迷っているのだろうか、あこがれているのだろうか、普通の生活に

龍士「……今日は雨か」

空は曇り水が地面に叩きつけられる音が聞こえる、それを聞いているとまた思い出してしまう、あの日友人であった茶髪の子を

龍士「……今日はシノギはなかったな、道場にでも顔出すか」
気を紛らわしたかったのか、道場に向かうことにした

弟子「せやあ！」

龍士「違う」

道場内で何人かの門下生が練習をしている、その中で龍士は一人の

弟子に教えていた

龍士「回し蹴りは脚のバネきかせろって言ったろ、それにまだ十分に上げきつていない」

そう言うのとゆっくり蹴りのモーションをしながら説明する

龍士「お前は軸足に体重かけすぎだ、それに後ろに傾いてるから外されるし威力がでん、腰を前に押し出すように蹴るんだ」

パンチもそうだが蹴りも腰をいれないと駄目だし重心が傾くのも駄目だ、それに体が固いとハイキックも出来ないし下手したらミドルするのも少しつらい、そのため蹴り技にとって柔軟と腰は重要なのだ
弟子「せりゃ！」

その事を聞き弟子がまた蹴りを繰り返す、龍士はそれを見ると頷いた

龍士「よし、いい音鳴らすまで続けろ」

しばらく様子を見ることにした龍士は次の弟子を見る、次は組手をしている二人だ

弟子「おりゃ！」

弟子「こ、この」

二人ともまだまだ動きが悪い、攻撃がワンパターンな上に必死過ぎて基本を途中で忘れている

龍士「ちゃんと考えて打て！考えずにやれるほど才能無いんだからな、ちゃんとコンビネーションの練習はしとけ！」

弟子「は、はい！」

龍士「後そんなに上手くないのに脚使い過ぎだ、そんなんじやすぐにやられるぞ、足技練習ちゃんとしてんのか!？」

弟子「す、すいません」

神埼「相変わらず辛辣だね言うことが」

後ろから声をかけられそちらを振り向くと神埼が立っていた

龍士「人に物を教えるときは分かりやすく、そして厳しくするのが、俺のもつとうだ」

神埼「普段とは大違いだ」

ヤクザの時と道場にいるとき、そして日常を送るときとコロコロ変

えている、そうでもしなければやっていけない

龍士「そこはちゃんと切り替えるさ」

神埼「あ、そうだ聞いたか、この間〇〇公園でノイズが現れたんだとよ」

龍士「知ってる」

神埼「あれ興味ない？」

龍士「まあな」

そっけなく返す、それがいつもの彼らしくなかった

神埼「……なんかあったの？何か今日いやに口数少ないけど」

龍士はそれを聞くとあることが横切るが直ぐにもみ消す

龍士「……別に、嫌な夢を見たただけだ、気にするな」

神埼はそれが少し気になったがこれ以上聞くのは無理だと判断しやめて本題に入ることにした

神埼「はいはい、そうだ、忘れる所だった」

龍士「なにを？」

神埼「久々にやらないか？最近詰まなくてさ」

龍士「何だ、夜中に遊んでるんじゃないやなかったのか？」

最近の事だが神埼が何故か夜中に喧嘩をすることが多くなったのだ、多分龍士からあることを言われたのが原因だが

神埼「いや〜やつぱりあんた程の人はけほども居なくなつてさ、峰さんは仕事だしいいだろ？」

峰は仕事なので暇がある時があんまりない、それに最近出掛けるときが多くなったので中々会えないのだ

龍士「……別に構わん」

そう言うと少し神埼と間隔をとり構える

龍士「こい」

神埼「OK」

――神埼 亮――

神埼「シュツ！」

まずは神埼が動いてきた、左のジャブから入りその次に軽いアツパーを入れる、ジャブは右で止めアツパーは手で抑えそこから裏拳を放つ

神埼「おっと」

それをスウエイで回避し顎にフックを放つ、それを屈んで避けると顔目掛けてのキックが飛んできた、龍士は足払いをし神埼の足を浮かせるとキックしている足を上に弾いく、そして倒れた所に腹目掛けてのパンチを放つ

神埼「っ！」

神埼は足で腕を抑え止めると後ろに転がり立ち上がる、そしてストリートを放つが止められ関節技をかけられ捻られる

神埼「いてててて！」

龍士「ほら、こういう時はどうしろって言った？」

神埼「腕を逆に捻られた時は」

神埼はその場で回転する、そして腹にむけてのブローが龍士に迫るが後ろに下がられ避けられた

神埼「捻られた方に回転して飛ぶ」

龍士「それか相手を怯ませて抜け出す」

神埼「嫌だよ、あんた本気で殴ってもきかないじゃん」

龍士「そんな事はないぞ」

神埼「ほんとか？」

龍士「そうだ」

神埼「なら試してみるか」

そう言うと龍士に近づきローを放つ、それを手で止めると顔にジャブが来た、直ぐ様ローを止めた手を上にやり止める、次にフックを放たれそれはアームブロックで防ぐ、龍士はそれを横に弾くとパンチを放ってきた

神埼「うお!？」

かなり早い速度で来た、それをスウェイで避けると脇腹目掛けてのブロー、それを腕で防ぐが腕にかなりの痛みが走り顔が歪んでしまう
神埼「くー！」

「離れようと距離を取るがすぐに詰められる、その勢いを乗せたパンチを放ちそれを避けたが服の襟を掴まれ引き寄せると同時に膝蹴りを喰らってしまう」

神埼「ぶぐう!？」

そしてそのまま腹にもくらい背中に肘打ちも受けてしまった

神埼（や、やばい）

直ぐ様股間を蹴り逃げようとするが防がれその足を掴まれひっくり返された

神埼「おわ!？」

空中で身動きが取れない状態で背中に強い衝撃がくる、背中に向けてのラリアットをかまされた

神埼「ごはっ」

そのまま受け身も取れず吹っ飛ばされた、龍士は腕を組み起き上がるまで待つことにした

神埼「いってえ、今のは死ぬかと思っただぜ」

背中をさすりながらゆっくり起き上がる

龍士「ボクサーとしてなら一流だが喧嘩となるとまだからつきしだな、予想外な事が起きたときの反応が遅い、服をちぎるか足払いして手の力が緩んだときに抜け出すかだったな」

神埼「ははは、まだ俺も甘いつてことかね」

へらへら笑いながら話し龍士は腕を組み指摘する

龍士「せめて投げ技か関節技は少しおぼえておくんだな、まだまだ経験不足だ」

神埼「へいへい」

笑いながら返事をし龍士に近づいていく

神埼「いやーやっぱ強いね、全然勝てる気しないわ」

龍士「なに、お前もかなり強くなっている、最初のチンピラだったときとは大違いだ」

神埼「工場での力仕事にここでの技術と発想、勉強ばかりしてたぜ」

龍士「良いことだ」

そう言うのと龍士は外に出てタバコを吸出し空を眺めていた、神埼もついでいき最初に気になったが夢の事を聞いた

神埼「なあ」

龍士「なんだ？」

神埼「どんな夢見てたんだ？」

それを聞くと龍士の顔が少し寂しくなりそのまま空を眺めた状態で話した

龍士「……昔の友人と遊んだ夢さ」

神埼「へえ、寝心地よさそうな夢だがな」

龍士「いや、今何をしてるのか気になってな」

そして神埼の方を見た

龍士「お前にもいたか、そんなやつ」

神埼「いたぜ、皆社会人になってたよ、成人式の時すごかったな」

龍士（ああ、確か二十歳になったらやるやつだったか）

二十歳になったお祝いのようなものらしいが龍士は二十歳ではないのでそんな事したことがない、元々出来るとも思えないが

龍士「見れるのかね、俺に」

神埼「ん？」

龍士「いや、何でもない」

そうはぶらかし次のを吸おうとすると周りに警報が響いた

龍士「警報か……」

神埼「話折られちまったぜ」

龍士は道場に戻ると弟子たちに指示をだす

龍士「全員逃げろ！シエルターまで避難するんだ！」

弟子たち「はい!!」

全員がそのまま避難を始める、そして神埼の方を向く

龍士「神埼、お前も」

神埼「ああ」

神埼もシエルターに向かった、龍士は道場を閉め組の事務所に向かう

龍士「さて、俺は親父たちと合流するか」

未来「おばちゃん、大丈夫!？」

一方そのころ未来の方ではいつも通っているお好み焼き店フラワ-の店主と一緒に逃げていた、未来は元陸上部なので少し余裕があるが店主はもう年寄りだ、途中で止まってしまい肩で息をしていた
おばちゃん「はあつはあ歳はくうもんじゃないね、若い時だったら、余裕なのに」

未来が駆け寄り手を貸そうとしているがその手は振り払われた

おばちゃん「未来ちゃん、私はいいから先に行きな、後から私も行くから」

未来「駄目です！ほら行きますよ！」

未来は無理をしているのだから無理やり手を繋ぎ歩く事にした

おばちゃん「優しいねえ」

おばちゃんも観念しおとなしく引かれることする、だがその時向こうの道路の方から嫌なものが見えてきた

未来「!？」

おばちゃん「の、ノイズっ！」

タコのように足を生やしているノイズがいた、ノイズはこちらに振り向きその足でこちらを攻撃してきた

未来「危ない！」

手をこちらに寄せ攻撃が当たらないようにした、その足が地面に突きささるのを見るとすぐに移動する

未来「こっち！」

おばちゃんを誘導し道路を走っていく、ノイズも追つてくると近くにあった廃墟に隠れた

おばちゃん「はあはあっ」

肩で息をしているおばちゃんを見る、やはり年のせいだろうかかなりつらそうだ

未来（これ以上無理はさせられない、どうしたら）

するとノイズも廃墟の中に入ってきた、未来は直ぐ様動けるようにおばちゃんの手を取る、だがノイズはこちらを認識しているにも関わらず周りをキョロキョロしている

未来「？」

未来は不思議そうにノイズを見ていた、すると廃墟の瓦礫が崩れ落ちた、転がっていく音が聞こえるとノイズが急に足を動かしその瓦礫を攻撃した、岩を貫き地面に足がささる

未来（そうか、見えてないんだ、音で探してるんだ）

それがわかった未来はおばちゃんに小声で話しかける

未来「おばちゃん、息を整えたらゆっくり歩こう、音を立てないように」

そう言うとおばちゃんが頷く、未来はノイズの方を見て合図をだす
未来「よし」

そしてゆっくりと出口に向かって歩きだす、ノイズはまだ気づいていないようだ

未来（よし、このまま!?!）

逃げられる、そう思ったのもつかの間、未来たちの足場が急に崩れた

未来「きゃー！」

固い地面に着地する、打った所を擦りながら辺りを見回す

未来「いたたた、おばちゃんっ!?!大丈夫!?!」

おばちゃんは隣で倒れうづくまっていた、側に駆け寄り傷がないかを見る、傷は無さそうだがさっきの音につられノイズがこちらの近くにきていた

未来（これじゃ動けない、どうすれば）

下手に音をたてる事は出来ないしおばちゃんがそもそも動けない、どうしようかと悩んでいると隣から足音がした

未来（他にも!?)

咄嗟にそちらを振り向くとそこには

未来「……ええ?」

龍士「……」

あの時、離ればなれになった龍士がそこにいた

未来「司波……君?」

龍士は二人の腕を掴み肩に担ごうとした、驚きのあまり少し固まっていたが直ぐに切り替え未来はスマホを取り出し操作し始めた、龍士はそれを不思議そうに見て未来がこちらに画面をこちらに見せた

未来『待つて、あれは音に反応するの、下手に動いたら駄目』

龍士「……」

それを見ると龍士はスマホを取り出し操作するとこちらに見せた

龍士『俺が外に出て引き付ける、その間に出ろ』

見せた後龍士は立ち上がる、ノイズの方を見た後視線を変え出口を見る、すると未来の前にいた龍士が消えた

未来「え?」

突然消えた、視界に写るのはさつき彼がいた地面だけ、何がなにやらわからずその場で固まっていると

パアアン!!!

未来「!?!」

突然外から乾いた音が聞こえそれが廃墟に響いていく、それを聞いたノイズは外にでた、それを見た未来は安心よりも不安が強くなってしまう

未来「…司波君」

あの時離ればなれになった親友が何故ここにいるのか、色々疑問が残るなか取り残された未来だった

龍士「まさかあんな形で会うとはな、 以外な事もあるものだ」

会うことではないであろうと思っていた未来がいる廃墟を眺めているとそこからノイズが出てくる、龍士は銃をしまいノイズを睨み付け構える

龍士「俺からは手が出せんから回避だけにしといてやる、こい」

ーーーノイズーーー

ノイズが足を伸ばし攻撃してきた、龍士はそれを見て回避をし続ける

龍士「……」

ストレートや鞭のように波を打ちながらくるものもあつたが龍士は両腕をポケットにいれながら回避を続けた、いつの間にか町に来ておりノイズは手数を増やし龍士を建物の壁際に追い詰める、そしてとどめに全方位からの攻撃をする、壁にあたり土埃が上がるがそこには炭はなかった

龍士「どうした？」

ノイズは声ができる後ろの方に振り向くとそこには龍士が立っていた

龍士「ウスノロ」

そう余裕の表情をしてこちらを見ていた、ノイズはまた攻撃を再開する、そして龍士は廃墟の中に入る

龍士「……こちら辺でいいか」

そして逃げるのをやめ振り替える、そして腕に力を込め地面を殴った

龍士「おらあああ!!!」

床にヒビが入り崩れノイズは地面に叩きつけられる、岩の瓦礫と土埃がすごいなかノイズは辺りを見回し標的を探す、だが相手は何処にもいなかった

龍士「……こんな所か」

龍士は床を割った後瓦礫を利用して飛び上がり高い所からノイズを見ていた、周りをキョロキョロしてまだ探しているようだ

龍士「……未来か」

まさかこんな形で再開するとは思わなかった、未来がいた建物の所には車が止まっており誰かが助けているようだ

龍士「お人好しもいるもんだ」

そう笑みを溢す、だが少し寂しい感じもする、何故だろうか？

龍士「おつと人の心配をしている場合じゃないな、早く合流しなくては」

そう言い合流地点に向かうため振り替えり歩きだす、だが数歩進むと止まり未来がいる方に振り返った

龍士「……元気でな」

そう言い残しビルから下り去っていった

男子会

未来「……」

何もなく青空が広がっている空を眺めていた、その頭の中にはあの時出会った知り合いの顔が浮かぶ

未来（何も話せなかった）

響「未来？どうしたの？」

隣からもう一人の親友の声が聞こえてきた、考えるのをやめ返事を
する

未来「ううん、何でもない」

響「最近何か暗いね、何かあった？」

未来「大丈夫、何もないから」

響「だったらいいんだけど」

これ以上心配させるわけにもいかない、そのため話題をだすことに
した

未来「それより、翼さんたちと何処に行く？」

響「どうしよっかなく、やっぱり映画はかかせないよね！」

未来「うん」

子どものように嬉しそうにする親友と話ながら明日の事を決める
ことにした

真沙武「てなわけで俺らも遊びに行くぞお！」

ある街中の公園にある噴水の前で男達が集まっていた、それぞれが
私服を着ていてその場をテンションが高い真沙武が取り仕切ってい
た

斎藤「いや、どゆこと？」

野々宮「ははは、相変わらず変わってるな」

峰「いいじゃん、こういうの俺嫌いじゃないよ」

真沙武「まずはここだ！」

そう言い真沙武が指したのは街のでかいデパートだった

齋藤「でか」

野々宮「ここら辺じゃ大きい方ですね」

峰「そう言えば皆は？」

野々宮「奏さんたちは女子会、遊びに行っただって」

そうスマホをこちらに見せてきた。その画面には奏が遊んでいる光景を自撮りの写真があった

真沙武「だから俺らは男子会だ！今思えば皆の事はよく知らないからな」

峰「まあ風神さんは仕事場が違うし、野々宮はマネージャーで忙しいだろうし」

齋藤「でも何するんだ？」

真沙武「服買ったり、ゲームしたり、映画見たり様々だ、取り敢えず行こう！」

峰「……何かあの人前あった時よりテンション高くない？」

野々宮「えつと、まあストレスとかあるらしいんで」

あの特殊な職場を知っている野々宮は苦笑いをしながら答え先に行った真沙武を追いかけた

四人はデパートの中の服屋に入っていた、真沙武の提案で最初に服を買いそれを着て遊ぼうと言う事だった、四人はそれぞれ好きな物を選んでいる

野々宮「これかな」

齋藤「これとかよさそう」

二人が選んだ服を見て真沙武はため息をついた

真沙武「以外とセンスないな」二人とも

野々宮「うう」

齋藤「き、着れりや何でもいいんですよ」

真沙武「ちち、そんなんじや駄目だ、お兄さんが手解きをしてあげよう」

そう言いあれこれと服を選び出した、先に野々宮の服を選びその後齋藤の服を選んだ、齋藤の服を選んでいる間野々宮の方に峰が近づいてきた

峰「野々宮って服のセンスよかったと思うんだが」

野々宮「あれは奏さんが選んでくれたんです、最初に付き合わされたとき色々着せられて」

峰「なるほど」

真沙武「よくし、んじや早速着て遊ぶぞ〜！」

峰「何処で遊びます？」

真沙武「それを探すのだよ」

野々宮「ええ……」

皆は少し周りを見て何かないか探す、すると齋藤が壁に貼ってある紙を見つけた

齋藤「ん？サバゲー？」

どうやら少し遠くの所でサバゲーをやってるそうだ

真沙武「お、いいじゃん、早速やろう」

峰「え？何も道具持ってないけど」

齋藤「貸し出しやってるみたいなんで大丈夫です」

峰「そっか、なら大丈夫かな」

準備中

齋藤「えっと、これどう、打つんだ？」

野々宮「リロードした後弾込めなきや駄目ですよ」

真沙武「ちよ、ちよっと重いかな」

峰「俺らは平気ですけどね」

真沙武「ぐぬぬ、やはり鍛えるべきであろうか、まあやってみよう！」

練習中

斎藤「いてててー！」

峰「うそ!?!」

真沙武「またやられた!!」

斎藤「お、お前こういうの興味あったのか?」

野々宮「えつと、まあ、やってみましたから」

真沙武「んじゃ野々宮君をリーダーにして小隊組んでやってみよう」

峰「賛成」

野々宮「が、頑張ります」

ゲーム中

斎藤「この！」

野々宮「峰さん、左抜けてます」

峰「おわ!?!あぶねえ！」

野々宮「斎藤さん、前出てください！」

野々宮「真沙武さんは左から、峰さんは援護を」

峰「おう」

ゲーム終了

真沙武「すげえ！優勝だつてよ！」

斎藤「いやお前すげえな！才能あるんじゃないの?」

野々宮「いや、それほど」

峰「ほんとほんと、指示が的確だったぜ」

野々宮「ありがとうございます」

真沙武「いや、遊んだら腹へったな、何食う？」

峰「あれとかよくないですか？」

真沙武「ステーキ店か、異論は？」

齋藤「ない」

野々宮「自分も」

真沙武「んじゃそこにしよう」

真沙武「いや、やっぱりこうやって遊ぶのもいいね」

峰「確かに最近仕事仕事忙しかったですからね」

齋藤「まあ皆色々ありますから」

サバゲーで見事優勝した四人は食事をしながら会話をしていた、そして真沙武があることを聞く

真沙武「そう言えばさ、皆は彼女とかいるの？」

齋藤「いない」

峰「いや」

野々宮「いませんね」

真沙武「なにやってるんだ！早く見つけなさい！二十歳までならまだいいけど三十路になったら寂しくなるぞ！」

峰「んなこと言われましたもね、いないもんはいないし」

一応好意はよせられているのだがまだ気づいていないようだ

野々宮「自分も特に気になる人は」

真沙武「君、そんなこと奏ちゃんの目の前で言ったら殺されるよ？」

野々宮「？」

そう？を思い浮かべる、気づかないのが不思議なくらいだ、だが一人は違った

齋藤「俺はまあ、気になる人ならいますけど」

真沙武「おお、どんなこ？」

齋藤「素直じゃなくて優しい女性です、ちよつと強気だけど」

真沙武「いいじゃないか、かわいい」

斎藤「ほんとです、素直じゃないけどかわいくってしかたがない」
そうにこやかに笑う、峰はそれを聞きある事を持ち出した

峰「女性かく、アルバイトでも募集しようかな」

真沙武「どうして？」

峰「まあやつぱり、手伝いはほしいと言うか、それに綺麗な女性がいるところって人来やすいでしょ？」

斎藤「まあ、確かに」

峰「だからさ、看板娘みたいなことがいたら売り上げあがるかなうって」

野々宮「確かに、キャバクラとかそうですね」

真沙武「……え？」

いきなりのことで真沙武はその場で固まった、突然のことで止まってしまう少したって頭がまわりだすと早速聞いた

真沙武「えっと、野々宮君、キャバクラ行ってるの？」

野々宮「はい、ごくたまに遊びに行ってます」

さも当然のように答える野々宮、それを聞いた真沙武は若干押されながらも聞くことにした

真沙武「えっと、お気に入りの子とかいる？」

野々宮「話して楽しいのが深雪さんですね、話しやすいです」

峰「へえ、そうなの？今度連れてってよ」

野々宮「いいですよ」

真沙武（い、意外と大人だった）

なんの恥じらいもなく話す二人、真沙武は意外そうな顔をしながら見ていた

四人は食事をした後真沙武に連れられ山を少し登り森を抜けると少し開けた崖についた、太陽が沈んでいく様子がみれ町全体の様子が
見ることができる

斎藤「いや、今日はたのしかったな」

峰「そうだね、こんなに遊んだのは久しぶりだ」

峰「良い眺め」

真沙武「いいだろう？よく来るんだ、一人になりたいときとかに」
野々宮「やつぱりそちでも嫌な事とかあるんですね」

真沙武「まあ家は家系が特殊だからなく、正直柄じゃないのよね」
額をかきながら苦笑いを浮かべる、にこやかに笑っているが元気がなさそうだ

真沙武「運がなかったら自分の好きなことも出来ないなんて、以外と厳しいよね、現実って」

峰「……」

その言葉を聞きある少年がもらした言葉を峰は思い出していた

龍士『弱いやつが生きづらい世の中なのは何処も変わらない、それだけはどうしようもないんだ』

峰「……確かに、そうなのかもな」

運と強さ、この両方を持つていないと自分の生活すらきつい、今世の中はたとえ道端にホームレスがいた所で気にしない人がいる、自分のことでいいいっぱいであろうしたとえ助けたところでメリットがない、常に足元を見ている人にとっては気にする必要もないのだ

斎藤「でも俺今楽しいです、皆がいて、ちよつと特殊だけどこうしてゆつくりできる、辛さもあるけどそれもあから人生は楽しい、そう思えてくることもあります」

峰「その辛さに耐えられなかった奴もいる、そこら辺も運が必要だ」

峰「俺は親が随分小さい時に死んだ、あの時ホントに辛くて死んでしまいたいそうだったがその親代わりのおじさんたちに救われた、感謝仕切れない」

自分が成人する前になくなってしまったがそれを支えてくれたのは龍士たちだ

峰「俺たちは誰かを守れる力を持っている、誰かが困っていたら手を貸して助ける、そうすれば俺が助かったようにその人も生きていく事ができるかもしれない、人間は助け合ってこそ生きる事ができるん

だ」

真沙武「んじやなおさら頑張んなきゃね」

峰「はい」

決意を胸に抱きながら綺麗な夕日を眺めていた

真沙武「よし最後は飲んで終わりにしますか」

斎藤「いや、あの、俺飲めませんよ？」

真沙武「大丈夫だって、ちよつとくらい」

野々宮「真沙武さん？」

真沙武「じよ、冗談だよ、そんな怖い顔しないで」

峰「今の緒川さんみたいだな」

斎藤「確かに」

そう笑いながら四人は帰っていった

平穏な日々

斎藤「カデインゲル？なんだそれ？」

クリス「よくわからねえ、ただファイーネが言ってたんだ」

斎藤「カデインゲルか、一体何なんだ？」

斎藤は一応一般知識より上位なら知ってはいるがそれが何なのかは聞いたことがなかった、人の名前かも知れないし、何処かの国の名前かも知れない

クリス「ファイーネの最終的な目的はそれだ、ただそれが何なのかは」

斎藤「まあ名前だけでもわかったのが収穫だな」

斎藤は立ち上がりスマホを取り出す

クリス「何するんだ？」

斎藤「ちよつと上司に相談」

それを聞くとクリスの表情が固くなった

クリス「……上司って、二課の？」

斎藤「そうだけど？」

クリス「……信用出来るのか？」

斎藤「できるから相談するの」

下を向きうつむいてしまうクリス、斎藤はそれを心配し声をかける
斎藤「どうしたの？」

クリス「別に」

斎藤「話して」

クリス「だ、だからなんでもねえって」

顔を合わせようとせず背けてしまう

斎藤「嘘だろ、ほらこっち見て」

それを聞いても少し間が合ったがゆっきりとこちらに顔を向けた、
どことなく不安そうな顔だった

クリス「……私がどんな風に育ったのかは話したよな？」

斎藤「うん」

両親が死にそのせいで奴隷商売をしている人間に捕まってしまった、叩かれ罵られるように扱われてきたためクリスは大人と言う人

たちを信用出来なくなっていた

クリス「だからかな、何かこう、大人は信用できないっていうかなんというか」

斎藤「……確かにクリスからしてみればそうかも知れないな、けど俺はそうは思わない」

斎藤「俺はまだまだ若い、喧嘩がただちよつと強いってだけのやつだった、そして気ままに人助けをしていたときにあの人にあつた、最初はうつと惜しいと感じたよ、けどだんだん接触してくるとその人がどんな人なのかわかつてきたんだ」

斎藤「野々宮は天然、奏はマイペース、翼は頑固で、司令はなんていったらいいんだろ、まあ取り敢えずそんな感じに人がわかつてきた」

はつきりと自分の考えを言う斎藤

斎藤「クリス、確かにそつちの立場で考えると信じられなくなるのはわかる、だけどクリスはもう前のような所にはいない、俺がいるから、今だけは俺を信じてくれないか？」

クリス「……わかったよ」

斎藤「ありがとう」

クリス「触んな」

斎藤「照れんなよ」

クリス「照れてない!」

頭を撫でようとした斎藤の手を照れ臭そうにはね除けるクリス
だつた

奏「うん、うまい」

野々宮「相変わらずかわりませんねえ」

そのころ奏たちは変装をしていつものデパートで買い物をしてい

た、いつものように買い物が終わった後は食堂エリアで何か食べるのがいつもの事だ

奏「いいじゃん、こうやってやるのも久しぶりなんだから」

野々宮「確かに、ライブとかノイズとかで忙しかったですもんね」
最近ノイズとライブの仕事なので忙しく中々時間がつくれなかったため一緒に行く時間がなかったのだ

奏「そうだね、こうしてみるとホントに変わったな」

野々宮「何がです？」

奏「野々宮だよ」

野々宮「自分が？」

奏「そりやそうさ、最初なんかまともに口聞いてくれなかったし」
野々宮「そりやいきなり見ず知らずの女の子と会話なんてできないですよ」

最初は奏が積極的に誘っていたのだが避けられていたので無理矢理捕まえて連れていった、そしてそうやっているうちに野々宮が折れて大人しくついていったのだ

奏「で私がぐいぐいいったらだんだん話してくれたよな」

野々宮「あの時はなんか積極的な方って感じでしたけどね、今は困った人ですけど」

奏「こんな美人といえるのにつれないな」

手に顔を置きふてくされて頬を膨らます奏、それを見て笑う野々宮、手にあるコーヒーを軽く揺らしそれを一口飲む

奏「……ありがとな」

野々宮「え？」

奏「今までわがまま聞いてくれて」

奏の顔を見る、優しそうな目をしていた

野々宮「……いいですよ、楽しかったですしね」

奏「そうか」

少し間が空き静かになる、デパートを歩き回っている人たちの声が聞こえる

奏「……なあ野々宮」

野々宮「はい？」

奏「これからもよろしくな」

野々宮「こちらこそ」

奏「よろし、んじゃ次行くぞお！」

野々宮「まだ行くんですか!？」

元気に次のプランを考える奏とそれにため息を溢す野々宮だった

真沙武「うん、うまい」

翼「誘ってくださりありがとうございます」

翼は真沙武に誘われ和食が中心の店に来ていた、育ちがいいのか綺麗な食べ方をしている

真沙武「大丈夫だって、暇だったしさ」

そう刺身を口に含む真沙武、翼は味噌汁に口をつけていた

真沙武「お仕事はどう？無理してない？」

翼「はい、頼れる仲間がいるので」

真沙武「それはよかった」

翼「真沙武さんは無理はされておりませんよね？」

真沙武「まあ大丈夫よ」

そう返事をして天ぷらに手をつけ汁につけて食べる、翼の方は顔が少し暗い

翼「……すいません」

真沙武「何で謝るの?」

翼「その、おじいさまが」

真沙武「その話はよそう、せっかく遊びに来たのにさ、楽しくやろうよ」

翼「……はい」

真沙武「ほら、それあげちゃったら気まずくなっちゃうでしょ?」

翼「すいません……」

気まずい空気になっていくのが感じる、真沙武はため息をつき翼の頬を引っ張った

翼「いひゃいひゃい?!?!」

真沙武「まったく、ほんとに硬者なんだから」

呆れて手を離す、翼は頬を抑え涙目で真沙武を見る

真沙武「そんなしよぼしよぼして謝らないの、次やったらげんこつだかんね」

翼「うう」

真沙武「……でもありがとう、心配してくれて」

翼「ふえ?」

真沙武「俺も翼ちゃんの事が心配なんだ、固いし真面目で少しポンコツがでちゃうけど、すごい頼りになる、だから無茶しないでね?君が倒れたら俺泣いちゃうから」

翼「:はい!」

真沙武「よくし仕切り直しだ、どんどん食べて」

そーいいメニューを取り出し何を選ぼうかを翼と一緒に考えた

峰「ふう」

峰の方は二課本部の訓練場で特訓をしていた、響も弦十郎と一緒にいて誘いがあったがある理由があり一人でやっていたのだ

未来「お疲れ様です、はいタオル」

峰「ごめんね」

未来「いえ、これぐらいしか出来ませんから」

事前に用意してあったタオルを未来がとってきてくれたのでそれを取り汗を拭いていると響が帰ってきた

響「ぐへえ〜」

未来「響お疲れ様」

疲れはてた響に未来が近より飲み物を渡す、響はそれな目を輝かせ

取るとすぐに飲んだ

響「ぷはー生き返る〜」

弦十郎「ふむ、流石だな飲み込みが早い」

響「えへへそれほどでも〜」

弦十郎「だが峰君も一緒にやればよかったのに」

峰「い、いえ俺の方は大丈夫ですから」

峰（何言ってるのかまったくわかんなかったからな、どれだけ龍士の教え方が上手かったのが身に染みてわかる）

龍士の場合師範という立場でもあるからなのだろうが人に技を教えるのが上手かった、まず事前にお手本を見せそしてそれをやられて駄目なところを指摘する、その時に相手にわかりやすい言葉で伝えていたので道場にいた弟子たちは覚えがよかった

峰「うわ気持ち悪る、脱ぎ」

汗で濡れてしまった服を脱ぎ汗を拭く、何故だか未来がじつところを見ていた、若干顔が赤いが

未来「……………」

峰「未来ちゃん？どうしたの？」

未来「あ、い、いや！何でもありません」

響「ははくん、さては未来、峰さんのは「なあに響？」い、いや何でもありません」

未来「もう」

謎の威圧で黙らせる未来、それを見て少し笑ってしまった

峰「はは、相変わらずだね」

弦十郎「峰君はかなり鍛えたあるな、どうやったんだ？」

峰「知り合いに格闘家がいたんで色々教えてもらいました」

弦十郎「ほお、よほどの偉人なのだろうな」

響「身長3mほどの巨人ですよきつと」

峰「でかすぎでしょそれ」

それを聞き皆が笑いだした、峰はその光景を見ているとある幻影を写し出していた

峰（ここに龍士もいればな）

そう思ったがすぐに振り払い目の前の光景を眺めていた

龍士「ふう」

その頃龍士は仕事をしていた、タバコを吸いながら歩きある店へと入っていく

龍士「よお」

店員「あ、司波さん、らっしやい」

龍士「繁盛してるか？」

店員「そりやもう」

龍士「店長は？」

店員「今呼びますね」

そう言うのと店員は奥に入っていく、そしてしばらく待つと店長が出てきた

店長「龍士さんすいません、気づきませんでした」

龍士「構わねえよ」

店長「そう言えば今日でしたね」

龍士「そりやオーナーだからな」

店長「わかりました、こちらに」

店長と一緒に奥に入っていく、事務室のような所で色々な資料が棚にしまつてあつた、中心にテーブルがありその椅子に座ると店長がアタツシケースを取り出した

店長「半年分です、このままのれば予定の額までいけますよ」

龍士「上出来だな、これが済めば約束通りお前の店を仕立ててやる」

店長「何から何まで、ありがとうございます」

龍士「だから別にいいって、ただ金やるだけじゃダメだかな、自立できるようにしなきゃな」

龍士はノイズなどで仕事が出来なくなった人などにチャンスを与

える自立させる、本来ならこういうひもつれならヤクザはしつこく捕まえるはずなのだが龍士はある程度額が集まったら離すことにしているのだ

店長「あの、龍士さん」

龍士「ん？」

店長「ここを離れても、宮本組とは仲良く「駄目だ」」

店長がそれをいう前に止めた

龍士「いいか、予定の額になったらお前の店を建てて契約完了、そこからうちらとの縁は切れる」

店長「ですが」

龍士「いいか？本来ヤクザとは関わっちゃ駄目なんだ、うちがあまりすぎるだけだ、他の組だったらどうなるか考えたくねえだろ？」
龍士が本来甘すぎるだけで他の組はこんなことなどしない、使えなくなるまで使うか適当に金をしばって捨てるかのどっちかだ

龍士「大丈夫だ、うちとの関係はキレイさっぱり消える、きにすんな」

店長「でも、ここまでしてもらったのに何も出来ないなんて」

龍士「俺はあんたがちゃんと自立してやっていくとこ見てるだけでいいのさ、それが俺が望んでいたものだ」

店長「……はい」

龍士「わりいな」

そういうと立ち上がり玄関まで歩いていき店を出る、店長も店前までついていった

店長「ありがとうございます」

龍士「……ああ」

そう言い残し店を後にした

龍士（真面目に生きてくれりやそれでいい）

仕事も終え事務所に戻ろうとした時スマホが鳴り出した、直ぐ様取り出し電話にでる

龍士「ああ俺だ………何？」

顔にシワをよせ、何もない建物を睨み付け口を言葉を溢す

龍士「釘原が？」

抗争

龍士「どういうことだ？」

顔にシワをよせ何も無い壁を睨み付ける、自然と手に力を込めスマホが少しきしむ音がした

山下『さつき親父の所に黒澤の叔父貴から連絡があつて、釘原が外国人とつるんで何かやらかすつて』

龍士「おいおின்なはずないだろ、釘原のシマで余計なことしたらからチクられたんだろうが、そんなやつらが普通組むか？」

そもそも外国人が摘発をくらつたのは釘原のシマで勝手に商売をしてしまったからだ、闇商売をしている以上他のやつらがへんな事をしていたらそこを仕切っている組の仕事に影響が出てしまう可能性があるため早く消した方がいい、だから普通は組むはずがない

山下『自分もそう思つたんですけど、最近釘原の姿が見えないですし釘原の組と外国人がいがみ合つてると言う話は聞きません』

龍士「それで？やらかすつて言うのは何だ？」

山下『裏カジノの話は覚えてますよね』

龍士「ああ」

山下『釘原はそこを襲うそうです』

龍士「……は？」

驚いて声が出なかつた、いくら釘原でもここまでやるとは思えなかつた

山下『今日の夜中カジノがオークションを開きます、昼頃に準備をする期間中品を盗むために襲うそうです』

龍士「あいつあそこが表のお偉いさんがいるつて知ってるのか？」

山下『それはわかりませんが、知つてたらやらないと思います』

龍士「あいつエンコじやすまねえぞ」

裏カジノだからと行って好き勝手にしていいわけではない、表の大物にちよつかいなど出したら組だけではなく本部にも影響が出るため用心しなければならぬのだ、場合によっては刺客を送られて殺されることもある

山下『ともかくカシラも動いてます、兄貴には外国人の相手をしてもらいます』

龍士「……何処だ」

山下『釘原が所有していた倉庫、船馬という名前です』

龍士「何人か回してくれ、ちゃんと装備させろよ」

山下『わかりました、カシラが仕掛けるのは昼過ぎです、その頃に仕掛けてください』

龍士「ああ」

通話を終わりスマホをしまう、額にこめかみが浮かびいかにも不機嫌だとわかる、目も細くなりいつもの顔ではない

龍士「あの馬鹿が、余計な事しやがって」

苛立ちを覚えていると警報が響きだした

龍士「こんな時に警報だ？」

さらにイラついてしまうが一度切り替え目標を定める、息を整え頭を冷やす

龍士「……俺らがやるのはかわらねえ」

素晴らしい歩き出し仕事をしに行く

外国人「……そろそろだな」

黒服の男たちが倉庫に集まっていた、そこには車もあり自分の武器の調子を確認しながら待機していた

外国人『まだか？』

外国人『合図はまだ来てない』

外国人『警報はなったぞ？』

少しそわそわし始めた時その倉庫を何か突き破ってきた

外国人『な、なんだ!?!』

突き破ってきたのは車だった、数台の車が外国人の前に止まると中から龍士と組員が出てきた

組員「派手にやりましたね」

龍士「以外にいるじゃねえか」

車から次々と組員が出てきて外国人とにらみ合いが始まる

龍士「おうお前ら!!ぶっ殺せ!!」

外国人『やれ!』

龍士が合図を出すと同時に外国人もだした、それに応じて全員が駆け出した

龍士「おらああ!!」

――謎の組織――

龍士「しやあ!!」

お得意の格闘技で倒していく、他の組員は事前に用意した武器あるいは龍士と同じでステゴロで戦っている、相手は警棒や銃を取り出してきた、組員はそれを見ると周りの物や車に身を隠す、すると直ぐ様銃撃が始まった

組員「兄貴い!あいつらチャカ持つてるぜえ!」

龍士「任せろ!!」

そういうと龍士は近くにあった敵の車のドアを引っこ抜き敵に向けてぶん投げた

外国人「ぐう!?!」

外国人「があ!?!」

龍士「おらああ!!」

投げては投げてを繰り返して敵の攻撃が一端止まってしまった、龍士は直ぐ様近づき接近戦をする

外国人『この!』

それに対応しようと銃を向けたが瞬時に叩き落とし拳で殴りぶつ飛ばした

外国人『あいつ!』

車越しの外国人が銃を向け発砲する、龍士は直ぐ様車を飛び越し避けると同時に勢いをつけた蹴りを放つ

外国人『ぶう!?!』

外国人『このやろう!』

すると他の外国人は警棒を取り出し接近しその警棒を大きく振りかぶってきた、龍士は近くにあつた車のドアを開きそれを防ぐ、そしてドアを使い近づいてきたやつをそのドアで挟んだ

龍士「おらあ!」

すると後ろから外国人が近づいてきた、龍士はボンネットをまたがりそれを回避すると両手をつきかかと落としを喰らわす

外国人『ぶう!』

外国人『こ、こいつつ!』

龍士「今だやれえ!!」

それを聞いた組員たちは突っ込んでいった、外国人たちはさっきの龍士の投擲を避けるので精一杯だったため反応が遅れた

組員「おらおら!!」

外国人「stop! stop!ぶう!?!」

組員「おら逃げたぞ逃がすなあ!!」

明らかに勝敗が決まった、だが一つの場所だけ違うところがあつた、体格のいい外国人が組員を蹴散らしていた

外国人「シュ!」

組員「ぶう!?!」

龍士「ほお」

組員を倒し次の獲物を探し周囲を探る、龍士は手で合図をし回りにいる組員を引かせる

組員「あ、兄貴」

龍士「任せろ」

外国人『でかいが、飛ばしてやる』

龍士『減らず口を叩くなお前』

外国人「!?」

組員「あれ?今英語喋った?」

外国人『喋れるのか』

龍士『それなりにな』

外国人「Die!」

外国人は最初に脚を狙ったキックをし次に左腕で殴ってきた、それを冷静に対処して防ぐと龍士も攻撃に出る、少し激しい攻防が続くが龍士がストレートを放ちそれを相手は防いだがそのまま拳を引くと裏拳が入った

外国人「ぐう!」

直ぐ様体勢を立て直そうとするがそれを見逃す龍士ではなかった、外国人が押されぎみになり車に追い詰められる

外国人『なめるなあ!』

飛んできた拳をアームブロックしダメージ覚悟で反撃をしようとして右腕を上げ殴ろうとするが押さえられ止められそのまま車に押さえつけられ空いた手で相手を殴り続けた

外国人『が、ぐう!』

まづいと思ったが力が強すぎるため中々抜け出せないでいる

外国人『なに黙って見ている!助けろ!』

組員「おっと、何処に行くきだあ?お前らの相手は俺らだろうが!」

龍士「残念だったな」

外国人『く、くそお』

顔を殴られ続けたためか意識がもうろうとしていた、龍士は相手を起き上がらせると腕に力を込める、筋肉が肥大し血管が浮かび上がる。そしてそれを外国人目掛けて振り下ろした

外国人「ひい!?!」

それを見た外国人は腕を重ねて構える、それが腕にぶつかったと思っただ瞬間、腕に痛みと体が浮く感覚を味わった

外国人「!?!」

それを認識したと思っただら車に叩きつけられそのままめり込んで

しまった、腕を動かそうにも痛みがはしりうまく動かせない

龍士「少し力んだか」

手の調子を確かめながらめり込ませた外国人を見る、腕は折れ下に垂れ下がり気絶していた

龍士「心配すんな、別に死にはしない」

組員「兄貴、こっちも終わりました」

龍士「おう」

組員の方を見るとその後ろでは外国人が大量に倒れていた、その中にまだ意識があるやつがいた

龍士「さてお前らには聞きたいことがある」

外国人「……」

外国人の方を向き睨み付けその外国人に近づくと

龍士「釘原は何でお前らと組んでいる？」

外国人「さあな」

その言葉を聞いたその時、龍士がその顔を蹴飛ばした

外国人「ぶ!？」

龍士「もう一回聞けど、何で組んでる？」

外国人「……」

ため息をつきながら外国人の腕を掴む、そしてその腕を折った

外国人「ああああああ!!？」

龍士「何ならもう一本行くか？」

龍士は直ぐにもう一つの腕を掴むがたまらず外国人が声をあげた

外国人『ま、待て俺らもあんまり知らないんだ!』

龍士「なに？」

外国人『た、ただ雇い主からあの裏カジノ襲えって言われただけなんだ!』

龍士「……その雇い主は？」

外国人『し、知らねえよ、いつも連絡だけで金だけ渡して依頼するから顔なんか見たことがねえ』

龍士（んなやつよく信じたな）

目を細目ながら雇い主の事を考えていた

龍士（金だけ渡して依頼するなんてよほど用心深いやつだな）

本来あまり信頼されない行為なのだがかここのやつらはそこまで気にしないやつらだったようだ

龍士「まあこれでお仕事完了だな」

あつちはカシラが片付ける手筈なのでそこまで気にしなくてもいい

組員「以外と簡単でしたね」

龍士「あつけなさ過ぎるけどな」

それにしても警報がなっているのに何故逃げなかったのが謎だ、まるでこれを待っていたのかのようだ

龍士「よしここにいる全員片付けた後カシラの所に行くぞ、それから……」

するとスマホが鳴りだし始めた、スマホを取り出し電話に出る

龍士「もしもし？」

神埼『龍士！今どこ!?』

龍士「仕事の都合で○○だが」

神埼『ちよつと遠いな、どうする?』

龍士「落ち着け、何があつた」

何やら気になる事があるようだがあまり心当たりがない

神埼『あんた学校に知り合いがいるって言ってたよな!』

龍士「それがどうした？」

神埼『ノイズが出現した所が学校なんだ！あんたの知り合いやばいんじゃないのか!』

龍士「……は？」

それを聞いた時唾然としてしまいその場に固まっていた

黒幕

未来「はあっはあっ」

あの綺麗な校舎が廃墟と化していくのを走りながら見ていく、響たちは今別のノイズを相手をしているためここにはいない、だが未来はここに残り避難誘導の手伝いをしていた、そのため未来がここに残ってしまうのは必然な訳でノイズに狙われてしまう

未来「きやあ!!」

校舎が崩れでこぼこしてしまっているためかつまづいてしまう、転けた痛みで少し止まってしまいその倒れている未来にノイズが近寄ってくる

未来「いやっ来ないでえ!!」

そう叫ぶがそんなことを聞くようなやつじゃないのはわかっていた、そしてその手が未来に届きそうになったそのとき

斎藤「おらあ!!」

その腹に拳でこなごなにする斎藤の姿がいた

未来「斎藤さん!」

斎藤「下がってて!」

そう手で合図しその場にいるように指示する、そしてノイズと戦闘し問題なく勝った

斎藤「よし、片付いた」

緒川「よかった、無事でしたか」

後から駆けつけた緒川が未来に駆け寄り傷の具合を見ていた

緒川「斎藤さんには万が一に備えて待機してもらったんです」

実は最初にノイズが出現した時に司令が斎藤に本部近くで待機するように命じたのだ、司令が何故そうしたのかはわからないが何やら斎藤は知っていそうだが

斎藤（この様子じゃ司令の読みが当たってそうだな）

緒川「斎藤さんは他に生存者がいないか探してください、自分は未来さんを本部まで護衛します」

斎藤「オーケー」

緒川と別れ他に人がいないか取りあえず外に出ることにした

「龍士「峰！今何処だ！」

龍士は襲われていると聞き直ぐ様峰に電話を繋げた、普段の龍士からは見れない焦りも見せ声も少し上げていた

峰『学校だ』

龍士「ならよかった、未来と響連れてそこから逃げろ！車で迎えに行つてやる！」

峰『い、いや駄目だ、こないでくれ』

龍士「ああ!?!お前状況わかってんのか!?!襲われてんだぞ！」

何を言ってるんだこいつは？と思った、何で迎えに行くと言うのに駄目なのか理由がわからなかった

峰『大丈夫だつて、ここにはシエルターもあるし』

龍士「ノイズの中心地でシエルター何か意味あるか！」

安心する理由が不安定過ぎる、シエルターと言うが所詮ノイズ見つからないようにしてるだけだ

峰『ともかく俺に任せてくれ、龍士はそのまま避難してくれ！』

龍士「お、おい！」

龍士「あんのお糞ボケえがあ」

近くにあった外国人の車のボンネットを握り潰し怒りをあらわにする龍士、組員はそれを離れて見ていた

組員「あ、あの、兄貴？」

龍士「お前らはようが用が済んだらとつと行け、俺は知り合いを迎えに行く」

組員「は、はい」

そう組員に指示を出し自分の車に乗ろうとする龍士、そんな龍士のスマホが鳴り出す、画面を確認すると山下のようだ

龍士「なんだ？」

山下『兄貴、カシラから連絡がありましたて釘原のやつは捕まえました』

龍士「それはよかったな」

車に乗りエンジンを駆ける龍士、さっさと切り出したかったが報告は大事なので切らなかつた

山下『それで捕まえた釘原からの情報です、動いていた外国人たちと釘原を裏で操っているやつがいるそうです』

龍士「そいつは何処に？」

山下『〇〇町の九朗通りにある居酒屋の裏にある雑居ビルです、どうやら釘原がカジノを襲った後そこに奪った物を運んでとんずらするつもりだったそうです』

龍士（ちと遠いな）

山下『警報がなりカシラはその区域に近づけません、兄貴にお願いしたいそうです』

龍士「俺にか？」

山下『はい、カシラから兄貴にやってほしいと』

龍士「すまないが出来ない、今知り合いがノイズの群れのと真ん中にいるんだ迎えに行かねえと死ぬ」

それに学校からも少し離れている、知り合いに身の危険が迫ってる以上受ける訳にはいかない、ヤクザと言ってもあまり人を見捨てると言うことができないのが龍士なのだ

山下『ノイズ中心地……リディアン学院か……なら俺がやります、ちようど近くにいますし』

龍士「ふざけんなノイズの発生源のと真ん中だぞ、俺しか無理だ」

山下『駄目です、カシラから兄貴にと預かってます、変えられませんが』

龍士「俺が言ったっていやあいいだろ？」

山下『兄貴、ヤクザの世界では親の命令は絶対です、忘れてません

よね?』

その言葉を聞き言葉が詰まる、少し目をつむり深呼吸をし落ち着かせる、そして答えをだす

龍士「……迎えに行けるな?」

山下『はい』

龍士「峰を含めて三人、神埼を連れて迎えにいけ、おまえじや顔が駄目だ」

山下『わかりました』

そう言いスマホを切り車を走らせた

そして未来たちは本部に続くエレベーターを仕様し避難していた、緒川の方は今の状況を報告するため司令に電話をしていた

緒川「はい、今未来さんと一緒にいます」

緒川「それとカディンゲルの事なんです、心当たりがあります」
その次の言葉を言おうとしたとき、突然エレベーターの上から何か
が壊れる音がし天井から誰が入ってきた

未来 緒川「!?!」

二人が唾然としている間にその人影が緒川の首を掴み持ち上げる

緒川「く!」

未来「緒川さん!」

それは金髪の女性フィーネだった、だが前とは違い金色の鎧のよう
なものを着ている

フィーネ「おかしいな、いつから気づいた?」

緒川「塔なんて高いものを建てるのは地上では無理です、なら下に
伸ばすしかないそれが出来るのはここ、リディアンと本部を繋いでい

るエレベーターシャフトだけですから」

フィーネ「ち、雑な偽装工作が仇になったか」

そして本部につきエレベーターが開くと同時にその中に放り投げた、緒川は直ぐ様拳銃を取り出し打つが当たっても銃弾が潰れるだけで意味がなかった

フィーネ「無駄なことを」

鞭を掲げ振り下ろそうとしたとき後ろから嫌な気配がした、直ぐ様後ろを向き視認しようとするが既に遅く、直ぐ目の前に拳があった

フィーネ「!?」

未来「峰さん！」

峰「下がって」

そう言い未来を後ろにやり目の前の人と睨み合う

峰「……やっぱり、教授なんですネ」

フィーネ「ふん」

峰「理由をお聞きしても？」

フィーネ「貴様に話すことはない」

峰「そうですか」

フィーネ「きさま、どうしてここに」

峰「前々からうさんくさかったんです、防衛大臣が死んだ時から、ちよつと怪しんでました」

フィーネ「ほう」

峰「あなたが今までやってきた事を考えると少し気が楽です、俺は女の人でも手は抜きませんよ」

静かに構え相手を睨み付ける

峰「んじゃ……行くぞお!!」

それを聞いたとたんフィーネが鞭をしならせ攻撃してきた、それをくぐり抜け拳を放ちフィーネはそれを腕で防ぎ戦いが始まった

……フィーネ……

懐に入りお得意の空手をぶつける、相手は鞭で防ぎながら隙を見て攻撃をしそれを峰は避けながら対応する、そしてローが塞がれた後すかさずハイキックをうつつが後ろに下がり避けられそこにすかさず捻りを加えた後ろ蹴りを打つ

フイーネ「ふん」

鞭を硬化させ受け止め片方の鞭を振り下ろす、すかさず足を引き避ける、そのために距離が出来てしまいそこから鞭特有の変則的な動きが飛んできた

峰「ち」

未来「峰さん！」

弾き防ぎ避けながら対処するがやはり何発か軽くもらってしまふ、何とか距離を詰め攻撃するがまるでわかっているかのように対処される

峰（そっぴや野々宮に撮らせてたっけ、やつかいだな）

後々の事を考えて戦闘記録を撮りパターンを読んでいるようだ

峰（なら）

少しだけ動きを変えた、あまり蹴りは使わずパンチを主体に動く
フイーネ（動きが変わった……）

蹴りはたとえ軽く打っても重いが人は足でバランスを取るためどうしても隙が大きいので攻撃が来たときに避けにくい、そのため足はあまり使わずボクシングのような回避中心のようなやつがまだやりやすい

まず空手の軽いコンビネーションを打ち相手の動きを読む、相手の鞭の攻撃を中心としているがそこまで洗礼された動きではない、まだよく馴染んでないように思える

峰「よし、だいたいわかったぞ」

峰（強いっっちゃ強いが技術や龍士のようなその場の発想はあまりない、力比べさえしなければいける！）

そうと決まれば色々やりようがある、まず接近し近接戦を仕掛ける、ストレートが鞭で防せがれ返しの振り下ろしが来たときすかさず

相手の鎧を掴み頭突きを喰らわす

フィーネ「っ!？」

予想外の動きに驚いき隙が出来てしまった、そこを逃さず前蹴りを放ち腹を抑え頭が下がった所にハンマーを喰らわせる

峰「おらあ！」

相手の頭が地面にめり込んだ所にジャンプし両足のスタンプを喰らわせようとするが寸前の所で避けられた

フィーネ「以外と荒いのだな」

峰「こつちの動きは読まれててやりにくい、ならこつちの方がやりやすいでしょ」

また接近し次は蹴りを入れた動きも加える、相手は鞭で防ぎながら攻撃を加えるが峰は落ち着いて対処し当たるとまではいかないがかするぐらいにはなった、一旦距離をとり様子を伺うが峰の方は余裕の表情をしていた

峰「何でもかんでも計算付くだと足元すくわれるよ」

フィーネ「そのようだな、なら」

するとフィーネはクリスが持っていた杖を取り出しノイズを召還した

峰（ノイズ？今さら？）

フィーネ「やれ」

峰はその言葉を聞き構える、そしてノイズが突っ込んでくるが少し違和感を感じた、こつちに飛ばすにしては当たるやつが一つもない

峰「なんだ？何処狙ってっ!？」

嫌な予感がし後ろにいる未来たちの近くによる、するとノイズがすべて当たる所になっている、どうやら狙いは後ろにいる未来たちのようだ

峰「ち！」

手や脚を使いノイズを叩き落とし未来たちの直ぐ近くで構える

フィーネ「シンフォギアとは違い体ひとつしなないからな、まとめて相手をするのはつらからう」

峰「まさかこんな手を使うなんて、本気なんですね」

フィーネ「そうさ、今度こそやりとげて見せる、そのために今まで生きてきたのだ」

ノイズを召還し突撃させそれと同時に攻撃もしてくる、避けようにも避けられずすべた無理に弾きながら防御に徹する、だがやはり手数が足りないのか鞭の一つを逃してしまった

峰「しまっ!？」

未来の目の前に綺麗な鞭が近づいてくる、峰はすぐに手を目の前に出した、鞭はそのまま手を貫くがそのまま力強く握り無理矢理止める
峰「ぐう!」

未来「峰さん!」

フィーネ「愚かなやつ!？」

フィーネが嘲笑い口を溢した瞬間何かにつけて引つ張られる、そのまま峰の近くまで引き寄せられ貫かれてない手の方で渾身の正拳を放った

フィーネ「かつ…」

そして脚払いをし相手を浮かせるとそのまま後ろ蹴りを放つ、吹っ飛ばされ離れようとしたがまた峰に引き寄せられ次はミドルキックを入れる

フィーネ「くうつなめるなあっ!」

痛みに耐えながら鞭を短剣化させそれを峰の腹に突き刺す、さらに一旦抜きエネルギーの球体を作りそれをゼロ距離で何度もぶつける
峰「ぐうう!」

二人の周りが煙に包まれる、腕の痛みに顔を歪ませながらも頭を掴み膝蹴りを顔に喰らわせる

フィーネ「っ!？」

峰「フウウツ!」

大きく息を吐き痛みに耐えながらも反撃の手は緩めない、その無防備な腹に正拳を入れる、するとそのめり込んだ腕に鞭が巻き付けられフィーネはそれをおもいつきり引き寄せるとそのクリスタル状の刃が峰の腕を切り裂く、そしてそのまま短剣にし腕に突き刺す

峰「があっ!？」

フィーネ「これで腕は使えまつ?!」

短剣にした鞭が抜けない、それに取られてしまったのか相手のドロップキックをもろに喰らってしまった

フィーネ「ごはあつ?!」

そのまま吹っ飛ばされそれと同時に刺さっていた両方の鞭も抜けお互いに倒れしばらく動かなくなる、未来は顔を青ざめながら心配なのか峰の近くによりかかる

未来「峰さん!」

峰「み、未来ちゃんか」

体には無数の傷に腹と両腕、とくに左腕がひどく血で肌の色がわからないほど出血していた

未来「ああつ、う、腕が」

峰「無理し、すぎた、な、ちよつと、ざつ、すぎた、かな?ゴフツ」
吐血し血が床に広がっていく、それを見た未来はさらに顔を青ざめ目を見開く

未来「いやあああ!死なないでえ!死なないでええ!!」

弱った峰を見たためか涙を流しその場で泣き叫ぶ未来、そんな未来を心配させまいと優しい言葉をかける

峰「心配しないで、大丈夫、だから、ほら、泣かない」

未来「ううつひつく」

フィーネ「くうつ」

フィーネの方はあらかた傷が治ったのか少しふらついてはいるが立ち上がった

フィーネ(アンノウンとは言え、たかがノイズに触れられるだけの分際でここまでのダメージを、ネフシユタンを着ていなかったら何回か死んでいるぞ!)

峰の方を睨み付ける、まさかここまでやられるとは思わなかった

フィーネ(近接戦闘力はシンフォギアを凌駕している、下手に動く前に止めをささねば!)

ダメージはおっではいるがネフシユタンの再生能力で治癒は進んでいるため足取りは以外と軽い、ゆつくりと峰に近づいていくとその

峰とフィーネの間に未来が割ってはいった

未来「……」

フィーネ「何をしている、どけ」

未来「いや、です」

体が震え怯えながらもどこうとはしなかった、峰はそれを倒れながらも見ていた

峰（ち、ちくしょう、上手くいったんだがな、動かねえ）

動かそうにも痛すぎてたてない、やはりゼロ距離で喰らうのは駄目だったか

峰（や、やつぱりあいつの真似事はまだ無理か、できると、思ったんだが）

やはり龍士のスタイルは自分には合わない、だが今考えるべき事はそれじゃない

峰（何とかしないと、こうなったら、まともに喰らう覚悟で！）

たとえ倒せなくとも未来が逃げれる時間ぐらいは稼げるだろう、そう考え無理に立とうとした時、突然天井が崩れてきた

峰「!？」

フィーネ「な!？」

峰とフィーネの間で土煙が上がり何も見えなくなる、それが晴れると見知った顔が出てきた

弦十郎「やはり君だったか、了子君」

弦十郎だ、どうやら天井をぶち抜きここまで直で来たようだ

フィーネ「まだその名で呼ぶか」

弦十郎「どんな姿をしていようが了子君には変わりはない」

フィーネの方は峰の前にノイズを配置し動けないようにすると、弦十郎を睨み付ける

弦十郎「……やはり戦うしかないか」

フィーネ「当たり前前だ、さんざん私のじやまをしてきたのだ、覚悟はいいだろうな？」

弦十郎「…ああ、必ずとめてみせるさ」

そう決意を表し戦いが始まる

その頃、龍士は

外国人「ぶへえ!？」

外国人『な、なんだこいつ!？』

龍士「とつとけどけやおらあああ!!!」

友人を助けられないいらだちだろうか、目の前に入った敵は吹っ飛ばしつづ目的のビルに入る

龍士（頼むからよ、無事でいろよ、俺もとつと終わらせるから）
二年前の光景を思いだし不安で仕方がなかった、龍士はそのためにも非常階段を壁へ壁へと飛び移りながら上へと上がっていった

奥義

龍士「ここか……」

敵を薙ぎ倒しながら目的の場所についた、鉄製のドアに手をかけそのままゆつくりと開ける、そこには見知らぬ白衣の男が立っていた

龍士「お前は？」

？「初めまして、龍士さん」

白衣の男はこちらに振り向く、髪はボサボサで髭も少し生えている、それに目の隅も酷くあまり清潔さは感じられない

？「申し遅れました、私F・I・Sのノスターと言うものです」

不気味な笑みを浮かべながら自己紹介をするが龍士は別にそんなのには興味なかった

龍士「知らねえよ」

ノスター「酷いですね、せっかく名前まで教えてあげたのに」

龍士「うちの本家の看板汚すようなやつの事なんか知ったこっちゃねえよ、釘原も釘原だが何でこんな依頼受けたのか不思議だ」

ノスター「彼は裏仕事に飢えてましたからね、それに彼にとってカジノは邪魔だったようで、以外と簡単でしたよ」

龍士「表の連中がいることは伏せてたようだな」

ノスター「それでもしないとやるとは言ってくれませんからね」

龍士「馬鹿なやつだ」

相変わらず後先の事を考えていない、今まででこずっていたのが嘘のようだ

龍士「まあお前が何処のどいつなのかは関係ない、今色々詰まってるんだ」

そう上のスーツを脱ぎ捨てる、シャツ一枚になり筋肉質の体が出てくる

龍士「さっさと終わらせるぞ」

ノスター「喧嘩腰ですね」

そう言うとノスターの後ろから何人が男たちが出てきた、何故だかその男たちから妙な違和感を感じる

ノスター『やれ!』

そう掛け声をあげる同時に男たちが駆け出してきた、龍士はその違和感を感じながらも迎撃に備える

——F・I・S——

——デイル・カイド・ノスター——

まず飛び込んできた一人の攻撃を避ける、以外と早いとその迫ってきた腕を叩き落とし顎にパンチを入れる、するとその違和感が現実になった

龍士「あ?」

顎に一発入れたのに笑いながらこちらを向く、完全なクリーンヒットだった筈だが、そう考えていると左右からもきた、右のやつのパンチをいなし左のやつに肘打ちを放ちすそしていなしたやつの背中にかかと落としを打つ、地面に叩きつけた後左のやつにフックを入れ吹き飛ばすが、直ぐ様起き上がりこちらに不気味な笑みを見せてきた

龍士「なんだこいつら」

ノスター「普通の人とは思わない方がいいですよ、色々いじつてますから」

龍士「いじる?」

敵が突っ込んできたためいつも通りに対処しようとしたがどうも言葉が引つ掛かるため様子を見る、攻撃をいつも通り避け防ぐが避けたパンチが地面にめり込んだ、それだけじゃない周りにある柱を折り壁を粉々にした

龍士「お前…コイツらに何した」

ノスター「どうです?強化人間の力は」

龍士「なんだそれ?」

ノスター「聖遺物を彼らの体の中に埋めました、ある程度適合出来ているのなら自分のエネルギーを還元して遺物のパワーを引き出すことが出来ます」

龍士「聖遺物?…まあどうでもいいけど寿命減らしてまでやるこ

とかよ、あほくさ」

ノスター「あの女が秘密主義なのがいけないんですよ、それに不完全とは言えあなたより強いんですから」

龍士「…ほお」

そう勝つ筈なのだ、自分のすべてを注ぎ込んで作り上げたのだそう思っていた、その成果があつた男に殴られ自分の方に飛んできた

ノスター「え？」

それが横切る、それと同時に後ろに振り返るそこには壁にめり込んだ男がいた

ノスター「な!？」

龍士「今のでギリギリ生きてるのならもうちよい下げた方がよさそうだな」

ノスター「な、何をした!」

龍士「本気でやったら死ぬから今までずっと手加減してたんだよ、ちなみに今のも少しだけ上げただけ」

ノスター「そんな馬鹿な!人間がそこまで強いわけが」

龍士「自分で強さを身に付けようとしないうアホには一生わからんさ」

ノスター「そんなはずはない!やれえ!!」

その声とともに周りの男たちが駆け出した、そのとたん龍士の筋肉が少し膨らんだ、そしてそのまま男を殴り飛ばす、顎の骨を砕きそのまま壁を突き破り向こう飛んでいった

ノスター「な、なんだ!？」

龍士「全力でかかってこい、俺は他の連中と違ってあまり加減はせんぞ」

他の三体が来る、最初のやつを肘打ちを顔に当てそのまま蹴りを放ちそして次に後ろに来たやつパンチに自分のパンチを打ち腕ごと潰しそのまま背中振り下ろし何か折れる音が聞こえた、そのまま正面に来たやつをそのままリアットで引っかけそのまま壁に叩きつける、淫らに舌をだしそのままめり込んだままになる

ノスター「な、な!？」

龍士「さて…」

ノスターの方に向き直りそして接近するそのまま勢いをつけ殴り飛ばした

ノスター「ぐへえ!？」

龍士「手前かけさせやがって」

近くによろうとノスターに歩きだし拘束をしようとする、すると急に地面が震え始めた

龍士「なんだ!？」

揺れが強くて体がふらつくがしばらくしているとその揺れも直った、何が原因なのか外を見てみると何やらでかい塔が建っている

龍士「なんだ？あのでかい建物は」

カラフルな色をしている不気味な塔だ、今の揺れを考えるとどうやらあれが生えてきたと考えるのが普通のようなだ、そんな事を考えているとスマホが鳴り出した

龍士「おう、俺だ」

山下『兄貴！峰さん探してるんですけど全然見当たらないです！』

龍士「はあ!？」

山下『それに道路や建物の崩壊が酷くて学校までつくまでに夜になりそうです』

龍士（ち、嫌な予感がするって言うのにこれかよ）

あの塔が出てから嫌な感じがする、その証拠に山下からきた連絡から地形も変化しているようだ、多分山下たちが行くのは困難だろう、なら

龍士「……山下、お前は帰れ」

山下『え?』

龍士「嫌な予感がする、これ以上ここに長いはずんな、峰は俺が探す」

こうなった以上自分がやるしかない、正直これ以上山下は動けないなら仕事が終わるような自分が動くしかない

山下『そ、それじゃ兄貴は?』

龍士「大丈夫だ、俺も片付けて峰見つけたらすぐに行く」

山下『でも!』

龍士「いいから、行つてくれ」

山下『……無理しないで下さいよ』

龍士「わかつてるよ」

龍士「……さて」

素晴らしい電話を切り後ろに振り返る、そこには吹っ飛ばされたノスターがこちらを睨んでいた

ノスター「くうっ」

龍士「しぶといな、あれだけ痛め付けたのに」

ノスター「冗談じゃない、私たちの研究の成果がこんな、こんなヤクザごときにい!」

龍士「とつとつこの町から出ていけば見逃してやるが、どうするんだ?」

ノスター「冗談じゃない、このまま引き下がれるか」

そう言う懐から何か取り出した、注射器のようなものだ

龍士「やめとけ、寿命減らしてまでやることじゃねえだろ」

ノスター「うるさい!ウイルやフィーネに追い付くには犠牲を払つてもやらねばならないんだ!」

龍士「ウイル?フィーネ?誰だそいつ?」

ノスター「自分が作った遺物の覚醒を促進させるものだ、今までのやつだと思ふな!」

それを倒れている男に刺し中身を注入させる、すると男が立ち上がる

「グウオオオオオオ!!!」

雄叫びが上がり男の体の至るところから金属のような物が突き出る、その光景を龍士は冷たい目で見ていた

龍士「外道がそんなので強さをはかるとはな、そんなんだからその二人にも勝てねえんだよ」

ノスター「こんのお、やれえ!!」

咆哮をあげながらこちらに突進して龍士はそいつとぶつかり力比べをし始めた、龍士にも負けないほどの巨漢になったがその男の手が

嫌な音をたてながら握り潰される、龍士はそのまま捻り持ち上げた

ノスター「そ、そんな、力比べで負けてる!？」

そして一度離し落ちてきた相手の腹に前蹴りをいれ少し相手と距離ができる、その距離を詰め胸に崩拳、それで下がった顎に肘打ちそして横腹にブローを入れそのまま顎にアッパー、相手の横に移動し脚で足払いをしてそのまま顔にかかと落としを喰らわせる

「グウウウアアアアアア!!?!」

起き上がりと同時にこちらに手を伸ばした、その手を掴み捻り相手の後ろにまわりその背中に足を置きそのまま腕を引つ張り腕の間接を外す、相手は空いた手をこちらに伸ばそうとするがその手を避け肩と腕を掴みそのまま外した

「グウアツアツ!?!」

痛みで抑えそうになるが抑えるための手が外されていて出来ない、その外したやつを睨み突っ込んでいく、そして龍士はそれを待ち構えていた

龍士（攻めに一割き常に威圧）

ゆつくりと構え相手を睨み付ける

龍士（守りに9を割き致命傷を逃れ）

そしてゆつくりと深呼吸をし落ち着かせる

龍士（虎疲れ果てし時、必殺の一撃を…）

相手との距離が間近になる、そして相手の蹴りが自分に迫ってくる、意識を高め集中するそして蹴りが間近になったその時ある心得の最後を心に叫ぶ

放っ!!

その心の声を合図に少し前屈みになりそして相手の蹴りよりも早く相手の腹に渾身の一撃を入れる

龍士「おらああ!!!」

古牧流 虎落とし

「ガアアアアアア!!!」

まともにくらったそれはかなりの速さでノスターを横切り壁に激突しそのまま瓦礫とともに消えていった

ノスター「ば、馬鹿な、そんなはずは」

龍士「力を使うのは難しいものだ、その力を誰かから与えられるときもあるだろう、だがそれで強くなるやつはその力の事を理解しているやつだ、そんな単純なこともわからんとはな」

ノスター「理解している!だからこんなことも出来るんだ!」

龍士「違うお前は理解していない、何故ならお前はあいつらのような力を自分で使おうともしない、それは何故か、怖いだろうか?自分がああなるのが」

ノスター「っ!」

龍士「精神、技術、発想、戦法、そして自分がそれを何のために使うのか、それらを考え鍛え上げ両立出来たやつがお前の言う強い分類に入る、たとえ外道だろうがそれが出来れば強者になる、それを人に与える時もその人間がその力をもつに相応しいのか見定めなければならぬ」

龍士「お前は弱者だ、おのれで鍛えることもせず、人に力を与えることを強制する、力を付ける覚悟もなく人を見定める目もないようなやつが強さを理解しているなど片腹痛いわ」

ノスター「うるさいっ!俺は天才なんだ!なのにいつもあの二人に比べられていた、だがこれを成功させれば私は並ぶ事が出来る!」

ノスター「そのためにもお前は邪魔なんだああ!!!」

銃を取り出しこちらに発砲する、それを避けながら相手のもつ銃を

掴む

龍士「いつまでもくだらねえ夢みてんじや……」

そしてそのまま取り上げる、そして相手の顔目掛けて思いつきりフツクを放った

龍士「ねええよ!!!」

ノスター「おごっ!!!?」

そのまま崩れた瓦礫の方に吹っ飛んでいった、龍士はノスターの様子を見るためにその瓦礫の近くまでよる、そこには気絶仕掛けのノスターが倒れていた

ノスター「かつ、あ」

龍士「け、惨めな最後だな」

タバコを取り出し火をつけ一回吸い自分を落ち着かせる

龍士「まあここならほっといても別にいいだろ、死にやしないし」

虎落としても手加減していたししばらくは動けないはずだ

龍士「さてと、さっさと探してずらかるかね、何処にいるんだよあいつ」

龍士はその場を後にし峰のいる方向、学校に向かうためビルから飛び降りた、龍士はその様子を見ていた人物のことにはきづかなかつた

黄金の塔

響「こ、これが」

奏「カディングエル！」

色鮮やかに黄金に輝くその塔の高さは天にも上りそうだ

フィーネ「ようやくだ、ようやくと私の願いが叶う時がきたのだ！」
その塔の近くで瓦礫とかした学校の近くでフィーネが斎藤たちを

見下ろし高らかに笑っている

斎藤「ふざけんなあ!! だいたい月壊した所でんなこと出きるわけ
ねえだろうが！」

そこに斎藤の怒声が放たれる、眉間にシワをよせフィーネを睨み付
けていた

クリス「ようは世界征服をしたいだけだろうが! 安い! 安さが爆発
し過ぎてる!」

フィーネ「なんとも言うがいい、時は満ちた、後は貴様らを排除
すればすべてが終わる! もう一度世界を束ねるのだ!」

斎藤「させるわけねえだろ」

頭に被っていた帽子を捨て腕の裾を上げる、四人も胸の歌を歌おう
とした

Imyuteus amenohakiri

tron

Croitzaalronzell Gungni

rizizl

Balwisyall Nescell gungnir tro

n

Killter Ichaival tron

フィーネ「ふふふ、無駄な事を」

斎藤「言ってる、その口叩けなくしてやる」

響「涼子さん」

奏「響、もうあの人は響が知ってる涼子さんじゃない」
響「でも」

翼「気持ちはわかる、それでも止めなければならぬ」

響「はい」

斎藤「行くぞお!!!」

――古代の巫女――

――フィーネ――

全員でフィーネに飛びかかるがそれを鞭でバラけさせ対処される、斎藤はそれを掻い潜り攻撃するが腕で防がれ後ろから鞭が飛んでくるそれを蹴り落としそのまま後ろ蹴りを放つが鞭で防がれそこに蹴りがきた

斎藤「んぐ!?!」

クリス「斎藤! 下がれ!」

CUT IN CUT OUT

その声とともに下がるとそこにミサイルが飛んできた、フィーネはそれを鞭で撃墜させる、当然ミサイルは爆発し周りが煙で包まれる、そしてフィーネの前にその煙から響と奏が出てきた

奏「おりややああ!!」

響「せりやああ!!」

奏は槍で、響は拳で攻撃するだがそれも冷静に対処され距離を取られる、完全に時間稼ぎだ

斎藤（あんまり教授の相手はしてられない!）

翼（カディングルさえ止めればそれでいい!）

奏（そのためにフィーネを止めるやつがいる!）

クリス（なら!）

全員が目を合わせるそして奏、翼、響がフィーネに突っ込みクリスは歌を歌い続け斎藤はそのそばにいる、それを見たフィーネは三人に駆け出し戦闘する

響「行かせません!」

フィーネ「ち」

響がフィーネと接触し押され始めると奏が変わりそれに翼も加わる、だがそれでも押されている

奏「くそお！」

翼「やはり強い！」

響「どりやああああ!!!」

響が横やりを入れ参戦するがそれでも押される、攻撃をしてもすべて対処され的確に反撃を入れてくる

響「きや！」

翼「く！」

翼と響が吹っ飛ばされた、そのため奏が一人で戦う事になる何とかしようと槍を振るうがからめとられ取り上げられる

奏「しまっ！」

フィーネ「邪魔だ！」

そしてがら空きの腹に蹴りを入れられ吹っ飛ばされる

奏「ぐ！」

フィーネ「これで！」

鞭を手元に戻しクリスの方に向かうそして鞭を叩きつける、それを斎藤が止める

斎藤「まだか!？」

クリス「もうちょい！」

フィーネ「貴様邪魔だ！」

斎藤「どくかよ！」

フィーネは遠距離から攻撃し斎藤は防御に徹する、だが斎藤は防御に対する技術はまったくない、そのため深い傷をおおう時が多いのだ
斎藤「があつくそお！」

フィーネ「相変わらず攻撃だけが取り柄の脳筋が！」

クリス「斎藤！」

斎藤「大丈夫だ、続ける！」

クリス「っ！」

クリスはそれを聞き目の前の事に集中し斎藤も目の前の相手に専

念する、鞭での攻撃は勢いがやまず斎藤に降り注ぎ続ける

斎藤（できるまで、後もうちよい！）

フィーネ「こんの！」

フィーネが止めに鞭で貫こうとする、斎藤はそれを避け手でそれを掴みそれを腕に巻き付けた

フィーネ「な!？」

斎藤「捕まえたぜ、クリス！」

クリス「わかってらあ!!」

クリスのアーマーが変形し大きなミサイルが出来る、それを塔に狙いを定めて放たれた

MEGA DEATH QUARTET

クリス「いつけえ!!」

フィーネ「させるかあ！」

斎藤の方の鞭をこちらに強引に引き寄せもう片方の鞭でエネルギーの球体を作りこちらに投げってきた

NIRVANA GEDON

斎藤「ぐ！」

それを防ぐために手を離してしまいフィーネはその隙に鞭を引き戻しミサイルを叩き落とす

フィーネ「切れた！後は…」

そしてもう片方のミサイルを探そうと上空を見回しているとそのミサイルに乗っているクリスを見つけた

響「クリスちゃん!？」

翼「何をするきだ！」

クリスはそのまま上空に上がっていくと途中で降りる、そして何かを覚悟するような表情をすると大きく息を吸う

1 Gatrandis babel ziggurat edena

奏「!？」

翼「こ、これは！」

響「確か、絶唱って言う」

斎藤「あんの馬鹿！」

斎藤はそれを聞き出した瞬間塔に向かって駆け出した

響「斎藤さん!？」

斎藤（ふざけんなよ、なに勝手に、あいつなにやる気だ!?)

ともかくカディングエルから何か回る音がする、おそらくもうしばらくしたら放たれてしまう、そしてクリスは恐らく月とカディングエルの間にいる

Emustolronzen fine el baraliz
izzl

腰にあるアーマーからクリスタル状の物が飛び出しそして同時にエネルギーが加速し始める

クリス（ごめん斎藤、私死んじやうかもしれない）

そして自分が持っている武器も変形し始めた、銃身が長くなりそれを一つに合わせると大きな銃が出来上がる

Gatrandis babel ziggurat edena
l

クリス（私やつぱりパパとママが好きなんだ、だから私は両親の夢を受け継ぐんだ、そして夢を叶えてあいつと一緒に、生きてみたい）
相変わらず素直じゃないと言うのが笑えてくる、これが最後かもしれないのに

Gatrandis babel ziggurat edena
l Emustolronzen fine el zizzl

歌の終わりにエネルギーの加速も終わりそしてそれが銃に注がれていく、カディングエルの方もどうやら充電は終わったようだ

フィーネ「たかが絶唱だ、撃ち抜け！」

その掛け声と同時にお互いに放った、だがやはりエネルギーの量が違うためクリスが押され始める

クリス（負けるか、あいつの所に帰るんだ!）

カデインゲルの勢いは止まらずクリスの前までに迫ってくる、そこでフィーネは何やら難しい顔をしているようだ

フィーネ（何だ？出力が弱い）

気のせいだろうか、何やら計算していたよりも弱い感じがする、だがその疑問を取り払いが如くそのエネルギーはクリスを大い月と衝突した、だが月は多少欠けるだけであった

フィーネ「仕損じた!？」

奏「どうなった!？」

空から赤いキラキラしたものが落ちてくる、それを目にこらして見るとそれはクリスだった

斎藤「クリス!!」

奏「野々宮!」

『……』

奏「野々宮!?!どうしたんだ!？」

待機させておいた野々宮から返事がない、そのままクリスは森に落ちていき見えなくなる、フィーネはそれを見届けるとまた高らかに笑いこちらを見下し始める

フィーネ「さあ、次は貴様たちの番だ」

響「く、クリスちゃん」

翼「おのれえ!」

フィーネ「はて、次は誰を葬ってやろうか」

フィーネは四人を見て次は誰をやるうかと考えていた、すると斎藤は眉間にシワをよせこちらを睨み付けていた

斎藤「てんめえ、ただじやすまさねえぞ」

フィーネ（なんだ？何か感じがかわ……）

それを考えているとその場に斎藤が消えフィーネの後ろにまわる

フィーネ「!？」

そしてそのままフィーネを蹴り飛ばすとそのまま突っ込んでいき追撃を始めた、フィーネも応戦しようとしたが斎藤がフィーネの攻撃を無視しこちらに全力の攻撃をしてくる

フィーネ「くう!」

取り敢えずその場から抜け出し距離をとり斎藤を睨む、その姿は至るところは皮がむけ血だらけの姿だがその目だけはなにもかわつていなかった

斎藤「もう謝っても許さねえぞ、このクズヤロー!!」

相手に突進しそのまま殴り飛ばす、そして飛ばした相手に追いつきさらに殴り飛ばした

フィーネ「がふっ!?こ、こいつ!?」

フィーネは斎藤に鞭を振り下ろすが斎藤はそれを弾き飛ばした

フィーネ「な!?!」

斎藤「おらあ!!」

そのまま近づきフィーネに拳を振り下ろす、フィーネはそれを光る壁をはりそれを防いだ

斎藤「!?!」

それに取りられたのか隙が出来てしまいフィーネの鞭が肩を貫いた

斎藤「つつ!?!」

フィーネ「こう言うことも出来るのだよ」

斎藤「だからなんだ!?!」

そのまま殴り続ける、フィーネは壁を出し続け疲れたところを狙おうとしていたが、その前に壁にひびが入ってしまった

フィーネ「なに!?!」

斎藤「おらあ!!」

その声とともに斎藤の拳が壁を貫いた、そして大きく振りかぶりフィーネに叩きつけようとしたその時

フィーネ「斎藤君!!」

斎藤「え?」

不意に優しい声が聞こえてきた、その声の持ち主を見るとその目は優しい目をしていてフィーネがいつもの櫻井教授に見えたのだ、だがそれがいけなかった

フィーネ「馬鹿が」

そして案の定フィーネの鞭が斎藤の体を切り裂いた

斎藤「があ!?!」

鞭の連撃を斎藤に喰らわせ止めに関を貫いた

斎藤「あ、ああ」

フィーネ「どいつもこいつも甘いやつだ、まあそれだから相手をしやすいのだがな、お前も、弦十郎も」

斎藤の体を持ち上げそれを投げ捨てた

奏「斎藤?!」

皆が駆け寄り斎藤の容態を見る、全身が血だらけになり目に光がなくなっていてピクリとも動かない

響「あ、ああ、傷が、傷が」

翼「微かに生きている、まだ助かる」

フィーネ「あれだけやってまだ生きているのか、流石はアンノウンだ」

フィーネ「さあ！次に私に歯向かう愚か者は誰だ！」

そう鞭をしならせ挑発する、三人は覚悟を決めギアを構える

翼「我々だけでやるしかない」

奏「おうよ！」

響「絶対に止めます！」

フィーネ「出来るものならやってみろ!!!」

全員が駆け出しぶつかり合い純粋なシンフォギア同士の戦いが始まった

第二ラウンド

翼「はあ！」

逆羅刹

逆立ちして足のブレードを展開しその状態で回り切りつける、だがやはり対策されており、鞭を少し長くし硬化させそれを回転して防いだ

翼「なら！」

その攻撃をやめ剣術で戦い始める、それもフィーネの予想していた通り対応され鞭で剣を取られ腹に蹴りを入れられる

翼「かは!？」

奏「こんの！」

響「やあ！」

それを見た奏と響が割って入る、槍を振り回し拳を叩きつけるが対応され鞭で反撃を入れられる

奏「くそ、相変わらず気持ち悪い攻撃だ」

響「これじゃ、二発目が撃たれます！」

カディングゲルの方もエネルギー充電がされており銃身付近が光始めている、そろそろ放たれようとしている

奏「あんまり飛ばせないが仕方ない、やるぞ！」

響「はい！」

アームドギアを使い始めフィーネが押され始める

フィーネ「く！」

響「やあああ!!!」

アーマーパーツがスライドされ光の壁に向かって放たれる

我流 激槍衝打

フィーネは光の壁でそれを受け止めるがそれにより地面に脚がうまり亀裂が入った

フィーネ「馬鹿が、そんなの効かない！」

奏「けど脚は止まったな！」

奏の方は槍を掲げ竜巻を纏いフィーネに突っ込んできた

METEOR∞STRIKE

障壁を貫きフィーネを巻き込んだ、土煙が上がり周囲が見えなくなるがその中から奏がでてくる

奏「翼!!」

翼「承知!!」

その声とともに翼が飛んだ、そして両手に刀を持ち青い炎を体に纏わせ青い鳥となり塔に突っ込んでいく

炎鳥極翔斬

フィーネ「させるかああ!!」

血反吐を吐きながら鞭をしならせ翼を撃退しようとするが、それを止めるため奏と響はボロボロになりながらも翼の活路を開くために力を振り絞る

奏「まだ動けるか、響?」

響「な、なんとか動けます」

奏「ならやるぞ、振り絞れ!」

響「はい!」

奏は槍を投擲しそれを複製させ空に展開、それをフィーネと鞭の迎撃に放たれた

STARBUST∞FOTON

フィーネ「邪魔!」

フィーネは自分の周りだけ障壁をはり槍を落としながら翼の迎撃しながら追い詰める、だがその背中に響が現れた

フィーネ「なに!?!」

響「どりやあああ!!」

その背中に一発アームドギアでの一撃を入れる、その背中の鎧にひびが入りだが踏みと止まり吹っ飛ばされなかった

フィーネ「があっこいつ!!」

鞭の連撃が響に降り注ぎ最後に吹っ飛ばされてしまう、それと同時に変身が解けてしまった

奏（これ以上やったらやばいが、ここでやらなきゃ!）

奏は痛むからだに鞭を打ち槍に竜巻を纏わせそれを大きくし

ファイネに向かつて放つ

L A S T ∞ M E T E O

ファイネ「ぬああああ!!」

ファイネは攻撃を防ぐよりも翼の撃墜を優先しエネルギーの球体を複数生成しそれを翼に放つたと同時に奏の技に飲み込まれた

翼「ちい!」

それを避けるが何処までもついてくる翼も何とか逃げ切ろうとしたが前後を挟まれ被弾してしまった

奏「翼!!」

翼の周りに煙が現れる、だがその中きら青い鳥が出てきて塔に真っ直ぐ向かい衝突した

奏「よ、よかった、届いたか」

それを見届けた奏は安心したのか倒れてしまう

奏「ちくしょ、う、動けねえ」

本来奏の技は使用限度は二回、一回使うだけでも辛いはずなのに三回目、しかも大技を使ってしまった反動で動こうにも動けないでいたファイネ「か、かか、かはは」

ファイネは笑っていた、あの技をくらってしまい腕が吹き飛び身体も少しえぐれ全身が傷だらけになっていた、その体を再生させながら塔を見上げる

ファイネ「あ、危なかった、塔もそれほど、損傷があるわけでは、ない、これならまだ、放てる」

翼の攻撃でダメージはおつたがそれでもまだ放つことが出来る

ファイネ「ははは、さあ穿て、もう邪魔はいない!」

塔の銃身が光始めさらに雷の軌跡も見え始めた

響「う、うう」

奏「や、やめろお!」

だがその声は届かずその雷が放たれた

奏「やめろおお!!」

ファイネ「これで全てが終わる!」

その雷の軌跡が真っ直ぐ月に向かつていく、ファイネは高らかにそ

れを眺めていたがそれが徐々に冷めていく

フィーネ「な、届いてない!？」

いつまでまっても月にカディングルの弾が当たらない、なぜそれが当たらないのかを考えていた

フィーネ（なぜだ！あれだけの損害なら問題なく撃てるはず!？）

そんな事を考えていると後ろから気配がした、そして後ろを振り向いたが遅かった

フィーネ「!？」

峰「しやらああ!!」

峰がフィーネを蹴り飛ばし地面に叩きつけた

峰「いつつ、無理に動かすといてえな」

左腕が使えないため脚で蹴ったがその脚の痛みに顔を少し歪みそうになるが笑いで誤魔化す

フィーネ「貴様、どうして」

峰「師匠の受け織りだよ」

フィーネ「なに？」

峰「もし何もかも失うのが嫌なのなら、腕折られてようか深い傷をおつてようが出来ることはやれって言われてな、エネルギーの供給件、機械は叩き壊させてもらったぜ」

フィーネ「な！」

実は上で奏たちがやりあっている間峰がエネルギーを蓄電させる場所を探していた、それを見つけその装置を壊していたのだ

フィーネ「なるほど、エネルギーが足りなかったのか！」

峰「お前さん馬鹿だな、俺らが黙ってみてる分けないじゃん」

フィーネ「き、貴様ああ!!」

峰「一人でこんなでかいことしようとするのがアホなんだよ、一人じゃどう考えても手が足りないってわかるだろ？まったくあの人がか計画だか知らないけど馬鹿じゃないの？」

確かに完全聖遺物を持っているフィーネでも塔の死守をするには手が足りなすぎる、再生でのごり押しでどうにかなっていたが裏をかかれたのは予想出来なかった

峰「仲間もいない、人を信用もしない、ただ憎悪に動くやつに限って失敗するんだよ」

フイーネ「何も、何も知らないくせに！偉そうに」

峰「他人の気持ちなんてわからんだろ、あんたが俺の気持ちをわからないように俺もあんたの気持ちがわからない、バラルの呪詛って言うのは知らんしあんたの昔話にも興味がない」

峰「世の中は不公平だ、理由もわからず奈落の底にまで叩き落とされる時がある、何もかもいやになり何かを恨んだときがあるよ、俺にも」

フイーネ「なら！」

峰「けどそれが早とちりの時がある」

視線をフイーネから自分の手に移す

峰「俺の場合、両親がノイズのせいで死にしまった、そのせいで大学にも行けずへんな罵倒をされ死にたくなった、誰も俺を助けてくれなかった、そんな日々が続いてた時叔父さん達が来たんだ、最初は何しに来たんだって追い返したよ、そんなときは俺が正しいと思っていた、その時の俺を殴りたいよ」

そして握り拳を作りそれを悔しそうに見つめる

峰「おじさんたちは助けようとしたんだ、ただその時息子さんの方の孫を預かってたんだ、もしあの時接触してたらその息子さんにも被害がでるだから会おうにも会えなかったそうだ、そして息子さんが成人した後俺の方に来てくれて支えてくれたんだ、馬鹿だったんだよ俺は結局自分の事しか考えてなかった」

峰「あんたは破壊するだのどうのこうの言っているけどホントにそんな理由で突き落とされたのか？何か理由があったんじゃないのか？」

フイーネ「黙れ」

峰「何でその事を探さず復讐に走った？自分が突き落とされたのは何故かと考えた事はなかったのか？」

フイーネ「黙れえ」

峰「何であんたはその人を、思い人を信じなかったんだ？」

フイーネ「だまれええええ!!!」

鞭をしなければ峰の前に叩きつける、だが峰はそれを冷たい目で見ていた

ファイネ「何がわかる！貴様に何が理解できる！私の気持ちがわかるのか!!」

峰「そうやって言い訳するだけですか？」

ファイネ「何だっとお！」

峰「そうやって何もわからうとしないで、愚痴愚痴と、昔の自分を見てるようでいやになるだよ、あんた」

冷たい目が鋭くなりそして額にこめかみが浮かび始めた

ファイネ「その減らず口を叩き直してやる！」

峰「さーて、第二ラウンド始めっか」

お互いに構える、お互いに傷だらけだが譲れないものがある

ファイネ「くたばれ峰ええええ!!」

峰「こいやああああ!!!」

ぶつかり合いお互いに戦う、片腕は使えないが相手も疲れはててなら勝算はある、だがそれは自分も同じだからあまり攻撃は受けない長期戦は出来ない、なら

峰「短期戦しかねえよな！」

パンチを打ちキックを打ち鞭を防ぎ鞭を避けお互いに譲らない

峰「こなくそお！」

ファイネ「くっそおしっこい！」

乾いた音とともに体を鞭が切り裂く、そしてそれと同時に腹に渾身のブローが入る、お互いに顔が歪むが峰がそこからローを放つそれでバランスを崩されファイネの顔に拳が迫る

ファイネ「くっ！」

寸前で避け変わりに鞭が体に叩きつけられる、その腕を掴み脚で膝蹴りをいれ腕を折る、そして直ぐ様顔にフックを入れる

ファイネ「くっ!!」

峰「ついでに！」

そして倒れた体にスタンプを入れようとするが鞭でからめとられて体が中に浮く、それを認識したと同時に地面に叩きつけられる

峰「がっ!?!」

ファイネ「っ!」

そしてそこに鞭が叩きつけられる、それを寸前で避けファイネに突っ込む回し蹴りを放つが飛んで避けられるがそのまま回転しバツクブローをファイネの脚に当てバランスを崩させそのまま顔に蹴りを入れる、だがファイネもこちらに蹴りを入れてくる、そのまま二人が倒れてしまう

ファイネ「こいつ!」

ファイネは倒れた状態で鞭を振るい攻撃してきた

峰「ちい!」

峰はその倒れたままの状態を手を使い体を浮かせ回避する、そして追撃の鞭も飛んで避け手で着地しそして相手の懐に入り両足で蹴りを入れる

ファイネ「ぐう!」

苦し紛れに振るが避けられそのまま頭を掴み顔に膝蹴りを入れる

ファイネ「ぶう!」

ファイネは離れようとするが脚払いをされ腹に正拳を入れ、下がった頭にアツパー気味の肘打ち、そして拳を握りそのがら空きになった胸に叩き落とされ地面に叩きつけられる

ファイネ「があっ、くそおお」

峰「ぬうん!」

そしてファイネに向かって下段突きが飛んでくる、だがファイネは直前で避け苦し紛れにエネルギー球体をぶつけてきた、だが踏みとどまり相手を睨み付ける

峰「はあっはあ」

ファイネ「どいつも、こいつも、しつこいやっだ」

お互いにボロボロの状態だ、次に押され始めたらそのまま押し負ける、上げるのもつらい腕を上げ構える、お互いに沈黙が続く、そして峰が駆け出した

ファイネ（来た!）

ファイネは鞭をしならせ動きずらくする、峰はそれを弾きながら無

理矢理中に入り懐に一撃入れようとするが寸前で小さな障壁を張られてしまう

ファイネ「これで！」

そしてファイネは弾かれた鞭で峰の周りを囲んだ、そしてそれを一気に引くと峰に襲いかかる

ファイネ「終わり！」

峰「そうかな？」

峰はがら空きの脚にローを入れバランスを崩させる、そしてその障壁に脚をかけ相手の頭上に飛び後頭部に蹴りを入れた、鞭は空を切りファイネは何とか踏みとどまり振り返るが顔にフックを入れる

ファイネ「があ！」

峰（押せる！）

そのまま、顔にバックブローを入れ腹にミドルそして内蹴りに切り替える、ファイネも鞭で反撃しようとするが限界なのかそれしてしまう、前蹴りでぶっ飛ばしそのぶっ飛ばしたファイネに向かって走る

ファイネ「くそお！」

エネルギーの球体を飛ばす、が当たる直前で飛んだ

ファイネ「な!？」

そして脚を引き絞り飛び蹴りを入れる

ファイネ「ごっ!？」

その飛び蹴りが終わった状態から着地しその勢いを殺さずそのままジャンプする

峰「おらああああ!!！」

そして相手の顔に目掛けて全体重を乗せたフックを入れた、ファイネはそのまま吹っ飛ばされ地面に叩きつけられる、そして峰も受け身を取れず地面に叩きつけられた

強者

龍士「さて、もうちよいだな」

建物を飛び移りながら目的の場所を向かっていた、学院の場所がよくわからないためスマホで探しながら行っていたのだが電波が悪いのかずれたり消えたりしていたのだ

龍士「嫌な予感がするな、もしかしてあの塔の近く、とか言わないよな」

そうなっていたら色々面倒な事になりそうだ、どう考えても嫌な予感がする

龍士「急がねえと」

ビルを蹴り他のビルの中に入り中を走っていく、するとそこに何か飛んできた

龍士「!？」

急いでそれを避ける、その飛んできたものをみた時それは不思議な物だった、コンバットナイフのようなものだが刀身が赤く光っており熱を帯びているような感じがした、そしてその投げつけた相手を見た時不思議に思えた

龍士「なんじゃありや？」

全身がアーマーで覆われ所々に赤いラインが入っており腰や脚、腕などにナイフや銃のような物がついている、身長は龍士より少し大きくその顔には大きな一つ目が赤く光っていた

? 「……」

龍士「なんだ貴様?そこをどけ」

? 「……」

その場をピクリとも動かすこちらをずっと見ている、龍士は無視をされたので目が鋭くなり相手を睨み付ける

龍士「てめえ、聞いて……」

それを言おうとした時、目の前に拳が現れた

龍士「!？」

急いで体を後ろに曲げそれと同時に相手の後頭部に蹴りを放つ

龍士「シャアアアア!!」

足に硬い感触を覚えるが直ぐ様体制を建て直し相手を睨む、相手も軽く飛びリズムを取りながら構えていた

龍士（こいつ、今の蹴り防いでやがった）

龍士の蹴りが当たる直前に相手は後ろに手を置き頭に直接衝撃がこないようにしていた

龍士「できるな、こいつ」

今まではだいたい対応されずほぼ手加減の一撃でほぼ倒していた、そのためいつも戦うときはつまらなそうにしていたのに今は少し違う、胸が少し熱くなってくる

龍士「行くぞお!!」

その声とともにお互いに距離をつめ相手は高く飛び上がりそのまま膝蹴りを、龍士はそれを拳をぶつけた

???

相手はそのまま逆の脚で蹴りを放ち龍士はそれを腕で防ぐ、反撃に殴るが手でいなされ顔に拳が迫るそれを避け肘打ちを打つが止められ裏拳を放つも後ろに避けられそれと同時にミドルがきた、それを腕で防ぎ下がる

龍士（動き方からして、テコンドーか）

テコンドー、韓国から出てきた格闘技、足技が主軸の戦いかたで足技なのにコンボが早いため隙がすくない

龍士（それだけじゃないいくつか混じってんな、自分の我流がでてやがる）

拳を放ち避けられるがそこに膝蹴りを入れ防がれるがそこからハイキックに移る、相手はそれを潜り抜け後ろにまわられ後ろ蹴りを放たれるが龍士も後ろ蹴りで叩き落とし振り返り様にアッパーをするが、相手はそこに肘を置こうとした

龍士「!」

直ぐ様アッパーをやめ手を開きその肘を取ろうとする、相手も置くのをやめジャブを放ち龍士が避けたと同時に下がった

龍士（あぶねえ、あのまま行ったら指が潰れてたな）

肘の部分は硬い、そのため肘と拳がぶつかった場合だいたいは拳が潰れてしまうのだ

?「…」

次は相手から仕掛けてきた、何度か打ち合ったが龍士が押し返し壁際に追いたてる、だが相手は壁に向かいジャンプしその壁を利用してこちらに蹴りを放つ、するとその蹴りは脚のアーマーが展開しブースターが点火しかなりの速度で迫ってくる

龍士「ち！」

龍士はそれを受け流すが重いためか少しぐらついてしまう、相手はそのまま後ろ蹴りそれを避けるとブースターで加速した上段蹴りがくる、龍士はそれを後ろに下がると壁においやられてしまう、そこに回し後ろ蹴りが来た、それを寸前でさけその脚が壁にぶつかる後ろの壁が崩れる

龍士「な!？」

支えがなくなり重力に引かれゆっくりと後ろに倒れていく、そこにミドルが来るが脚を浮かせ腕で受け止め吹っ飛ばされるが脚で着地する、相手も接近してきて上段蹴りがくるがそれを屈んで避けそのまま腰を捻り後ろ回し蹴りを相手の後頭部に当てる

?「!」

相手は倒れそこに龍士のハンマーが来る、相手はそれを避け床に激突すると床にひびが入り崩れる

龍士「おらああ!!」

?「!？」

そのまま床に叩きつけられる、龍士はそしてそのままスタンプを放つがそれを避けられ同時にこちらに蹴りを入れ龍士はそれを手で止め蹴りで返す、それをジャンプして体を浮かせて避けると同時に倒れた状態でこちらに回し蹴りを放ってくる、それを手で防ぐと次は蹴り上げがきたので避ける、相手は蹴りの勢いを利用して立ち上がりこちらに構えをしながらこちらを見ていた

龍士（最悪だ、せつかくできるやつと会えたのに予定が詰まってる）

峰を見つける所か学校にもたどり着けていない、そしてこの変な
アーマースーツみたいなやつを着ているこいつ、アーマーもあるだろ
うがほとんどは本人の実力だ、身のこなしがきれいな上にその場の発
想も悪くない

龍士（あいても全然余裕だな多分俺と同じで様子見、少し楽しみた
いが、峰のこともあるから早くしねえと！）

?「……」

相手を威嚇しながら見ていると急に赤い目が右に動いた、そして相
手はゆつくりと左手を耳に当てる

龍士「？」

それを不思議に思い耳をすませる、すると何か話しているのか若干
声が聞こえた

龍士（微かに話し声が聞こえる、でもこの距離じゃわからないか）
会話を聞きたかったが無理と判断しやめ相手を睨み付ける

?『…了解』

龍士（喋ったな）

どうやら相手は変声しているようだ、流石にわからないけど人間の
はず、中身はあるかは別だがそして相手は構えを解き後ろを振り返り
走り出した

龍士「な!?!」

龍士は何故逃げたのか理由がわからず少し固まったが直ぐにその
疑問を捨て追いかける

龍士「てんめえ何処に行くきだこらあ!!」

相手も龍士も壁を使いながら飛び回りながら移動していく、これで
は逃げれないと判断したのか自分の腰に付いてある長方形の物体を
取り出しこちらに投げつけた

龍士「!?!」

龍士は嫌な予感がし直ぐに止まり後ろに逃げる、するとそれが強烈
な光を放ち視界が真っ白になる

龍士（閃光弾だあ!?!）

龍士は直ぐ様壁際に寄り添い視界が回復するまでまつと目の前に

は誰もおらずただ廃墟の壁が見えていただけだった

龍士「閃光弾なんか御大層なもの使いやがつて：仕方ないそれよりも早く学校に…」

「誰かー！いませんかー!？」

龍士「……は？」

学校にいかうとした途端女性の声が聞こえてきた、声を頼りに移動しているとそこには手足を縛られた女性がいる

龍士「人？何でこんなところに」

取り敢えず降りてその女性の拘束を解いてやる、女性の方は腕をさすりながらこちらをチラチラ見ていた

龍士「お前、こんな所で何してる」

女の子「じ、じつは変な人に拐われて気づいたらここに」

龍士「へんなやつ？」

女の子「何か、機械みたいな人で」

龍士（さっきのやつか、何が目的だ？俺の相手？いや、それならまだ戦っても良いはず、切り上げるのが速すぎるしそれに何故こいつを拘束しといて連れていかずもさずにここに放置している？）

何故自分の相手をしていたのか、何故ここにいる女性が拘束されていたのか、疑問は浮かぶが今は峰たちを連れて帰るのが先決だった

龍士「お前ら早く脱出しとけ、車拾えりや行けるだろ」

女の子「む、無理です、怖くて腰が抜けちゃって」

龍士「おい、こんな時に腰が抜けただ？冗談は笑えねえぞ？」

女の子「ほ、ほんとなんです！」

龍士は女性が嘘を付いていないことぐらいわかっていた、だが峰たちを救いたくそれが嘘だったらよかったと逃避をしていたのだ

龍士（どうする？こいつ担いでいくか？いや、ノイズの中心地でこいつ担ぎながらなんて正直きつい、それにさっきのやつおのせいかなり時間がたつちまつてる、騒ぎが終わって封鎖されたらこいつは良いが俺がサツに捕まっちゃう、それに峰の正確な位置も掴めてない）

龍士がここまで派手に動けるのはこの状況が警察の手に終えないからだ、だから好き勝手動けるし大胆なことだって出来る、もしこの

騒ぎが静まり警察がここを封鎖したら間違はなく捕まる、警察も避難民やら何やらで対応は終われるだろうがああ塔がどう考えても普通ではない、だからおそらく警察よりもたちの悪い奴らに捕まってしまいう可能性があるのだ

龍士（……仕方ねえ）

大きく息をして女性をみる、そして女性を担ぎビルから外に出る

女の子「きゃ!?!」

龍士は落ちないように両手で持ちながらシエルターまで移動していく、女性の方は移動手段に驚いているのだろうかあたふたとしている

女の子「あ、あの、これは」

龍士「黙ってる」

ドスの効いた声が聞こえてくる、それを聞いた女性は怯えて話しかけづらくなってしまふ

女の子「い、いえ、あの」

龍士「……」

それを最後に龍士は黙り女性もその威圧に押されたのか黙ってしまった、そしてここを離れる最後に後ろを振り返り学校があるであろう所を見た

龍士（峰、すまん）

そう言い残し龍士はその場を去っていった

龍士「……ここならいいか」

だいぶ遠くはなれた場所で女性を静かに下ろす

龍士「スマホは持ってる?」

女の子「は、はい」

龍士「んじや電話して迎えこつちに寄越させな」

女の子「わかりました」

女性はスマホを取り出しそれを耳に当て誰かと喋りだした、龍士はそれを見届けるとその場を離れる

女の子「あ！ちよつと！」

その言葉を見無視しそのまま去っていく、そして戻ろうとしていたがその経路には黒いスーツを来ている人が封鎖をしていた

龍士（やつぱり）

どうやらギリギリだったようだ、この様子だと他の場所も無理そう
だ

龍士（親父に迷惑をかける訳にはいかない、峰が言っていたシエルターの無事を祈りかないか）

龍士が峰よりも女性を優先していたのは少なくとも女性よりかは安心な場所にいるだろうとの判断だった、だがそのシエルターの真上でノイズが現れているのがかなり不安だが後は峰に何とかしてもらうしかない

龍士「…長居は無用だな」

龍士は私情を捨て相手に気づかれぬように組の集合場所に向かっていった、だがその様子ビルの遠くから誰かが見ていた

？「……」

機械で出来たスナイパーライフルを構えレンズ越しにその様子を見守っていた、そして耳に手を当て誰かと話した後ライフルをしまいビルの中に消えていった

最終決戦

峰「く、くそお、いてえよ」

峰は顔を上げ殴り飛ばしたフィーネを見る、フィーネの方はピクリとも動かずにただ倒れていた、それを見て安心した峰は顔を下ろす

峰「終わ、たか」

安堵し体から力が抜けていく、だがそれで安心したせいも身体中から痛みが走り出した、起き上がろうにも両腕の痛みが酷すぎて力が入らない、その痛みで意識を失いかけそうになるも何とか立ち上がる

峰「さて、響ちゃんたちは、何処だ？」

そう辺りを見回す、瓦礫とかした学校とそしてカデインゲルが見える、そして少し先に響が倒れているのを見つけた、峰はそこまで歩を進んでいく、そしてその目の前にクリスタルの鞭が地面に突き刺さる

峰「!？」

後ろから伸びているそれを見ながらゆっくりと後ろに辿っていく、そこには身体中が傷だらけのフィーネが立っていた

フィーネ「はあっはあ」

峰「な!？」

あれだけの攻撃を受けたのにまだ立っていた、ネフシユタンのお陰だろうが傷が少しずつ直っていく

フィーネ「くふふ、流石の私も、ちよつと死ぬかと思ったぞ？この私が、たかがノイズに触れられるアンノウンにここまでやられるとはな！」

それをいい終えるともう片方の鞭をしなければこちらに振り下ろす、流石の峰ももはや満足に動ける状態じゃなかった、当たると乾いた音が響く

峰「ぐあ!？」

フィーネ「まったく、ここまで追い込まれるのは正直計算外だった
が」

そして横に風払い吹き飛ばす、峰は受け身を取ることが出来ずうずくまってしまう

フィーネ「所詮私の敵ではなかったな」

峰「ちい！」

峰は立ち上がるとうとするが腕に力が入らない所か感覚が無くなってきた、血を流しすぎて五感がおかしくなり始めたようだ、フィーネの方は鞭を高々に上げこちらを向いている

フィーネ「さて、私も休みたいのでな、止めをさしてやる！」

峰（ちくしよおお、ここまで来て！）

そう心で叫びくる衝撃にそなえる、そんな時何かが聞こえる

フィーネ「何だ？歌？」

峰「これは、リディアン、校歌か？」

女性の綺麗な歌声がスピーカーから放たれ聞こえてくる、それを鼻で笑うフィーネはどうでもよさそうに峰に向き直る

フィーネ「ふん、やつらの歌など、一体何のやくに……ん？」

後ろから気配がし振り返ってみるとそこには響が胸を抑えて下を向きながら立っていた

響「聞こえる、皆の歌が」

フィーネ「今さらか、どうするのだ？シンフォギアすら纏っていないじゃないか」

響「皆の思いが、伝わってくる」

そしてゆつくりと顔を上げこちらを見る、前の時とは違う迷いのない目だ

フィーネ「ごちやごちやと」

もう聞きたくはなかったのか鞭を響に向けて振り下ろした、それが当たりそうになったとき響に当たってもいないのに何も無い空間で弾かれた

フィーネ「……なに？」

跳ね返されたのだ、何にも無い空間の筈なのに、もう一発入れても結果は同じだった

フィーネ「馬鹿な、こんなことが!？」

あり得る筈がない、心も砕き体もボロボロの筈なのに、何処からそんな力が沸き上がるのか不思議だ

響「頑張れる！」

その言葉とともに響の回りに光が現れそれが柱となり空に伸びていく、しかもそれだけじゃなく森やカディンゲル近く、そして響たちの直ぐ近くにも色が違うが光の柱が並び始めた

フィーネ（何かまずい！ここで仕留めておかなければ！）

鞭の先端にエネルギーの球体を作りそれを大きくしていく

峰「ここで動かなきゃ、いつやるんだ！」

無理矢理体を動かしフィーネに突進する、フィーネはそれを見ると別の鞭で吹き飛ばす

峰「ぐぬ!？」

フィーネ「これで！」

斎藤「おらあ！」

フィーネ「!？」

峰を倒した後に次は斎藤が入ってきた、不意打ちだったためか攻撃が入ってしまった

フィーネ「こんのお、邪魔だああああ!!！」

回し蹴りを入れ吹き飛ばす

フィーネ「これでえ!!！」

野々宮『うおおおお!!！』

フィーネ「な!？」

そしてようやくと攻撃しようとしたそのとき、野々宮がヘリでフィーネに体当たりを仕掛けた、多少押されるが手で止めそれを投げ飛ばす

野々宮『うわああああ!!！』

遠くまで飛んでいきそのまま地面に激突した、フィーネが溜めていた球体もさっきの体当たりで消えてしまっている

フィーネ「間に合わなかったか」

フィーネは舌打ちをし響の方を見る、そこには通常のシンフォギアとは違い所々に黄色がある白を中心としたギアを纏った響がいた

響「暖かい、皆も諦めていない、私もまだ頑張れる」

フィーネ「頑張れるだど？たった一人で何ができる」

奏「一人じゃないぜ！」

フィーネ「!?」

そう上から声がする、上の方を向くと同じく白を中心とした翼が大剣を掲げこちらに振り下ろした

翼「はあ！」

フィーネは横に飛びそれを回避する、だが避けたと言うのに衝撃波で飛びそうになる

フィーネ（さっきまでと威力が違う!?）

クリス「おらあああ!!」

それに驚いていたがクリスもフィーネに弾幕をはる、フィーネはそれを障壁で防いだ、だが障壁に響が入ってしまった、それを見たフィーネは後ろに下がる

フィーネ「ふぎけるなあ！こんな土壇場でこんなこと、認めるものか！」

クリス『ごちやごちやうるせえんだよ！』

フィーネ「念話だど!？」

頭の中に声が響いてくる、どうやら限定解除されたギアは億を越えるセイフティーがかかっておりそれがある程度解除されると念話などが出来るようになったようだ

翼『世界にはびこるノイズの原因、お前の仕業なのか!?!』

フィーネ「そうだ、本来ノイズと言うのは人類が相互理解を失ったとき、同じ人間を殺戮するために産み出された物だ」

響『人が、人を殺すために?』

フィーネ「バビロニアの宝物庫は開け放たれたままだ、そしてこのソロモンの杖があれば十年に一度の出現を必然に変えることができる!」

杖を使いノイズを召還する、これでノイズの異常な発生率にも納得がいく

クリス『また訳のわかんねえことを!』

奏『いつまでも下らないこといつてんじゃねえ!』

翼『いざ参る!』

響『行きますよ！了子さん！』

そう四人は光の翼を広げファイネを見下ろす、ファイネも迎え撃つ準備は出来ているようだ

ファイネ「こい！シンフォギア!!」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆ファイネ◆

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ファイネ「墜ちろお！」

ファイネはまず杖を上に掲げる、そして杖から何かが出てきてそれが街へと拡散していく、するとそれが地面に当たるとノイズとなりそのノイズが街を多い尽くした

クリス『今さらノイズ！』

奏『どうとでもなる！』

皆はそれぞれ散らばりノイズの対処に当たった、奏は嵐を起こし翼は大剣を振り下ろし響は直接殴りにいく、クリスは何か色鮮やかな機械を召還、それに乗り弾幕を張りながら倒していく

クリス『やっさいもっさい！』

響『すごい！乱れ撃ちだ！』

クリス『馬鹿！狙って撃ってんだよ！』

響『なら私が』

響は両方のハンマーパーツを起こしノイズに急降下しながらそれを連続スライドさせエネルギーを放出していく

響『乱れ撃ちだああああ!!!』

我流 連激衝波

翼『はあ！』

奏『いいねえ、暑いものが心から湧いてくる！』

奏の方は槍の先端にエネルギーを溜めそれを横には振ると、それが槍とかし拡散していきノイズに襲いかかる

METEOR∞SHOWER

地面に降り注ぎ受けたノイズは黒い霧とかす、ある程度倒すと四人は集まり背中を合わせ戦況を見回す、まだノイズはかなり残っている

がこのギアなら問題なく対処出来そうだ

クリス「どれだけ出ようが、今さらノイズ！」

奏「取り敢えずある程度片付けたら了子さんの所に！」

それを聞きフィーネがどうなっているかと思いい見るとそこには杖を自分に向けて突き刺しているフィーネがいた

翼「な、何を!？」

突き刺した杖を中心にフィーネの体からひびのような物が浮き出てくる、そして周りのノイズたちが一斉にフィーネに集まり始めた

響「の、ノイズが、了子さんに」

奏「不味いな」

億を越えるだろうノイズがフィーネと融合し形を作っていく、巨大な赤い竜のような姿になった

奏「なんだありや」

響「お、大きい」

カデインゲルほどではないがそれでもビル並みの大きさだ、その大きさに驚き固まっているとその竜の口に光が集まり始めた

翼「まずい！」

奏「避ける！」

その赤い竜から光がこちらに放たれる、全員は奏の言葉を聞いて避けることができたがその赤い光は向こうの地面に当たると巨大な火柱を上げた

響「ま、街が！」

フィーネ『逆さ鱗に触れたのだ、相応の覚悟は出来ておろうな！』
その赤い竜の中にはデュランダルを持っているフィーネがいた、そして竜から翼のようなものを広げその羽の先端からビームのような細い光が放たれそれが四人襲いかかる、それを避けるとクリスが弾幕をフィーネに放つがフィーネは中に閉じ籠り中まで攻撃が届かない、そしてお返しとばかり羽からビームを放たれる

クリス「ちい！」

クリスはそれを避けるがそれは何処までも追ってくる、そしてそれがクリスに当たりそうになったとき、横から槍の嵐がそれを叩き落と

す

STAR DUST∞FOTON

奏「大丈夫か？」

クリス「ああ」

奏がフォローを入れた後に翼がフィーネに向かって大剣を振り下ろす

蒼ノ一閃

それが竜に当たりその周辺が煙で覆われるが、煙が晴れたそこには傷が治りかけの赤い鱗だった、そこに響は懐に入りハンマーパーツをスライドさせる

響「どりやああああ!!」

竜の腹に直撃するがまた治ってしまう、そしてその響の周辺に光が迫り響はそこから離脱する、そして竜からフィーネの笑いが聞こえてくる

フィーネ『所詮は欠片から作られた玩具、この完全聖異物に対抗出来るだけでも?』

それを聞いた響を除いた三人はお互いに顔を見合わせる

クリス「聞いたか今の」

翼「ああ、だがそれをやるには」

そして三人が響の方に向く

奏「響、お前の力がある」

響「え?私?」

すると四人は集まりだし何か話し合っている、フィーネは竜の目を通してそれを不思議に思っていた

フィーネ『何をやっている?』

響「……わかりました、やってみます!」

話し終えたのかこちらに振り返る、そしてまた響を除いた三人がフィーネにむかっていく

翼「露払いは私たちが!」

奏「ああ!」

クリス「任せろ!」

まず翼が前に出て大剣を振るう

翼「はあ！」

蒼ノ一閃 滅破

それが竜に直撃し亀裂が入る、そこに奏が竜巻を纏いながら突っ込む

奏「おらああああ!!」

M E T H O O S T R I K E

フィーネはそれをビームで撃退しようとするがクリスに叩き落とされ奏の攻撃が直撃しぽつかりと穴が空く、そしてその穴からクリスが中に入ってきた

フィーネ「ちい！」

クリス「おらああああ!!」

クリスは前砲を展開しフィーネに弾幕を浴びせる、フィーネはそれを障壁で防ぐがその煙の中から翼が現れた

フィーネ「なに!？」

翼「はあ！」

フィーネ「なめるな！」

大剣をふるい斬撃を放つがそれをフィーネが障壁をはり防ぐ、だが煙が完全に晴れるとそこには奏が竜巻を槍に纏わせていた

フィーネ「な!？」

奏「横ががら空きだぜ！」

そのまま突き刺すように放ちそれがフィーネに直撃する、するとその煙の中からデュランダルが飛び出した

奏「出たぞお！」

翼「そいつが切り札だ！」

デュランダルが徐々に落ちていく所をクリスが銃で打ち当てながら響の所まで持つていく、そして響がそれを掴むと響に変化が起こり始める

響「うう、ううウウ!!」

響の体がだんだん黒く染まりかけ始めた、響の方も何とか維持をしようとするが今にも飲み込まれそうな雰囲気だ

響（だ、だめ、だ、の、飲み、込まれ、る）

響がデュランダルと葛藤している最中瓦礫から未来たちが現れた
弦十郎「踏ん張り所だろうが！」

「これからの自分を！」

「自分を強くもって！」

ナニか、キコエル？

意識が遠くなり始めだんだん黒くなっていく、今にも飲み込まれそうだ、フィーネは奏たちの狙いに気づいたのか妨害しようとするがそれを必死に三人で止めている

フィーネ「じゃまだ！」

クリス「くそおまだか！」

翼「ここを通すわけには！」

峰「頑張るだ！響ちゃんなら出来る！」

斎藤「そうだ！人一番優しい君なら！」

響「ああ、アアアア！」

ナニテ、イッテルンダロウ？

その言葉を最後に保っていた意識が飲み込まれてしまった

響「ガアアアアアア!!!」

未来「響いいい!!」

響「！」

その声を聞き一瞬意識が戻る、すると何故だろうか同時にあることを思い出した

？『泣くなよ響、あんまり見たくないよそんな顔』

響（…そうだ、この力は、私だけの力じゃない！）

皆がいたから今の自分がある、皆がいたから笑って楽しかった、皆の力があつたから今の自分があるんだ！

響（こんな、こんな衝動に吞まれてなるものかああああ!!）

奏「よし！」

クリス「おせえよばか」

翼「よくやったな」

響「すいません皆さん、けどもう大丈夫です！」

四人が集まり周りにオーラののような物が生まれる、そのおかげで
フィーネの攻撃はこちらにはこないようだ

フィーネ「ば、馬鹿な、その力は何を束ねた!？」

響「皆の思いを乗せた」

剣を高く上げるとそこから真つ直ぐ光の柱が現れる、そしてそれを
竜に向かって振り下ろした

響「シンフォギアだああああ!!!」

S y n c h r o g a z e r

フィーネ「ふ、ふぎけるな、こんな所で終わって、終わってなるものかああああ!!」

竜が真つ二つにされようやつと終わりが近いようだ

峰「や、やった」

だがそう思ったのもつかの間、その竜が爆発しその爆風がこちらに
襲いかかる

峰「やべえ!？」

直ぐ様隣にいた未来を抱えその場で縮こまると体が浮いた、方向も
わからずに何処かに吹っ飛ばされそして叩きつけられた

峰（あ、あれ？何で俺倒れてんだ?）

もはや体の何処も動く気配がない、何も聞こえず何も感じない

峰（そうか確かおれ、結構無理してたっけ）

ただえさえフィーネとの激戦で酷似させてしまったので当然であ
ろう、だが目だけは見えておりその目の先には未来が涙目でこちらを
見ている

峰（ああ、未来ちゃん、また、泣かせちゃ、た）

あの時の事を思い出しながら心配させまいと手を未来の額におき
笑みを作る、それが限界だったのだろうかそこで意識が途絶えた

嵐の後

夢を見ていた、それが何かは思い出せないが自分は倒れていて向こうでは誰かが話をしていて、だが思い出せず途切れ途切れになってしまっている

？『そ……か……も……てき……だ』

？『よ……んで？』

？『かま……い』

そ話し終えたのかその二人かこちらに来た

峰『あな、たは、誰？』

？『……』

こちらに何か話しかけているがそれは聞き取れなかった、そして目を閉じ意識を失った

その夢が覚め目を開くとまず写ったのは真っ白な天井だった

峰「ん、んん？」

上だけ起こし周りを見る、隣には点滴が置かれてその近くには心音を図っている機械が置かれている、どうやら病院のようだ

峰「あれから、どうなった？」

齋藤「気づきました？」

不意に声をかけられその声の主の方に振り向く、そこには包帯でぐるぐる巻きにされていた齋藤がベットの上で寝ている状態で見えていた

峰「齋藤？」

齋藤「そうですよ」

峰「確か俺は、あの後どうなったんだ？」

齋藤「あの後色々あったらしいですけど、響ちゃんたちが地球に落

下しそうになった月の破片を破壊、フイーネも消えたらしく皆無事だそうです」

峰「月の破片が落下!? 大変だったな」

「どうやら自分が寝ている間に全部片付いたようだ、そしてフイーネが消えたと言うことを聞き少し残念に思う」

峰（最後まで、可愛そうな人だったな）

憎しみに囚われ真相も分からずに消えてしまった、それがなかったら優しい人だったろうに、そう思いながら外を見てみると街の方はひどい有り様で建物は崩れ見る影もなかった

峰「あくあ、無茶苦茶だよこれ」

齋藤「まあ皆必死でしたから、仕方ないんじゃないでしょ」

峰「俺どれくらい寝てたの？」

齋藤「いや、それが俺にもわかんなくて、俺も今起きたんです」

峰「…というか少し気になったんだけどそこで寝てるのって」

峰の指を指した所にいたのは、齋藤のベットの近くで座っていたであろうクリスがベットに寄りかかり寝ている姿だった

齋藤「クリスですよ、今寝てます」

峰「クリスもずいぶん馴染んだな」

齋藤「ああ、ホントに」

そう言い軽く彼女の頭を齋藤が撫でる、その光景を見て笑みを溢していたが急に部屋のドアが開き誰が入ってきた

峰「あ」

未来「あ」

入ってきたのは未来だった、峰の顔を見ると驚いていたがその顔が急に不満顔になりこちらに近づいてきた

峰「や、やあ未来ちゃん、どうしたの？」

未来「……」

未来は無言のまま峰まで近づきその体に抱きついた

峰「ど、どうしたの未来ちゃん？」

未来「黙ってください」

峰「い、いやあの」

未来「黙ってください」

峰「は、はい」

謎の威圧をかけられる峰、未来の方は顔を腹に埋め沈黙が訪れる

未来「…心配でした」

峰「う、うん」

未来「あの時ベツト覗いたらいなくて、そしたら何か戦ってるし、あんな状態で戦うなんて馬鹿じゃないですか？」

峰「嫌でも結果的にはよくってててて!?!」

その言葉を聞いた未来は我慢出来なかったのか腕に力をいれ始めた、そして峰の方は未来の頭を撫でてやり落ち着かせる

峰「…ごめんよ、心配かけさせて」

未来「許しません、こんなに心配させて」

峰「えっと、どうしたら許してくれる?」

未来「…デート」

峰「ん?」

未来「デートしたら、許します」

峰「え、でもデートって好きな人と行くものっててて!?!」

いい終える前に腕に力を込め言わせまいとする、すると観念したのか未来の頭を撫でる

峰「はいはい」

齋藤「ははは」

その様子を見ていた齋藤はクリスの方を見た、まだ気づいていないのかまだ寝ている

齋藤（この様子だと、心配かけさせちゃったな）

綺麗な寝顔を見ると何故か撫でたくなってきた

齋藤（ありがとな、クリス）

クリス「ん」

齋藤「…可愛いな」

その頃野々宮

奏『この馬鹿やろおおお!!』

野々宮『え!?なんですか!?痛い痛い!』

奏『馬鹿な事しやがって、死んだらどうする気だったんだ!?』

野々宮『いいじゃないですか、全治1ヶ月ですし』

奏『ピキ』

野々宮『な、何ですかその目はて苦しいです!?病人ですよ俺!』

奏『こんの馬鹿!?私の気持ちも知らずに!』

野々宮『あの、もしかして泣いてます?』

奏『泣いてない』

野々宮『いや、でも』

奏『泣いてない!』

翼「大丈夫そうだな」

響「そうですね」

弦十郎「全く、後処理があるのだからあまり動いてはいけないのに」

緒川「いいじゃないですか、たまにわがまま聞いてもバチは当たりに
ませんよ」

弦十郎「まあ仕方ないな」

残った疑問

――宮本組事務所――

勝又「……」

宮本「……」

周りには机がありその上には色々な資料や機械が置かれている、そして取り分け大きい長いテーブルには何枚か紙が置いてありそれを見た二人はため息を吐く

勝又「親父、これは」

宮本「ああ」

その紙の中には地図があり街の建物などに×という印が付いていた

宮本「……やられたな」

――古東会本部 会議室――

青鬼「あんのくそ野郎共お!!」

高そうな絨毯にテーブル、部屋にあるものはどれも一級品だ、その椅子を荒々しく蹴飛ばす男がいる

大政「落ち着け兄弟」

――古東会直系 篠座一家総長――

――大政 一晃――

それをなだめる髪を上げている強面の男は大政組長、商談及び暴力

を両立させ今の地位についた、冷静な判断力を持ち手を出すときは静かに始末する切れ者である

青鬼「落ち着いてられるか！サツの連中ふざけやがってえ」

――古東会直系 二代目白銅組組長――

――青木 大河――

それに逆ギレする顔が傷だらけの男、実力派白銅組の組長に抜擢され主に暴力が担当、ご自慢の喧嘩術で恐れられた存在だ

佐伯「やられた、どうするよ黒澤の兄貴」

――古東会直系 佐伯組組長――

――佐伯 翔平――

一方それを静観している顔が整っていてこの中で若い佐伯が隣に声をかける、彼は腕もいいが頭脳戦が主体で彼が商談に目を付けたら誰にも取る事は出来ない、そして佐伯の隣には髪を刈り上げ眼鏡をかけているまた強面の男がいる

黒澤「まさか俺らが避難している時に取られるとはな、あの塔周辺のシマを持つていかれた」

――古東会直系 黒澤組組長――

――黒澤 骸――

そう顔をしかめ目の前のテーブルを睨み付ける、古東会の中で古い組で他の組と比べると人数が少ないがほぼ精鋭の強者揃いだ、その男の声と共に周りの人間からも怒りが沸々と感じる

虎岩「ごたごた言っても仕方ねえよ、持つていかれたもんはよ」

――古東会直系 浅倉連合会長――

――虎岩 剛――

金髪の大男がそう治める、こっちは佐伯の逆で力がたけており元々は一つの組だったが古東会の誘いを受け入る事にした

大政「あの妙な塔の周辺のシマは持つていかれた、ただその場になかった資料は回収されずにすんだしそこは手はついていないが手離すのは考えていた方がいいかもな」

青鬼「幸いなのが塔の周辺で取られる範囲が小さかったのがよかった」

取られたのはあの塔の周辺だけ、しかも取られたのが警察なんだが少し手際がよすぎる

大政「上の命令、か？」

青木「だろうな」

椅子を戻したため息を吐く、警察沙汰になるのはいつもの事だがあの塔の事を考えると警察が片付けられる案件ではない、となると極秘にお偉い方が片付けたと考えるのが普通だ、そうなつてくるとあまり関わり合いたくない

佐伯「まあ裏の仕事にはあまり手がつけられてないからいいが」

青木「だがあそこら辺もうボロボロだ、管理が難しい所は切るしかねえぞ」

あの戦いのせいで街はほぼ壊滅、そのためいくつか切り捨てなければならぬ所がある、幸いなのが二課が周りがある程度固めていたため被害はあまりないがそれでもシマが取られ壊されているので商売上がつたりだ

虎岩「そもそもあの塔は何なんだよ、急に出てきやがったぞ」

黒澤「それについてはあまり探るな、絶対ろくな目に遭わないぞ」

虎岩「……だろうな」

黒澤「取り敢えず全員現状維持だな、失ったシマは取り戻していきやいいがしばらくは様子見しながら商売しなきやな」

その場にいる全員が仕方なく頷き取り敢えず今後どうするのかを話し合う事にした

一方龍士の方は雑務処理に終わっていた、組の方針で切る所としな
い所を維持そして他の処理も行い電話などで指示を出している所だ

龍士「ああ俺だ、頼んでいた件どうなってる？」

山下「そうだ、復興作業で手をつけていいのはうちのシマだけだ、他
の組の場所には手をつけるなよ」

龍士「そこは無視していい、競売物件は取り敢えず安い奴から買え、
俺も事務処理終わったらシマ内で引越す奴の対応しなきゃならん、
じゃあな」

ようやくと一段落終わり電話を切りタバコに火をつけ大きく背を
伸ばしたため息を吐きながら窓を見る、お天道様は相変わらず元気そう
だ

龍士「たく、多いな」

山下「何か街の方ですんごい音してましたもんね、んでちよつと
帰ってきたら」

龍士「街はボロボロ、道路も配管、しかも電気までほとんどやられ
てやがった、家を失った奴やここに住むのが嫌になった奴は他の場所
に移ったりするし、俺らも維持費のためにいくつか切らなきゃならな
い所まででてきたし、まったく最悪だぜ」

山下「あの塔が出てきたせいですよね？」

龍士「他に理由ねえだろ、たく親父は会議でカシラは現指揮で忙し
い、何処のどいつだが知らねえが面倒なこと起こしやがって」

山下「……そう言えば峰さんはどうなったんです？」

龍士「あんのやろ大丈夫だとか抜かしてやがった癖に重症で病院で
寝込んでやがった」

山下「ええ!?大丈夫だったんですか？」

龍士「全治二ヶ月だそうだ、まったく」

実はあの後組の方で待機していたら峰から連絡が合ったのだ、そし

て急いで病院に行くところにはぐるぐる巻きにされている峰がいた、龍士は怒りのあまり殴り飛ばしそうになったが怪我人なので説教だけにとどめたのだ

山下「まあいいじゃないですか、無事だったんですし」

龍士「よかねえよ、そうだ、俺が頼んどいたやつどうなってた?」

案件と言うのは龍士が叩きのめしたあの博士の事だ、龍士が確認したかったのだが忙しく山下に頼んでいたのだ

山下「実は、その件なんです」

龍士「どうした?」

山下「兄貴の言う通りその博士ばいやつ捕まえに雑居ビルに向かったんですが、その外国人……死んでました」

龍士「なに!?!」

山下「いえ、それがあつたのが炭ばかりでして、あいつかどうかの確認は」

となるとノイズの仕業だろうか、だがあの場にはノイズはいなかった

龍士(いや待て、確かノイズが街中で埋め尽くされたって聞いたな)聞きたくもない話だ、ノイズが街を覆っている所なんて想像もしたくなかった

龍士「……他のやつらもいただろ、そいつらは」

山下「死体も無し、証拠になる物も一切ありませんでした、そいつらの事について探してたんですがその一週間後、港からその死体が上がったそうです」

龍士「まじかよ……その死体は?」

山下「二課が極秘で片付けたので手がだせませんでした、速急にそれから手を引き関係した資料も消したようです」

龍士「良い判断だ、流石は親父だ」

どうやらかなり危ない案件に首を突っ込んでいたらしい、親父の判断に助けられたようだ

龍士(いいように使われて捨てられたって所か、にしても二課の手回しが早いな)

だがこれでわかった、博士は殺されたのだノイズのやり方に見せかけて始末したと考えられるだろう、そんな事をしそうなやつは一人しかない

龍士「……あの野郎の仕業だな、結局何者かのかもわからなかった）不気味な赤い一つ目が脳裏を過る、いつかまた会うかもしれない

龍士「警戒すべきやつは他にもいる、か」

山下「どうされたんです？」

龍士「いや何も」

龍士「……これは俺が片付けた方がいいな」

龍士「…取り敢えず組の方針通りに進めるぞ」

灰皿に灰を落としながら吸い続ける

山下「方針？」

龍士「今本家で予定してるやつは、この街再開発計画だ」

山下「まあこうなっちゃ作り直すしかないですしね」

あの塔の周辺の土地が手を出せないため一つ無くなるが他の街の土地は手をつけられる

龍士「手をつけられる街が三つ、だからここら辺の土地を買う必要があるんだが今はよしといた方がいいな」

山下「え？何ですか？」

それを聞いた龍士はため息をつき呆れながら山下を見る

龍士「あのな、ノイズばかり出てくるような場所に住みたがる奴がいるか？」

山下「あ」

どれだけ安くしようがどれだけいいところだろうが化け物が出るような所じゃだれも住みたがる訳がない、そのため日を置く必要があるのだ

龍士「いくら土地買い漁って集めても売る相手がいなきゃ売りもんにならねえ」

山下「でも周りの組は地上げしてますけど、何ですか？」

龍士「……家の直系の跡目争いだよ」

タバコを口にくわえながら目を細め目の前のテーブルを見ている

龍土「古東会の会長はもういい年だ、それに本家若頭がまだ決まっていけない状態だし本家にでかいシノギを持つてくれば若頭候補に上がる、それが今予定されている再開発だ…もしだ、もしこのままノイズの襲撃が少なくなりこちら辺に人が集まり始めたら、再開発成功させりや確実だな」

直系組長である以上誰だって本家会長の道に進みたいのは当然である、そのため五人全員譲るきもないのだ

山下「なるほど、やっぱり譲りたくないんですね」

龍土「そりや本家の若頭候補だぞ、ヤクザなら食いついて当然だろ」
タバコを口から離し肺から煙を吐き出す、そして指で掴んでいるタバコをじつと見つめる

龍土「…親父も、黒澤の叔父貴もそれらを欲しがっている、親の欲しいものを差し出す、それが俺ら子の仕事だ」

そして灰皿に押し潰し火を消しその灰皿をじつと見つめる

龍土「多分いざこざは起きるはずだ、気を付けろよ」

山下「は、はい！」

後日談

未来「だ、大丈夫かな、変じゃないかな?」

近くにある噴水に溜まった水を覗き込み身だしなみが変わりやないかチェックする、もう4回ぐらいやつてるが何やら落ち着かない様子、それも半場怒り任せでデートの約束を取り付けてしまったからだ

未来（だ、大丈夫、落ち着いて対処さえすればいいだけの話!）

そう心のなかで謎の決意を表す未来、だがそれも自分の視界に峰が映った瞬間崩れ去った

峰「よ、未来ちゃん」

未来「は、はい!今回はお天気もよく!ぜ、ぜっこうのの!」

峰「えつと落ち着いて:」

自分でも何を言っているのかわからないであろう未来を落ち着かせる、後が不安しかない

峰「ほらリラックスリラックス」

未来「す、すみません」

さつきまでの行動を恥じて可愛い帽子で顔を隠す未来、そしてチラツと峰を見ると手を口に当て苦笑していた

未来「や、やっぱり変ですか?」

峰「いや違うよ、嬉しいんだ」

未来「え?」

峰「こんな張り切って来てくれて、嬉しいんだ」

そして目線を合わせこちら未来を覗き込む

峰「ありがとう、未来ちゃん」

未来「く／＼／＼」

帽子で顔を隠し峰に見られないようにする未来、少ししか見えなかったが顔が今も真っ赤だろう

峰「あ、照れてる?」

未来「へ、変な事言うからですよ!」

そう背を向ける、そして峰はその隣にたち未来の手を取る

未来「はひっ!」

自然な動作で少し呆けていたが自分の手を見た瞬間我に帰りまた顔を赤く染める、対する峰はニコニコしながら未来を見ていた

峰「んじゃ、行こうか」

未来「は、はい！」

手を繋がれたのが嬉しいのか一緒に嬉しそうに歩き出す二人、さつきまでの緊張は何処に言ったのやら

峰「何処にいこうか？」

未来「それじゃまずは映画はどうですか？」

峰「お、いいねそれじゃ早速行こうか」

早速映画を見るために、映画館に入ることにしたなった

未来「うう〜」

峰「まだ泣いてる…」

目元にハンカチを押し当てながら涙を流す未来、それを峰は少し笑いながら未来を見ていた

未来「だつて〜」

峰「ほら何か食べよう？何がいい？」

未来の気をまぎらわせるために飲食店エリアに来たのだ、そこにはステーキやらうどんやら色々なコーナーがある、その中にある一つに未来は指を指す

未来「ん」

峰「スマイルバーガーね、いいよ」

レジに行き何を食べたいのかを聞くと注文ししばらく待つ、そして品を受け取り席に座り食べ初めた

未来「あの映画、悲しかったな」

峰「そうだね、結局最後は殺しあった」

物語は大正時代、復讐に駆られた男と警察官であった女性を中心に起こった話だ、男も警察官であったが政治の道具にされ仲間を殺される、そして幹部と少しの隊士だけが生き残ってしまいその復讐を墓前

で誓う、そして警察に潜り込み機会を伺っていた時にある女性と知り合う、彼女はその男の事を気にかけるが無視し続ける、だが人質救出作戦の時に男がその女性が撃たれそうになった所を庇い重症を折う、男は気にするなど言ったが女性はそれを無視して彼の看病をしていきうちに二人の仲が少しづつ良くなって行く、だがそれも終わり男が復讐のために動き出した、そしてそれを知った女性はそれを止めようと奮闘するが結局止められず男は復讐を失敗し罰として首を跳ねられた、そしてその三日後彼女にある手紙が届く

『これを読んでいると言うことは俺は死んだのだろう、結局復讐は忘れることは出来なかった、出来るわけがなかった、あの優しさで包まれていたあの場所を壊したあいつだけは許せなかったのだ、許すことなど出来なかった、何も生まれないのは承知の上だ、お前には迷惑を掛けてしまった、謝礼として俺の知り合いに金はすべて預けてある、好きに使ってほしい、お前と会えてよかったと思う、そしてどうかその優しさだけは捨てず俺のようにはならないでくれ』

さよなら比奈、初恋だったよ』

そう男は書き残した、それを呼んだ女性は涙を流しながら馬鹿と口から溢しながら彼の墓前に倒れこむように座り物語は終わってしまった

未来「うう〜可愛そうに」

そうハンバーガーを口にはふりながら喋り未来、峰はそれとは別の事を考えていた

峰（あいつ、あれからどうしてるのかな？）

あいつとは龍士の事で前病院で説教を喰らって以降姿が何処にも見えない、最後に忙しくなるからあまり顔は出せないと言ってからまるつきり見ていない、そんな事を考えているとまた未来が涙を溢し初めた

未来「思い出したら、涙が」

峰「ああもうほら泣かないで」

よほど心に来たのかまた泣き出す未来、自分のハンカチを押し当て涙を堪えるとポテトを食べお互いに完食する

峰「ふいぐごつそさん」

未来「ご馳走さまです」

峰「お腹膨れたから休めたいし、何かアクセサリーとか見とく？」

未来「あ、良いと思います」

二人は立ち上がり早速アクセサリーコーナーに行く、そこには宝石が埋め込まれているネックレスやピアスなどがある、それを見た未来はケースを覗き込み目を光らせる

未来「綺麗……」

峰「何かいいの合ったら言つてね」

未来「はい」

それを聞くと他の場所にも行きだし同じようにケースを覗き込む、装飾品の細かな細工がよく見える

峰（こうしてみると普通の女の子だな）

二課の民間協力者と言う立ち位置で少し特殊だが今は純粹に楽しんでるだけの女の子だ

峰（普通ってなんだろうな）

龍士と自分の生活を比べてみると明らかに違う、あつちにとっては暴力沙汰になるのは普通だがこちらは違う、真つ当な仕事をするのは自分達は普通だがあつちは違う、普通と言う基準がよくわからなくなってきた

峰「さて、何か良いのあつた？」

そう声を掛け未来の手元を覗き込もうとする、だがすごいスピードでこちらを向くと同時に手元を後ろに隠した

未来「は！え、えつと、まだです！」

峰「え？いや今手に」

未来「持つてません！」

峰「いやでも見え」

未来「き、きつと蜃気楼です！」

峰「は、はあ」

未来「も、もう！と、取り敢えず出てって下さい！」

峰「え!?!ちよつと!?!」

体を逆に向けられそのまま背中を押されて出ていかされた、峰は何が何やらわからないまま呆けるしかかった

峰「……何か怒らせる事したかな？」

その後未来からのお許しがあり中に入れた、そして自分は幾つか購入し店を出た、空を見てみると日が堕ち初め周りが夕暮れに照らされ初める、だが未来はそれに負けないくらい顔を染めていた

峰「大丈夫？あれから顔赤いけど」

未来「だ、大丈夫です」

未来はそう言っているが全然そんな様子が伺えないがそれもそのはず、内緒で買った物をサプライズに渡すのが今なのだから、そして未来の方は心の中で葛藤していた

未来（おおおお落ち着くのよ私！大丈夫大丈夫！雀の涙位の勇気を振り絞って渡せば良いだけの話、落ち着くのよ、落ち着いて、よし！）

未来「あ、ああああの、峰さん！」

峰「？」

キョトンとした表情で未来を見る峰、そしてここで未来が一言

未来「いい天気ですね！」

峰「え？まあ、夕陽は綺麗だけど」

未来（違ううううう！何を言っているのよ私！）

未来「あ、あの！峰さん！」

峰「うん、なあに？」

そう笑顔で答える峰、その笑顔に負けじと答えようとした未来の一言

未来「つ、次もデートしていいですか!？」

峰「あ、ああうん、いいけど」

訂正、負けてしまった

未来（違ううううう！ていうか今のは反則！勝てるわけないじゃん!? 今度こそ!）

未来「峰さん！」

峰「う、うん」

次は何が来るのだろうかとうと半場聞きながら未来を見つめる、また負けそうになるが目を下に向け我慢し目の前に目的の物を出す

未来「これ！」

峰は前に出されたそれを受け取る、綺麗に包まれた箱だ

峰「中身見ていい？」

未来「は、はい！」

峰は封を切り箱を開け中身を見るとそこには銀色のブレスレットがあつた

峰「これは…」

未来「えつとその、いつもお世話になつていたのでそのお礼に」

自分の人差し指を合わせながら目を下に向ける未来、そして何も返事がないのが心配になつたのか目だけを上に向ける

未来「迷惑、でしたか？」

峰「いや、全然」

そう笑みを浮かべて答える峰、そして未来の方にゆっくりと視線を合わせる

峰「んじや俺からもかな？」

未来「え？」

それを聞いた未来は固まっていると首に何かを掛けられる、そこには可愛らしいピンクダイヤのネックレスがあつた

未来「こ、これは」

峰「さっきの店で買ってきたやつ、うんやっぱり女性には宝石が一番」

そして最後に目線を合わせ一言

峰「綺麗だよ、未来ちゃん」

それを聞いた瞬間未来の心臓を貫きそのまま脳を麻痺させた

未来「……」

峰「？未来ちゃん？」

未来 ボツ

よほど嬉しいのもあるだろうがこんな真つ正面で言われたのがかなり恥ずかしいのだろう、脳の処理が追いつかずその場で気を失った峰「み、未来ちゃん!? ちよ、ちよっと大丈夫!? しっかりして! 未来ちゃん!?!」

峰は肩を揺らしながら未来の心配をしていた、未来が正気を取り戻すのは夜になってからだがそのまま寮まで送られてまた正気を失うのはまた別のお話

奏「はい、あーん」

野々宮「だから、もう大丈夫ですって」

奏「何だよ今さら、恥ずかしがることじゃないだろう?」

一方野々宮はまだ入院中だった、峰は体の酷使、斎藤は体の切り傷だがそこまでひどくはなかったためすぐに回復し峰もあれだけの重症をおいながら何故か斎藤の後に回復した、だが野々宮だけはまだ治らず病院暮らしが続いている

野々宮「いや、有名なポーカルユニットにあーんされんなんて、見られたら終わりですよ?」

奏「こつちの方が都合がいい、悪い虫も付かなくなるしな」

野々宮「虫? 病院に虫なんかいませんよ?」

何を言っているんだと感じを出す野々宮、それを見た奏はイラツとし彼の頬を引っ張る

奏「……」

野々宮「いひやいいひやい!?!」

奏「ふん」

気がすんだのか手を離し頬を膨らまし顔を背けた、野々宮は赤くなった頬を抑え涙目になっている

野々宮「もう、何で怒ってるんですか？」

奏「お前が元気ならデート行けたのに、余計な事するから」

奏が少し不機嫌なのは彼と遊びに行けないからだ、いつもなら暇な時間遊んでいたが病院ではすることがないのだ

奏「まったくこんなデカイ怪我なんかしてさ、無茶するよホントに」

野々宮「けどよかったでしょ？」

奏の口が隠る、無いとは言いきれなかった、だが

奏「あんまり、無茶はしないで」

野々宮「え？」

そう野々宮に寄りかかる奏、野々宮は彼女の背中に手を置いて少し呆けていた

奏「あの時怖かったんだ、血だらけのお前が担ぎこまれた時、ホントに死んじゃうんじゃないかって、怖かったんだ、お前がいなくなったら、私」

野々宮「……」

どうやら知らぬうちに心配を掛けてしまっていたようだ、野々宮は安心させるために背中に手を回す

野々宮「大丈夫ですよ、自分は死にません」

奏が顔を上げ不安げな目で野々宮を見る、野々宮は彼女の頭に手を置き優しく撫でる

奏「ほんと？」

普段の彼女からは考えられない震えた声だった、野々宮はそれにゆっくりと頷く、それを見た奏は野々宮の顔を両手で優しく包み込み顔を近づけていった、野々宮はそれを見ると驚いたがそれに応じ目を閉じる、そして二人の唇が触れ合う

翼「野々宮私だ、邪魔をするぞ」

はずせず野々宮はそれを聞いた瞬間顔を戻し翼を迎えた、奏はその状態で固まっている

翼「何だ、奏も来てたのか、言ってくれば一緒に行ったのに」
野々宮「ま、まあ大分前にここに来たんですよ」

翼「そうなのか、それで奏は今何をしておるのだ？さつきから動いてないが」

そう奏に投げ掛ける翼、すると奏の体がプルプルと震えだし初める、野々宮は顔を窓に背け見えない振りをし逃避を初める

奏「うがあああああ!!?!」

翼「ど、どうしたのだ奏!?!」

奏「あと、あともうちよいだったのにいい!!よくもおお!!」

翼「うわ、奏、やめ、ちよ!?!」

あれが出来なかったのがよほど悔しかったのか翼をポカポカ殴り初めた奏、翼ひ訳がわからずそれを防ぎ野々宮はそれを苦笑いしながらそれを見ていた、そして後に二人とも緒川に怒られるのは別の話だ

斎藤「おっしや！クリア！」

一方斎藤の方はゲームセンターに来てクリスと一緒に遊んでいた、今夜だがそんなの気にせず前と同じものをやっているようだ

斎藤「うまくなったなクリス」

クリス「へへん、どうよ」

そう胸を張りどや顔をするクリス、斎藤はそれを見ると笑いそうになるが堪える

クリス「にしてもこうゲームばつかしてると少し小腹が空いてきたな、何か食べるか」

斎藤「だな」

そう言い二人はゲームセンターを後にする、クリスマスもそうだが斎藤の方も中々気合いの入った服装だった

斎藤「どう？もう二課の生活には慣れた？」

クリスマス「そうだな、まだまだ慣れそうにねえ、こうむず痒いって言うかなんと言うか」

フィーネの所とは違い二課は彼女を優しく迎えた、それにあまり馴染めず少し距離を置いていたクリスマスなのが斎藤が付き添い他の隊員と交流していたのだ

クリスマス「まあありがたいけどよ、そんなガキじゃねえんだし色々してくれなくても」

斎藤「俺はするね、だってそうしなきゃ仲良くなるの時間かかるだろう？」

クリスマス「ぐむ」

確かに、クリスマスの場合正直じゃないためどうしても距離が空いてしまうのだ、それを知っているので斎藤が付き添っている

斎藤「それにクリスマスの事ほっとけないしね」

クリスマス「!?ばっ馬鹿！んな恥ずかしいこというな！」

それを聞いたクリスマスは少し顔を赤らめ斎藤に当たる、斎藤はそれから笑いながら対処していた

斎藤「ごめんって」

クリスマス「たく、遊びやがって」

そう愚痴り手を下ろす、まだ顔が赤くそれをチラリと見た斎藤は笑みを溢す

クリスマス「て言うか何処行くんだ？」

斎藤「ああ、ちよつと寄り道」

クリスマス「？」

飲食店とは違う方向に歩きだしている斎藤に気づいたのか声をかけるクリスマス、向かった先は噴水広場だ

クリスマス「ここは、私たちが待ち合わせてた場所じゃねえか」

斎藤「まあまあ気にせずこっち来て」

素晴らしい噴水の前に集まる二人、目の前にある噴水は勢いが止まる事をしらず湧き続けている

斎藤「俺さ今まで色沙汰とか無くてさ、今後も無いって思ってた」
そして斎藤が突然何かを語りだした、クリスは何故切り出したのかわからずに斎藤を見ていた

斎藤「やることもないから二課に入ってそれで好き勝手やって給料貰い、仲間と一緒に年取って行くのかなって、そう思ってた、けど」
すると斎藤がクリスの方を見る、その目には決意の表情を宿していた

斎藤「そんな中、クリスが来た」

そして体もこちらに向ける

斎藤「最初は素直な子じゃないなーって思ってたけど、優しくていい子で、何だか接しているとどんどんお前にひかれている自分だった」

クリス「…え？」

それを聞いたクリスは顔を下に向け顔を合わせまいとするが斎藤に手を取られる

斎藤「もうこのさいだからはっきり言う」

心臓の鼓動が止まらない、何故だろうか今から言われる言葉が予想出きる、聞きたくないけどそれを絶対に聞きたいと思っっている自分がいる

斎藤「俺は、雪音クリスを愛しています」

そう静かに告げられた、斎藤はクリスを見てクリスは下を見ているかその顔は真っ赤に染まっている

斎藤「俺はお前を支えたい、お前を愛したい、クリスと一緒に生きてみたいんだ、その気持ちを抑えられなくて俺は今こうして話している」

斎藤の方も恥ずかしいのか顔が赤くなっている、そしてクリスの手を離し少し間を置いた

斎藤「俺と、付き合ってください！」

そう頭を下げクリスの前に手を出す

斎藤「……迷惑、だったかな？」

そうゆつくりと上げた斎藤の顔に映ったのは泣きながらこちらを見ているクリスだった

斎藤「ご、ごめん！まさか泣くほど嫌だなんて」

クリス「ち、違う馬鹿」

そう服でごしごししながら涙を拭き取るクリス、だが涙が止まらないのか一行に終わらない

クリス「わ、私も、恋、なんて、しないって、思ってた、けどお前、と、一緒に、斎藤と生きたいって自分がいたんだ」

そう泣きながら答えるクリス、斎藤はそれをじっと見ていた

クリス「だ、だから、今、出てる、涙は、嬉し涙なんだ」

そうこちらに笑顔を見せるクリス、斎藤はそれに胸を撃たれながらも返事を待つ

クリス「だ、だから、こんな、私で、良ければ」

そうゆつくりと手を出しゆつくりと斎藤の手を掴む

クリス「よろしく、な？」

斎藤「もちろん」

そう彼女の手を引きこちらに抱き寄せる、クリスの方は斎藤の心音を聞き笑みを溢す

クリス「お前、鼓動早いぞ」

斎藤「仕方ねえだろ、う、嬉しいんだからよ」

クリスは上の斎藤の顔を覗き込む、恥ずかしいのか顔を赤らめ斎藤の方を見ている

クリス「お前、顔赤いぞ」

斎藤「そっちだって赤い上に目元赤いぞ」

クリス「うるせえ」

そういう顔を斎藤の胸に埋める、そこにいるクリスは幸せそうな顔をしていた

クリス「にしてもいきなりだな、まだ私とあってそんな日は経ってないだろ」

斎藤「仕方ねえよ、おまえ取られたくないもん」

クリス「そうか」

お互いに沈黙が置かれる、感じるのは夜の風の冷たさとお互いの温もりだけだ

斎藤「な、なあ」

クリス「どうした？」

斎藤「キス、しないか？」

それを聞いたクリスの鼓動が早くなる、それと同時に斎藤の鼓動も早くなるのが聞こえる

クリス「い、いきなりかよ」

斎藤「い、いや、だつてさ、してみたいじゃん？キス」

そう照れてしまい頬をかく斎藤、そしてクリスが答える

クリス「…いい」

斎藤「え？」

クリス「だから、いい」

そう言いクリスが斎藤の胸から顔を離しこちらを見つめてくる、斎藤は頭の後ろと背中に手を回す、そしてゆっくりと顔を近づけそれが重なり合った

クリス「ん」

少ししてお互いの顔を離す、そしてしばらくお互いに見つめ合ったクリス「こ、これでいいだろ！」

斎藤「え？く、クリス!？」

よほど恥ずかしかったのかその場を逃げ出すようにクリスが斎藤から離れていく、そしてそれを追いかけていく斎藤、二人の姿はあつという間に見えなくなつていった

響「……」

響はある場所に一人で来ていた、そこは廃墟が決定してあるアパートで立ち入り禁止と書かれた張り紙が合ったが時間が経っているのかかなり汚れている上に封鎖してある筈の金網も破れ人が通れるようになってしまっている、その中に入り人は階段を上がる、そして2階に行きある場所に止まる、203と書かれているドアにたどり着いた

響「……」

その扉に手をかける、すると鍵が掛かってないのかあっさりと開く、そして響は中に入ると前誰かが生活していたのか物等がそのまま置いてありそしてある部屋に行く、懐かしい部屋だ

響「そのままなんだ……」

小さく眩き中に入る、そこにはトレーニング器具などが置いてある、そして目の前にある机には写真立てがある

響「あ」

それを見た響はそれを覗き込む、そこには左に幼い未来と右に響がおり真ん中に体格がデカイ大男がいるがその顔には同じ幼さがあった

響「これも、そのままか……」

それをゆつくりと持ち上げ寂しそうにそれを眺める

響「…どうしてるんだろ」

そう呟く、それに答えてくれる人は何処にもいなかった

龍士「…今回は遅くなっちゃったな」

そして龍士の方は墓に来ていた、龍士だけではなく後ろにも何人かいる、組の組織と言うわけではなく服装から見て普通の人もいるようだ

龍士「山下」

山下「へい」

そう言うと山下と部下があるものを取り出す、墓の前に置くお供え物だ、そして次々と人が取っていき他の墓にそれを置いて線香を立てた、龍士の方は酒の栓を開け墓に注いでいた

龍士「好きだったろ山崎18年、高いんだぞこれ」

そう呟きながらお供え物を置く、そしてその場に座り立て掛けてある写真立てを見る、そこには龍士の父親であろう人が写っていた

龍士「また皆と一緒に来たよ、この日しかやれないから」

龍士とその他で線香を上げている人はノイズの襲撃にあい大切な人を亡くして途方にくれてしまった時に龍士が助け出した人たちだ、そして決まった日にこうやって集まるのだ

山下「兄貴もよくやりますよね、みんなのためとはいえ」

龍士「ヤクザつてのは弱い人を守るのが仕事なんだ、ならこんな事してもいいだろ」

そう手を合わせ黙祷する、そしてそれが終わると立ち上がりタバコに火をつけた

龍士「お前も誰か大切な人が亡くなったらちやんと墓参りには行けよ」

山下「へい」

タバコを一度離し煙を吐きそしてまた口につける、山下は腕時計を見て龍士に声をかける

山下「兄貴、そろそろ」

龍士「…そうだな」

携帯灰皿にタバコを入れ振り返る、そして山下が皆を呼び集めた

龍士「今日もお疲れさん、気をつけて帰るように」

全員がその声を聞き解散となった、龍士は山下の車に乗り走らせる、龍士は、窓を眺め景色を見ているか、そして信号で止まり景色が止まる

龍士「……」

龍士は窓を締め自分のスマホに目をやる、そしてその車の少し先には二人の女性がいた

響「へくそうなんだ、未来もやりますなく」

未来「もう！響もからかわないの！」

響「でも峰さんもよくそんな事が出来るね」

未来「自覚がないだけだと思う」

響「そうかもね」

そう話していた響はふと横で止まっている黒い車に目が止まった、何故かはしらないがそれから目を離せなかった

未来「どうしたの？」

響「…何でもない」

そういつもの笑みを浮かべながら歩いていく、そしてその黒い車はそのまま彼女たちを追い越し街の中に消えていった

???

? 「おーおー、何とか勝てたって所か」

遠目である最終決戦の終わりを見ていた者がいた、顔はよくわからないが二人いて一人は黒のジャンパーにもう一人は和風の着物を着ている

? 「あんな研究しか取り柄がないやつにあそこまで手こずるとはな、情けんやつらだ」

? 「まあ最初のやつにしては手こずり過ぎだけどギリギリ合格ラインじゃない?」

? 「まあよい、それで仕事はすんだのか」

? 「おう、カディングルの残留エネルギーは用意してあるタンク全部入れたよ、おまえさんは?」

? 「抜かりはない、アイン」の方は?」

? 「無事だぜ、今ボスに報告してる」

? 「そうか」

? 「ほら帰ろう、もうようはないし」

? 「それもそうだな」

そう言うと後ろを振り向き去っていく

? 「それで次は何処が動くんだ?」

? 「予定通り次は外国側が派手に動くらしい、まあ我々はいつも通りだがな」

? 「つまんねえの」

―――???

? 「……」

周りが鉄で出来てそうな廊下を歩いている人影の様なものが見えた、それがはつきりしていくとそれはあのアーマーを着た者だった、

鉄の当たる音が周りには響きしばらく歩き続けると目の前に扉のよ
うな物がある、そしてそれに近づくとそれは開き中の様子が見えた、
そこには全身が金属のような物で覆われている人のような者がいた
？「お帰り、どうだった？」

椅子に座りながらこちらを見ている、彼が来たのは報告のためだ
？「お二人は仕事を終え今帰還中です、後二時間程で付くと思われ
ます」

？「そうか、君の方は？」

？「司波龍士の相手をし、そしてノスターの始末をしました、予定
通りです」

？「ノスター君はどれくらい持ったのかな？」

？「ほとんどやくにも経ってません、相手がその気なら秒殺でした
ね」

正直龍士が強すぎたためノスターはほとんど相手にもならなかつ
た、半殺しにするためにわざと手を抜いていたしお世辞にも相手に
なっているとは言えない

？「まあいいじゃないか、君の到着の時間稼ぎにはなったし」

？「まあ、そうですね」

？「ご苦労様、戻っていいぞ」

？「：はい」

若干間が置かれる返事をした、どうやら気になることがあるようだ
？「どうした？」

それに気づいたのか座っている奴が気にかける

？「何故彼を止めるように指示を出したのですか？別に手を出さな
くとも」

？「：気になる？」

？「もちろんです」

鋭く尖った爪みたいな指で自分の頭のような部分をかく、金属の擦
れるような音が聞こえるこちらを見る、顎と頭の尖った金属の部位に
隠れているがその影から黄色に光小さな目がこちらを見ていた

？「単刀直入に聞こう、もし彼とフィーネが戦ったらどちらが勝つ

と思う？」

？「龍士です」

即答だった

？「何故かな？」

？「彼は女でも手は抜きません、攻撃にては抜きますがそれでも間接技や骨を粉砕するなどは普通にやってきます、多分人質とつてもやられるでしょう」

？「ご明察だ、彼は二課と違って油断はしない、多分フィーネと会ったら彼は殺しただろうし、それに彼が行くタイミングが早すぎた、おそらく二課と合流していたらカディングは止められていただろう、カディングは撃ってもらわなければ困るからな」

すると彼の後ろが光始め映像が出る、それはフィーネが砕いた月と破片が写っている

？「最悪月を半分とは考えてはいたが峰君がいい仕事をしてくれたおかげで破片で止まった、これで彼女たちが関与してくるはずだ」

？「本場のFISですね」

？「そう、そうしなければあれにも勝てないだろうし」

？「……そこまで予定を建てて成功するのでしょうか？」

？「何を言っているのだ、そうさせるようにこつそり道筋を、建てやるのだよ」

顔が太い針のような物で隠れているため表情はわからないが何やら楽しそうな表情をしてそうな返事だった

？「さて、忙しくなるな」

第二部

開幕

人が賑わう夜の街、ネオンの光で彩られそこに人が集まっていく、ここは直系黒澤組と佐伯組が仕切っており時々揉め事があるこの街にある男がいた、宮本組の司波龍士はシノギ終わりに部下と打ち上げをしていた

龍士「どうだった？新しく出来た飲み屋は」

山下「意外といいつすね、今度新人連れてきましょうよ」

龍士「そうだな」

二人で歩きながら夜の街を歩いていく、町並みの明かりが地面を照らし人もよく見えるが捨てられていくゴミもちらちら写ってしまう

龍士「相変わらず汚ねえなここも」

山下「仕方ないですよ、だいたい来るのが遊び人だし」

佐伯が仕切る商売エリア、黒澤が仕切る老舗と企業などのエリアで別れており今龍士たちがいるのは前の街で引越してきた老舗の店だ

山下「そう言えば風鳴が何かライブ開くって言ってませんでした？」

龍士「ああ、復興ライブの事か？」

壊されてしまった街の復興のために律儀にライブを開くらしい、これでこちら辺に人が集まれば再開発の予定も視野に入れられる可能性がある

龍士「まあ頑張つてほしいもんだな」

そんな事を言っていると急に電話が鳴り出した、それを取り出し直ぐ様出る

龍士「もしもし？」

宮本『龍士、今暇か？』

龍士「はい暇ですが」

宮本『なら事務所に来い、頼みたい事がある』

龍士「直ぐ向かいます」

素晴らしい電話を切る、そして山下の方に向く

龍士「わりの、呼び出しがかかった」

山下「あちやー、なら仕方ないっすね」

龍士「また今度遊ぼうぜ」

山下「はい」

素晴らしい残り山下と別れた

山下と別れた後迫一通りにある組の事務所に入る、そして階段を上がり組長の部屋に入る前にドアを軽く叩き一言入れる

龍士「親父、龍士です、失礼します」

素晴らしい中に入る、そこには顔にシワが目立つが威圧を感じる程の老人がいた

宮本「おお、きたか」

――古東会 黒澤組組内宮本組組長――

――宮本 大成――

龍士は入り直ぐに組長に頭を下げる

宮本「実はまたあれを頼みたいんだが」

あれとは一体何だと思ったが前々からやらされていた事なのでだいたい察しはついていた

龍士「…もしやお嬢のですか？」

宮本「そうだ」

実は宮本には若い娘がいる、年の差は何と五十以上と言うおかしな数字だがなんでも亡くなったら奥さんが最後に産んだ女の子らしい

宮本「またこんな時間帯で行きたいって言い出してな、また頼めるか？」

龍士「大丈夫です、それでお嬢は何処に？」

宮本「いつもの場所だ、お前が来るまで待たせてある」

龍士「わかりました」

宮本「頼んだぞ」

それを聞いた龍士は直ぐに事務所を出た、宮本が言ういつもの場所は宮本組が所有しているデカイホテルの事だ、一部屋一部屋かなり大きくそこに娘さんが住んでいる、そして少し早歩きでそこに向かう途中通行人と肩がぶつかった

龍士「おっと、すまん」

そう言い立ち去ろうとするが龍士の肩に手を置かれる

男「いつてえじゃねえかてめえ！感謝料払えやあ！」

龍士「たかだか肩ぶつかったただけだろうが、いちいち騒ぐな」

男「なんだとてめえ」

男が龍士を睨む、そして男の隣にいた男たちが龍士を囲む

男「デカイからって調子乗んなよ！」

龍士「：調子に乗ってるのはお前らだろ」

そうため息をつき構える、龍士はやる気がないが男はやる気がありすぎるようだ

男「ぶつ殺せえ!!」

ーーーーチンピラーーーーー

まず目の前の男が大きく腕を振りかぶる、龍士はその男の懐に入り腹にパンチを一発、そしてそのまま体を掴み後ろに投げる

男2「おわあ!!」

男3「やろお！」

そして男は龍士の背中に拳を振り上げ殴ろうとする、龍士は下ろされる前に振り返り様に相手の顎に掌底を入れる、相手はそのまま一回転し倒れた、あらゆる方位からの攻撃に対処するこの技は色々と便利だ

古牧流 無手返し

男2「う、うそだろお!?!」

龍士「ほらどうした、こいよ」

男2「な、舐めやがって！」

男は懐からナイフを取り出しこちらに突き刺すように迫る、龍士はそれを横に避け腕を掴みそのまま肘に膝蹴りを入れる

男「ぎやああああ!!!」

あまりの痛み叫ぶ男、遠くで見ている通行人も引き気味になっている、そして龍士はその男の顔に拳の突きを入れた、男はそのまま吹っ飛ばされ地面に倒れる、その後はピクリとも動かなかった
ドス腕折りの極み

龍士「たく、手間取らせやがって」

そう手を叩き転がっている男たちから目を外し目的のホテルまで走り始めた、ネオンで彩られた町が辺りを照らし慣れてなければ痛いであろう道を走る、そしてそのホテルにたどり着き早速中に入る、そこには白と所々に茶色が入っている大理石で作られたフロアーでありいかにも高そうな雰囲気を出していた、龍士はその周辺を見渡すとそこに目的の女性が綺麗な服装をして柱に寄りかかっている

龍士「お嬢、すいません遅れました」

龍士は頭を下げようと考えたが出来なかった、それは周りに人がいるためそう言った行動は出来ないのだ、そしてその女性は龍士を睨みながら顔をあげる

?「遅いわよ、何してたの？」

色は茶髪で肩までの長さ、そして誰からみてもわかるほどの美貌を持つ彼女の名前は宮本 美音、組長の娘さんだ

美音「お父さんも別にいいのに」

龍士「いや、そう言う訳には行きませんか」

美音「余計なお世話なのよ、せつかくの遊びなのに」

龍士「……」

返ってくる言葉が冷たかった、龍士がこの役に任されたのは最近なのだ、なにやら娘さんに色々問題があるようだが流石に本人の口からは聞けなかった

美音「まったく、さっさと行くわよ」

龍士「へい」

そう言われ美音に着いていく龍士、またわがままを言われるのかとため息をつきそうになった

美音「あははは！でしょ、それでさそいつ」

ホスト「へえ〜そうなんだ」

龍士「……」

美音の遊びはだいたい決まっている、自分の片想いのホストが出勤している時にはいつも行き時間ギリギリまでいつもいる、そして出勤してないときは家にいてだらだらしているのがいつもの生活、親父さんの場合仕事が忙しく相手をしてやれなかったためか性格がまるで違う、そして龍士はと言うと美音が見える範囲で少し遠くにいるようだ、その龍士に若いホストが声をかける

ホスト「あの、龍士さん？何か飲みますか？」

龍士「今は仕事だ、遠慮しとく」

ホスト「仕事って、あの女ですか？」

龍士「おい」

龍士はその言葉を聞きホストに威圧をかける、ホストは少し縮こまってしまふ、美音は基本的に片想いのホスト意外興味がない、それどころか本命以外のホストが来たときは悪態をつくのだから、そのためあまりいい印象はないのだ

ホスト「す、すいません、言葉が過ぎました」

龍士「…あんまり強くは言えねえが本人の前では言うなよ、めんどくせえことこの上ない」

そのため息をつ美音に視線を戻す、龍士も正直苦手で理由はホスト

と話すときにたまにでる組員の失敗話だ、それを笑いのネタに平然とするのであまり組の事情を話せないし話したくもない、だから余計な事はしないように護衛と言う形で買って出たのだ、護衛に厚かましさを覚えるのは仕方がないのだがこんな町で女が一人歩かせるよりはましだ

龍士「いつも通りの時間が出る筈だ、それまで普通にやっつけよ」

ホスト「はい」

そう言いそのホストは離れていく、また長引きそうだと感じた龍士だがそのまま目を離さず美音とその周りを監視し続けた

美音「はあく飲んだのんだ」

龍士「お嬢危ないですって」

あれから飲んだ美音は脚が少しふらふらしている、それを龍士は倒れないように見ながら周りに目をやる、怪しい人物は見受けられない

美音「触るんじゃないわよ、うつと惜しい」

そう龍士を突き飛ばそうとするが重すぎて手で押しもてこでも動かなかった

美音「もういいわよ、もう目の前でしょ」

気づいたら目的の場所についていたようだ

美音「たく、今日もいらなかったわね、あなた何のためにいるの?」

龍士「お嬢を守るためです、夜道は危険ですから」

そうにやけ顔でこちらを見る美音、龍士は喋らずそのまま美音を見ている

美音「…つまんないの」

そう言い残しホテルの中に入っていった、その様子を見届けるとそ

のホテルの近くにいた人が龍士に近づく

龍士「…後は頼む」

男「お任せを」

男は離れていき龍士は振り返りホテルから離れていく、そしてスマホを取り出し電話をならす

龍士「親父ですか？」

宮本『龍士か、どうだった？』

龍士「いつも通りです」

宮本『そうか、お前この後予定あるか？』

龍士「いえ、特にありませんが」

宮本『なら今から何か食いに行くか？』

龍士「…いいんですか？」

宮本『いつも無理させているからな、今回は俺の奢りだ』

龍士「わかりました、ではご一緒させていただきます、事務所まで迎えに行きましようか？」

宮本「いや、いい」

前から声がしてスマホから目を離し目の前を見ると宮本がこちらを見ている

宮本「…行くか」

龍士「へい」

宮本は静かに言い龍士はそれに答え宮本に付いていく

宮本「今日娘は何をしたんだ？」

龍士「ホステスに行きました、どうやらお気に入りの方がいるみたいで」

宮本「そうか」

それを最後にお互いに黙ってしまふ、それを宮本が切り出す

宮本「…わりいな、本来は父親である俺の仕事なんだが」

龍士「仕方ありません、急がしいんじや」

宮本「勝手な事だが許してやってくれ、あいつも可愛そうな奴なんだ」

龍士「……」

龍士は何となく訳アリなのはわかっていたのだ、だがその訳を聞くわけにもいかずそのままにしていたので理由はわからないが首を突っ込んでいいのか正直悩んでいた

龍士（ヤクザの娘っただけで色々あるからな）

こんな風当たりの強い職業の子供は苦勞することが多い、本来ならばそうなる前に組を立ち去るのがいいのだが入れ替わりが激しいこんな世の中では組を止めたとして新しい道を探しても失敗するかもしれないので出る時が難しいのだ

宮本「おつと、ついたな」

そんな事を考えていると宮本が横を向いたので同じように向いた龍士、そこには小さなおでんの屋台があった、宮本はそこに入ると龍士も入りカウンターに座る

宮本「適当に見繕ってくれ」

男「わかりました」

そう言うと店主はまず酒を出す、そしてコップを二つ置き皿を取り出し何かを入れていく、龍士は酒瓶を持ち上げ宮本のコップに注いでいく

宮本「ごくろう」

そして次は自分に注ぎ酒瓶を二人の間に置いた、そしてゆつくりとそれを飲む、喉を潤していくと同時に体が暖まるのを感じた

龍士「よく来るんですか？」

宮本「ああ、こちら辺の店はあらかた食ったんだが、やたら高い所で食うよりこつちに来た方が落ち着くんだ」

そして宮本の前におでんがのった皿が出される、宮本はまずコンニャクにカラシをつけ食べる

宮本「…それにうまいしな」

龍士の方にも出された、大根、はんぺん、卵などがありますはんぺんにカラシをつけ食べる

龍士「…うまい」

そう感想を漏らしながら大根にも手をつける、前食ったステーキも美味しかったがこつちはおでんと言う感じがして美味しい、大根は味

がよく染み込んでいる他にも手をつけていくとすぐに空になる、そして店主に追加をお願いしました食べ始める

宮本「…お前、いつまで極道やるんだ？」

龍士「……」

その言葉を聞いた龍士の手が止まる

宮本「…商売の色はもう叩き込んだ、そこらにいるガキよりよっぽど大人で経験がある、ならカタギの方が向いてるって、そう思わねえか？」

龍士はそれを聞きしばらく黙ってしまいが言葉を返す

龍士「…俺はここで生きていくって決めたんです、そのために親父から紹介された彫り師に背中を彫ってもらったんでしから」

宮本「…そうか」

宮本はコップに口をつけそれを飲み干していく、そしてその置かれたコップに龍士が酒を注ぐ、そして二人はそのまま他愛のない話をしながら食事を楽しんだ

神埼「ふい、今日も行くかな？」

そう言いつつもその服装で出かける神埼、そしていちも通りこの夜の街にはネオンの光が灯され夜中だと言うのに道端の小さなゴミまではつきり見える

神埼「龍士さん最近忙しいそうだからな、やることすくないし」

そう短髪の灰色の髪に触れる神埼、道場に通いながらボクサーを指していて近くの大会では優勝するまで上り詰めた

神埼「まあ生活費稼げなくて中々出るの難しいけど」

龍士の勧めで工場のお手伝いと言う所で以外と給料はいいがもつと安定した収入をしたかったので今建築関係を勉強中だ

神埼「こんな事になるんだったら勉強しときゃよかったかも」

誰でも後悔してそうな事を呟きながら歩いているとある場面に出くわした

? 「ちよつと! 離してください!」

神崎「ん?」

ロングヘアの茶髪の女性が厳つい顔をした男に手を捕まれている、周りの人は関わりたくないのか目を背け横を通りすぎる

神崎「はあ、ほんとナンパ多いよねここ」

ため息を吐きながらその問題に近づいていく、男の方は気づいたのだろうかこちらにガンを飛ばしながら声を出す

男「おう兄ちゃん、何のようだ?」

神崎「お嬢さんが困ってるようだから助けようと思って」

男「はあ?」

そして神崎は男の腕を掴み女性から引き剥がした

男「つ! てんめえ」

神崎「みつともないよ、大衆の面前でこんなことしてさあ、恥ずかしくない?」

そして神崎は男と女の間に入り後ろにいる女性に声をかける

神崎「大丈夫?」

? 「は、はい」

怯えた声で返事を返す女性、そして前を向く

神崎「さつさと帰ったら? しつこい男は嫌われるってよく言われるよ?」

男「いい度胸してんなお前」

そう言うのと神崎の周りに人が集まり始めた、どれも真つ当な仕事をしてそうな人間ではない、神崎はその場で軽くジャンプしながらリズムを取った

神崎「いいね、話が早いのは好きだよ俺?」

男「お前ら、やつちまえ!」

――ヤクザ――

ヤクザが拳を振りかぶる、右のストレートだ、それを顔を横にそらし避け顎目掛けてジャブを入れる、相手は脳を揺らされたためそのま

ま気絶する、そして横から鉄棒を振りかぶるヤクザと後ろから振りかぶるヤクザが同時に来る

神埼「たく」

まず横にいる相手の方を向き横にすり抜け背中を押す、するとそのヤクザの横顔に拳が突きささる

ヤクザ「ぶう!？」

ヤクザ「あ、やべ！」

殴られた男は吹っ飛ばされそして殴り飛ばした男に近づき腹にブローを入れそして右のフック、最後に左のアッパーを入れるとヤクザは地面に叩きつけられ動かなくなった

ヤクザ「やろお！」

そして殴り飛ばされた鉄棒を持った男が立ち上がりこちらに向かってくる、鉄棒を振り回し最後に地面に叩きつけるのを見るとその男の顔にジャブをいれ怯ませ腹にストレート、脇腹に左ブローそして最後に体重を乗せた右フックでぶっ飛ばした

ヤクザ「があ!？」

それをまともに受けたヤクザは吹っ飛ばされ地面に叩きつけられると動かなくなった

? 「す、すごい」

神埼「終わり」と

そして振り返り女性の近くに行く

神埼「あの、大丈夫ですか？」

そうして女性に声をかける、女性は帽子を取った、そこには水色の綺麗な瞳でこちらを見る美貌を持った女性がいた

? 「ありがとうございます、助かりました」

神埼は思わずそれに見とれてしまった

? 「あの? どうかしましたか？」

神埼「あ、いや、別に」

慌てて顔を背ける、あまりにも顔が綺麗すぎて見きれなかったのだ、取りあえず気を取り直して注意を呼び掛ける

神埼「こんな所に女性が一人じゃ危ないよ」

? 「す、すいません」

シユンとしてしてしまつた、何だかこつちが悪いみたいだ

神埼「まあ、取りあえず早く帰るように、何か最近ヤクザがギスギスしてるようだから」

? 「……」

それを聞くと下を向き何だか気まずそうな顔をする

? 「家は、ありません」

神埼「…え?」

それを聞いた神埼は次の言葉を考えた

神埼「えつと、頼れる人は?」

? 「…いません」

またお互いに沈黙が出来る

神埼（見た目は綺麗、だが身元不明、怪しいな）

恐らく好きでこの町に来たわけではないようだ、様子的にもそうだしおそらく訳ありだ

神埼（どうすつかなくこのまま行かせるつてのも）

頭をむしかきながら彼女から視線を外す、かと言って困っている人を助けたら最後までやるのが常識、中途半端にもほつとく訳にはいかずどうしようかと考える

神埼「…!」

その時、神埼に電流が走つた

神埼「ねえもしかして住む場所に困ってる?」

? 「…はい」

神埼「宛があると言つたら?」

? 「え?」

女性は顔を上げる、そこには笑みを浮かべている神埼がいた

龍士『んで?俺に頼つたと』

神埼の案は龍士を頼りに何処か宛がありそうな場所を見つけてほしかったのだ

龍士『たく、親父と楽しく飲んでる時に』

神埼「ごめんって、それでさ何とかならない？」

龍士『ボランティアやってるわけじゃねえぞ？』

神埼「そこを何とか…」

電話越しにため息を吐くのが聞こえる、あの女性お金あまり持っていなかったように家で泊まる金もなかったようだ

神埼「俺がその子のぶんまで払うからさ」

龍士『月十数万しか稼げない奴が二人ぶんなんかだせるか馬鹿』それを聞くと頬をかいた、まったくもってその通りだからだ

龍士『…少しだけだぞ？』

神埼「ほんと！いやゝ助かる」

龍士『家はお前が住んでいるアパートの隣でいいだろ』

神埼「え？それは」

龍士『文句ある？』

神埼「…ないです」

こちらはしてもらっている立場なので何も言えない、電話越しにシユンとなってしまう

龍士『んじやその女にそう伝えとけ』

神埼「はい」

電話を切られ後ろにいる女性の方を見る、落ち着かないのか手を重ねたり離したりしている、安心させるために彼女に近づくと

神埼「大屋さんから許可とれた、俺の隣の部屋でいいのなら止めるってさ」

？「わざわざありがとうございます」

神埼「困った時はお互い様さ、んじや早速行こうか」

？「はい！」

不安が多少取れたのか女性の顔に笑みが浮かび上がった

神埼「あ、そうだ、名前聞いてなかったね」

？「あ、そうでした」

女性は改めて名前を言う

セレナ「私はセレナと申します、お手数をお掛けしますがよろしく
願います」

あの電話の後食べ終わった二人は会計を済ませ宮本を事務所まで
送っていった所だ

宮本「今日のご苦労だったな」

龍士「いえ、いつでも言ってください」

宮本「おう」

龍士「お疲れ様です」

膝を曲げその膝に手を置き身を少し屈め頭を下げる、そうして宮本
は事務所に入っていく姿を消した、龍士はそれを見届けるとタバコに
火をつけそれを吸いながら街の方に戻っていく、そして街の中心地に
行くと周りには大型ビジョンやデカイホテルやら何やらが点在して
いた

龍士「無理してんな、親父も」

ヤクザをやっているがほんとは娘思いな人だ、何でヤクザをやっ
ているのだろうかと心底思う

龍士「…それはお互い様だな」

まだ高校生位のガキが何をほざいているのやらと苦笑しながら空
を眺めていく、すると大型ビジョンにあるニュースが入ってきた

『速報を伝えます！いまツヴァイウイングとマリア カデンツァヴナ
イヴのライブにノイズが現れたようです』

龍士「はあ？」

どうやらここら辺の土地は呪われているらしい、めつきり出てこな
かったノイズがまさか復興ライブの時に現れるなんて嫌がらせにも
程がある、通行人もそれを聞き何人かはビジョンに釘付けのようだ

龍士「…まあ俺が言ってもどうしようもねえな」

ここから会場までは距離がある、本気で行けば多分つくだろうがそ

んな気も起きない、ノイズと言う存在がいる以上自分がいても邪魔なだけだからだ

龍士「さっさと秘密兵器で片付ける、訳にはいかねえか」

まだ会場には何人か取り残されているようだ、つまりは人質されているようなもの、多分秘密兵器も出せないのだろう

マリア『私たちは！このノイズを操り力を持ってして、あらゆる国家に要求する！』

龍士（ノイズを操る？んなこと出来んのか？）

マリア『く♪』

龍士「こんな状況で歌うなんて、度胸あんなこいつも」

だがそんな呆れた表情も一変する、何かを口ぐさんだマリアが光を放ちその光が消えると黒と薄茶色を中心としたインナースーツに所々にアーマーのような物を着ているマリアが現れた

龍士「これが、秘密、兵器？」

龍士がさっきから言っている秘密兵器の事だがこうして直で見るのは初めてだ、色々と不安でこんなので守れるのか？と言う疑問は表れるがどうでもいいかっと思流した

マリア『我々ファイネの要求は、そうだな、国家の割譲を求めようか』

龍士「馬鹿だろこいつ」

龍士はそれを聞き心底呆れた、国家の割譲なんかまずお偉いさん方がやるわけがない

龍士（にしても世界の歌姫がテロリストか、よも末だね）

そうビジョンを眺めていくとある場面に切り替わった、それを見た龍士は目を見開き信じられないような顔をする

龍士「……は？」

そこにいたのは旧友の未来と親友の峰がいたのだ、それを見た龍士はその場にしばらく固まっていた

再転のフイーネ

峰「まずいな」

そう峰は戦況を遠目から見守っていた、観客たちは何故か逃がしてくれたがテレビにこの光景は報道されている、そのため動くこうにも動けないでいた

未来「峰さん」

峰「大丈夫、何とかなるって」

そう誘ってくれた未来を安心させるために頭を軽く撫でてやる、だが状況は最悪だ

峰（とは言っても俺も下手には動けない、せめてテレビさえ消してくれば何とか動けるんだが）

そんな事を考えていると峰の携帯が鳴り出した、それを取り出し電話に応じる

峰「ちよつと失礼」

電話が鳴り出しので未来から離れ電話に出る

峰「もしもし?」

龍士「峰! お前何でそんな所いるんだ!？」

峰「え?」

龍士『テレビ見てたらお前が写ってんだ! おまえそんな所でなにポーつと突っ立てやがる!』

峰はそれを聞き辺りを見渡すとカメラが何台かこちらを見ていた、そして電話の相手に慌てて返事を返す

峰「未来ちゃんがどうしても行きたいって言うから一緒に…」

龍士『響は!? 姿が見えねえぞ!』

峰「えつと、響ちゃんはトイレに行ってたみたいなんだけどこの騒ぎだろ、無理やり避難してきた人盛りに巻き込まれて外にいるんだってさ」

適当に嘘をついた、本当の所は別の場所で斎藤たちと任務に当たっているのだが任務に行ってる何て言えないし言われてもわからないだろう

龍士『そうか、ならいい』

龍士はそれを聞いて安心したのか、そして電話越しに大きく息を吐くのが聞こえる、おそらくため息だろうと思いきや苦笑いを浮かべる

龍士『……峰、待ってる今そっちに行行ってやる』

それを聞いた峰は止めるように促す

峰「いや下手にこっちは来ないで、ノイズだよ!?!」

龍士『大丈夫だ、あのマリアとか言う奴半殺しにでもすればいいだろ』

峰「いやそれまずいって…」

そういう終えるやいなや電話が切れてしまう、峰はそれが嘘だと思っただけで何度も名前を呼ぶ

峰「ええ!?! 龍士? 龍士! ちよつと!?!」

龍士の実力なら峰がよく体験している、アンノウン能力を使ってもまったく歯が立たない時点で安心感しかないが色々とまずいことがある

峰（あいつの事だからまじで死ぬ一歩手前でやるに決まってる! どんだけ奴だろうあいつ容赦しねえし）

龍士は加減はするがそれでも過剰だ、相手には間接技は普通に使うし骨を折る技も普通に使うのだ

峰（響ちやんたちは任務で今はいない、けどこっちに向かっている筈だ、早く来てよ、早くしないと龍士が全部片付けちゃう）

峰は未来を連れて客席から降りなるべく奏たちの近くで待機することにした

奏「あくあ、せっかくのライブがこれじゃ台無しだ」

辺りを見渡しライブ会場を見る、観客が一人もおおらず寂しい観客席が出来上がっている、そしてマリアの方に向き直る

奏「あんたは胡散臭いとは思ってたけどよ、やりすぎじゃない？」
マリア「これでいいのよ、これで世界は私たちに目を向く」

マリアは奏の方を見ずただ前を見ていた

翼「何が目的だ？」

マリア「教える義理はないわ」

振り向くと同時にマントが靡くそしてゆっくりとこちらに目を合わせ、それを見た二人は首にかけてあるペンダントに手をかけた

マリア「あら、私に飛びかかる気はあったのね、けどいいのかしら？」

そう槍を上げてカメラ指す

マリア「日本政府はシンフォギアに関して一部発表はしているが装着者については黙認してたのではなくて？」

翼「そんな事を言えば私が鞆ばしると思っっているのか！」

奏「命より大事なもんはねえよ、こんなんでも私が命を見捨てちまったら野々宮に申し訳ないからな」

マリア「：そう、いい心がけね」

それを聞いたマリアは目を下に向ける

マリア「あなたたち見たいな人がいれば、世界は変わったのかも知れないのに：」

奏「？」

そう顔を伏せ呟いた声は奏たちには聞こえなかった、そして覚悟を決めた眼差しでこちらを見ると槍を回し持ち変える

マリア「その覚悟があるのなら、やってみなさい」

そう槍をこちらに向ける、翼はそれに答えようとする

翼「言われずとも！」

奏「さて翼！」

それを止める奏、それを聞いた翼は驚いていた

翼「何故だ奏、何故止める!？」

奏「もう少し待ってくれ」

マリア「あら？やっぱり口先だったのかしら？」

翼はそれを聞くと悔しそうにペンダントを握りしめる、そして奏の

方は何故か余裕の表情をしている

奏「：野々宮、やってくれ！」

それを言った矢先に周りの明かりが消えた、ただ会場の端にある照明は消えておらず少しだけだが会場が月明かりとともに照らされている

マリア「!？」

翼「こ、これは!？」

奏「そう言えばいい忘れてた事があったな、野々宮って意外と用意周到でさ、こう言う事があるだろうと思って色々準備してたんだよ」
そう自慢げに話しながら耳に手を当てる、するとそこにある回線が開き野々宮に礼を言う

奏「ありがとう野々宮」

野々宮『いえいえ、これもマネージャー補佐の仕事ですから』

奏「これ終わったらまた食べに行こう、実は美味しいところ見つけたんだ」

野々宮『またそんな悠長な：いいですけどお仕事はちゃんと終わらせてくださいよ?』

奏「わかってるって」

それを終わると奏はマリアを睨み付ける

奏「さて、これで問題は無くなったな」

マリア「なるほど、侮っていたわ」

マリアは驚きもせず笑みを見せる、奏も同じように笑い翼に呼び掛けた

奏「行くぞ翼あ！」

翼「承知！」

Imyuteus amenohakiriron

Croitza ronzell Gungni

r z i z z l

歌い終わると二人はギアを纏う、だが前と多少変わっており翼は多少黒があつた所が青に変わり奏は腰と腕のアーマーが増えている

奏「さて、私たち二人のコンビネーション、流せるもんなら流して

みろ！」

——マリア カデンツァヴナ イヴ——

奏がまず駆け出し槍を振り下ろす、それをマリアは自分の槍で受け止める、そして持ちかえ尻払いそれをマントで流すとそのマントの中から槍が出てくる、それが奏に当たる前に翼が刀で弾きそのまま切り上げの移る、マリアはそれをバク転して避けその着地点に奏の槍の突きが放たれる、マリアは自分の槍を地面に突き刺しそれを軸にして横に転がるように避ける

奏「まだまだ！」

奏が手で槍を回しながら迫り右下から左上にかけて切り上げ、それを避けられると回して短く持ちかえ突きを連続で放つ、マリアはマントでそれを防ぎ槍で突きを振り下ろし押さえつけそのまま切り上げようとした後翼が刀を横に一閃してくる

マリア「っ！」

小さく舌打ちしながら後ろに下がりそれを避けると次は袈裟切りそれを避けると次は突きをそれを槍で防ぐと兜割りに移行する、マリアはマントでそれを軽く流し大きく後退した

マリア「確かにいいコンビネーションね、手が出しづらいわ」

翼「こんな事をしでかしたのだ、よもや卑怯とは言わせないぞ！」

マリア「あら？いつから私が一人だと？」

奏「なに？」

その直後奏たちの所に二つの影が重なる、二人は嫌な予感がし横に避けるそこにはピンク色をした丸ノコの刃のような物とうつすらと緑の筋が入っている鎌の刃が地面に突き刺さっている、そしてその影はその場を離れマリアの隣に立つ

マリア「助かったわ、二人とも」

？「ギリギリセーフ、と言うか戦うのが早すぎるデスよ！」

？「何とか間に合ったね切ちゃん」

マリアの隣には二つの影ができた、そこには黒を中心とした緑のラインが入ったギアを纏った金髪の女の子、そして同じくピンクのラインが入ったツインテールの女の子が立っていた

マリア「これで3体2」

？「へへーん、マリアをいじめた借りを返してやるデスよ」

峰「俺もいること忘れんなよ」

その声とともに峰が客席から乗り出しステージに上がる

峰「さて、これで互角かな」

そう奏たちと顔を合わせ一緒に構える、だがマリアの顔には何故か笑みが浮かんでいた

峰「何がおかしい？」

マリア「あなたの相手は別の人に頼んであるわ」

峰「なに？」

未来「峰さん後ろ!!」

峰「!?!」

その声とともに後ろから殺気が来る、すぐに身を屈めると自分の体が合った所に銀色の刃が通りすぎる、直ぐ様そこから離れ後ろを振り向くと白い着物を着た黒髪の男がいた

？「やはりそう簡単にはいかないか」

男はゆっくりと構え直しこちらを見る、そして峰はその男の手にある物に目がいく

峰「日本刀？」

若干日本刀っぽいもので鍔等に白の機械のような物が少し周りを覆っている、少し異質を感じさせる刀だ

マリア「そっちは任せるわね」

？「ああ、お前さんたちは目の前に集中しろ」

マリア「言われなくても」

峰「ごめん、手を貸せそうにもない」

奏「いいよ、けど気を付けな、雰囲気からして多分」

峰「俺と同じアンノウン、だろ？」

奏はそれを聞くとコクリと頷く、そして峰も構えをし相手を睨み付けた

？「では、行くぞお！」

男が駆け出し首もとを狙った袈裟切りがくる、それを身を屈め避けると次は真横に一閃してくる、それは後ろに大きく避け距離を取ると相手は刀を戻しこちらに突きを放ってきた

――謎の男――

それを横に避け様に顎に掌底を放つ、それを下から柄で弾きそれと同時に来た切り上げが峰の腹に迫る、それを懐に入り肘で止めそのまま裏拳、相手はそれを見て後ろに下がる

峰「刀持ちはちよつとやりづらいな」

？「俺でちよつとか」

そう男は笑みを溢す、腕も確かしかも素手と刀ではやりづらい

峰（確か龍士も何か刀の流派持ってたっけ？）

北辰一刀流だとか言ってたような気がする、ただ刀を使う機会がないから組手で相手したこともないが

峰「予行練習しときゃよかった」

？「何を言っている？」

それを言い終えるや否や相手が刀を振り下ろして来た、それを横に避けるとそこから斜め切り峰はそこに手を出そうと思ったがまた後ろに下がった、嫌なビジョンを見たからだ

？「お見事、手を出していたら落ちてたな」

そう切り替えて下からの切り上げの構えになっていた姿が見える、あのまま手を出してたら腕を切られていた

峰（気が抜けないな、一瞬でも切られたらアウトだ）

一度でも受けたら出血多量じゃすまない、完全に殺すきで来てるし下手に手が出せない、防御主体で行くしかない

峰（奏たちの方は？）

横をチラツと見る、翼との連携で対応しているが相手もかなりの連携で奏を追い詰めていつてる、このままではまずい

峰（まずは目の前の奴だ、こいつをどうにかしないと）

えたいの知れない日本人風の刀使い、何故彼らがこんな事をしてい
るのかは知らないが止めなければならぬ

峰「！」

峰が駆け出す、ジャブを放ち相手はそれを袈裟切りで切り落とそう
としたが拳を直ぐ様手を引つ込め逆の手で腹にブローを放つ、相手は
それを脚で受け止め一旦下がり様に縦に振り下ろしてくる、その一閃
をすり抜けるように近づき相手の顔に一発入れた

？「っ！」

それに怯んでしまった隙ができ峰はすかさず相手の脚を払いそこ
にすかさず正拳突きを腹に入れる

？「ぐ!？」

そのまま吹っ飛び倒れる相手、だがそこに峰は追撃はできなかつ
た、自分の腕から血が少し出始めそこを峰が抑えている

未来「峰さん!？」

峰（こいつ、飛ばされ様!?!）

峰の正拳が腹に直撃するまえに後ろに飛びさらに腕を軽く切つて
きた、相手は腹を少し抑え刀を杖変わりに使い立ち上がった

？「かなり重いな、まともに喰らってたら危なかったな」

顔が少し青くなっている、衝撃を和らげていても辛いのだろうかま
だ腹を抑えている

？「いいぞ、もっとやろうか!？」

峰「っ！上等!？」

お互いに駆け出し接戦を繰り広げる、防ぎ避け受け流し合う、一瞬
の気の緩みが命取りだが相手が隙を作った

峰（ここ!）

相手は大きく真横に振ってしまつて動くのが若干遅れてしまふ、そ
こに峰はタツクルし相手を浮かすとそのままショートアッパーに移

る、相手もそれを受けないように顔を反らすは待っていたかのようにアッパーの勢いをその場で回転してそのまま肘打ちに乗せた
? 「くっ!」

流石に避けられず受けてしまうが相手も峰と同じように殴られた勢いを利用し回転して刀を振り下ろしてきた、峰はそれを見ると直ぐに下がり避けようとするが間に合わない、そのため刀が来るであろう場所に腕の甲を向け右腕を顔の前に、左腕はそれを支えるように置いた、相手はそのまま振り下ろし峰の肉が抉れ血飛沫が上がる、それを見た未来は目を見開く

未来「峰さん!!」

峰「つう、いってえっ」

動脈を切られないようにしたがそれでも重傷だ、腕を見てみるとそこには大きな切り傷が出来ておりそこから血が溢れだしている

? 「い、一瞬息が詰まったぞ、本気でやったな」

峰「あんたもね、おかげで綺麗に切られちまったよ」

首にかけてあるタオルを取りそれを切られた所に巻き付ける、そして残った方は下のシャツを破りそれを巻き付けた

? 「恐ろしいな、普通は切られたら怖い筈だろうに」

峰「ま、俺も負けられないんでね、それにこんな傷腹貫抜かれるよりはましだし」

そう顔に笑みを浮かべながら自分にそう言い聞かせる、それに相手だつてさっきの肘打ちで肋骨が折れてる筈だ、なら条件はある程度一緒の筈、峰は服を破りそれを包帯変わりに使い腕の出血を止めた

峰「待たせたな、もういいぜ」

そしてじりじりと距離を詰めまたやりあおうとしたその時

クリス「土砂降りの十億連発!」

それを空から降り注ぐ銃弾の嵐が止めた

? 「ち!」

峰「おわ!」

二人は後ろに飛びその銃弾を避ける、そして峰が下がった所に奏とクリスたちが集まり始めた

斎藤「こんのお馬鹿！峰さんに当たったらどうするんだ!？」

クリス「いいだろうが！当たらなかつたんだから！」

奏「まあまあ二人とも、そこら辺にして」

響「み、峰さん!?腕から血が！」

峰「ああいや、大丈夫、軽く切っただけだから」

斎藤「いや軽くって、何処がよ」

響は峰の腕を見て驚き切ったであろう相手の方を向く

響「何でこんな事をするんですか!？」

?「何故?それはその男が敵だからだ」

響「そんな、そんな事しなくても話し合いましたよ?そしたら…」

?「偽善者」

それを横目で見ていたツインテールの子がそう言い放った、響の方を睨み続ける

?「この世界には、あなたのような偽善者が多すぎる!」

そう丸ノコの刃を飛ばす女の子、それをクリスが銃で叩き落とす、そして緑の女の子が鎌で攻撃してきた、それを斎藤が持ち手を掴み止める

斎藤「この、いい加減に!」

斎藤は握り拳を作り拳骨をかまそうとするがその手が誰かに蹴り落とされる

斎藤「な!？」

そして腹に衝撃がきて横に吹っ飛ばされる、何とか着地し蹴飛ばされた方を見るとそこには緑色のジャケットに動きやすそうな黒のサルエルを着ている若干緑のかかった黒髪の男がいた

?「こら切歌ちゃん、一人で行っちゃ駄目でしょ!」

切歌「ご、ごめんなさいデス、出雲お兄さん」

出雲「まったく、それと来栖さん、おばさんから引き上げの合図が来ています」

来栖「そうか、マリア!」

マリア「ええ、わかっているわ」

すると何もない空間から光が出始めそこから形が整っていない緑

のノイズがでてきた

響「うえ!? 何ですかあのイボイボ!」

そしてマリアは槍をノイズに向ける、すると槍の先端が変形しそこから光弾が発射されそれがノイズに直撃、ノイズの肉片が飛び散りそれを見届けるとマリアたちはその場から振り返り逃げていった

奏「呼んできてやりやがったぞ!」

だがそれも束の間、その肉片が増殖し始めた

峰「やべ!」

峰はそれを見ると未来の方に移動し彼女を守るように動いた

響「峰さん! ここは私たちに任せて未来を連れて逃げてください!」

峰「どうにか出きる!?!」

響「いえ、けど何とかします!」

峰はその言葉を信じ未来を連れて避難する、未来は響の方を見た

未来「響! 頑張つて!」

響「うん!」

それを言い終えた未来は峰と一緒に避難し始めた

斎藤「俺はあいつらをおうか」

翼「任せる」

斎藤はそれを言い終えるや否やマリアの逃げた方に斎藤が走り始めた

奏「んで、どうすんのよこれ」

翼「下手に手を出せばまた増えてしまうぞ」

クリス「どうすんだよ」

野々宮『まだ下には避難している人がいます、これ以上増えられると危険です!』

奏「響、宛あるつて言つてたよな、何なんだ?」

響「絶唱です! みんなの絶唱を会わせれば!」

クリス「おいおいありや未完成だろ!?!」

翼「だが他には」

奏「ない、よな」

さう四人は頷き響を中心にして手を取り合う、顔を見合せ覚悟を決める

E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z i
z z l

G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n
a l

E m u s t o l r o n z e n f i n e e l z i z z l

それを歌い終えた四人の周りに虹色のオーラが出始めそれが増殖していたノイズを遅い始めた、だが響の方も四人の絶唱をまとめているためか辛そうな声を上げている

響「う、うう」

翼「耐えろ立花！」

クリス「お前がやらなきゃどうする!？」

響「う、うん」

そしてノイズの本体であろう物が出てきた、響はそれを見ると両腕のアーマーを重ね合わせそれを右腕に装着する、そしてそれが変形し始めたノイズに向かって飛んだ

響「これが私たちの！」

それをノイズの本体にぶつけハンマーパーツがスライドした

響「絶唱だああああ!!!」

そして響の拳から虹色の竜巻が発生しそれがノイズを飲み込み空へと舞い上がって行った

斎藤「はあっはあ、あいつら何処にいった？」

斎藤は彼女たちが逃げたであろう場所に向かい会場の中に入っていた、周りは機材だらけで人などいそうにもなかったのだがそこに誰かいた

斎藤「でか」

背中を向けていて顔はわからないがかなりでかい体格をしている、斎藤はそれに声をかける

斎藤「おいあんた！そこで何してるんだ!？」

その男はこちらを振り向きもせず去ろうとする

斎藤「こいつやっぱり、おい待て！」

斎藤は声を上げその男に近づいていく、男の方はその場で止まっているがこちらを振り向かなかった

斎藤「まったく、あんたこんな所で何してるんだ？」

返ってきたのは沈黙だった、斎藤はため息を吐きながら近づいていく

斎藤「おい、聞いて…」

斎藤が肩を掴もうとしたその時、男が振り返ったと思ったら目の前がボヤけ意識を失った

クリス「おい！おい大丈夫か!？」

斎藤「あ、あ？」

うめき声を上げながら目を開くとそこには涙目のクリスがいた、体をお越し周りを見てみると皆が心配そうにこちらを見つめている

斎藤「皆どうしてここに？」

クリス「どうしてってそれはこっちの台詞だ！」

斎藤はその言葉を聞くと首を傾げる

クリス「お前と連絡しようとしたら繋がらなかったんだ、それで心配して来てみたら地面で倒れているお前を見つけたんだ」

齋藤「? 面白いえば何でおれ倒れてんだ?」

響「え? 自分でもわからないですか?」

齋藤「いや、ここに来たのまでは覚えてるんだよ、ただそれから先の事が少しボヤけてて」

そう顎に手をやり思いだし始める齋藤、だがやはり思い出せないのか頭を横に振った

齋藤「駄目だ、わかんね」

奏「まあけど無事でよかったじゃん」

翼「そうだな」

クリス「取りあえず休んでろ、後片付けはやつといてやるから」

齋藤「そうはいかないってあれ?」

そう脚に力を入れ立とうとしたとき少しふらついてしまう、それを見たクリスは齋藤を支えた

クリス「ほら、無理すんなって」

齋藤「ご、ごめん」

龍士「んで? その腕は?」

峰「いや、これはそのく…」

一方峰は未来を安全な場所に移した後龍士を探しだして介入しないように止めていたのだが龍士はどちらかと言うと峰の腕を見て冷たい視線を送り何か言いたげな視線を送っている

龍士「見せろ」

峰「え? いやけど」

龍士「いいから」

峰に近づいていき腕を取り巻いてあったタオルを取る龍士、タオルのおかげで出血はある程度止まったがそれでもまだ少し出ており皮膚も自分の血で汚れてしまっている

龍士「綺麗に切られたな、ドス…じゃないな、日本刀か?」

峰「ま、まあそんな所」

龍士「何でこんな場所で日本刀の傷が出来る」

峰「えっと、テロリストに襲われたと言うか何と言うか」

それを聞いた龍士のこめかみに血管が浮かび上がる、それを見た峰は何とか話題を反らそうと別の話をした

峰「未来ちゃん近くにいるけど、ほんとに会わなくていいの?」

龍士「言ったら?俺はヤクザだ、会うわけには行かねえよ」

そう返す龍士、そして龍士は何かにはイラついてるのかさつきから顔にシワがよっている

龍士「にしてもあのマリアとか言う奴しばけなかったな、お前が止めなかったらやれたのに」

峰「まあまあ、政府の極秘に触れたらめんどくさいに決まってんじゃない」

龍士「影でこっそりやればいいんだよ、ばれなきゃ問題ない」

峰「そう言う問題じゃなくてだね」

その言葉をツツコミ峰、少しずつだが笑いが出てきた、すると龍士の顔が急に変わり何も無い壁を見つめ始めた

峰「どうした?」

龍士「誰か来るな、四人、いや五か」

峰「多分俺の知り合いかな、さつき連絡したらこつち来るとか言っ

てたし」

龍士「そうか」

龍士は峰の方を見る

龍士「んじや気をつけて帰れよ」

峰「おう、んじやな」

そう後ろを向き手を振りながら去っていく龍士、峰が瞬きをした時にはもうその場にはおらずその後には峰は皆と合流した

龍士「にしてもあいつには悪いことしちゃったな、つい癖でやつちまっただけど大丈夫か?」

龍土の方は会場の中で気絶させた男の事を気にしていた

取り立て依頼

龍士「入ります」

龍士は今日事務所に呼び出されていた、いつもの事務所にある組長室がありそこには若頭と組長がよくいる事がある。

その二人から直々に何かを頼まれる時はそこに呼び出される、他の者に聞かれない内容や情報の流失を避けるために使用することがある、そしてドアのノブを回し押しして入ると奥には大きな机がありそのまた奥の壁には任侠という大きく書かれている文字の立てが上の壁に掛けられている、そしてその組長の机の前には椅子が一つ、その手前には二つあり龍士から見て左側にタバコを加えた勝又が座っていた

勝又「…きたか」

ゆつくりと目を開け前を向いたまま眼だけこちらを見ている、頬にある傷にその威圧を感じさせるその顔を見ながらも龍士はその場で頭を下げた

——古東会 黒澤組組内宮本組 若頭——

——勝又 翔——

勝又「まあ座れ」

龍士「はい」

そう言われ勝又とは向かい側の椅子に座る、そして勝又は背もたれに体重を駆けこちらを見た

龍士「今回はどのような件で？」

それを聞いた勝又はタバコを前のテーブルにある灰皿に押し付け消した、そして姿勢を戻しこちらに返答する

勝又「おめえ佐伯組は知ってるよな？」

龍士「はい、知っております」

それに迷わず頷いた、古東会直径 佐伯組等ヤクザである以上知らない何て出来る分けがない

勝又「一年前こころ辺がノイズの出現が激しかった頃、その混乱に乗じてマフィアがうちのシマを奪っていった、うちらも手が困って

た所だった、そんな時に現れたのがあの佐伯だ」

龍士「はい、確かその時彼は警察官で佐伯がマフィアの連中を叩き出したんですね？」

勝又「ああ、だがその時に自分の汚職を苦し紛れにばらされてな、それで退職されたんだがその時に秘密裏に回収した金と自分の口を使つて家に入つてきたんだ」

龍士「それがどうかしたんですか？」

ここまでの経緯は古東会に人間なら誰でも知っている事だ、勝又は顔を澁らせ姿勢を起こしこちらを見る

勝又「…これは誰にも言うなよ」

その言葉を聞いた龍士は目を見開く、そしてゆっくりと目を戻していきコクリと頷く

勝又「佐伯組が出てきてからマフィアが少なくなった、だがこの間マフィア関連の事件が起こったよな？」

龍士「釘原を利用したマフィア、ですね？」

前の騒動で起きた釘原とマフィアの騒動、結局はそんなに大きくはならず黒澤組の力で片付けられた、釘原は本家に指を詰めて絶縁、マフィアも痛めつけて外国に飛ばし方がついた筈だ

龍士「なんでその話が？」

勝又「そのマフィアを招き入れたのが佐伯組と言ったら？」

龍士「なに？」

その言葉を聞き顔にしわが寄り始める、頭の中ではどう言うことだ？と心の中で考える、そしてその疑問を答えるが如く勝又が切り出した

勝又「あの頭のわりい釘原が何でマフィアとつるんだのかよくわからなかっただが調べているうちにマフィアの侵入を阻害する役目の筈の佐伯が何故かそのマフィアだけを通らせたんだ」

佐伯組の仕事は密輸などの商売関係、本家での役割は外から入ってくるマフィアの妨害および監視だ、だが大抵は面倒事になりかねないのでいつもなら追い返しているのだ、手口は脅迫紛いのことや色々やっているそうだが何故佐伯組がそんな事をしたのか不思議に思え

た

龍士「どうしてですか？」

勝又「それはわからねえ、それを調べるためにお前を呼び出した」
「どうやら今回の件は思っていたより重そうだ、気持ちを切り替え真剣にその言葉に耳を傾ける」

勝又「山下には既に伝えて別の所を探させてある、お前にも探して欲しくてな」

龍士「カシラの頼みとあらば喜んでうけますよ」

勝又「お前ならそう言うと思つたよ、最近マフィアを見かける所がいくつもある、そこから当たった方がいいだろう」

龍士「自分の足で探せ、いつもの事ですね」

勝又「まあそうだが、もうなれたろ」

龍士「そりやなれますよ、では早速行ってきます」

龍士はそう言い立ち上がる、そして勝又の方に一礼し部屋から出ていった

勝又「たく、面倒な事になりそうだ」

そうタバコに火をつけ立ち上がる、そして部屋を出てそのまま自分も事務所を出ていった

龍士「今日は珍しく平和だな」

そう雲一つない青空を眺める龍士、手にはビニール袋をひっさげ家やビルにはひびが入り道路も酷い有り様だ、そんな場所には人影等なかった、こんな日なら街の方では人が賑わっており遊ぶには絶好の日だろう、だが龍士はこの日も仕事なので関係ない、休みの日は来る時もあるしこない時もある、一週間働くなんてざらだし労働基準法なんか守る気もサラサラ無い、そんな暇を持てるのは組でも顔が売れている人ぐらいだ

龍士「よう、ちよつといいか？」

男「お？なんだい？」

ふと目に入ったホームレスの男に呼び掛ける

龍士「最近こちら辺で変わった事がなかったか？」

男「変わった事か、んや知らねえな俺そこら辺の事情には疎いんだ」

龍士「そうか：誰か知ってそうな奴知ってるか？」

男「こちら辺だと木下さんが知ってそうだが」

龍士「そいつは今何処に？」

男「見た目はホームレスだけど中身は情報屋だよ、何でも情報を貰う時に何かいるらしいけど」

龍士「それが何だかわかるか？そいつの場所は？」

男「場所は〇〇通りにある大きな工事現場跡だけど合言葉的なのは知らないな」

龍士「そうか、ありがとうございます」

お礼として手に下げてあった袋からビールをとりだし投げ渡す、それを受け取った男は喜んだ

男「おお！久々の酒だ、ありがてえ」

龍士「飯とかに困ったら横塚町に行きな、面倒見てやるよ」

男「へへへ、考えとくよ」

そう男の側を離れ情報屋がいるであろう場所に向かった、その最中に龍士はどう話を切り出すか考える

龍士（どうすつか、ホームレスと違って酒じゃ連れなないし、それに会っても条件知ってないと無理か）

裏の仕事を生業としている人間はだいたい用心深い、中には特定の合図や合言葉、はたまた質問の回答等に対応する人間もいる、そういう場合だと教えて貰おうにも口が固い場合が多いのだ、そんな事を考えているとその場所についた、土地周りを守っているしきりの壁は崩れ中の土台も荒れ果て建設途中であった建物に至っては足場の鉄骨が崩れ骨組みと混ざり会いゴチャゴチャな状態だ、そんな周りを囲っているしきりの壁の直ぐ側に帽子をかぶり歩道に座っている男がいた

龍士（いた）

確かに見た目はホームレスだがブーツとしている目じやなくしつ

かりと目に力が入っている、気ままに生きているホームレスにしては雰囲気少し違った

龍士（素直に聞いて見ても駄目だろうし、客が来るまで待つか）

これ以上手がかりもないので警察や探偵がよくやりそうな監視をする、相手に気づかれないようにするのが条件だが流石に工場現場の崩れ落ちた建物から双眼鏡で見てるなんて知らないだろう

龍士（にしてもここも変わったな）

こちら辺は龍士もたまに通っていた、父が大好きな飲食店がありそこに家族一緒に仲良く行っていたのを思い出した、至つて普通の店だったがあそこのミネストローネは格別だった、今ではもう見る影もなかったが

龍士（どうしてんのかね、店長さん）

父と顔見知りだったあの優しそうな太った店長はどうしてるのだろうか、その行方を知らないし知ろうとは思わない、だいたいこうやって気になって探した人間はろくな事になってないからだ

龍士（いつけね、集中）

つい馴染みの町なため考え事をしてしまった、双眼鏡を構え直しホームレスを見張る、すると私服の厳つい男がホームレスに近づいた

龍士（来たな）

男はホームレスと何か話すと最後には男は口を開かず黙りホームレスだけが喋っていた

龍士（恐らく質問系か）

男の方は用事が済んだのだろうかホームレスから離れていった、龍士はそれを見ると建物からビルを伝って行きその男を追いかけた

龍士（…止まった）

龍士は直ぐ様男が見易い位置に止まり上から眺める、男の方は周りをキョロキョロ見ながら目の前にある雑居ビルに入って行く、龍士はビルから飛び降りその男が入って行ったビルの中に入る、中は道も階

段もひび割れていたがその2階だけはひびが入っておらず多少手が入り綺麗にされている、龍士はその2階で部屋を探す、すると一つだけ電気が灯り鉄製の綺麗なドアがあった

龍士（三人くらいか？）

そう目の前の扉を覗む中にいるであろう人間を予測する、取りあえず中に入る事にした

男「あ？」

予想は当たりふんぞりかえって黒いソファーに座っているサングラスの男と一番奥には髪をまとめ上げ椅子に座りる男と隣にいる立っている男がいた

龍士「少し聞きたい事があるんだが」

男2「なに勝手に入ってきてんなこと聞くんか？お前何様だ？」

ふんぞりかえっていた男が立ち上がり龍士を覗む、それをなだめるかのように奥にいる男が静止させる

男「まあまあ、話ぐらいは聞いてやろうじゃないか」

それを聞いたサングラスの男は顔を渋らせたがソファーに座り直した

男「んで？聞きたい事ってのは？」

龍士「実は探し物をしてな、それで情報屋に頼りたいんだがどうも何か手順がいるらしいんでな、それを教えて貰いたいんだが」

それを聞いた男は顔にシワをよせ隣に立っている男を覗む

男「：お前、つけられたのか」

男3「す、すいません」

そう姿勢を直し頭を下げる、ボスである男の方はため息をついていた

男「流石にそんな簡単に教えられねえよ」

流石に簡単には口を割るわけがなかった、だが龍士もここで引き下がるわけにはいかない

龍士「そこをどうにか出来んか？」

男は手枕をし顔にシワをよせこちらを覗みながらどうするか迷っていた、すると答えが出たのか小さく頷きながら顔を上げた

男「実は俺ら金貸し何だよね、隠れるのに絶好の場所だからここを使つて警察さんも中々これないわけ」

龍士「まあこんな場所じゃな」

「どうやら闇金のようなのだ、銀行何かで金を貸して貰えない人何かに金を貸しているのだが銀行と違い利子が桁違いに高い、それに返済期間も短く期限内に払えないと雪ダルマ方式でどんどん積み重ねて行き金を吸いとつていく、龍士の方でも金貸しはやってるが利子はそこまで高くはなく期限決めてはいるが伸ばしても利子は増えないと言う仕事ではありえない事をするがだいたいは龍士に助けられ恩があるため全員早い期間で返す事が多い」

男「んで、最近金貸した男がいてよ、これが面倒な奴で図体がいい連中連れて金返さねえとか抜かしやがる」

龍士「まあいるだろなそんな奴」

男「それであんたに頼みたいんだが、そいつらをしめて金を持ってきてはくれないかい？」

龍士「取り立ての代行か」

「だいたい金を返さない奴はどうするかと言うと闇金が直接脅しに来るかケツモチのヤクザに頼むかこんな風に雇う形式もある、だいたいは脅しになるので顔に物を言わせた罵声だが龍士の場合顔が駄目なので力から入る必要がある」

男「もし取り返してくれたら情報屋の合言葉を教えてやるよ、どうする？」

龍士「いいぜ」

男「よし、相手は松下庚季、もところら辺ではば効かせてたヤクザ何だけどよ、組長がノイズに殺されて行く宛が無くなってしがない取り立て屋をやってるんだよ、と言っても全然信用なくて家に金借りたんだけどな」

龍士「何で貸したんだよ」

男「まあ家も調べが足りなかったんだよ、いづれ何処かに頼もうとは思ってたんで正直助かったよ」

龍士「なるほどね、それで？ばしよは？」

男「町の外れにある〇〇丁の坂田アパート、その一号に住んどる」
龍士「よし、わかった」

龍士は種を返し扉を開け目的地である場所に向かう事にした
龍士「荒い取り立て何ていつぶりだ？入りたての時かね」

今から暴力行使で金を取り上げしようと言うのになんだかこの雰
囲気が懐かしく感じる、まだ入りたての頃組の方針をよくしらない時
に金貸しからや組からの依頼でよく暴れていた時がある、荒れ果てた
街を歩きながら笑みを浮かべながら思いだしていく

龍士「でもだんだん家に金借りる奴はだいたい荒事にはなりにくく
なって殴るのは減ったんだよな、最近イライラしてたしストレス発散
出来そうだな」

最近色々あり過ぎて龍士もイライラする事が多くなったのだ、神崎
の事もあるがそれ以外にも組との小競り合いが多かった

龍士「おつとあぶね、ここか」

そう目的のアパートの前についた、予想よりも外見は綺麗で白が中
心のアパートで色落ちも少ない、ただガスボンベや入口前にある小さ
な屋根を支えている柱の腐食が目立って見える、龍士はアパートの横
にある電機をどれくらい使っているのかがわかる計測機器を見る

龍士「以外と使つてねえな、使わない物以外はコンセント抜いてそ
うだな」

電気を使用する時はコンセントを通して使い、大抵の人は使用後
はそのままにしておくのだがその状態にしておく待機電力と言う
状態でいつでも使えるように電気を少量使い待機しているのだ、その
ため本格的に節電する人はコンセント等は使わない時は全部抜く時
があるのだ

龍士「まあ取り合えずやるか」

玄関前に立ち取り合えず立ちインターホンを鳴らす、中によく聞き
なれた音が鳴りだした

龍士「すいませくん松下さんいますか？ちよつと話があるんです
けど」

まずは軽い声で名前を呼びかける、反応は返ってこない

龍士「中にいるのはわかってるんです、早く出てきてください」

奥で息を殺して隠してはいるが声を出した後火を消した音や足音は聞こえた、次に少しあら気味に声を上げる

龍士（出てこねえつもりだな、最悪蹴とばすか）

器物損壊で訴えられそうだが相手のまともな人間じゃないのでそんな簡単に警察にはいけない、そもそも金の取り立てややってる事件で恐喝でしょっぴかれるのが落ちだ、とりあえず玄關の戸を叩こうとした時後ろから威圧を感じた、違和感を感じた龍士は後ろを振り向くとそこにはガラの悪そうな男が四人ほどおり龍士を睨んでいる

龍士（ち、仲間呼びやがったか）

どうやら近くには合流しやすいようにしていたようだ、取り合えず龍士は前が出る

龍士「大人しく中にいる奴に出てくるように言ってくれないか？したら穏便に済むんだが」

男「誰がやるかよ」

そう鉄棒やドス等を取り出ししてきた、龍士は肩を鳴らしながら構える

龍士「まあそんな時間かからんだろ」

――チンピラー――

相手は右の死角から鉄棒を横に振ってきた、取り合えず横に少し動き空振りさせるとそのまま裏拳を顔に入れそのまま肘打ちを腹に入れた、後ろにいた男助け出そうと後ろから襲いかかるが龍士は肘を相手に入れたまま逆の腕で頭を掴み後ろから来ていた男の攻撃を掴んだ男を盾にして受け止めた

男「がっ!?!」

男2「やべー!」

男の仲間が驚き動きが止まる、龍士はそのまま掴んだ状態で背負い投げの要領で回転して投げ相手にぶつけた

男3「やりやがった!?!」

男4「やろお！」

取り合えず残った二人は同時に襲いかかるが龍士は脚で二人の攻撃を流しそのまま高速の二連蹴りをそれぞれに入れて気絶させた

龍士「最近つまらん」

そうあきれながら愚痴を言ってしまう、まだ龍士は軽く相手をしてやっただけなのにこれだ、ほぼ一撃で終わり最近まともに相手をしたのはあの謎の機械を纏った奴ぐらいだ

龍士「あいつぐらい強い奴いねえかなあ」

そのため息をつきながら取り合えず中に強引に入り中にある人間と話をする事にした、前いた場所に戻り玄関の入口を蹴り壊して中に入る、中は生活品で溢れゴミは袋に入れてありそれが積み重なっているがそれでもカップラーメンやお菓子のゴミ等は洗われずそのまま雑に捨てられている、そしてその奥に髪がボサボサな男が縮こまっていた

龍士「よう松下さん、初めましてですよね」

男「あ、ああ」

そう顔を上げながらこちらを見る男、龍士はそのまま相手を見下ろした状態で続ける

龍士「緒方さんの所から金借りてたよな、返済日大分過ぎてるけどなんでだ？」

男「い、いや、その」

男は目を泳がせながら混乱していた、おそらく返す気なんかなかったのだろう

龍士「利息が5でジャンプ8回合わせて370ってところか」

男「いや300って、そりゃ」

龍士「なんだ？」

男「いや、その」

そう軽く威圧をかけ怯えさせる、こうなって引越しになったらもうこっちの物だ

龍士「取り合えず今ある分出せ」

男「ま、待って下さい、金があります、今から取ってきますから」

龍士「何処に？」

男「ぎ、銀行に」

龍士「んじやカードか手帳渡せ、俺が行ってやるよ」

男「い、いや」

龍士「出せ」

軽く声を低くし威圧をかける、男は震えながら懐から手帳を取り出した

龍士「何だよ、ちゃんと返済できるんじやねえか」

それを見た龍士は手帳を相手に渡す、相手は渡せと言われたのに何故かそれを返されたので困惑している、龍士が見せろと言ったのは相手の金額がどれくらいあるかを確認するため、もしたらなかったらどう返済するかを聞くつもりだったのだが返済してもしばらくは生活できそうだ

龍士「いますぐ銀行行って金降ろしてこい、今から走れば、往復で二時間くらいで帰ってこれるよな」

そして相手の頭を掴み力を込める、そして相手を睨み脅す

龍士「早く来いよ、いいな？」

男「はいいい!!」

それを聞いた男は飛びあがるようにアパートから出て行った、龍士はアパートから出て相手の帰りを待つことにした

龍士「よう」

龍士はあの後無事金を回収、最後に癖で釘を刺しといたがあの様子じゃここでも金を借りる事はないだろう、そして金貸しは流石に早すぎたのか驚いていた

金貸し「え？早」

龍士「意外と簡単だったな、約束の金だ」

そう膨らんだ封筒を相手の机に置く、相手はそれを手に取り中身を確認しながらこちらに話かける

金貸し「いいね仕事が早い奴はうちにはいないからな、どうだい？

これを機にうちにはいらない？」

龍士「悪いな、家はこう言う者でな」

そう胸ポケットにしまっていた代紋を見せる

金貸し「はあ!? ヤクザだったの!？」

龍士「黙ってて悪かったな、最近代紋見せるのも怖くつてね」

金貸し「本職だったのかよ、そりや早い訳だ」

そう苦笑いを浮かべながら最後の札をめくり終わる

金貸し「ぴったしあつたぜ」

龍士「まあ一応確認はした、んじや約束のやつ聞かせてくれ」

金貸し「本職に貸し作るのも怖いからきっちり話すよ」

流石に相手も本職に貸しを作るのが怖いためか素直に話す事にした、なんだか悪いことをして申し訳ないが最初に代紋を見せたら貸しを作るのを嫌って受けなかったかも知れないので仕方ない

金貸し「あのおっさんはまず最初にこちらから話かけると『なんだい? 酒でもくれるのかい?』って言うてくる、そしたらこっちは断る、次におっさんは『ならお金をくれるか』と聞いてくるからこれはない、そしたらおっさんは『んじや何をしに来たんだい?』と言うからこれを自分は話をしに来たと言う、そしたらおっさんはそれを断り『用がないなら帰ってくれと言う』、そして最後に自分があることを聞きに来たと言ったらおっさんは情報を売ってくれるぜ」

龍士「断る、ない、話に来た、聞きに来たか」

金貸し「ちなみに酒がないって言うとのはだめだし、金をやらないうって断っちゃ駄目だぜ、そしたらおっさんは情報を売ってくれねえ」

龍士「質問の答え間違えると駄目なやつか、ありがとさん」

それを聞いた龍士は金貸しから離れ部屋の出口に向かう

金貸し「んじやな、もう来るなよ」

龍士「ああ、世話になったな」

そう別れの言葉を残し龍士はその場を後にした

謎の老人 暗躍者

龍士は金貸しから情報を得て情報屋の合言葉を教えて貰い早速その情報屋のおっさんの場所に向かう事にした

龍士「いたいた」

最初にいた工場現場跡の前に座っていた、龍士はその座っているおっさんに近づき目線を合わせるために少し屈んだ、するとじいさんの方はゆつくりと顔を上げこちらを覗き込むように見る

龍士「ようおっちゃん、元気かい？」

まずは手順通りこちらから話しかける、相変わらず体格に似つかわしくなく顔だけ見ると合ってるような声が目の前にいる男に響く

？「これの何処が元氣に見えるんだい？同情するなら酒をくれないかい？」

龍士「わりいな、これは渡せないだ」

そうビニール袋を揺さぶり片手を伸ばしそれを顔の前にやりお坊さんがよくやりそうなポーズで優しく断る、それを聞いた男は口元が少し歪みこう答える

？「斤力公園って知つとるか？」

その言葉を聞いた龍士は少し驚くが顔に出さず冷静に考え取りあえず知っているので素直にこたえる

龍士「知ってるが、それが？」

？「どんな公園だった？」

龍士「属に言う噴水公園だったが？」

？「ふふ、そうじゃったな」

そう不気味に笑う老人、龍士は周囲を警戒するが特に敵意はなかった荒れ果てた町の光景が広がっているだけだった

？「懐かしいのう、よくあそこには散歩に行ったわい」

思い出し笑いをする老人、龍士はその不気味さに警戒しいつでも抜けるようにしておく

？「妻を亡くした痛みを和らげたくてよくあの噴水を眺めてたわい、そんな時じゃったかのう、ある赤子が噴水の排水にすっぽりは

まっていたのは」

龍士「！」

龍士はそれを聞くと思わず驚きが顔に出てしまった

？「びっくりして慌てて助けたわい、だが赤子は命の危機にも関わらず楽しそうに笑っておったな、その後その子の両親が慌てた様子で駆け寄って来て赤子を心配しておったのう、いや懐かしい」

龍士「あんた、まさか」

龍士もよく知っている話だ、よく父から話され大変だったと家族で笑いながら流していた話だ

老人「君が、龍士君だね？」

そう優しい目で見ながらこちらを見上げる老人、龍士は驚きながらその老人の目を眺めていた

老人「そうか、大道君は……」

龍士「はい……」

場所を変え公園の椅子に二人は座りお互いの現状を話していた、そして龍士の父、司波大道の死を知った老人は残念そうに顔が寂しそうになりため息をついた

老人「じやがまさか君が極道をやつとるとはの」

龍士「まあその、成り行きでして」

老人「……大変じゃったな」

龍士「……はい、あなたは何故こんな事を？」

老人「ワシが若いころ記者をやっていたからの、だがこんな老いぼれを雇ってくれるところは何処にもなくてな、こうしてしがない情報屋をやつとるんだ」

龍士「そうでしたか」

仕事をすれば金は手に入る、だが一生を生きていくには何かしらの資格はとつといた方がいい、そうしないと定年退職をした後仕事が見つけられずひもじい生活をしながら過ごさなければならぬ、一応政

府からお金は貰えるが歳を取っていくと色々お金は必要なためそれだけでは足りないのだ、しかもノイズにより失業者も出てくるのは珍しくもない上に政府関係がその対処に追われる事が多いので全員を助けるのは無理なのだ

老人「じゃが正直もう無理かと思つてな、そろそろやめようかと思つとるんだ」

龍士「いいと思います」

真つ当な仕事をしてるのならいいのだがこんな裏仕事に正直老人がやつていけるわけがない、むしろよくここまでやつてこれた物だ

老人「ネタを掴むのは得意だったから自信があつたのじゃがな」

龍士「…」

そう軽く笑いながら龍士から目を話し空を眺める老人、龍士は何処かその姿が寂しそうに見える声をかけにくかつた

龍士「あの、本題に入りたいのですが」

老人「おお、そうだったな」

話しづらいが仕事なので早めに本題に入りたい、こちらの動きを向こうが察知して証拠を消されたら手の打ちようがない

老人「まずマフィアと佐伯が通じてるのは確かじゃ、ホームレス仲間が住んでいた所の幾つかが取引場所にされて追い出された時がある」

その話が本当なら佐伯組がマフィアを追い出していると言う話がない臭くなってきた、密輸はメールや電話等で話し合い取引をしそれを一般の物資に紛れ込ませるのが主流、顔を合わせる必要もなければ変声してやり取りするなど普通なのだ

龍士（んじやマフィア連中通して理由はなんだ？と言うか何話してんだ？）

密輸関係なら場所はうつつけだがそれなら搬送が目立つ、こちら辺は車が走る事が少ないので車があれば目立つしそれに町の外ではたまに警官が巡回してるときがあるので下手したら捕まる

龍士「その会合は頻繁に行うのですか？」

老人「いや直接会うことはそんなにはない、ただ電話ではよく話す

らしいが」

龍士「それじゃ何処の枝組が会ってるか知ってますか？」

老人「そうじやの確か、最近木野組が何処か架空の業者、まあどうせマフィアじやろうがその依頼を受けたらしい、木野組が物を仕入れそれを売っているそうだが」

龍士「どんな物をうってますか？」

老人「それがの、医療関係の物が大量に送っておるそうじや、流石に種類まではわからんが」

龍士（医療？わざわざ日本で買う必要あるのか？）

日本の技術外国には負けてはいないがそれでも医療関係の技術は圧倒的に負けてるしこっちでは受けられない難しい手術なんかも外国に行けば受けられる、医療に関しては外国で買った方が得の筈だ

龍士（何か、臭うな）

マフィアや商売人はどれだけ自分が得をするのかを考え物を買う、だが木野組から援助を受けている所はわざわざ技術が高い外国ではなく日本に来て買っている

龍士（これは得とかさう言う話じゃないな、どちらかと言うと、あつちじや買えない理由があるかそれとも、誰か病気にかかってんのか？）

恐らくそのマフィアは何らかの理由で母国に帰れないのだろう、そして何らかのアクセシブントかそれか体が弱い人がいるのだろう、その人の処置をしたいがためにこそこそしながら買っている、まあ闇医者の可能性もないが今はそれがしつくり来る

龍士「ありがとうございます」

老人「おや、もう行ってしまふのかい？」

龍士「そうしたいのはやまやまなんですがその前に情報料を渡さない」と

龍士はスーツから財布を取り出す

龍士「前金で三十渡せます、後で知り合いに頼んで四十渡します」

老人「お金か」

龍士「お金が不要なら何か言ってください、出来る範囲で払いま

しょう」

老人「そうじやの、ならお金じゃなく」

「ゆつくりと顔を上げこちらに笑みを見せた

老人「わしと公園に行かんか？」

龍士「公園と言うのは、さつき話した」

老人「ああ、わしにとつては金などあまりいらさない、そんな事よりも久々に会った知り合いともう少し話たいんじや」

それならお安い御用だ、ここからそう遠くはないしそれに場所もわかつている、急いではいるが少し寄り道してもいいだろう

龍士「わかりました、付き合いますよ」

老人「それじゃ、早速行こうか」

龍士はそれに頷き椅子から立ち上がる、そして老人はゆつくり立ち上がりこの場所を後にした

荒れた街から少し離れた場所にあるこの森がある公園、子供が遊ぶ道具のような物は設置されておらずただ長く少し大きな歩道があり入口が三つある、その三つの入口が交差している真ん中に大きな噴水広場がありそこで子供たちやその親などが暑い日に水浴びしながら遊ぶ時があるのだ、ただ最近ノイズが頻繁に出るせいなのだろうか、人があまり寄りつかなくなった、そのためかそのシンボルだった噴水は噴き出しておらずただ広いだけの公園になっていた

龍士「……」

老人「ここも寂しくなつてしまつたのお」

そう悲しそうに小さく声をこぼした、隣にいた龍士の方は老人から離れその公園を見渡す、椅子もあり自然もあり歩道も手入れされていないがまだそんなに風化が進んでいない、龍士の脳裏には微かに残っているここの記憶が薄つすらと出ていた

龍士「確かに、な」

そう龍士も寂しそうに見渡す、両親が死んで以降ここの事等忘れ仕事ばかりをしていた、ただ生きていくために自分の必要な事をしなが

ら

老人「龍士君」

そう後ろから声を駆けられる、ゆっくりとそちらを向くと椅子に座りながらこちらを見ている

老人「取り合えず座ろうかの、立ち続けるのも辛いじゃろう」

龍士「はい」

龍士も老人の隣に座りそこから公園を見てみる、姿勢が低くなったせいか荒れた地面がよく見える、木と木の間も見えるが手入れされていないせいか草は枯れ木も痛み公園の外が少し見える程ひどい有り様だ

老人「ここで君をたすけたんじゃ」

龍士「…」

龍士は前を向いたままその老人の声に耳を傾ける、表情はわからないが何処か優しい声だった

老人「君も知つとるかと思うんだが大道君は面白い子での、色んな所に行つてるから年寄りなわしよりも知識が豊富での、たまに会った時の旅話が面白かったわい」

龍士「親父は、母さんと結婚する前は世界の文化を楽しむ旅人でしたから」

俺の親父司波大道は趣味で他の国等に訪れ文化の違い等を楽しんでいたらしい、しかし母と結婚した時にこの市に住み始め腰を落ち着けた、親父は仕事をし始め普通の生活をしていた、俺が小さい頃にもよくその話を聞かされた時がある

老人「大道君の友達も中々こつた人たちだったのお、確かその人達から体術を習っておったんだか？」

龍士「どちらかと言うと自分が興味があつたので教えてもらったつて所でしようか」

龍士は父が持っていた武道の本などをよく見ていた、父はそれを読んでもわからず倉庫の中で埃を被っていたが龍士がそれを見つけたのだ、龍士も何故それを読んでいたのかはわからずただそれを暇な時に見ていた、そしてたまに大道の友人が訪ねてくる時があるのだがそ

の中に武道を極めた人が数人おりその人たちからよく教わっていたのだ

老人「気にしておったぞ？まだ小さいのに筋肉がつき始めて何だか怖がられてたって」

龍士「まあ親父は身長も高かったし体格もよかったですしね、その上鍛えたので正直子供の体格ではなかったですね」

父も自由人だったためか俺が好きなき事をしてても別段止めようとはしなかった、ただやはり小さい頃にそんな体をしている人間等あまりいないため周囲からはやはり浮いてしまったのだ、そんな時だ響に出会ったのは

響『ねえ！一緒に遊ぼう！』

龍士『おれ？』

響『うん！』

龍士『別にいいけど、楽しくないよ？』

響『大丈夫大丈夫、速くやろう！』

龍士「…」

龍士が煙たがれていた理由は体格だけじゃない、龍士は昔から物覚えがよく見た事は大抵出来た、興味があることは実際に行ったり調べたりしていたのだ、その興味が子供にとっては特殊なせいも友達が出来ずしかも身体能力も高かったので普通の鬼ごっこやかくれんぼ何かをしても加減を知らないため遊びにもならなかった

響『ぶむぐー、少しは手加減してよー！』

龍士『だって手加減したら申し訳ないし』

響『そんなんじや私勝てないのー！少しは手加減しろー！』

龍士『わ、わかったよ』

響も同じように秒殺されていったが負けず嫌いだったのだろうか何度も挑んで来てそれを相手していくうちに龍士もだんだん手加減を覚えてきた

響『あ、未来ちゃーん！』

未来『あれ、響ちゃ!?』

龍士『…』

響『あ、紹介するね、こっちは私の友達の未来ちゃんだよ』

龍士『龍士と言います』

未来『…ご丁寧にどうも』

響『龍士君挨拶変わってるね、凄く落ち着いてる』

龍士『俺に武道教えてくれる先生の挨拶がこんなんだ』

響『ほへー、挨拶にも種類があるんだ』

龍士『国によって挨拶の仕方が違うんだ、ハグしたり、お互いの鼻を当てたり色々』

響『！にしし、響ちゃん閃きました』

未来『な、何を？』

響『色んな種類使って挨拶ゲームをしようよ！楽しそうじゃない？』

龍士『は？』

未来『ひっ』

響『もうそんな驚き方じゃ未来が怖がっちゃうよ、えっとかにしなきゃ』

龍士『…』

響『よしんじや早速やってみよう』

未来『えっと、ちよつと変な子だけど気にしないでね？』

龍士『何気に辛辣だね君』

そうして三人は出会った、个性的過ぎる二人の面倒をまともな未来が見てくれるうちに三人は仲良くなっていった、龍士の方が多少子供らしくなった、それだけじゃなく龍士はいじめの現場に出くわした時よく割って入り止める時が多くなった

響『龍士君かっくい！』

龍士『別に、何か気に食わなかっただけだし』

未来『でもそれすごいことだと思うな、私そんな事できないし』

響『私も龍士君みたいにやってみたい』

龍士『んじやまず語彙力付けといた方がいいよ、響勢いに任せてごまかす時あるし』

響『う、うわーん未来ううう龍士君がいじめるううう！』

未来『よしよし』

龍士『俺そんなにひどいことした？』

龍士の毒舌が響に突き刺さりそれを未来が癒す、そういうコントがいたについてきてだんだん龍士もほかの人と話を合わせられるようになった

老人「その後その子たちとは？」

龍士「もう、長くは会ってません、今何処にいるのかも」

老人「…」

自分が生きるのに必死だった、仕事を覚え黒に染まり人を脅すようになってから会おうとする気も起きなかった、いつしか親父から気に入られ場を任される時も多くなり二人の事などほとんど忘れていた
龍士（正直会いたいのか会いたくないのかよくわからないんだよな）

流れに身を任せすぎたのだろうか会うっていいのかよくわからない、立场上会うべきではないのだろうか

老人「龍士君よ、学校とはどういう場所なのか知つとるか？」

龍士「義務教育を受ける場所、ですかね」

老人「確かにそうじゃがそれが子供にとって一番影響があるのは同年代の子供と会えることじゃ」

龍士「…」

老人「同じ歳、同じ年代を生きているがそれぞれ個性が違う、そんな場所でふれあい話し合い友達を作り助け合っていく、それが学校に行く一番のメリットだ」

知識など学校に行かなくても本やネット等で覚えられる、だが人との触れあいに置いて学校ほどいいところはない

老人「わしも学校に行く時が辛い時があつての、その事を父に相談したらこう返されたのじゃ、『なら友達には会いに行け、勉強は二の次でいい』、最初この言葉を言われてもピンとこなかったが今では父の考え方がわかってきたよ」

優しそうな笑顔を作り前の景色を見続ける老人、そこには何が写つてるのだろうか、懐かしさなのかそれとも寂しさなのかどちらとも言

える雰囲気だった

老人「人は助け合わないと生きていけん、げんにわしも他の人たちの手を借りながら今まで生きてきた、ホームレス仲間だけじゃない、学校から知り合った友人からも手を借りた」

そしてゆつくりと上半身をこちら側に向けた

老人「龍士君よ、ノイズのせいで人生が狂ってしまったのはわかる、君たち宮本組が昔の極道の任侠を守っている組だと言うのも知ってる、じやが黒に染まるのは早すぎだとは思わんか？」

龍士「…」

龍士はその言葉を聞いて老人から目を背けた、実際そうだ高校生の歳でヤクザをやっている所など何処にある？そんな事をして人生先行きは大丈夫なのか？いや、大丈夫じゃない、大丈夫じゃないから親父にも心配されたのだから

老人「まあこれはわしの考えじや、君が仕方なくヤクザをやっているのはわかるとるしあまり強くは言えん、じやが考えといた方がいいぞ」

そう言い終えると老人は自分の懐から紙を出しそれを龍士に渡すと立ち上がり前を歩き始める、そして龍士と間を開けるとこちらに頭だけ振り返る

老人「ゆつくり考えるといい、君はまだ若いんだから」

そう最後に言い放つと老人はそのままその場を後にした、その場に残された龍士はため息をつきながら頭を抱えしばらく椅子に座っていた

龍士「わかつてるよ」

自覚している、先を考えてない何て事も知っている、その不安から漏れた声を誰に言ったのだろうか、多少のイラつきが心に浮かびながらただ下を見つめ呟いた

龍士「……ここか」

あの後しばらく固まっていたが取りあえず任された仕事を片付けるために目的の場所に来ていた、目の前のビルを見る、何の捻りもなただのビルのだがこの2階に木野組の事務所がある、取りあえず様子見として張り込みをしようとした矢先少し違和感を感じた、その事務所にある窓を見てみると茶色い物体が窓から見えた

龍士（……?）

その物体は長方形の形をしておりそれが斜めに傾いている、嫌な予感がした龍士はそのビルの中に入り事務所の入り口であろう場所に向かう、階段を少し早足で上がると組の事務所のドアが大きく開けられていた

龍士（嫌な予感がするな）

組がこんな雑に入り口を開けている訳がない、ゆつくりと忍び足で近づいていきその開けられている入り口から中を覗き込む、そこで龍士が見たものは、周りが散らかり組員であろう人が倒れておりその真ん中には黒いスーツを着た茶髪の男がいた

龍士「……」

? 「ええはい、そうです、どうやらそのようで」

その男はこちらをチラッと見たが直ぐに手に持っている資料に目を移す、龍士はため息を吐き中に入るとゆつくり後ろを振り返りまずドアを變形させる

龍士「たまにいますんだよな、ヤクザに喧嘩うる奴が」

? 「……すいません、少し遅れます」

そして龍士は窓の方に向きゆつくりと歩いていく、その時に男の方

を見る、男の方も何かを感じとったのだろうか資料から手を放し龍士をじつと見ている、危機感知は多少遅いがそれでもこちらの殺気には気付ける程のようだ、そしてこの惨状だと言うのに服には傷どころかほこりもついていないので間違いなく強い、そう分析しながら窓の前に立つとカーテンに手をかけを閉めた

龍士「まあ恨み買われるのは仕方ない、やり返すのは悪くない、なあ兄ちゃん？」

そう振り返らず後ろに入るであろう男に話しかける、龍士の方も男の背丈、危機感知はどれくらいなのかはだいたい把握できた

龍士「あそうだ、そういえばあんた」

男はその続きがあると思ったのだろう、その場で瞬きをしてしまった、そして目を開くと目の前にはこちらに向かつて飛んでくる机と散乱した資料やペン等が男の方に迫っていた

？「！」

男はそれを屈んで避ける、するとまた目の前に拳が現れる、それを横に避けると風圧が顔にあたり目をつむりそうになるがまた顔に脚が迫る、それを腕を盾にして防ぐと吹っ飛ばされ壁に叩きつけられた
？「っ！」

そして目の前に目を限界まで開きさらに血走っており歯を噛み締めながらこちらに拳を振り下ろそうとしている龍士が目の前にいた

――謎の男――

それをギリギリで避ける、すると龍士の拳が壁にめり込むと壁にひびが入りそれが部屋の端にまで入っている、そして龍士はそのまま逆の手でバツクブローに移りそれも男は避けまた壁にひびが入る、そしてまた龍士はまた拳を振り抜くがそれも避けられ男は体制を立て直した

？「驚いた、司令以外にこんな人がいるなんて」

龍士「うろちよると、すばしこい奴だ」

そう壁から手を引っこ抜き相手を睨み付ける、体は細いが反応がい

いし龍士の攻撃にも対処してた

龍士「まあ取りあえず、腕へし折って連れてくか」

そうドスを聞かせて男に突っ込む、ストレートを放ちそれを避けると男が手が出てきた、男の手刀が龍士の顔に吸い込まれる、だがそれを見た龍士はその腕を掴み捻り上げようとする、それを男は振りほどき下がるが龍士が接近し腕を絡めとり後ろに捻り上げる

?「っ!」

そしてそのまま相手の後ろに行き脚に軽く蹴りを入れ膝をつかせ、そしてそのまま逆の手で頭を掴み膝蹴りを食らわせようとするが男は捻りを解きそこから逃げ出す、龍士は追撃に蹴りを放つが男は手でそれを受け流した、男は直ぐ様脚払いをし龍士の体制を少し崩させ後ろに下がる

龍士「ち」

そして龍士は姿勢を建て直し男にジャブを放った、男はそれを避けると龍士は拳を引っ込め腹に左のブローを放つ、男はまたもや後ろに跳び体を浮かせ下がる、すると龍士の口元が歪み微かな笑みが溢れた、龍士は大きく一歩踏み出し男の懐に入る

? (しまった!)

そしてそのまま崩拳を放った、男はそれを見て腹に腕を伸ばしギリギリで塞ぐ、だが完全には止められず腹に腕越しに衝撃がきた

?「っ!」

男はそのまままた壁に叩きつけられる、そして龍士はすかさずそこに追撃を入れ拳が男の腹に突き刺さる、その時その男から煙が出て龍士の周りを覆い尽くす、そして晴れて出てきたのは自分の拳がめり込んだ丸太があった

龍士「あ?」

龍士はそれを不思議そうに見つめるが前屈みになっている体を起こし後ろを振り返る、そこには男が手をぶらぶらさせながら立っていた

?「驚いた、体術の心得もあるとは」

龍士「忍者見てえな事できんのか、兄ちゃん」

? 「それは残念ながら言えません」

龍士「そうか?今の身代わりの、術?とか言うんじゃないのか」
他愛のない話をしながら龍士は歩き近づいていく、男は構えこちらを睨んでいるが若干焦りがあるのか額に汗が出てき始めた、そしてある程度近づくと龍士が一気に駆けだしてきた

? 「!」

男は龍士が近づいてくると裏拳を放った、龍士はそれを受け止めその腕を掴み捻り上げようとする、緒川はそれを解き腹に蹴りを入れようとする、龍士はそれを防ぎ逆に腹にブローを放つ、男はそれを腕で押さえつけ止めると直ぐに反撃の肘打ちを放つ、すると龍士が消えた

緒川 (な!?)

いきなりの事で思考が停止しそうになるがそんな事を考えている暇等なかった、突然後ろから寒気がした

緒川 (後ろ!)

荒羅流 狼影

後ろを振り向くとそこには姿勢を屈めている龍士がこちらの喉元に手刀の突きを放っていた

荒羅流 浪影 喉刈

緒川はそれを当たる寸前で避け後ろに飛ぶが当たったのか緒川の頬には大きな切り傷が出来てしまった、何とか着地し龍士を視界に収める、そして頬の血は徐々に赤くなり血が溜まりそれが頬を伝って落ちていく

龍士「驚いた、喉刈を避けるなんて、ホントになにもんなんだ?」

? 「…」

男は黙ったまま頬に垂れている血を袖をで拭った、そしてその袖をチラリと見るが直ぐに龍士の方を向き警戒する

龍士「綺麗な顔を傷つけたのは悪いな」

? 「…」

龍士「だんまりか…まあいいがお前さんチャカは使わねえのか?」

? 「…」

男はその言葉を聞いても動じなかった、だが龍士はその胸元にあると確信していた理由があった

龍士「少し左に重心が片寄ってるな、よく銃を携帯してる奴がやる癖だよ」

? 「…」

ただそれだけ、ただそれだけの理由だそんなの確定ではない、だが龍士は自分の勘にしたがいそれだと迷わず口にした、男はそれを聞き自分の胸を見る、どうやら迷っているようだ

龍士「こないのか？」

素晴らしい放ち男に向かって駆け出す、そして男は直ぐ様懐に手を伸ばしこちらに銃を向けた

龍士(弾丸避けるのは難しいことではない!懐に入ればこちらのもの)

そう心の中でいい放ち足を止めない、そしてその男の銃から弾丸が放たれる、だがその弾は龍士の横を通りすぎる

龍士(あ?何処狙って…)

その次の瞬間龍士の動きが止まった

龍士「!?!」

龍士も何故止まったのか知らない、だが一つだけ心当たりがある、後ろを向くと龍士の影が写っている地面に弾がめり込んでいた

影縫い

? 「…」

男は安堵し大きく息を吐く、龍士の方は何をされたのか分からず目を血走らせ無理やり動こうとしているが思うように動かない

龍士(なんだこりあ!?)

まるで金縛り似合ったかのように動かない、そう困惑している龍士を無視し男は銃をしまった

龍士「て、てんめえ」

大きく目を見開き血ばらせ歯でくいしばりながら男の方を睨みつけてくる、こんな奴影縫いでなんとかなったがまともにやっていたら時間がかかっただろう、これ以上長いすることは出来ないので取り合えず窓から出るしかない、カーテンを開け窓のカギも開ける？（一刻も早く離れないと、彼のことも気になるが今は司令に報告しないと）

イレギュラーは発生したが情報は得た、これ以上余計な事にならないように早めに去らなければ

ピシ

? 「?」

そう考えていると何かにひびが入る音が聞こえた、何の音かとふと思い後ろを振り向くとそこにはこちらに迫る革靴の足が見えた

? 「な!?!」

龍士「ガアアアアア!!!」

油断していたためかそれをまともに喰らい壁を突き抜け外に放り出された、龍士は蹴り終わった動作で止まっているが少しずつ動いている、そして地面に足を叩きつけひびを入れると何故か動くことのできた

龍士「あいつは?」

突き破った所に顔を出し外を見る、そこには誰もおらず瓦礫だけが積み重なっていた

龍士「何処に行きやがった?」

そう地面を何度も見渡すがさっきの男は何処にも見かけなかった

龍士「取りあえず不味いな、さっさと出るか」

こんな場面誰かに見られたら言い訳のしようがない、取りあえず男が見ていたであろう資料を持ってその場を後にした

龍士「こここれぐらい離れればいいのか」

後ろを振り返りながら尾行されてないか警戒しながらビルの屋上

から裏路地に降りた、そして直ぐにそこから出て街の人の中に紛れる、そしてスマホで撮った資料を眺める、今手元にあるがなるべく不思議に思われたくない

龍士（…廃墟の病院に物資を送ってる、さっき聞いたな）

ノイズにより廃墟となった病院に何やら物を送っているようだ、その紙には場所も記載されているようだ

龍士（…行ってみるか）

龍士は勝又に現状報告が済んだ後、下調べをしたら行くことにした

蹴り技と無手勝流

翼「緒川さんが怪我を!？」

弦十郎「ああ」

二課の指令室で告げられた事実には皆は驚いた、そして周りの者を代表して出てくるかのように翼が一番に声を出した

弦十郎「彼女たちの動向を探っていた緒川が何者かに襲われてな、何とかそこから逃げ出したが怪我をおつたらしい」

奏「具合は?どんな感じだ?」

それを聞いた弦十郎は野々宮の方を向くと野々宮がカルテを取り出し奏に渡す

野々宮「肋骨が数本割れている上に腕の筋を痛めています、今は病院で養生してるようです」

奏「誰だ、緒川さんに怪我させたのは」

翼「あの緒川さんが怪我をするとは、何者ですか?」

弦十郎「わからないそれを調査したい所だが今はFISの動向を探る方が先だ、緒川の方でアクシデントは起こったが緒川のおかげで彼女たちの場所と思わしき場所も絞りこめた」

その言葉の終わりと同時に指令室にあるモニターが起動し町の地図が表示される、そして一か所に赤い点が記されていた

弦十郎『と言うわけだ、今日の五時頃に指令室で打ち合わせを行いたいので来てくれ』

峰「わかりました」

峰はその知らせを聞いて峰は端末を閉じるとその画面に映されていた弦十郎の顔が消える、それをポケットにしまい厨房に戻る、そこには白いエプロンと三角頭巾を着ている未来がカウンターの片づけをしていた

未来「もしかして司令さんから?」

峰「ああ、今日の夜に出撃するからその打ち合わせをしたいんですけど」

皿を洗い出し後片付けを始める、指定された時間は五時で今はもう三時半だ、今から片づけをして仕込みをすればいい時間帯になるだろう

峰「と言うわけで今日はここまで、片づけ終わったら帰っていいよ」

未来「いえ、仕込みも手伝います」

カウンターから持ってきた皿などを持ってきてそれを峰に渡す、未来はその間に仕込みの準備に取り掛かる

峰「別にいいのに」

未来「私がしたい事なので、大丈夫ですよ」

峰「ははほんとに気が利く子だな、将来いいお嫁さんになるよ」

未来「よ、よめ!」

それを聞いた未来は顔を染め調理器具を落としてしまいそうになる、峰の方は皿洗いに集中しているのか気づいていないようだ

未来「も、もう!変な事言わないでください!」

峰「誉め言葉だよ、正直将来の嫁さんは未来ちゃんみたいな人がいいな」

自分はこんな性格だから色々迷惑かけるような事になるだろうし、未来ちゃんのような人と結婚する事もありかもしれない

峰「まあ例え話なんだけど」

少し笑いながら未来の方を向く、そこには顔を真っ赤にして目をぐるぐる回している未来がその場で固まっていた

未来「峰さんの、嫁、嫁」

峰「み、未来ちゃん!?大丈夫!」

自分の発言に自覚がない朴念仁は皿洗いを一旦やめ未来に近寄るのであった

クリス「やつと終わったと思ったたらこれだな」

昼で飲食店で食事をしていた齋藤とクリスの二人、いつものように街で遊んでいたら司令の連絡がありそれを聞いたクリスが愚痴を溢していた

齋藤「気になるのか、ノイズを操っている理由を」

クリス「そりゃ、まあな」

フォークでハンバーグを刺し口に放り込む、多少、いやかなり汚い食べ方をしているせいかわりとテーブルがすごいことになっている、齋藤はやれやれと思いつながらティッシュを取り出しクリスの口回りを拭き取っていく

齋藤「ほら汚いぞ、綺麗に食べるっていつてるだろ？」

クリス「つくむ、いいだろ別に」

齋藤「よくないって、ああまたこんなに汚して」

テーブルも拭いていきそれを別の紙に包む、相変わらず汚い食べ方だったがいつもの事なので齋藤は慣れたのか手際がよくなっている

齋藤「そもそも連中が何で行動してるかだ、ましてや全世界に喧嘩を売るなんて……」

クリス「さあな、けどこれ以上好きにやらせるわけにはいかねえ、例え理由が何であろうと止めるだけさ」

齋藤「その言い方、クリスらしいな」

クリス「そうか？」

そうフォークを口に加えたまま不思議そうな顔をして齋藤の方を見た、齋藤はその光景が可笑しく思えたのか笑ってしまう

クリス「な、なんだよ」

齋藤「いやなに、クリスって相変わらず可愛いなと思ってよ」

クリス「ば、馬鹿！何言ってるんだ!？」

頬を赤らめながらテーブルにつき立ち上がり齋藤の方を睨み付けるが照れているのがバレバレなのか逆にそんな様子が可愛らしかった

齋藤「まじ可愛いよ、そういうとこ」

クリス「か、かつか!？」

クリスをからかうのが好きになったのかいつの間にかからかい上手になった斎藤は笑いそれを見たクリスは斎藤に詰め寄りまた照れ隠しの言葉を彼に浴びせていた

そして響たちはある廃墟された病院に來た、緒川が掴んだ情報ではここにあるヤクザの事務所が物資を横流ししているという情報を掴んだのだ、皆は顔を見合わせるが翼と奏は何故だか浮かない顔をしている

響「気になりますか、緒川さんの事」

奏「そりや気になるさ、緒川さんって強いんだよ？」

翼「私に影縫いを教えてくれたのは緒川さんなんだ」

斎藤「え？ そうなの？」

翼「緒川さんは忍者の末裔なんだ、實力もありそうやすやすとやられる人ではないのだが」

峰「……」

それを聞いた峰は下を向く、それを気にかかった斎藤は話しかける
斎藤「どうしました？」

峰「いや、なんでもない」

そう皆で歩く中峰は頭を振る

峰（…まさかね）

翼の師匠であり實力もある、そんな人に怪我をさせるほどの

人物は一人心当たりがいるが管轄が違う組の筈だと思いいその考えは否定した

クリス「まあ取りあえず入ろうぜ、犯人探しは今度やればいいだろ」
翼「：そうだな」

いつまでもわからないことを考えるのはよくない、後回しにし病院に近づくと、暗くてよく見えないが病院は色が抜け落ちており若干ひびも入っている

齋藤「こんなにでかい病院がどうして」

真沙武『ノイズのせいさ、ここも発生源の近くだったらしくて医者も患者もほとんどが殺された、それで噂がたつて潰れたって所かな』
響「そうなんだ：」

峰「まあノイズに潰された所なんて、数えるだけ無駄でしょ」

ここの病院だけじゃない小さな老舗何か合わせたらどれだけあるのかもわからない、災害とはそう言うものだ、いつ何処で現れいつ消えるのかを知らずただ力だけを示すだけの存在、生きている訳ではないただ自然に起きるだけの仕方がない事として数えられる、ノイズもそれに該当するがあれはそもそも知性がない生き物に等しいだけの存在だがふらりと現れるのは災害と同じ、どちらに該当するのかよくわからない

齋藤「にしてもほんとに厄介だな」

出雲「そりゃ何処から来るのかもわからないからね」

峰「!？」

その声をする方向に全員が振り替える、そこにはあの会場にいた二人の男が立っていた

来栖「天災とは気まぐれ、それに襲われて困るのは致し方ない事だ」
齋藤「なに言ってるやがる、ノイズ操る連中が言うことじゃないよな？」

出雲「ははは、耳が痛い」

一人は頭をかきながら二人は近づいてくる、全員が身構え始めるがそこに峰と齋藤が前に出た

峰「女の子たちは？」

来栖「中にいる、我々が相手をするのはその二人だ」

そう腰から刀を抜きこちらに向ける、どうやら峰たちをご所望のよ

うだ

峰「…いつて皆」

響「で、でも」

峰「こいつには借りがあるし、それにシンフォギアの相手はシンフォギアの方がいい」

斎藤「そうだ、それに相手は俺らと戦いたいらしいしね、クリスも行つてやつて」

クリス「け、けどよ、装者は見たところ三人だけだったし、ここに一人残つて援護も…」

峰「人数もよくわかつてないのにその考えは危険だよ、ここには二人しかない、不安が強いし四人で行くべきだ」

確認出来ているのは装者と彼ら二人を合わせて全員で五人だがそれ以上ないとも限らない、それに二人は個人的な事もある

斎藤「そう言うこと、ね？」

そうクリスの頭に手を置き軽く撫でる、少し不安顔だったクリスもため息をつきその手をはね除ける

クリス「無茶すんなよ、絶対だぞ！」

斎藤「任せろつて」

そう笑顔で答える斎藤、クリスはそれを聞くとため息をつくが仕方ないと頷いた

翼「それでは、ここはお願いします！」

奏「油断すんなよ」

そう四人は病院の方に向かい影の中に消えていった、それを見送つた二人は視線を相手に戻す

出雲「よかったのか？六人がかりだったら楽勝なのに」

峰「ちよつと怪しすぎたんだな、何でこんな所に二人だけなのか」
こちらに声をかけたという事はこちらが見えており人数はわかっていた筈、なのに奇襲するわけでもなくただ声をかけただけなのが気にかかった、峰が問いかけたその疑問に来栖は少し嬉しそうにしながら答えた

来栖「たいした理由ではない、ただ邪魔はされたくなかったんだ」

峰「俺らが残るのを予想したのか」

来栖「いや、だが私が頼んだら受けてくれそうな男なのでな、二人じゃなかったらそうした」

峰「めんどくさ」

そう返すと来栖と出雲が左右に別れる、二人は目線を合わせるが直ぐに戻し同じように別れる、相手と間を空けながらついていく

来栖「自己紹介がまだであつたな、来栖 一花だ」

峰「峰 孝だ」

来栖「さて、前の続きをしようか」

峰「……」

立ち止まりお互いに構えた、夜の月日に照らされ刀身が不気味な光を帯びている

出雲「来栖さんもやる気だね」

そう二人を見ながら頭をかく出雲という男、そして視線を前にいる斎藤の方に戻す

出雲「そういや兄ちゃん、名前は？」

斎藤「斎藤 護」

出雲「おれ出雲 淳ってんだそれじゃこつちも……」

腰を下げ左足を少し前に出し右足を後ろに、左手は下げ右手は胸の前に出すし顎を引く、斎藤も同じように自身の構えをして睨み合う、夜の風が髪を揺らしその光がお互いの姿を照らし続ける

出雲「やろうか」

その声と同時に相手が駆け出し放たれた回し蹴りを斎藤は受け止めた

——出雲 淳——

斎藤が受け止めた後出雲の蹴りが内蹴りに切り替わった、その蹴りが顔に迫るとそれを避けそれと同時に腹にブローを放つ、だがその脚で踵落としをされその拳が叩き落とされる、そして直ぐに逆の脚で追撃が来た

斎藤「ちい！」

それを腕で防ぐと次に前蹴りをが来る、出雲はそれを手で抑えその

まま逆の脚で回し蹴りを放つ、斎藤は顔に迫るそれを身を屈め避けそれと同時に相手の腹に拳を放つ

出雲「おっと」

相手はそれを後ろに下がり身を屈めている斎藤の頭に蹴りを放つ、斎藤はそれを腕で受け止めるが直ぐ様脚を引き逆の脚で回し蹴りが来た

斎藤「くそ！」

それも腕で受け止めそして掴み脚を折ろうと左肘打ちを入れようとするがそれをさせまいと掴まれている脚を軸に体を浮かせ蹴り上げを行う

斎藤「！」

直ぐに手を離し後ろに下がる、出雲の体は宙を浮き地面に吸い込まれるように落ちていくが当たる前に受け身を取り直ぐに起き上がった

出雲「あんた何か戦い方下手だね」

斎藤「何だと？」

突然の告白、斎藤がその言葉に苛立ちを覚えながらも出雲が先に切り出した

出雲「苦し紛れに攻撃するにしても少し動きが雑だな、あんた体術の訓練とか積んでないでしょ」

斎藤「……」

斎藤のスタイルは喧嘩で積んだ我流だ、斎藤自信は才能はそれほどでもないため動きが多少荒い、そのため攻撃に転じる時が若干遅いし防御する時も自分の視界を隠したりして防御に関しては下手なところが目立ってしまう

出雲「俺の蹴り技も我流だけど訓練とかはしてちゃんと作り上げたんだよ」

そう足を上げその場で蹴り技を連続で披露する

斎藤「何が言いたい」

出雲「まあ要するに、これ以上やると怪我するよって事」

斎藤「それは俺を倒してから吐けよ」

それを聞いた出雲はため息をついた

出雲「…そうするよ」

出雲が駆け出した斎藤はそれを待ち構えると腹にミドルが来た、それをガードしようとするがそのミドルキックが上段に切り替わった

斎藤（はや!?)

それに反応出来ずまともに喰らってしまう、そしてキックを終えると体を捻り後ろ回し蹴りを放なたれそれが顎に当たる

斎藤「ぐ!?!」

顔が左右に揺らされる、そしてそこに出雲の踵落としが頭に迫る、斎藤はそれを腕を上げ受け止めるが出雲は直ぐに切り返し顔に前蹴りを入れた

斎藤「っ!」

出雲「シヤツ!」

斎藤が怯んでいる所に連続蹴りが来る、斎藤はそれを防ぐが完全には防ぎきれず何発か喰らってしまう

斎藤「ぐう!」

出雲「せいやあ!」

そして防御が崩れて空いた所に強めの蹴りが放たれそれが斎藤の腹に突き刺さる

斎藤「がはっ!」

肺にある空気が吐き出され痛み of せい息がしずらくなる、出雲は足を腹に当てたままこちらを見ている

出雲「これ以上やったら怪我だけじゃすまなくなる、やめといった方がいい」

斎藤「……」

苦しそうに顔を上げ相手を睨み付ける、それからは降参の意思が見えず続けると言う意志だけが伝わった

出雲「まだやる気なっ!?!」

それをいい終える前に斎藤が突き刺さった脚を掴み無理矢理引き寄せる、出雲はまた体を浮かせ回し蹴りを放つがそれが当たる前に出雲の顔に頭突きを喰らわせた

出雲「！」

思わず怯み隙が出来てしまう、そしてそのまま出雲にフックを喰らわせる

出雲「ぐっ！」

齋藤「はっ、どうだよ俺のパンチはよ」

地面に倒れている出雲を見下ろす齋藤だが腹に蹴りを入れられたのが辛いのだろうか、腹に手を当てて回復を待っている、その間に出雲は立ち上がり齋藤を睨みつける

出雲「まったく、喧嘩ばかりしてる人は読めないな、けど辛そうだね」

齋藤「ちい」

またも蹴りを喰らったせいも少しふらついている、出雲の方は少し流していたのでまだ大丈夫そうだ

出雲「さっさと終わらせたいし、加減はしねえぞ！」

齋藤「舐めんなよ、こらあ！」

お互いに駆け出し齋藤の拳と出雲の脚がぶつかり合った、本来脚と腕の力は明白だが齋藤が意地を見せお互いに譲らない

出雲「馬鹿力があ！」

お互いに離れそこから攻防が始まった、出雲は距離を詰め脚を狙ったローを放ったが齋藤は後ろに下がりやり過ぎすが出雲はそのまま回し蹴りに移った、頭にせまるそれを齋藤は頭を下げやり過ぎすと相手の背中にパンチを放つが相手はその回し蹴りの勢いを利用し回し蹴りをした足を地面につけ逆の脚で後ろ蹴り上げを放ちそれを蹴り上げる、そしてそのから空きの腹に後ろ蹴りを放つ

齋藤「っ！」

何とか腕を出しそれを受け止めたが姿勢が崩れた状態で受け止めたせいか体が浮き地面に倒れてしまった

出雲「おらあ！」

齋藤「ちい！」

その状態からの蹴り上げの追撃が来る、それを自分の両足で受け止めると蹴られた方に地面にこすりながら飛ばされる、そのまま後ろに

転がるように起き上がり直ぐに起き上がり出雲に接近する

齋藤「おらあ!!」

そのままパンチを放つが出雲はそれを横にスウェイして避け齋藤が横を通り様に脚に蹴りを入れる、姿勢が多少崩れてしまいが負けじとその場で止まり出雲の方にバックブローを放つがそれも頭を下げれ避けられる、そして出雲は飛び膝蹴りを齋藤の顔に直撃させる

齋藤「んぐう!!」

顔にとてつもない衝撃がくると同時に出雲は着地した同時に二連蹴りを顎に入れる

齋藤「っ!?!」

意識が飛ぶ、視界がぐらつき目の前がぼやき始め眠りとは違うものに意識が持つていかれそうになっている、そしてそんな齋藤に追撃をやめず上段蹴りが顔に直撃する

出雲（これで）

そのまま腹に蹴りを、次に脚を軽く蹴り下がった横腹に膝蹴りを入れまた足を蹴り齋藤の体を浮かせそのまま体を捻り腹に強烈な蹴りを入れ吹っ飛ばした、齋藤はそのまま建物に直撃し壁を崩しながら消えていった、その土煙が出雲の周りを覆う

出雲「さて、これで終わりかな」

手で脚の汚れを払いながら齋藤がいる場所を見る、煙でよく見えないが崩れてできた穴から出てきそうな気配がない

出雲「いてて」

体を動かすと殴られた箇所から痛みが走り思わず顔をゆがめてしまふ

出雲「さて、来栖さん所行きますか」

種を返しその場から離れるため歩いていく、周りが土煙で覆われる中歩いていき来栖たちが戦っている場所に向かう、場所は恐らく別の場所で大きな音がしている場所が二つ、そして病院から離れた場所からしているので恐らくそちらが来栖が戦っている場所だ

出雲「あつちは強そうな人だったなく、俺もあつちが相手ならよか
…」

今戦っていた斎藤の評価を考えながら歩いてきた足が止まった、そして安心して顔が一変し目の前を睨みつける、そこには全身痣だらけで血を流している斎藤が立っていた

「斎藤「何処いくきだ？まだ終わってないぞ」

出雲を睨みながら斎藤は近づいていく、血が滴り落ちていく

出雲（おかしいな、骨も折れてまともに動けない筈）

いやそれだけじゃない、彼の目からはかなりの圧を感じ思わず後ろに一步引いてしまう、それになんか彼の背中に何か見える、いやそれが何かはわからないがこちらにも負ける訳にはない、それに状況はこちらが有利だ、あつちは重症こっちは軽傷、心を落ち着かせ冷静に対処すれば大丈夫だ

出雲「落ち着け、何ビビってる」

構えをして相手を待つ、ゆっくりと近づいてくる、その頭から血を流しながら見つめる斎藤を睨みつけながら待ち構える、そして斎藤の脚が止まった、間が少し空いておりあと数歩歩けばもう目の前だ、そんな状態でお互いににらみ合いながら仕掛ける瞬間を待つ、もうそこには土煙が無く夜の月日が周りを照らしていた

出雲「！」

斎藤「！」

お互いに駆けだした、出雲は蹴りを脚に放ち止めようとするが斎藤はそれを飛び越えて避けると同時にこちらに殴りかかる、それを出雲は屈んで避けお互いにすれ違う、雑に着地しながら相手から目を離さず姿勢を立て直す、だがその前に斎藤がその場にあつた瓦礫を出雲の方に投げる

出雲「ち！」

姿勢を立て直す前に相手の攻撃を避けやりすごしたため立て直すのが遅れ斎藤が先に仕掛けた、屈んでいる出雲の顔を蹴り上げようと蹴りを放つ、出雲はそれを手で受け止める、すると出雲の体が浮いた

出雲「な!？」

そのまま手を持っていかれ腹ががら空きになる、そのがら空きの腹に斎藤は拳を振り下ろした

出雲「か!？」

肺から息が吐き出され地面に叩きつけられる、地面に披裂が入りそれが広がり体が地面に埋まる

出雲（馬鹿力があ!!）

そう心で吐き捨てながら斎藤の頭を蹴り上げる、そのまま起き上がり斎藤の腹に蹴りを放ったが斎藤が受け様にこちらに殴りつける

出雲「ぐう!？」

斎藤は怯まず出雲の蹴り飛ばした、出雲はそのまま吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる

出雲「や、やろお」

そう相手を睨みながら腹を抑え立ち上がる、斎藤も出雲の方に走りながら近づいていく

斎藤「あああああ!!!」

出雲「来い!!!」

そうお互いに声を上げながら駆けだしていく、そしてその二人がぶつかろうとしたその時、病院に建物から爆発が起こった

出雲「おわ!？」

その瓦礫が飛んできて二人の進路をふさいだ、さらに続けざまに降り注ぎお互いは避ける事を優先し離れていく

出雲「あぶねえ」

切歌『出雲兄さん！そろそろ時間です!!そろそろ戻らないと帰れなくなりますよ!』

そう耳につけてある無線機から音声聞こえた、それを聞いた出雲は耳に手を当てて聞こえやすいようにする

出雲「時間か…わかった直ぐにそっちに行く」

出雲は瓦礫の中を避けながら指定されている場所に向かう事にした

来栖VS峰

銀色に光る刀身が暗い夜の中で白い線を作りながら空気を切り裂いていく、峰はそれに当たらないように回避しながら自分の空手技を放っていく、そして大きく振られた横一文字を腕を蹴り上げそのまま正拳突きを行いそれを叩き落とそうと刀を持ち替えそのまま振り下ろした

——来栖 一花——

来栖「ふん！」

来栖の刀が縦に振り下ろされる、峰は正拳突きをやめそれを横に避けストレートを放つが来栖が下から斜め切り上げを繰り出したのでそれを後ろに下がり避けた

峰「おらあ！」

そしてまた近づき腹を殴ろうとする、来栖は刀を横に一閃しようとするが腕を止められ出来ず峰はそのまま膝蹴りに移行する

来栖「！」

それを足で止めそのまま足払いをし倒れた所に刀を突き刺そうとする、それを峰は転がり避けると次に避けた先に刀を振るう、峰はさらに転がり避けると直ぐに起き上がり来栖の顔にジャブを放つ

峰「シュ！」

それが来栖の顔に迫る、来栖はそれを空いている手で流すと下げている刀で切り上げる、それを避けられると次に袈裟切り、それも避けられる横に一閃、そしてまた避けられるとそこに突きを放つ、それを峰は避けられないと判断し腕で受け止めた

来栖「なに!？」

まるで金属に当たった振動が腕に響く、それに驚いたのか隙が出来てしまったのかそのまま刀を弾かれ裏拳を入れられ正拳突きが顔に当たる

来栖「ぐぬ!？」

急いで後ろに下がり構え直す、そしてよく峰を見てみるとその腕には銀色の光沢が見えた

来栖「なるほど、ガントレットか」

それを聞いた峰はニヤツと笑い自分の腕をポンポンと叩きそれに答えた

峰「流石に素手だけじゃ戦えないからね、悪いけど使わせて貰うよ」

来栖「なるほど、前より動きが若干鈍いのはそのためか」

峰「ありや、ばれてたか」

来栖「その様子だと脚にも入れているだろう、蹴りも遅かった」

そう頭をかきやれやれと手で脚を叩く、コンコンとする音がそれも答えであった、それを聞いた来栖は笑みを浮かべる

来栖「なるほど、平和ボケした阿呆ではなかったか」

峰「人を阿呆呼ばわりとは、失礼なやつだな！」

峰が駆け出し手刀の突きがくる、それを避けると次は顔の横に裏拳、それを屈んで避けると狙ったかのように蹴りがくる、それを刀で受け止めてそのまま腹を切りつけようとするが逆の腕を出され防がれる

峰「そらあ！」

膝蹴りから入り防がれると正拳突き、それを避けると同時に袈裟切りをする、峰はそれを避け顔にジャブを放ち避けさせた先にまたジャブを放つ

来栖（以外と早いっ！）

それを刀の柄で弾きそのまま切り上げる、峰はそれを避けると次に兜割りが来てそれも横に避けると相手は足首目掛けて刀を振るう、流石に峰も足首までは道具で守れない

峰「おわっ!？」

峰はそれをジャンプして避けると来栖は直ぐに切り上げを行った、峰はそれを見ると腕を下にしてそれを防ぎ勢いを殺したら脚をつきそのまま回し蹴りを放つ

来栖（もらった！）

回し蹴りをしているため背中はがら空き、蹴りを避け背中に刀を振るう、だが峰の方が一枚上手だった、峰は蹴りを終えたとたん姿勢を低くし避けまた体を捻って蹴りを放つ、回転後ろ回し蹴りだ

来栖「な!？」

まともに顔に当たり蹴り飛ばされる、だがそれでも受け身を取り直ぐに起き上がると峰のローが脚に迫る、それを脚を下げ避けるとそこから浴びせ蹴りが飛んできた

来栖「ちい！」

来栖はそれを刀で受け止めるがそのせいで膝をついてしまう、峰は直ぐに姿勢を立て直し連続攻撃を重ねる、左の二連蹴りを放つがそれを刀で防ぎそのまま切り替え内蹴りに移行する、それを刀を回転させ切り落とそうとするが脚にある金属に阻まれてしまう、そこからは腕と脚に仕込んである物を使い刀を防ぎながらの接戦を行う

峰（切り替えや持ち替えて刀の速度を上げてるから中々手が出せねえ、こいつホントに強いな！）

来栖（技量で何とかしているがカバーがあるせいでペースが乱れる、ならば！）

何度か打ち合っていると来栖の刀身が刃の部分だけ一瞬光った、そして来栖が刀を鞘に納めるとそれを見た峰は大きく目を見開き後ろに下がった

峰（不味い不味い!?)

来栖（少し遅かったな）

そして鞘から刀が抜かれる、その速度は今まで打ち合っていた速さの比ではなく一瞬で腕のガントレット事切り裂いた

峰「っ!？」

腕の激痛に顔が歪んでしまうが直ぐに追撃が来たのでそれを腕のガントレットで受け止めようとしたが振られた刀がガントレットを貫き腕の骨にまで達した

峰「な、なんで!？」

来栖「き、金属より硬いのか!？」

確実に腕を持って行けたと思ったのに相手の骨で止まってしまったのに驚いてしまったのかお互いに止まってしまった、峰が先に攻撃を仕掛けた、それを見た来栖は刀を引き抜こうとするが抜けなかった

来栖「!？」

峰「オラあ！」

そのまま来栖の顔に拳が直撃しそのまま頭突きを食らわせ怯ませそのから空きの腹に正拳突きを突き刺す、だが来栖も負けじと刀を引き抜き峰の腹を切り裂いた

峰（雑に動き過ぎた!?!）

峰は来栖の顎を蹴り上げその喉元に手刀の突きをいれる、それに呼吸が止まり怯んでしまい隙ができそのまま上段蹴りを入れ吹っ飛ばす、来栖は踏み止まり峰の脚を切った、それに激痛が走りながらも相手の右手を掴み脚での連続蹴りを正中を貫いた

来栖「ぬう！」

峰「負けるかあ!?!」

そのまま顔を掴みそのまま地面に叩きつける、そのまま背中を下段突きを入れる、来栖も刀を振り峰の脚を切り裂いた、痛みに怯んでしまいがさらにそこに袈裟切りが腹に迫る

峰「っ！」

身を引き何とか回避するが次に切り返しに水平に振られそれを掻い潜りショットアツパーを来栖の顎に放つ、来栖は顔を反らす事でやり過ぎが懐に入られているため刀が振れずそのまま逆の腕で放たれたフックをまともに受けてしまった

来栖「かつ!?!」

そして横に振られた顔に上段蹴りが直撃し鼻から血が出る、峰はそのまま追撃のブローを腹に入れ喉に手刀そのまま首を掴み背中に周りに膝蹴りを連続で放たれた、何かを叩く鈍い音が周りに響くが来栖は苦しみながらも刀を逆に持ち替え後ろにいる峰の腹に突き刺した

峰「いつ!?!」

それに怯み思わず攻撃が止まりその間に来栖は抜け出し峰に刺さっていた刀を抜いた、だが峰も逃がすまいと来栖の脚にローを入れ倒すが腹の痛みに耐えかね地面に倒れてしまう、リズムを刻むように視界がボヤケていく

峰（ち、ちくしよ、痛すぎて動きたくねえ）

脚に二箇所と腕もほぼ半分切られているような上に腹にも穴が開

いてしまった、その激痛で動けなくなってしまうが相手がそれを許してくれなかった、相手も骨が折れているであろうに地面に倒れたまま刀を振るう

峰「くそ！」

命の危機なため痛みには怯んでいる訳にもいかず直ぐに手を押し体を浮かせやり過ぎ、そして手をつき横に転がり起き上がるが峰の顔に刀が迫る、それを腕で防ぐと次は逆の方向から切りかかる、それを掌底を弾き飛ばし来栖の首元に手刀の突きを放つがそれを顔を横に反らし避けその腕を掴みそして刀を峰に振るうがその持っている腕を掴まれ止められた、そしてお互いににらみ合いながら手に入力を入れ続け譲ろうとしない

峰「や、やろお！」

来栖「離さん！」

睨み続け力を緩めない、手を離れたらお互いにやられるだが明らかに負傷がでか過ぎる峰の方が圧倒的に不利だった、腕や脚に力を込めると血が流れていきだんだんと腕に力が入らなくなっていく、これではただの時間稼ぎ、血が足りなくなつた瞬間峰がやられる、心に焦りが生まれどうしようかと悩んでいると突然病院の方で爆発が起こりそれと同時に峰たちの方に病院の残骸が降って来た

峰「うえ!?!」

来栖「なに!?!」

そのため急いで力を緩めお互いにその場から離れる、いつの間にか病院の近くにいたせいかわ礫が多く避けていくうちに相手の姿が見えなくなってしまった

峰「この爆発クリスだな、派手にやりやがって」

服を破り急いで切られた場所に巻き付け血を止めるが流し過ぎたのかうまく動けず近くにある壁に寄り添いその場で腰を付いた、そして少し時間がたち落ち着いたのか周りを見る、来栖と戦っていた場所は瓦礫まみれになり所々に火の手が上がっており病院の方を見ているポツクリと穴が空いてしまっている

峰「あいつは、いないか」

不安が取れたのか安堵のため息を吐き体から力が抜けていく、そのせいかまるで思い出したかのように身体中から痛みがはしりだし思わず声を上げそうになる

峰「っ！いつてえな」

齋藤「峰さん！」

突然声をかけられ思わず悪寒に襲われるが声の持ち主が齋藤だとわかりため息を漏らす、横を見てみるとそこには全身傷だらけの齋藤がこちらに駆け寄ってきた

峰「そつちも随分痛い目にあつたようだな」

齋藤「だ、大丈夫ですか峰さん!? 其処ら中に血が…」

峰「止めたからもう大丈夫、と言っても止めただけだから痛いけど」お互いに疲れたのかその場で座り一息つく、齋藤をよく見てみると腕や脚に違和感がありどうやら折れて変な凸凹が服の上から目立つ

峰「こりやお互い帰ったら怒られるな」

齋藤「でしょうね、どう誤魔化しましょう?」

峰「しない方がいいよ」

齋藤「はい…」

峰「さてと、んじゃ皆の所に急ごう、あいつらが合流したら大変だ」

齋藤「いや、迎えが来るまで安静にした方が」

峰「ならせめて皆が戦況を見たい、そつちの方が安心できる」

そう壁に手をつきながら立ち上がり響たちがいるであろう場所に向かうがやはり傷が効いているのか壁沿いに移動している、齋藤は急いで立ち上がり峰に近づき止めようとする

齋藤「ほら辛いんでしょう? ホントに休んどかないと未来ちゃんに怒られますよ?」

峰「う、痛いところ突いてくるな、けど戦況がどうなってるのかは知りたい」

齋藤「…仕方ないですね、一緒に行きましょう」

峰「悪いね」

峰より怪我が浅い齋藤が峰を支え取りあえず爆発した場所に行くことにした

野々宮「大人しくしてろよ」

ウイル「はいはい、もうしてますよ」

一方響たちは案の定三人のシンフォギア装者を相手していたため四人いるこちらの方が有利でマリアは翼と奏が相手しており切歌と調はクリスと響が連携して対処していた、野々宮の方は共犯だったウイル博士の身柄を抑えその場から離れ潜水艦に連れ帰ろうとしていた

野々宮「よくもまあ簡単に裏切れるもんだ、二人のが言っていた印象と随分違うじゃないか」

ウイル「外面等ただの飾りですよ、こっちの気分しだいで印象なんて幾らでも作れる」

野々宮「そのせいだこっちは苦労したんだよ」

そう身柄を抑えながら敵となるべく距離を開けながら離れていく、響の方は大丈夫そうだがクリスの方は遠距離型なためか押され始めている

ウイル「あらあらこのままじゃあの銀髪の少女、やられてしまいますよ」

野々宮「もしマリアの相手が響ちゃんならなんとかあったかもな、あの子なら多分一人で相手出来るだろうし逆だったらなんとかあった」

ウイル「おや、意外と冷静に見れるんですね」

野々宮「これが仕事何でね」

ただしこれは響が対話と言う形を押し出さない場合の話だ、だがそうなる可能性はかなり低いためそんなに期待できない、けど切歌と調の連携を見てみるとやはり奏と翼が当たった方がいいしその上にク

リスの援護があれば期待が持てるのだが、もう割れてしまっている時点でそれはもうできない

野々宮「さて今のうちに聞いておこうか、何が目的だ？」

ウイル「何がですか？」

野々宮「とぼけんな、あんたらやってること色々無茶苦茶すぎてわかんないんだよ、国家の割譲何てブラフだろうし、あんたら何がしたいの？」

この約束の期限が切れているというのに各地でノイズに襲われた何て話は何処にもなかった、ノイズを使うというのもなかったし外国でも特に目立つような出来事はない

ウイル「世界を救うんですよ、文字通りね」

野々宮「それはどういう意味で？」

ウイル「それはまあ、楽しみにしててください」

ウイルの余裕そうな顔に思わず舌打ちをしてしまい顔を渋らせる、思はずその顔を殴りたくなってきたがそれを優先する前にまず捕まえておく、そしてその場で大きく深呼吸し前の戦況を見て目を尖らせる

野々宮「まあいい、事情は後で」

それを言おうとした時何故か視界がぶれ体が浮かび上がった、ウイルを見下ろす形になりそのウイルの顔も拍子を付かれたような顔をしており何故浮いているのかと疑問に思いさつきから違和感がある腹に目をやるとそこには、何か鋭い物が血まみれになりながら野々宮の腹から出ていた

野々宮「か、あ？」

ウイル「え？」

響「野々宮さん!!」

響たちの方も手を止め野々宮の方を見ている、いや正確にはその後ろにいる存在を見ている、その影は野々宮から爪を引き抜き響たちの方を見つめる、その顔は鰐のように尖った頭をしいおりまるで機械のような鱗のような物で覆っていた

? 「キ””シ”ヤ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア

”!!!!!!”

その存在が大きく口を開け無数の歯を見せながらその場で雄叫びを上げた

アンノウン

? 「グ”ル”ル”ア”ア”アア””””ア!!」

天に向かい吠え自分の存在をこれでもかとアピールする、顔と共に上げられている腕は丸太のように太く不気味に生えている結晶で隠れてはいるがその隙間からは機械のような金属やコードがうつすらと見えている、脚も体もゴリラよりもでかく身長は軽く2mを越え手や口から生えている爪や牙は綺麗な程尖っている

? 「グ”ル”ル”ル”ル”」

野々宮「ゴホツ! ツ!」

その直ぐ隣で野々宮が貫かれた腹を抑えながら口から吐血をし始める、それを黄色の眼光が目ギラギラさせ野々宮を見下ろしていた、そしてしばらく見ているとそれは歩きだし野々宮の隣に来て地面に手をつき口から涎を滴しながら野々宮の腹に顔を近づけた

? 「グア””ア”」

目が三日月のようになりまるで笑っているかのように喉を鳴らしている、そしてその口を大きく開け野々宮の腹に迫る、垂れた涎が地面に当たると溶けるような音が聞こえそれが不気味なりズムを刻みながらそれが野々宮に当たろうとした時、突如竜巻が謎の生き物を襲った

LAST∞METEO

奏「野々宮!!野々宮あ!!?」

野々宮の側に奏が駆け寄る、怪我をしているので体は揺すらずただ側に寄り声をかけてやる、腹に激痛がありうまくしゃべれないのかうめき声をあげ固まっているが辛うじて生きているようだ

? 「:」

謎の生き物の方は竜巻をまともに食らったにも関わらず手を下げ膝を折り若干前傾の姿勢でその様子を見守っていた、さっきの三日月のような目は消えたただ奏の心配の声だけが響いていた

響「な、何あれ?何が起こって?」

いきなりの事で奏以外の全員はその様子を見ていた、響の方は目の

集点が合わず体を震わせながら血だらけの野々宮を見ている、腹から出ている血がどんどん広がり野々宮の方も瞳孔が開き始めだんだん動かなくなっていく、奏の方は何とか腹を抑えながら必死に無線機に助けを求めている

奏「早く来てくれ!!野々宮が、ホントに死んじまう!!!」

弦十郎『医療班何してんだ!!早く向かえ!』

さくや『護衛は緒川さんがついてくれるから早く行って!!』

葵『駄目です!波形反応無し!ただ微弱ですが特殊な電磁波が出ており温度もあるため熱源にもひつかかるようです!』

さくや『他のデータで電磁波とサーマルから得た情報を元に解析中、風神さんも手伝ってくれてます』

弦十郎『翼は回収班の場所を確保しろ、響君たちはその謎の生物を警戒して:』

クリス「おいバカ右だ!!!」

響「え?」

あまりにも情報量が多すぎてその場で唾然としながら聞いているとふとクリスの声が耳に入った、言われた通り右を見るとあの生物が大きく上げた腕を爪をたてながらこちらに振り下ろした

???

反応が遅れながらもそれを後ろに下がり回避する、相手は爪を高速で振り回しながら響に攻撃をしていく、凄まじい速度を出しながらその爪が空を切っていく

響「とりゃ!」

響もお得意の拳法を使って攻撃を加えていくがまるで聞いておらず響の攻撃を自分の攻撃で押し伏せながら迫っていく、相手の突きを響は腕を当て反らしその間に腹に崩拳を入れるがそれも倍に前蹴りで返された

響「かつ!?!」

体が浮かび上がりそのままフックで吹っ飛ばされ瓦礫に叩きつけ

られる、相手は目を尖らせ響を睨み吠えながら響に向かって跳躍した、そのまま爪を前に出し響を貫こうとするがその飛んでいる最中にミサイルと銃弾の弾幕がその生き物に直撃する

クリス「おいバカ！大丈夫か!？」

響「ううつ」

腹を抑えながらうづくまる響だが何とか立ち上がろうと壁に手をつきながら起こそうとする、クリスはその様子を見て爆煙の中心を見てみると煙を突き破りながらクリスの方に走ってきた

? 「ガ””ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア!!」

クリス「ちい!」

弾幕を張るが直撃しているのにそれを突っ切りながらクリスに迫っていく、クリスは後ろに引きながらも撃ち続けるが相手の方が早く距離が縮まっていくがその生物に槍の嵐が降り注ぐ

STAR DUST ∞ FOTON

小高い金属音と共にそれが謎の生物に当たるが表面が固すぎるせいか貫けず当たった槍は地面に落下していく、するとその槍が消えるとアンノウンの後ろに奏が現れ槍の先端を猫背になっている相手の背中につけた

奏「死ぬ」

FOTON ∞ BURST

槍が展開しその先端から稲妻が走りそれが光となって相手を包み込んだ、そして槍を大きく回しそのままもう一発風払いながら叩き込んだ、目映い光と共に爆風が起こり小さな瓦礫が風に乗って響の顔に叩きつけようとす、それを響たちは腕を前に出して防ぎそれが静まるまでその姿勢で固まっていた

奏「はあっはあっ」

肩で息をしながら目の前を睨み続ける、爆風によって舞い上がった塵が煙となり回りを覆っている、それが薄くなると煙を切り裂きながら奏の前に傷一つない怪物が現れた

? 「グ”ヴ”オ”ツガ”ア”ア”ア”ア!!””””!!!」

奏「くそ！」

槍を怪物に叩きつけられるそれを気にせず爪を立て切り裂こうとする、それを屈んで避けるが直ぐ目の前に怪物の脚が現れ奏が蹴とばされた、壁に叩きつけられそこに追撃の突きが迫りそれは横に転がり避け槍で突くがそれを腕を振り払うかのように弾かれその後直ぐにまた爪で切り裂こうとする、怪物の攻撃を避け隙あらば攻撃を加えるが効いておらず押され気味になっていく、それを切歌と調を見ている

切歌「な、何ですかあれ？」

調「わ、わからない、けどドクターは回収出来た、早く引き上げよう」

ウエル「そうですね、あれが何であれこちらに飛び火が来たらたまりませんね」

すると上空から突然飛行機が現れそれからロープが垂れ下がりそれに三人は掴むと引き上げられヘリに搭乗する、三人は怪物の相手で一杯でとてもじゃないが追うこと等出来なかった

クリス「くそがあ全然効いてねえなんだこいつ!？」

響たちが相手をしている時に援護して当てているのだが効いている様子がまったくない、響たちにかんしても打撃は確実に入っているのにそれを気にする様子も見られない

響「きや！」

高速で振られた爪の攻撃が腕に付いてあるハンマーに当たりその当たった部分が抉り取られ欠けてしまった、部品が当たりに散らばり片腕のギアが使えなくなってしまった

奏「化け物が!!」

クリス「くたばれ！」

怯んでいるクリスと響をカバーしながら下がりが相手と距離を取る、だが相手もそれを許す訳がなく距離を詰め手を広げこちらを切り裂こうとする、奏はそれに対処せずただ大きく後ろに下がった、すると化け物のいる所に大きな影ができる

? 「クル?」

何かと違って上を見るとそこには巨大な剣がありそれが化け物に

クリス「先輩気をつけろ！こいつは！」

翼「わかっている、にしてもこの固さまさしく鋼鉄、私の剣も届かないとは！」

？「ガ””ア””アアア”ア”ア””ア””!!!」

身体能力に物を言わせた高速連撃が放たれそれを二人で受け流す、だが攻撃が効かない事がわかっているのか二人は攻めず大きな攻撃が来たら下がりやばそうな時はクリスが援護して隙間を作る

響「や！」

そうしていると響が怪物の横腹に体格を生かした高速連撃を入れるがうつとおしく感じたのか目が広がり血走っており響にも負けな速度の一振りが響に迫る、それを避けようとそれを潜り抜けたがその腕が直ぐに響を追撃し瓦礫に叩きつけられた

翼「な!？」

奏「まず！」

怪物が目標を変え響に駆けだした、直ぐに二人は駆けだすがあまりのスピードに追い付けず一瞬で響との距離が詰められてしまった

？「ア””ア””ア””ア””ア””ア””ア””””!!!」

響「うう」

ダメージがかいかいのかうまく立てず構えようにもうまく出来ない、怪物は目を血走りながら響に腕を振り下ろした、響はそれを腕で流そうとしたが怪物はそのまま前に進みタックルで響を吹っ飛ばしそのまま腕をまた振り下ろし地面に叩きつけた

響「かはっ！」

？「グアアアアア!!!」

翼「追撃も早すぎる！」

奏「クリス！」

クリス（くそ、間に合わ！）

怪物の追撃が早すぎて三人の対応が間に合わなかった、その拳が響に突き刺さるとした時怪物の顔が歪んだ、姿勢が崩れ拳が止まり横に少し飛ばされる、そしてその顔の横には峰が怪物に向けて蹴り込んでいた

斎藤「おらあ！」

その次に斎藤が腹に飛び蹴りを入れる、怪物は姿勢が崩れていたため吹っ飛ばされるが両足で着地し地面に爪を立てブレーキをかけ蹴飛ばした二人を見る

? 「グギユル？」

峰「まったく、こっちは大怪我してるってのにこんな奴が相手かよ」
斎藤「いてて、くそ脚やってるのに蹴りは不味かったかな」

二人とも怪我をしている場所を抑え響と怪物の間に立ち睨み合う、だが状況はそこまでよくはなかった

峰（固すぎるな、筋肉もでかいしこんな腕じゃ間接技はかけられないし）

斎藤（俺の攻撃で当たるのに皆の攻撃が当たらない訳ないよな、固くて力も強いってとことん脳筋特化かよ）

二人は何となく一撃入れた事で何となくわかった、あの怪物は恐ろしく強い、そんな怪物はこちらの様子を細い目で見ながら体を起こし叫び声を上げながら突っ込んでいった

? 「キシヤアアアア!!」

峰「来るぞお!!」

斎藤「ちつくしよ！」

手から繰り出された突きを潜り抜け腹に二発正拳を入れるが特に怯みもなく逆の手で来たショットアッパーが来た、だが斎藤がその前にジャンプして顔に蹴りを入れそれを中止させた、それを受けた怪物は斎藤を地面に叩きつけた

斎藤「っ!？」

クリス「斎藤！」

クリスも弾幕を張りその間に峰が斎藤を担ぎその場から離れる、それを逃すまいと弾幕を受け止めながら追撃しようとするが背中に響の拳が突き刺さった

響「はっ！」

そのまま引き伸ばしていたハンマーを打ち込まれる、相手は少し後ろにくの字に曲がりそこに翼の技が放たれる

蒼ノ一閃

大剣から繰り出されたその斬激波は怪物に直撃した、そして直ぐ様その大剣を相手に向かつて蹴り放つ

天ノ逆鱗

その大剣が怪物がいるであろう場所に向かっていき何かぶつかった衝撃で衝撃波が起きた、翼は空中で蹴った後の反動を流しながら地面に着地した

翼「立花！峰さん！逃げるぞ！」

響「え？」

翼「正直今は打開策がない！ここは一旦引くしかない！」

峰「それ賛成、ほら速く」

響「え、えつと、はい！」

あれだけ攻撃が直撃してるのに目立った外傷が無い、クリスの射撃も翼たちの攻撃も正確な筈なのにそれをまったくものともせず突っ込んでくる、しかもスピードも速く威力も強いので接近戦に持ち込まれたらほぼ終わりだ

翼「やはり無傷、理不尽な！」

逃げている時に後ろを振り返るとそこにはまたもや無傷の怪物がこちらに向けて目を光らせながら見ていた、そして案の定こちらに突っ込んでくる

奏「ああもううぜえなおまえ!!!」

クリス「静かにしとけ！」

二人が応戦するが攻撃が効いておらずクリスは壁に殴りつけられ奏は槍の攻撃ごと叩き伏せられた

クリス「かつ!？」

奏「っ!？」

響「クリスちゃん！奏さん!？」

峰「っ!!」

迫りくる怪物を峰が変わりに相手をする、地面を蹴り上げ相手に土を浴びせ一瞬視界を奪う、その間に脚にを掴み救い上げバランスを崩させる、怪物は何とか手を付き倒れないようにしたがその後頭部に峰の踵落としが直撃する、そのまま追撃の下段突きを入れ顔をめり込ませる

? 「ガアア!!!」

すぐさま頭を抜き後ろに向けて爪を振りかぶる、それを飛び越え顔に軽く蹴りを入れ怪物の目の前に移動した、怪物も前にいる峰に向かって両手を広げ襲い掛かるが峰は片方の手を掴み合気を使い横に流したがすぐさま後ろに向かってバックブローを放ち峰の追撃を止める

峰（まだ使うには日が浅いか!）

直ぐに後ろに下がりやり過ぎ次に怪物の突きがくる、それを横に少し動くと同時に相手の顔に上段蹴りを入れる、怪物が右手の爪が峰の腹に迫りくるがそれを両腕を使って受け止めると腕に激痛が走る

峰（重い!）

顔にジャブを入れるが体の結晶に当たり手に痛みが走る、それにより隙が出来てしまい体を掴まれる、振りほどこうとするが振りほどけずそのまま持ち上げられる、怪物は品定めをするかのように峰をしばらく見ると口をゆっくりと開いた

峰（あ）

背中に寒気が走り怪物の口を見る、綺麗に鋭い歯が並んでおり下顎には長い舌があった、それがどんと近づいてくると自分の横を通ると肩に激痛が走った

峰「あああああああああああ!!!?!?!」

怪物が峰の肩に噛み付いた、肩からは血飛沫が吹き上がりそれを嬉しそうに噛み続けそれにもない峰が苦しそうに声を上げながら怪物の手の中でもがく

峰「がっ!?!いいい!あああああああ!!!?!?!」

斎藤「峰さん!!」

斎藤と響たちが気を引き付けようと攻撃しているがそれを気にせず峰の肩を噛み続ける

斎藤「くそが離せよ!!」

響「峰さん!!」?

峰「いいっあっ!!」?

攻撃し続けるがそれでもやめず峰の肩に噛み続ける、全員顔に焦りが生まれがむしやりに攻撃を続ける、峰の方も意識が飛びかけたんだん暴れなくなっていく気を失おうとしたその時、誰かが怪物の両腕を引きはがし肩から顔を引きはがした、怪物は驚き後ろに引かれるように下がっていくとその掴んでいるであろう人の顔が瞳に映った

弦十郎「…」

翼「叔父様!?!」

?「グルア!!」

怪物はその掴んでいる手を取ろうと腕を伸ばすがその手が空を切った、弦十郎の方はその場で腕を引き力を込め始めた、筋肉が少し肥大化し血管が浮き出てきた、そしてその腕に込めた力を怪物の背中に叩きこんだ

弦十郎「せりゃ!!」

怪物はその場から吹っ飛ばされ瓦礫の壁に叩きつけられる、弦十郎の方はその場で残心を行い軽く息を吐いた

斎藤「す、すげえ」

自分たちがよってたかかって攻撃しても傷一つつけられなかった奴をたった一撃で黙らせた、司令官にふさわしい判断力と知恵に武闘派にまさるとも劣らない力量だ、斎藤はゆっくりと怪物がいるであろう場所を見る、瓦礫に衝突して土煙が上がりよく見えないが弦十郎はそこから目を離さないのを見るとどうやら終わってなさそうにそれ回答えるように怪物が煙から出てきた

弦十郎「良いのが入ったと思ったのだが、やはりそう簡単にはいかんか」

?「……」

怪物はその場から動かずただ弦十郎を見ていた、弦十郎も相手から

目を離さずいつでも来ていいように警戒を行う、だが怪物の方からは動きが見えなかった

斎藤（な、なんだ？動かねえぞ？）

弦十郎（不気味な奴だな）

怪物は爪をゆつくりと地面から引き抜き前傾の姿勢のまま二人を見続ける、さつきまでの荒々しい様子と違いまるで品定めをするように目を細め顔の表情も変えずじっとしている

斎藤「な、何だよ、用がないなら帰…」

帰れ、そう言おうとしたとき怪物の腕が動いた

「[!:]」

直ぐに動けるように構えた、奏たちは怪物の後ろに峰たちその場で構える、怪物はゆつくりと腕を上げその状態で握り拳を作り力を込め始める、腕が太くなり怪物の腕が震え始めた

峰（な、なんだ？あの距離から何しよう…）

？「グ”ル”ア”ア”ア!!”」

その力を込めた拳を自分の真下にある地面に向けて解き放った、あまりの威力により出てきた衝撃波で塵が上がりさらに暴風が巻き起こった

斎藤「おわっ!!」

響「わ!?!」

奏「しっかり目を開けろ！翼！」

翼「わかってる！」

そう言うと二人は背中を合わせ警戒する、クリスの方は距離を取って高い所に移動し煙幕の中心を見る

斎藤「クリス、あいつ何処にいるかわかるか!?!」

クリス「今探してる！」

スナイパーのスコープとバイザーを使用して探すが煙幕が上がりすぎて敵の姿どころか皆の姿も見えないままだ、全員は周りを警戒しながら何処からきてもいいようにしていた、全員の鼓動が早まり緊張感が高まっていく、だが煙が晴れるとその怪物は何処にもいなかった

斎藤「あ、あれ？」

弦十郎「いない？」

響「た、助かった？」

一応周りを確認するために見回すがただ瓦礫の山と地面を殴った時に出来た大きなクレーターがあっただけだった

斎藤「た、助かったあゝ」

そう言うのと斎藤がその場で倒れ斎藤も同じように倒れてしまう、それに驚いた四人はその場に駆けつけるそれと同時に弦十郎が指示を出す

弦十郎「医療班直ぐに来てくれ！ 葵とさくやは索敵を行ってくれ、俺はしばらくここにいます」

響「だ、大丈夫ですか!? 峰さん!? 峰さん!?」

峰「だ、大丈夫、聞こえてるから、あまり大きな声は」

クリス「おい馬鹿傷だらけじゃねえか!?」

斎藤「俺なんかまだいい方だ、峰さんなんか深い切り傷結構あるし……」

クリス「お前も骨折れてんじゃねえか！ 無理すんなって言ったろ……！」

斎藤「い、いや、その……」

クリス「あれだけ言ったのにまた無茶して来やがったなあ！」

斎藤「ちよつまっ!?」

斎藤の制止を聞かずクリスは斎藤の首に腕を回し締め上げる

クリス「こんの馬鹿が！ もう少しまともな戦闘出来ねえのか!?」

斎藤「ぎ、ギブギブ………だけど背中に伝わるこの感触は悪くない、かも」

クリス「ばばば馬鹿！ お前何いってんだ!?!」

響「あ、あはは」

奏「かあくくつそゝ、一発殴られただけなのに全身がいてえ、野々宮大丈夫かな？」

翼「命に別状はないだろうがあれじゃしばらく安静にした方がいいだろうな」

峰「ひ、響ちゃん、このことは、未来ちゃんに内緒で」

響「い、いやそれはちよつと無理な気が…」

さつきまでの雰囲気は何処に行ったのやら、もはや殺伐とした感じは消えいつものような日常的な感じがそこにはただよっていた

出雲「ばか野郎！」

ウイル「ぐ！」

そう出雲が殴り飛ばした、冷たい金属の壁に叩きつけられる

出雲「下手うちやがって、まだ計画までやること一杯なのにアジト抑えられてどうするんだ!？」

来栖「よせ」

そう肩を掴み静止させる来栖、周りには今にも飛びかかりそうな切歌を止めている調とそれを静観して見ているマリアがおり壁にあるモニターには謎の年老いた女性がいた

? 『虎の子であるネフイリムの保護が出来たのが幸いです、ですがアジトを抑えられた以上餌となる聖遺物が無いのが痛手です』

来栖たちは近くにある電磁ゲージに閉じ込めてある謎の黒い生き物に視線が集まる

出雲「来栖さん、知り合いのツテ使って何とかありませんか？」

来栖「あいつは武器商人だ、そこまでの物は流石に…」

出雲「ならまた抑えるしかないか」

切歌「駄目です！この前だって食われかけたじゃないデスか！」

出雲「大丈夫だって、あれは油断してただけだしそれに装者である切歌ちゃんを出すわけにはいかないしね」

もし装者が襲われでもしたら大変だ、ネフィリムは遺物を餌として成長するため食べられたら大変な事になるのだ、出雲は切歌の頭に乗せ軽く撫でた

出雲「大丈夫だから、ね？」

切歌「うう、許してしまいそうデスう」

ウイル「まあ宛は無いことはないですよ」

そう服を叩きながら立ち上がる、そんなウイルに冷ややかに視線が注がれる

ウイル「こんな世の中です、聖遺物の破片なんかゴロゴロしてるじゃないですか」

そう切歌たちのペンダントを見る、それを隠すように前に出る出雲
出雲「まさかこの子たちのを使うとかじゃないよな？」

ウイル「そんな事出来る訳ないでしょ、こちらの戦力を削れませんから」

マリア「なら、私が二課のギアを…」

調「それは駄目！マリアがギアを纏うたびフィーネの魂が強くなつていく！」

切歌「そうデス！それは私たちの仕事です！」

そう声を上げる二人、マリアはそれを見ると目を細めたがいつもの優しい目に戻し二人と視線を合わせた

マリア「それじゃ、お願い」

それを聞いた二人は元気そうに頷いた

来栖「やはり知らないか」

マリア「ええ、仕方がないことだわ」

出雲「まあしようがないよ」

あの後別々に部屋に別れ三人は集まり話し合っていた、内容が内容なので話す所を変えたかったのだ

マリア「それより本当なの？セレナが見つかったのは？」

来栖「ああ、目星がついたようで迎えにいくそうだが、やはり追手がいるようだ」

マリア「これ以上は危険ね」

来栖「マリア、奴が保護をしたら私はセレナを向かいに行きたい、正直この方がまだ安全だ」

それを聞いたマリアは小さく頷く、そして来栖は出雲の方を向いた
来栖「出雲、次の隠れ家に着いたら私と一緒に車で向かいについてくれないか？」

出雲「いいですよ、けど車はどうするのです？」

来栖「俺が車を借りる間に知り合いと会ってセレナと会って欲しい、その後場所を言うからそこに連れてきてくれ」

出雲「了解」

来栖「取りあえず予定は決まったな、だが一つ気にかかるのが切歌たちが会ったあの謎の奴だ」

すると壁にあるディスプレイが起動しある画像が写し出される、全身が結晶で覆われていて若干蜥蜴の擬人化見たいな姿だったが顔は鳥のようになっていて口を開けると無数の牙をちらつかせた、ゴリラよりもでかい体格で結晶の隙間からは機械のような物がちらつかせている

来栖「何なんだこれは？」

出雲「生き物：だよな、サーマルには引っ掛かっているし、けどこの機械はいやつはなんだ？」

マリア「ノスカーが前にやっていた聖遺物と人の融合、いえそれにしても人の面影が何処にもないわ」

来栖「聖遺物の反応はなかったからそれは恐らくないな、だがこんな生き物は見たことが」

出雲「見た目もそうだがこいつの一番凄いのは身体能力にもの言わせたこの暴れっぷりだ、正直あいつらの攻撃が効いてないんじゃないや俺たちの攻撃も大して効かなさそうだな」

あの四人係でやって無傷、切歌たちと彼女たちとはそこまで差がないし恐らくこの生き物には勝てないだろう

出雲「こりや会ったら逃げるが一番かな、逃がしてもらえるかは別として」

来栖「そう言えば何故奴は切歌たちを狙わなかったのだ？二課の連中は逃がす気がなかったのに」

マリア「恐らく彼女たちを襲うのが目的、なら何で途中で逃げたの？あなたたちとの戦闘でろくに動ける訳がなかったのに」

あれ以上戦闘を続けられていたら全滅は確かだっただろう、だが峰たちが来た途端あの怪物は直ぐに引き上げた

出雲「いやわかんねえなこれ、知識があるのかなのか…」

来栖「まあこの議題は後にしよう、取りあえず出雲は準備に掛かってくれ」

出雲「はいはい」

そう返答し早速準備にかかる出雲、来栖も明日の事を考え眠ることにした

来栖「マリア、お前は どうする？」

マリア「私は少し、一人になりたいわ」

来栖「わかった」

そう言い終え来栖も出る、一人残されたマリアはペンダントを握りしめ歯をくいしばって

謎の女性セレナ

神崎「さて、今日はちよつと違う一日かな？」

窓から指す明るい陽射しを浴びながら鏡を見ながら歯を磨き考えていた、水を含んで吐き出しそして着替え外に出る、多少ボロイ廊下を歩きながら隣の部屋のドアに向かいそのドアをたたいた

神崎「セレナさくん起きてますか？」

セレナ「はい、ちよつと待つてください」

直ぐに返事が返ってきてドア越しに歩く音が近づいてくる、少し離れ待っているとドアノブが周りドアが開けられる、そこからはポニータイルのセレナの顔がドアで隠しながらこちらを覗いていた、それに思わず心が高鳴り顔が赤くなってしまう、するとそれを疑問に思ったのだろうかセレナが不思議そうに見ながら声を掛ける

セレナ「どうしましたか？」

神崎「あいや、そう言えばさ生活用品買ってなかったよね？今から買いに行く？」

セレナを匿うと決めた時に思い出していけばよかったのだが夜も遅かったし疲れていたのですっかり忘れていた、それを今日の朝歯磨きをしながら思い出したので取り合えずどうするか相談しにきたのだ

セレナ「さ、流石にそこまでしていただく、訳には」

神崎「でもお金ないんでしょ？それに少しの間と言ってもここで暮らすわけだし流石にいるんじゃない？」

セレナ「で、ですが」

神崎「まあ、無理には言わないよ」

そう言うときセレナは下を向いて考え始めた、無一文でここで暮らすのもかなり辛い筈だし生活用品はあった方がいい、そして答えが出たのかこちらを見る

セレナ「…お願いします」

そう申し訳なさそうに頭を下げお願いする、神崎の方は気にしないでと手を振りなだめる

神崎「まあ流石に下着とかは自分で買ってね、お金は渡すから」
セレナ「：はい」

神崎「んじや準備出来たら声掛けてくれる？ここにいるからさ」
セレナ「は、はい」

そう返事を返されセレナは急いでドアを閉め部屋に戻った、そして神崎の方は顎に手を当てその場で一言呟いた

神崎「…ポニー、いいな」

そうセレナの可愛さを評価しながら浮かれながらしばらく一人で呟いていた

周りが綺麗な白い大理石で覆われそこにエスカレーターや二階や三階等に落ちないように鉄の骨組みでガラスを張った柵がある、そして大きな建物を支える柱も通路にあうがそれでも十分な程に広くその通路の端にはビルのオーナーから雇われたのだろう、様々な店が開かれている、そんな場所に二人は来ていた

神崎「えっと、生活用品はあらかた買ったか」

セレナ「はい」

デパートで買い物をし終えたのか二人の両手には買い物袋を持っている、買ったのは日用品だけで神崎は構わず色々買ってもいいと思っただが流石にそれは出来ないとセレナが慌てて拒否したのだ

神崎「にしてもセレナさんてここら辺じゃ見ない顔だね、外国人？」

セレナ「はい、アメリカですね」

神崎「へえくアメリカか、どんな所なの？」

セレナ「えっと、日本と違って建物が高いですね」

神崎「あく確かに」

ニュースとかでも見れば日本と外国とじゃ建物の高さが違う、高層ビル並の建物がずらりと並んでいる様子が浮かんた、やはり土地の大ききの違いだろうか日本で高いと言われているビルでも外国ではそ

こまで大した高さではないのだ

神崎「やっぱりどう？日本の建物ってちっちゃい？」

セレナ「そうですね、確かにあつちと比べると小さいですけどその分雰囲気は違っていいと思いますよ」

神崎「そう言うもんかね」

そう二人で他愛話をしながら歩いていて、そしてデパートの出口に向かい外に出る

神崎「ありや、もう暗くなっちゃったか」

セレナ「すみません、私に付き合ってたばかりに」

神崎「いいんだって、俺が好きでやってるんだからさ」

そう笑いながら返し夜中の道を歩いていく、夜のネオンの光が町を照らし多少薄暗い世界が広がり外にいる人たちは遊びに行く人たちがや仕事終わりで何処かで飲みに行くのだろうスーツを着た人たちが夜でここもそこそこ賑わってる筈なのだが今回は何故か人盛りが少ない、それに疑問に思いながらも気のせいかと思いついて流してあるき続けると近くにあつた裏路地から人が飛び出してきた

神崎「ん？あんたは確か」

ヤクザ「よう、昨日は世話になったな」

顔に手当てをした後があるヤクザが数人いる、昨日神崎がボコボコにした奴らだ、明らかな敵意を見せ神崎を睨みつける、神崎はため息をつき荷物袋を後ろに置きヤクザの方に向き直る

神崎「懲りないねえ、また痛い目に会いに来たわけ？」

ヤクザ「ちげえよ、俺らが用があんのはそこのお嬢さんだ」

神崎「なに？」

その言葉を聞いた神崎はセレナを後ろに隠す

神崎「ナンパなら他にやれよ、しつこいぞ？」

ヤクザ「おめえには関係ねえってさつきからいつてんだろ？」

お互いにガンを飛ばし会いその場に冷たい雰囲気の流れ始める、そして睨んでいるため注視したせいかヤクザの服についている大門を見えた、そこには佐と言う大きな文字が彫られている

神崎「佐伯組？何でこんな所に？」

本来ここは黒澤組のシマの筈だ、ここにはいない筈佐伯組が何故こんな所に？色々疑問が思いうかぶが取り合えず誘ってみる

神崎「いいのこんなことして、ここら辺は黒澤組のシマの筈だ、問題起こしたら不味いんじゃないの？」

ヤクザ「関係ないね」

そうしてヤクザが神崎を囲い始めた、三人はドスやバット等を取り出す

神崎（こいつらまじ？）

殺傷沙汰は流石にやりすぎだとわかる筈、取り敢えずセレナに離れるように言いその場ステップし構える

ヤクザ「俺らも後がねえんだよ、覚悟しろ！」

――佐伯組組員――

ヤクザはドスで突いてくる、神崎はそれをダッキングでいなし腹にブローを入れる、綺麗に入り決まったと思ったのががそれを決めた神崎は目を見開き直ぐ様下がった

神崎「こいつ」

ヤクザ「おめえボクシングしてるらしいな、なら対処は簡単だ」

神崎（こいつ、腹に何か入れてやがるな！）

そう痛そうに手をブラブラさせる、硬さからするとただ適当に鉄を入れていく訳でもなさそうだ、ヤクザたちはニヤニヤしながら神崎に近寄ってくる、これならやれると思ったのだろう、だが

神崎（なら腹じゃなけりやいい！）

そう決め駆け出す、そこにバットのスイングがくるがそれをスウエイで避け足にローを入れバランスを崩させそこにハイキックを顔にいれぶつ飛ばした

ヤクザ「な!？」

神崎「馬鹿だな、試合と喧嘩は使い分けてんだよ」

神崎は龍士に教えられる時にちゃんと試合と喧嘩の戦い方の違いを習っていた、喧嘩の時はキックボクシングのような脚も使うように

しており汎用性を上げ対応力を上げている、まだまだ粗削りだがこの程度の相手なら問題なく対処できる、そして驚いて隙が出来ているヤクザに近づき肩にジャブを入れる、そして顎に左フックをいれると苦し紛れにパイプを振ってきた、それを潜り抜け様にストレートを顔面に浴びせ倒す

セレナ「神崎さん！後ろ！」

その声を聞き後ろを見るとそこにはドスを振り下ろそうとしているヤクザがいる、それを見た神崎はその手を右で殴り軌道を変えたのちに左で殴り付ける、そして喉元にパンチを入れ怯んだ時にアツパーを入れぶつ飛ばす、それを終わると相手は動かなくなった

セレナ「大丈夫ですか？」

セレナが神崎の元に駆け寄ってくる、神崎は周りを見て危険がないか確かめ終わると安全と確認してセレナを向いた

神崎「大丈夫」

セレナ「よかった」

そう安堵するセレナ、そして神崎はある疑問をセレナに問いかける
神崎「セレナさん、何故ヤクザに狙われてるんですか？」

セレナ「え？」

神崎「佐伯組は本来こんなおおびらな暴力は禁止してるんです、だけれどあいつらは後がないと言っていた、つまり上から命令されて動いていたと言うことになります」

佐伯組は古東会では穏健派として知られている、組長があまり面倒事が嫌いのようで子分たちにもよく言い聞かせている、それは枝組も同じで教育されており普通だったらこんな事は起きる分けがないのだがセレナの話と言い少し疑問に思い聞く事にした

セレナ「……」

神崎「狙われている理由、心当たりありますか？」

セレナ「……」

それを聞いたセレナは下を向き黙ってしまう、町の明かりが二人を照らし影がセレナの顔を隠してしまう、表情が読み取れずなんだが気まずくなってしまう神崎に多少申し訳ない気持ち上がるがここで

うやむやにするわけには行かない、もしかしたら龍士の所に迷惑をかけているかもしれないのだ

セレナ「…逃げて来たんです」

神埼「?逃げた?」

怯えるように出てきた震えた声がセレナから出てきた

セレナ「私気づいたら病院にいたんです、それでそこで少しの間住んでいたんですけど突然連れていかれそうになって、そしたら誰かに助けられたんです」

神埼「それで?」

セレナ「途中までその人と一緒に逃げてたんですけど、日本にいたときにまた襲われてその時にはぐれちゃって、それで無我夢中で逃げてたらここに」

神埼「着いたって訳か」

セレナ「はい」

神埼（外国ってどういうことだ?マフィアならわかるが、なんで佐伯組が狙ってんだ?）

顎に手を当て思考を巡らすが疑問だらけしかない、どうしてそれを佐伯組が狙っているのか、そもそも彼女は何で狙われているのか、わからないことだらけだ

神埼「どうなってんだ、ほんと」

そう頭をかきながらため息を吐く、取りあえずわかったのは

神埼「厄介ごとに首突っ込んだか」

そう溢しながら夜の空を見ていた

神埼「……」

セレナ「……」

あの後お互いに無言になってしまいいアパートに帰って来てしまった、だがセレナはドアの前に立つとその場で固まってしまっ

セレナ「…私出ていきます」

神埼「え？」

その声に釣られ隣にいるセレナの方を向いてしまう、そこには不安顔を浮かべ下を向きただ目の前にあるドアを見つめるセレナの顔があった

セレナ「だつてここにるのがばれたらあなたにも、大屋さんにも迷惑が…」

神埼「そんなこと出来るわけないでしょ？」

神埼はそういいセレナの肩に手を置いた、するとセレナは顔だけをこちらに向けた、その目を見ると涙腺が溜まり今にも泣き出しそうだと神埼「一応言つとくけど俺はセレナさんを助けたのはあなたが困つてたから」

セレナ「けど、これ以上は」

神埼「迷惑だなんて言わないでくれよ、俺はそんなの気にしないし人を助けるつてのは覚悟がいることだつて、俺の憧れの人も言つてたから」

勇ましくもありその大きな背中からは憧れを感じた、自分よりも年下なのに大人のように冷静で子供のように気に入らない事があつたら直ぐに止めようとする、そんな単純な見方であつたがそんな姿に神埼は引かれていた

龍士『いいか？生き物を助けたら最後までやり遂げると言う責任を持ちやがれ、途中でそれを放棄したらそれはそいつを助けたんじゃない、変な希望を持たせて見捨てたつて言う最低な行為だ、それだけは絶対やるんじゃないぞ』

たまに路上で引かれた猫等を純粹に助けようとする人がいる、だが大抵の人はただ病院に届けるだけで後は病院に任せるだけだ、その後はペットショップなりなんなり預けられ何処かで暮らしてくれるだろうと思つているのだろう、だが現実はそのなりに甘くはない

龍士『前に小さな子供が助けた猫を引き取ったペットショップが猫を捨てたのさ、そういう引き取りはせず途中で放棄した奴が多すぎて無理矢理預けられた所が飼育の数が多すぎて捨てちまうのさ』

ただ病院に預けて自分は飼えないからさるなどそれはただその生き物の一命を取り留めただけだ、命を救うと言うのはその命ある者を最後まで見守りそれが人ならちゃん最後まで生きれるように自立させる、それが今の時代に求められる命を助けると言う行為、一時の救いが人のためになる訳ではないのだ

神埼「だから俺が責任を持って、あなたを守ります」

セレナ「神埼さん…ありがとうございます」

そうふかふかど頭を下げた、神埼は彼女の肩に手を置きポンポンと優しく叩き彼女を安心させる、そして彼女が泣き止むまでその場で待つことにした

龍士「……」

もはや日が無く月が空にありその月日が大地を照らし薄暗い世界が出来ていた、そんな中龍士はある病院に来ていた、あの木野組襲撃の後下調べを終えたのちに準備をし目的の場所である場所に来たのだ、月日はあるが中は照らしてはくれないのでライトで照らしながら歩いていく

龍士「ん？」

そしてあることに気づきその場に屈む、そこには誰かが大きく踏み込んだであろう大きな足跡があった

龍士（大きさからして小柄だな、八極拳か？）

八極拳、中国の伝統的な流派の一つだが何故こんな所にあるのだろうかと疑問に思った、そしてそこから顔を上げ道を照らすとそこには

炭のような物が散らばっていた

龍士「ノイズ？てことは秘密兵器がやりあった後か、ホントに倒せるんだな」

そう周りを照らしながら行く、だが拳や足跡だけじゃなく刀で切った痕や銃弾のような痕もある

龍士「日本刀の切り傷はわかるが銃弾はわからないな、そこまで詳しくはないし」

壁に手を当てながらその傷痕を触り感触を確かめる、まるでコンクリートの壁が豆腐のように綺麗に切られ綺麗な刀傷が出来上がっている、弾痕の方もよくわからないが大きさからして普通の拳銃じゃなさそうだ、そう歩いていくと月明かりが見えた、そこに駆け寄って見るとそこには大きく病院に大きな穴が空いており遠くには綺麗な海が見えた

龍士「派手にやってんな、逃げ出したって所か」

どうやら一足遅かったようだ、多分昨日のうちに決行したのだろう、他にも探索してみたがそれらしい物は何処にもなかった

龍士「昨日のうちに رفتとけばよかったかな」

だが逆によかったかも知れない、政府の機密事項には関わりたくないし面倒事は嫌いだ、ならさっさと離れるべきだと思ひ帰ろうと振り返った時龍士の顔が変わる

龍士「…誰だ？」

その声とともに黒いスーツを着た男たちが出てくる、龍士は前にいる、男を睨み付けている

？「はじめましてだったな、司波龍士さん」

龍士「俺の名前をしまったのか」

？「単刀直入に聞きましょう、セレナさんは何処ですか？」

龍士「は？」

誰だそれ？と心の中で思いながら考えたが該当者がいないため素直に答えることにした

龍士「…誰だそいつ、知らねえよ」

？「嘘は言わないで下さいよ、あなたの知り合いがその人を匿って

いると言うのは知ってるんですよ」

龍士「だから、何の話？」

少し顔に出そうになったが一つだけ心当たりがあった、神埼が連れてきた女、名前は聞いてはないがそれしか思い当たらない、そうして睨み合っている相手は銃を取り出した

？「最後のチャンスです、何処だ？」

低い声がこちらの耳に響く、だが龍士はそれに怯えず相手を見続ける

龍士「知らねえよ」

その声とともに引き金が引かれ乾いた音が周りに響いた、銃から弾が発射され真っ直ぐ進んでいく、だがそこには龍士の姿はなかった
？「!？」

弾が瓦礫の壁に当たるとともに顎に衝撃がはしった、そのままひっくり返され後ろにいる部下が見える、全員驚きの顔を浮かべている

龍士「撃ったってことは、殺しても証拠隠滅出きるって事だよな」

龍士はその場で構える

龍士「取りあえず半殺しにするか」

男たちも拳銃をこちらに向け放つ、龍士はそれを瓦礫を盾にして受け止めそのままそれを蹴飛ばす、何人かは巻き込んだが四人位は避けた

——謎の組織——

龍士はバックからトンファーを取り出し相手が立つ前に頭にトンファーを振り下ろして気絶させる、そして別の男に詰め寄りブロー気味に回して頭に当て逆のトンファーで殴り飛ばした

？『しねえ！』

そう言い放ち後ろから撃たれる龍士はそれを見切り避けながら詰め寄る、男はそれを見て怯えてしまい対応が遅れた所にトンファーの振り下ろしで肩を外しそのまま横に振る腕を外した後に前蹴りでぶっ飛ばす

龍士「さて」

? 『く、来るな!』

相手は怯えているのか銃身が定まらないのか撃つても龍士には当たっていないかった、そのため弾切れを起こし急いでリロードをしようと思っただけの間、銃を叩き落とされ足払いをされ倒された、相変わらずの身体能力に物を言わせた突撃である

? 「ぐへえ!」

そして相手の前にトンファーを突き付ける

龍士「そのセレナってのは誰だ、何でその女狙ってる?」

? 「い、言うわけ…」

それが言い終わる前にトンファーで脚を叩かれる、まるで鞭で叩いたかのような音が周りに響き何かが折れる音がした

? 「ああああああ!!!」

龍士「もう一回聞くぞ、何でだ?」

? 「くそがあ!」

そして腕を動かし何かを取り出そうとしたとき、腕を叩き顔にトンファーをめり込ませた

? 「が、は」

龍士「…喋らないのならもういいかな」

持ち替えゆつくりと腕を引き突きの姿勢を取る、流星に痛め付けられ勘弁したのか龍士の方に手を開き伸ばし止めた

? 「ま、待ってくれ!」

龍士「んじや聞くぞ、何で襲った?」

? 「う、上からの指示で!あんたが探してる男の知り合いだって掴んだんだ、だから」

龍士「会いに来たって?にしては殺そうとしてやがったな」

? 「お、脅しだったんだよ!殺す気なんか」

龍士「銃を乱射してる時点で説得力がないな」

? 「ご、ごめんなさい」

そうすると押されたのか素直に謝った、それを見た龍士は呆れてしまいが取りあえず口は軽そうだと思ひ遠回しには言わず素直に聞く

龍士「んじや次だ、セレナってのは誰だ？」

？「そ、それは」

龍士「…喋るのなら口以外は動かなくてもいいよな？」

？「ひい！」

そうドスを聞かせた声を出し相手を見下ろす、それに怯えたのか相手は情けない声を上げた

？「お、俺らも知らないんです！他の奴から頼まれたって話で」

龍士「別の奴？どこのだ」

？「さ、さあ、アメリカ人っただけで」

龍士（アメリカ人、またやっかいな）

そう心中で舌打ちをする

龍士「そのアメリカ人について心当たりは？」

？「わ、わからない」

龍士「その女を探してるのはお前らだけか？」

？「た、確か他の奴も探してる！知り合いのマフィアたちはほとんど探してる！」

龍士「ほんとか？」

？「ほ、ほんとだ！これ以上何も知らないんだ！」

龍士「そうか、ご苦労」

そして顎に一発いれ気絶させた

龍士「…取りあえず神崎に聞くことが出来たな」

倒した男たちの懐を探り何かないか探す、すると最初に銃を発砲した男の懐から写真が出てきた、その中心にはピンク色の長髪をした女性が写っていた

龍士「こいつか」

容姿を見てみると外国人なのは間違いない、服装も日本よりもアメリカの感じが強いが何処かで見たとような顔だ、それに神崎が身元不明の女性を匿っていた筈だ

龍士「…嫌な予感がする」

その確認のために車に戻り帰ることにした、落としたバックを拾い上げその中にトンファーを入れようとするが龍士がその手を止めた、

そして呆れたかのようにため息を吐きその場でつぶやく

龍士「何だ、まだいたのか」

バックから目を離し崩れた通路を見る、するとそこから足音が聞こえた、龍士は直ぐにトンファーを取り出し足音がする方向に構え耳を澄ます、するとある違和感を感じた

龍士（ん？靴履いてないのか？）

そんなの一般人にはわかるわけないのだが龍士はそれを多少の距離程度なら足音で体重ぐらいはわかるのだが、本来一緒に聞こえる筈の靴の当たる音がしていない、そしてその音が近づきその存在が姿を現す、それを見た龍士は思わず口を開け声を溢してしまった

龍士「は？」

そこにいたのは二足歩行はしているが明らかに人間ではない、結晶の塊をいくつも生やした不気味な存在がその場に立っていた

「キ”シ”ヤ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア!!!”!!!」

怪物

月日が大地を照らし雲がそれを一時的に遮る夜の世界、そんな世界では街灯も簡単な明かりもないこんな廃墟の病院では暗すぎて歩くのも辛いだろう、それに限らず壁や床、天井は崩れ？き出しになり完璧には崩れてはいないものの外側から見てもそこら中に亀裂が入りいつ崩れるかもわからず昔は真っ白な綺麗な色をしていたであろうその色も既に落ちただ元のコンクリートの色が見えているだけであつた、そんな場所ですらみ合う不気味な二人がいた、いや正確には人と言えるか怪しい存在が一体いた

？「グ”ル”ル”ル”ル”」

そう目の前の存在を威嚇する不気味な存在、人と同じ二足歩行だが似ているのはそれだけだ、二メートルは超えている身長に体全体からは結晶が生えておりその下には何やら機械のようなパーツが見え隠れしている、足の指は四本、手は五本と合っておらず脚は恐竜のようになつており腕は女性のウエスト並みの腕があつた、そしてその結晶で隠れている顔からは髪のような物は確認できず獣のような鋭い眼と威嚇する時に見える鋭い牙が見えていた

龍士「なんだこれ？」

流石の龍士も驚いていた、前のような人の面影がある存在だったらまだ落ち着けたが今回は違う、完全に人の形を保っておらず神話に出てくる竜人という言葉がふさわしいだろう、指から生えている鋭い爪も口から生えている牙も夜の光で照らされ綺麗に光っていた

龍士（ノスカー？いや、あいつは死んだ筈だ、と言う事は別のやつだな）

取り合えず敵意しかないのは感じ取れる、バックを背負いトンファーを構え怪物を睨みつける、怪物の方も姿勢を屈めこちらにとびかかる姿勢を取っていた

龍士「……」

？「ウ”ウ”ウ”ウ”ウ”」

地面に爪を立て下から見上げるようにこちらを視認している、龍士

は一步も動かず切り出すタイミングを計る、冷たい夜の風が剥き出しの素肌をなぜ寒いが乗ってくる潮風が鼻をくすぐる、地面は最悪で場所も暗く見えづらい、唯一よく見えるのが綺麗に虹色に光る結晶だけだった

？「ガ”ア”ラ”ア!!!”」

すると怪物がこちらに向けて突っ込んできた、爪を大きく振り上げながらそれを龍士に振り下ろす、龍児はそれをトンフアーで爪ではない部分に当て横に流した、爪はそのまま地面に突き立てられるがぐさま抜き龍士の方に振りかぶる、その時見えたのは大きく口を開け牙を見せながら大きく目を見開き睨む怪物とそれを冷静に見ている龍士がいた

――???

？「ガ”ア”ア”ア”ア!!!”」

がむしやらに龍士の方に手と足の爪を振り回す、恐ろしい速度が出ており空気を切る音が聞こえ壁や床にあたった瞬間それを易々貫き切れ味を証明していく、そんな危険極まりない攻撃を龍士は流しはぶき避けてじつくりと相手の行動パターンを見る

龍士（がむしやらに振っている訳じゃないな、考えるよりも動いてるから隙が少ない）

そう攻撃を対処しながら自分も攻撃するがトンフアーでは傷が入らずただ弾き飛ばされるだけであった

龍士（本番のじゃないが一応鉄でできてんだがな）

そう大きく後ろに下がりトンフアーをバックに戻す、怪物は龍士の方にただ突っ込み攻撃を繰り返す、龍士はそれをかいくぐり腹にブローを入れる

怪物「カツ!?”」

怪物の体がくの字に曲がりその前に出た顎にアッパーを入れる、上に上げられ体が起き上がるが怪物は負けじと両腕で挟んできた、それを龍士はその場で屈みやり過ぐしその場で手を地面に手を付き腹に

た、怪物は思わず転ぶが負けじと追撃を仕掛けてくる、だがその攻撃の勢いを利用され投げられ続ける

合気道、力の流れを利用したり相手のバランスを崩させたり変えて技を仕掛ける日本の技で、力を殺さず己の体を使い流し、投げ、返すと言うカウンター限定の技だがこれを極めれば自分から仕掛けることも出来る

? 「ギアアアア!!!」

腕を掴まれそのまま背負い投げされ地面に叩きつけられる、暴れながら起き上がろうとするとその力を利用され投げられる、また起き上がろうとすると盛大に投げられ地面に叩きつけられた

龍士（受け身なしか）

龍士は恐ろしく冷静だった、人ではない存在を相手しているのにまったく怖じけずただ人と同じように対処する、龍士は決して怖い訳ではない、ただ心を乱したら自分が怪我するだけだとわかっているのだ、戦いでは何かの拍子で驚き心が乱れ技が鈍るのはやってはいけない、たとえそれが人じゃ無くてもだ

龍士（人以外には案外馴れてるしな）

7メートルは越える大鰐と虎に大熊、はてはトラブルの果てに複数の鮫と乱闘した時もあった、それだけじゃなく自分が足を運び学んだ所にもまさしく化け物と呼ばれる存在はいた、ボクサー界の王者、中国の天龍、日本の玄人、発想の喧嘩屋、様々な者と出会い学び続けたあの五年間、恐怖何ぞには慣れっこだった

? 「グルアアアア!!!」

結晶は碎け右腕は外れ身体中は痛く血も流している、だが怪物は逃げずただ龍士に突っ込んでいくだけだった、それを見た龍士はため息を吐き冷めた目で怪物を見ている

龍士「お前はつまらん」

怪物の突きを避け様に顔にストレート一発、負けじとバックブローを放つがダッキングで避けられ顔にジャブと腹にブローを入れる、怪物は口を開け噛みつきこうとするが顎を蹴り上げられ無理矢理閉じられた後そのまま踵落としが顔に突き刺さった

? 「グッ!？」

そこからは一方的だった、怯んでいる所に龍士の連続蹴りからの回し蹴りが炸裂し結晶を貫き人体に衝撃が来る、反撃しようと爪を立て突き刺そうとするがその腕ごと拳で叩き落とされそのまま顔にストレートが突き刺さる、血飛沫を上げながらも追撃の手は止めず殴り蹴り続ける、もはや結晶はほとんどなく皮膚が剥き出しになり怪物の方も意識が朦朧としていた、そしてそんな棒立ちの怪物に止めをさすため腕に力を込め始めた

龍士「…」

問題はなかったが生かしては危ないかもしれない、ならここで息の根を止めるのがいいだろう、龍士は自分の驚異が存在しそれが消せる機会があるのなら迷わず実行するのだ、たとえ誰かになんと言われようが

龍士「死ぬ」

我流 碎龍の一撃

その拳は怪物の体を突き破ると同時に凄まじい勢いで地面に叩きつけた、床にヒビが入り崩れて下に落ちてしまうが龍士に取っては構わなかった、下にいる死にかけの生き物に止めをさす

我流 碎龍の一撃

その拳が頭に叩きつけられその顔が潰れると同時に其処ら中に結晶と機械付きの肉片が飛び散った、落ちてくる瓦礫にそれが埋もれていきその場に土煙が立ち込める、それが晴れてくきても龍士は突き刺したままそれをじつと眺めていた

龍士「…」

頭は潰れ腹には穴が空きそこから赤い血が出て血の池を作り出す、ゆっくりと手を抜き自分の手を見ると血がベツトリとつきそれが夜の光で照らされて赤黒い物がこびりついていた

龍士「…」

ゆっくり視線を死体に移したがピクリともせずただ倒れているだけ、それを確認した龍士はまず血を洗い流すために近くにある沿岸に行くことにした

真つ黒い海の浜辺で自分の手を洗い流す龍士、その行為には特に表情は変えずただ目の前の汚れを落とすと言うだけをしていた

龍士「ちゃんと殺したし、問題はないと思うが、死体は後で片付けとくか」

指を動かしながら手に付いている血を取っていく、まるで煙のように水中で広まっていきそれが龍士の手を覆い隠しまるで隠しているかのように見えた、ついた血を取り終わり水面から手を出し確認する、血は取れいつものゴツゴツした手が見えた

龍士「……」

黙って隣に置いてあったタオルで水を拭き取りそしてバツクの中に戻す、そしてバツクを背負い死体を放置した場所に向かう、瓦礫だらけで歩きにくいが多少平面があるのでまだましだが戦った場所では瓦礫が多いため車は通れないかもしれない、やはり自分が一人で片付けるしかない

龍士（それに変な事になって来たしな、あまり巻き込む訳には行かない）

あの怪物がなんであれ誰かが作ったのは間違いないし明らかに自然の生物ではなかったのは確かだ、誰が送ってきたのかは知らないがあんな奴を送ってきた以上日常の生活にも気を付けないといけないかもしれない

龍士「立て続けにこんな事が起きるなんてな、何で俺だけこんな目に合うんだ」

頭を掻きながらも歩き続ける、戦いでは動揺はしたくないため抑える時があるがあまり非日常な事がこうも立て続けに起こる何て心臓に悪すぎる、ノイズだけでもいっばいなのになにに化け物やらマフィアやら多すぎて正直この街に集中し過ぎている、まあこんな街に住んでいる以上仕方がない事なんだが

龍士「ん？」

そして死体があるであろう場所に付いたがそこで龍士は目を見開いた、何故ならあつた筈の死体が消えているからだ、思わず駆け出しあつた場所に近づく、死体どころか血や肉片何かも周りを見ても何処にもなかった

龍士「そんな筈は、確かここに」

自分が殴つたて出来上がった場所を見る、少し凹むが出来上がっておりそこを中心に亀裂が入っているだけで死体等なくただ瓦礫の山が周りに出来上がっているだけだった

龍士「どうなつてやがる？」

不気味に消えたと言う事に謎の寒気に襲われ周りを警戒する、何があつたのかわからない怖さに多少悪寒に当たりながらその場から離れる事にした

龍士「くそが!!」

その場にあつたゴミ箱を蹴とばした、それは雑居ビルの屋上に落ちてしまったが別にそこまで龍士は気にはしなかった

龍士「やつちまった、厄介事の後始末が出来なかった」

今まで完璧にやってきたのにこの数日の騒動で落ち着かなかったせいか油断してしまった、まさか一瞬で痕跡を消していく何て考えもなかった

龍士「甘かった」

あんな物騒な者を用意するんだからせめて証拠隠滅する事ぐらいは考えるべきだった、あんな物野ざらしにする筈もない

龍士「あ”あ!!”!!気になる事が多すぎて頭が重くなってくる」

収まったと思っていたノイズ騒動に、何故か絡んできたマフィア、正体不明の女、正体不明の怪物、恐らくこの事件に関わっている奴らなのだろうが何がどう繋がればこうなるんだ？怪物の方は相手をしていてつまらなかつたし最悪だ、いらつき過ぎてむしろよくしゃしゃしてきしたが冷静になるために自分を落ち着かせる、今怒っても何もならないし後で色々調べればいい、どんな物にだって跡は残る筈なのだから

龍士「ん？」

そう悩んでいると自分のスマホが鳴り出した、それを取り出し電話に応答した

龍士「俺だ」

山下『兄貴ですか!?今何処です!?』

龍士「今か？江東区辺りにいるが…」

出たのは山下だが何だか焦っているように聞こえる、龍士は直ぐに車が出せるように車に向かう、そして案の定龍士の方に問題がきた

山下『お嬢が、お嬢が消えました!!』

龍士「はあ!？」

ヤクザの娘

山下『お嬢が、お嬢が消えました!』

その知らせを聞いた龍士はその場で大声を出した

龍士「何だ、どう言うことだ!？」

山下『それが、いつも通りクラブに行ったらしいんです、そしてトイレ行った後姿消したみたいで』

龍士「護衛はなにしていたんだ!？」

ハンドルを握る手に力が入りスマホを睨む

山下『流石にトイレまでは入れませんよ!何処から出たのかと調べているとあのクラブ非常口のような別の出口があったみたいでそこから出たようです』

何故美音が逃げたのかは疑問に思ったが取り敢えず美音の身柄を確保するのが優先だった

龍士「取りあえず使える組員全員引っ張り出して探せ!俺もそっちに行くから」

山下『わかりました』

龍士「まったく、いつまでも面倒事持ってきてやがって」

行き場のない怒りが沸き上がるがそれを押し殺し美音が消えたであろうエリアを探す事にした

美音が消えてから三十分程たった、龍士たちも色々探し回ったがまだ手懸かりも見つからなかった

龍士「なあ」

キャッチ「はい?」

龍士「こいつ探してるんだが、見てないか?」

そう美音の写真を出す、だがキャッチの方は顔を横に降った
キャッチ「うくん見てないですね」

龍士「そうか、見かけたら教えろ」

キヤツチ「わ、わかりました」

写真をしまい次の宛を探す龍士、苛立ちを表す顔をしながら歩いていくと龍士の前に柄の悪い男たちが立ちはだかる

男「おい兄ちゃん、どうしたのそんなにイラついてさ」

その言葉は聞こえていたであろうが龍士は無視を決め込みその横を通ろうとする、するとそれを見た男はこめかみに血管が浮かび肩を掴もうとした

男「おいてめえ、何無視して…」

だがその肩を掴む前に龍士の左腕が動いたと思ったら男の顔が横に傾きその場で倒れた

男2「え？」

男3「な、なにが起こった？」

何が起こったのかわからない男たちはその場を去っていく龍士の背中をただ黙って見ていた

龍士「どいつもこいつも…」

相変わらず治安が悪い町だ、いくらノイズで荒れているからと言って息を吐くかのように何故喧嘩出来るのだろうか？そんな暇があるのなら真つ当な人間になってキヤバにでも行けばいいのに、そうイラついていると龍士のスマホが鳴り出した

龍士「きた、俺だ」

情報屋『あ、龍士さんですか？頼まれた人が揆一通りで見かけたとの情報が入りました』

龍士「ほんとか？」

情報屋『はい』

龍士「恩に切る」

それを聞いた龍士は目的の場所に向かった

揆一通りでの目撃情報を元にある場所にたどり着いた、そこはビルに挟まれた小さな公園だった、その敷地内にはブランコや鉄棒等がありそして椅子には美音が座っていた

龍士「お嬢……」

美音「ん？何だ、見つかつちやったか」

こちらをゆっくりと見上げる美音、その表情は暗く目元が赤かった、脚をぶらぶらさせその脚を見続ける

龍士「お嬢、帰りましょう、親父も心配してます」

美音「してるわけないでしょ」

顔を反らす美音、どうやら何か合ったようだが取り敢えず場所が場所なため連れて帰る事にした

龍士「いいから、帰りますよ」

美音「離してよ!」

伸ばした手を振り払われた、そしてこちらを見た美音の顔は泣いていた

美音「帰りたくないったら帰らないの!もうほっといてよ!!」

龍士「お嬢?」

また美音は顔を下に向けた、余程見られたくないのだろうか、龍士はその場に屈み目線を合わせようとする

龍士「何かあったんですか?」

美音「……」

龍士「あつたんですね?」

美音「……」

横に顔を反らされた、いつもと様子が違う

龍士「何があったんですか?」

龍士（いつも通りならこんな事はしないはず、だがいつもとは違う事が起こったって事だ）

いつも通りならこんな事はしない、それなら心当たりは幾つかあるが一番考えられるのは

龍士「もしかして、クラブで何かあったのでは?」

美音「！」

それを聞いた美音の顔が変わった、そして歯ぎしりし始めた

龍士「教えてください、力になれ……」

美音「うるさい！」

目を見開きこちらを睨む美音、荒く息をしこちらを睨み続ける

美音「嫌いだ！あいつも！ヤクザも全員嫌いだ！だからどつか言つてよ！あっち行きなさいよ！」

だがその表情も崩れ始め目元に涙が溜まり始めその場で泣き始めた

龍士「……」

美音「どっか、行ってよ、一人にしてよお」

龍士「…風邪引きます、落ち着ける場所を知ってるのでそこに行きましょう」

今は真夜中で少し肌寒い、取り敢えず場所を変えるため美音に手を伸ばす

龍士「大丈夫です、ほら行きましょう」

美音「…あんただけよね、文句も言わないのは」

少し落ち着いたのか表情が和らいだ

美音「わかってるのよ、父さんも、組員も悪気はない、だけどやっぱりヤクザの娘だから、友達も作れなかった、そんな時なのよ、当真が優しくしてくれたのは」

龍士（当真、確かお嬢のお気に入りか）

美音「話してて楽しかった、あそこに行けば心が安らいでいった、当真と話せてたら、それでよかった、けど」

ホスト『どうよ、また絞れた？』

当真『ああ、あいつチョロいわ、流石にヤクザの娘だけあって金はあるよな』

ホスト『いいよなあんなべっぴんさんに相手してもらって、嬉しいだろ？』

当真『ふざけんな嬉しいわけあるか、あんな自己中な女金がなかったら相手してないよ』

ホスト『ええけどあれお前にぞっこんだろ』

当真『だからなんだよ、あんなヤクザ娘相手してやってるだけでも感謝してほしいね』

龍士「……」

それを聞いた龍士はこめかみが浮かび握り拳が出来始めた、だがホストやキャバ嬢などその程度だ、相手は客、それ以上行くことはないし行くわけにも行かない、当真とホストの会話はホストからしたら普通の会話だから仕方ないとも言える、だが龍士が一番許せないのは美音の気持ちを知っておきながらそんな事を口走った事だ

龍士（女の気持ちを知っておきながら…）

美音も自分の気持ちを言わなかったのも悪いが相手も気持ちがわかってたのなら多少の助言はやるべきだったのだ龍士がいつも助けた連中になっているように、美音の方は泣き始めそれを手で拭っている美音「もういやあ、何処にも私の居場所なんてなかった、何でなのよ」

そして再び目を見開きこちらを見る美音

美音「ねえなんでなの!?!なんで私がこんな目に合わなきゃならないの!?!私は、私は、ただ幸せに、なりたいたけなのにい」

龍士「……」

その場に崩れ泣き始める美音、龍士はそんな美音を見て背中をさすってあげた

龍士「…辛かったんですね」

そして目線を合わせ落ち着くまで待つ、そして泣き止んだ所に優しく語りかける

龍士「おれはお嬢とあってそんなに経ってませんから、お嬢の事はよくしりません、けど一つだけ俺と似てる事があります」

美音「え?」

龍士「二年前のツヴァイウイングの事件は知ってますよね」

龍士「おれは、その時その会場にいました」

美音「え?」

龍士「知り合いに誘われまして、それであの会場に行ったのですが、

まあ知つての通りノイズが暴れて滅茶苦茶、そのせいで大勢の人が死にました、俺は何とか生き残りました、重症で1ヶ月病院にいましたけど、それで終わればよかったですけどね」

そして話を続ける龍士、その顔は何処か辛そうだった

龍士「あの事件によつて亡くなつた人たちの親、兄弟、知り合い、そして報道機関の人たちが等がああ生き残つた人たちを追い詰めたんです」

美音（確か、ニュースで…）

二年前に取り上げられたあの理不尽な差別、そのせいで自殺する人などもあったという程徹底的に追い詰めたようだ

龍士「家に帰つても嫌がらせが多くそのせいで母は逃げ出し、父は独り身で頑張つてくれたんですが過労やストレス等の原因で死んでしまいました」

龍士「俺の居場所と言える場所は亡くなってしまった、俺の友人もそれで人を信じられなくなり俺の事を嫌い絶縁されました」

脳裏にある人が浮かんだ、元気が取り柄で人助けが好きな女の子、その姿を思い出すと何故か心が安らいだ

龍士「何処にも自分の居場所がない、誰もいない、裏路地で死ぬかと思つていたその時助けてくれたのが、黒澤の叔父貴でした」

その時の事を話していると助け出された時の事を思い出した

黒澤『ひどい面だな坊主』

龍士『あなたは、誰？』

黒澤『悪いヤクザもんだ、どうしたんだお前？』

龍士『何処にも、行く場所がない』

黒澤『そうか、なら来い』

龍士『え？』

黒澤『ガキ一人位は面倒は見えてやれる、ほらこい』

龍士『な、なんで、助けてくれるの？』

黒澤『あ？特に理由はねえよ、いいから来い』

龍士『は、はい』

そして宮本組に預けられヤクザとして働いた、最初は堅気の仕事を

しろといわれたが自分は命の恩人の役に立ちたかったのだ

龍士「叔父貴は俺を親父に預け仕事を与え何とか暮らせるように手を貸してくれました、俺の居場所を作ってくれた叔父貴と親父には今でも感謝してます」

龍士「おれは、居場所を作ってくれた二人に恩を返すために極道になりました、それから二人の背中を見て俺はああなりたい、あの人たちと同じように弱きを助ける昔の極道が掲げた任侠を守るあの二人のようになりたいと思っただけです」

龍士「お嬢、俺は力だけが取り柄なただの馬鹿です、ですけどこんな俺でも人を助ける事はできます」

龍士「だからその：頼って下さい、一人で考えてたら駄目です、俺も、親父も、皆がいます、一人は寂しいですよ」

美音「うう、うああああああ!!!」

美音「ごめん、泣いちやって」

龍士「大丈夫ですよ、辛い時は発散させといた方がいいですから」
場所を移し龍士が管理している道場の中にいた、綺麗な木の床の上
に体を丸めて座っており龍士はタバコを灰皿に入れ美音に近づき美音の前に立つ

龍士「組に連絡を入れました、迎えが来るのでそれに乗ってください」

美音「そっか」

なんだか寂しそうな顔をする、龍士はそれに疑問が浮かぶがあまり気にせず続けた

龍士「今日は取り合えず休んでください、それで落ち着いたらまた話しましょう」

美音「うん…」

そうさらに体を丸めていき龍士の方をチラチラ見ているがそれに気づいてないのかタバコを吸いながら待っている

美音「…ねえ」

龍士「なんでしよう?」

美音「お父さん、怒ってるかな?」

龍士「…父親ですからね、怒ってると思います、多分色々言われると思いますがそれは親父が心配してるから出てくる言葉だと思います、それは仕方がないですね」

美音「だよね」

今回は仕方がないとは言っても最近物騒だから護衛をつけていたのにそれに黙ってどっか行つたのだから何かしら言われるだろう、そんな事をしていると外からエンジン音が聞こえてきた

美音「来ちゃったか」

龍士「そうですね」

そして道場の入口の方から組員が数人入って来た

組員「龍士さん!お嬢は!」

美音「ここにいるわ」

龍士「ああそれはいいんだが、土足厳禁なんだが」

組員「す、すいません」

すると組員は靴を脱ぎだしているうちに美音が近づいていく、美音たちはそのまま入口に向かって行くと美音がこちらの方を振り向いた

美音「その…色々ありがとう」

龍士「はい」

そう言うと美音たちは去っていった、それを見届けた龍士はまた電話を取り出し電話を始めた

龍士「人を集めろ、ちよつとやりたい事がある」

それを言い終えた龍士は直ぐにその道場を出る、その顔は優しい表情はもう無く仕事人としての甘さがない怖い顔になっていた

神崎「今日も収穫無しか、はあ〜」

もう辺りは暗闇に包まれている深夜の中神崎はアパートの帰り道を歩いていた、どうやらセレナに関する情報を集めていたそうなのだがどうやら何も見つからなかったようだ

神崎「下手に俺が動いたら駄目そうだけどなく、けど後手に回るのもちよつと」

取り敢えず襲われる理由がわからないと手の打ちようがない

神崎「ともかく明日は別の場所を探そう、手がかりさえ掴めれば…」
神崎はそれを言い終わろうとしたとき急に顔が変わり目の前を睨み付けた、嫌な気配がしたからだ、すると暗闇から街灯の明かりにゆっくり照らされて中髪刈りの男が出てきた、黄色のジャンパーに中は黒いシャツ、黒のズボンにはポケットが多く見えた

？「よお、今日はいい夜ですな」

そう余裕の笑みを見せながらその男は言葉を残した

謎の多い日

? 「よお、今日はいい夜ですな」

神埼「……」

神埼はその場で止まり相手を見続け目を離さなかった、龍士の教えで怪しい奴が喋りだしたら目を離さず警戒しろと教わったからだ、ただし構えはせずいつでも動けるようにすること

? 「こんな寒い日には温かい酒飲んでゆつくりしたいですな、そう思いませんか？」

神埼「一人で飲めばいいじゃん」

? 「冷たいな、日本人は」

そう様子を伺うように右に歩きそして左に歩くを繰り返す、神埼はそれを眺め続ける

? 「怖い顔だ、いい顔が台無しだぜ？」

神埼「余計なお世話だよ」

? 「ちよつと褒めたんだけどな、ああそれから…」

その言葉を男が言おうとした時男の手がポケットに入った、神埼は警戒はしながらも遅れてしまい男の手が抜かれこちらに振られる、そして案の定視界に映ったのは細い針のような物が3本見えた

――???

神埼（まず！）

神埼はそれを急いでダッキングで避ける、針が横を通りすぎると目の前に拳が見えた、それを避けたが頬に痛みが走る、直ぐに追撃のバックブローを後ろに下がり避ける、そして脚でリズムを取りながら構え相手を睨み付ける、すると相手を見ていると相手の拳から何か黒い鋭い物が突き出ている

? 「反応遅すぎだぜ」

神埼「バグナクかよ」

？「しってんのか」

インドの暗器、虎の爪とも呼ばれメリケンサックと同じで指に嵌めて使う武器だ

神埼「知り合いが持ってたよ、指がでかくて嵌めれなかったらしいけど」

？「そうかい」

そして男が駆け出し拳を振るう、それを潜り抜けストレートを相手の腹に放つが逆の手で止められるそして顔に向けての蹴りが来るが足先に銀色の光が見えた

神埼（足に仕込み!?）

直ぐに顔を反らし避けるがそこに裏拳が顔に直撃する

神埼「ぶっ!？」

そのせいで目を少し閉じてしまった、そこに追撃の膝蹴りが腹に入られバグナク付きの拳の突きがせまる

神埼「なめんなあ！」

それを蹴り上げ顔に左ジャブを放つ、それを避けられるが次に腹にブローを放つ、それも腕で防ぐがその次にローキック、下がり避けるが詰められ左のブローそれも腕で防ぎ返しにバグナクの突きが来るがダッキングで避け顔にフックを放つ、相手は突きを出したため避けるにいくのか少し顎に当たってしまった

？「っ！」

少し視界がぐらつく、それを見た神埼はローキックでバランスを崩させ腹に左フック、下がった頭に膝蹴りを入れた、倒れそうになったが何とか相手は持ち越し直ぐ様下がる、鼻から出てくる鼻血を指で拭き取ると余裕の表情が崩れてきた

？「：以外とできるじゃないか」

神埼「だてに鍛えられてないんだよ」

同じく片方の鼻を抑えもう片方の鼻で勢いよく鼻を吹き出しを出し鼻血を飛ばす

神埼（いいね、燃えてきた）

相手も少し冷静になったのか構えたまま動かない、聞こえてくるのは自分の足のステップと荒い息遣いだ

? 「!」

すると相手が駆け出した、神崎はそれを見て構えじつと待つ、すると相手は針を出しこちらに投げてきた、それをダッキングで避ける、さらに針を投げられこれも避けるが避けた先に投げられたため大きく避けた、相手はバグナクをしまいコンバットナイフを取り出し右手に持って突いてくる

神崎「っ!」

横に避け顔にジャブを放つがその顔と拳の間にナイフが置かれる、直ぐに拳を引っ込め腹に蹴りを放つが左手で止められナイフを逆手に持ちそれで脚を刺そうとする

神崎「こんの!」

その腕を掴み止め顔にジャブを放つ、相手はそれを避けるために顔をそらす、掴む手が緩んだので脚を下げ腹にブローを放つ相手はそれを止めようと身を屈めそれを逆手に持ったナイフで突き立てようとした、だがそのブローは来ずに逆の手のジャブが顎に当たった

? (フェイント!?)

それを気を取られたのか腹にストレートが入る、そして下がった頭にアッパーを入れる、だが相手はそれで倒れずにナイフを捨てタックルし神崎を倒し馬乗りになる

神崎「んな!」

? 「目玉貰うぞ!」

懐から針を取り出し目玉に向かって振り下ろした、神崎は顔を背けやり過ぎし返しざまにジャブを放つが手で押さえられその神崎の肩に針が刺さった

神崎「いつ!?!」

肩に激痛が走り針が刺さったまま別の針を取り出そうとした、神崎はその隙について相手を突き飛ばし直ぐに立ち上がりお互いに構えをするが神崎の方は左方が上がらないのか少し下がっている

神崎「はあっはあ」

? 「良い腕だけど、しよせんスポーツだな」

神崎「っ！」

その言葉が気に入らなかつたのか針を抜き出しそれを乱暴に捨てるが痛みは引かなかつた、相手はそれを見ると苦笑しながらまた懐から何かを取り出した、鉄の棒が出てきた

神崎「高そうな警棒だな」

? 「俺の特注品でね」

それをこちらに向け近づいてくる、神崎は肩を抑えながら後退りどう対処するのかを考えているが焦っていてまとまらない、今片腕はあまり使えない上に相手には余力がある上に殴ってみてわかつたが何か体に仕込んでいるようなので体にダメージが残る程の物でもなかつた

神崎（焦るな、考えろ）

頭を冷やし今自分が持てるすべての知恵を使い思考を巡らす、額に滲み出た汗が頬を伝って落ちていき冷たい空気が充満する、そして神崎の方は答えが出たのかそれを行動に移そうと思つたその時、視界に変な者が映つた

神崎「…え？」

いがみ合っていると神崎が急に変な声をだしその場に固まつた、相手はそれをチャンスだと思つたが神崎の様子がおかしすぎて気になつた、視線はどちらかと言うと自分の後ろを見ているような、なんだか嫌な予感がして後ろを振り向いてしまった

? 「な!？」

龍士「……」

そこには男がいた、身長もそうだが体の大きさ異様にでかくこちらを見下ろしている、その目は細くそこから見える黄色の眼光は暗い事もあつてか妙な寒気に襲われた

龍士「…面白そうな事してるな、二人とも」

龍士は相手とは間を保つたまま話しかけてきた、相手はそれに答えずに警棒を龍士に向けたまま警戒している

龍士「神崎、これはどういう状況だ？」

神崎「えっと、これはその、俺にもよくわからなくて」

龍士「お前が連れ込んだ女にようがあるんじゃないのか？そうだろうか？」

そう投げ返すが相手からは返事らしいものは返ってこなかった、変わりに龍士が近づいていき相手との距離が詰められていく、妙な緊張感が走り神崎と謎の人物にはそれがあがるが龍士の方には別段そんな物はなく涼しい顔で進んでいた、そして龍士が相手の間合いに入った瞬間その鉄棒が振り下ろされた、だが不思議な事が起こった、その鉄棒が龍士の顔に迫ろうとした時龍士の右腕が消えた、それと同時に大きな音が走り警棒が振られる、だがその腕は静止せずそのまま振りかぶった

？「え？」

きちんと距離を測って振った筈なのに何故か何もあたらず空を切った、思わず鉄棒の方を見てみると大きく曲がっていた

？「…は？」

有り得ない、これはただの鉄じゃない、希少合金を配合させて作った特注品だ、生半可な事じゃ曲がりもしなければ軽い攻撃なら傷だつてつきやしない筈だ

龍士「切った方がよかったか？」

その言葉を聞いた途端曲がった警棒は捨て懐からヌンチャクを取り出し龍士に向かって振り下ろそうとする、すると次は龍士の左腕が一瞬ブレ顔に凄まじい痛みと衝撃が走り後ろに吹っ飛ばされた

神崎「おわ!？」

吹っ飛ばされた相手を神崎が避けるとそのままそれが横切り数メートル飛ばされた所に地面に落ちた、その光景を見ていた神崎は数秒ポカンとしていて正気に戻り後ろを振り向くとそこには龍士が歩いて来ていた

龍士「後で話がある」

そのまま神崎の横を通り過ぎあの謎の人物に向かう、そして相手の前に立つとその場で膝を折り姿勢を下げた、相手の方は龍士のパンチが聞いているのか起き上がるの辛そうにしている

龍士「大人しくついて来る気はないか？色々お前から聞いておきたい事があるんだ」

？『く、くたばれ』

そう言った瞬間謎の人物から光が見えた、その元を見てみると自分の左腕の服の上から右手で何かを掴んでいて左腕の裾辺りが破れ煙も出ている、どうやら仕込み銃があり消音機能付きのようだ、だが龍士はそれを至近距離で放たれたにも関わらずその右手には弾丸が掴まれていた

？『まじかよ』

龍士「返すよ」

右手で上に軽く弾き落ちてきたのを掴みなおすとそれを人差し指に置き親指で弾き飛ばした、それは相手の左腕に直撃すると金属同士が衝突し合う音が響いた、どうやらワザと当てたようだ

龍士「腕に仕込み銃か、初めて見たな」

相手の裾を掴みそれを持ち上げると人が片手で持ち上がった、そして龍士は腹にブローを入れると鈍い音が響くと相手は大人しくなり動かなくなった

龍士「さて取り敢えず武器は取り上げるとして…神崎」

神崎「な、なんです？」

龍士「その女は何処にいる？少しそいつからも聞きたい事がある」

神崎「い、いや、でも」

龍士「聞きたい事があるだけだ、悪いようにはしない」

神崎「わ、わかりました」

いつもと違う声に押されそれを了承すると龍士は掴んでいる人物を担ぎ上げそのまま歩くと神崎もそれについていった

龍士「さて…そろったな」

神崎のアパート近くにある倉庫、そこには使われなくなった生活用品等が積み重なっておりその真ん中には神崎と龍士、それと例の男とセレナがそれぞれ椅子に座っていた、神崎とセレナはソワソワしており男の方はもう起きており後ろに手を縛られているため龍士を睨む事しかできずその龍士の方はセレナの方に目を向けた

龍士「あなたがセレナさんですね？」

セレナ「は、はい」

龍士「んじやお前は？」

?「……」

セレナの方は返事はしたが男の方は返事をしなかった、それを見た龍士はため息を吐きながら椅子から立ち上がり男の前に立つ、そして自分の片手を上げその手の甲を相手に向けるとその手がぶれた瞬間、男の顔が歪み鼻字が出た

?「ぶっ!?!」

龍士「喋らないならもう一発行くか？」

セレナ「ま、待ってください!!」

その行為を見ていたセレナが何故かそれを止めに入った、その声に釣られた神崎と龍士の二人は思わず顔をセレナの方に向ける

セレナ「そ、その人なんです、私を助けてくれたのは」

龍士「助けた?助けたのは神崎なのでは?」

セレナ「いや、そうじゃなくて、私が病院にいた時に助けてくれた

人で…」

龍士「…神崎」

それを聞いた龍士は大きなため息を吐き神崎の方に声をかける、その顔はとてもめんどくさそうにしていた

神崎「いやその、その話は俺も最近聞いたもので」

龍士「何で俺に話さなかった？」

神崎「それは…忘れてて」

龍士はまたもやため息を吐き次はセレナの方に向いた

龍士「取り敢えず自分が今から言う質問に答えてくれませんか？その男も」

龍士は席に戻りまずセレナに質問攻めを行いある程度を理解すると次は男の方に向いた

龍士「だいたい理解した、次はあんただ」

？」「…わかったよ」

男の方は無言を貫くのは無理だと判断しあきらめたように喋りだした

ラフ「俺のラフティー シャフ デュラベルだ、よくラフって呼ばれているからそれでいい」

龍士「俺は龍士、こっちが神崎だ、取り敢えずセレナさんの事を教えてくれないか？」

ラフ「わかった、俺がセレナさんを助けたのは頼まれたからなんだ」
龍士「頼まれた？誰に？」

ラフ「俺の武器全部見たか？俺は武器商人なんだ、最近付き合いがあるお得意様から頼まれたんだよ」

龍士「そいつはどんな奴だ？」

ラフ「それは明かせない、一応依頼だからな」

龍士「まあいいだろう…」

ラフ「それでその依頼を受けてその目的の病院に行ったんだ、でも様子が変だった、だから周りを警戒しながらセレナを連れ出したら、襲われた」

龍士「マファイア連中にか？」

ラフ「ああ、そいつら倒しながら逃げ続けて来たんだ、それで適当な飛行機捕まえて高跳びしたら」

龍士「ここに来た」

ラフ「そういう事だ」

龍士「よく空港で引つ掛からなかったな」

ラフ「流石に空港では武器は持つてこれないから武器は部下に頼んで乗ったよ、まあそのせいで空港では何も出来なくてセレナとはぐれちゃったけど」

龍士「そんなのニュースになってなかったぞ？」

ラフ「俺らも皆もこそそやってたからね、少人数だったしそんなに騒ぎになってなかったよ」

龍士「そうか…セレナさん、今の話は本当で？」

セレナ「はい、そこから逃げるように街に逃げたんです」

龍士「……」

龍士は二人を見比べ嘘をついていないか見ているがラフはともかくセレナがそこまで演技が上手いとは思えない、だが龍士は前から疑問に思っていた事が晴れていなかった

龍士「羽田空港でお前たちを襲ったのは誰だ？」

ラフ「佐伯組だけど？」

龍士「何で佐伯組がそこで出てくる？」

神崎「と言いますと？」

龍士「アメリカからここまで十時間ちよいだ、マフィアならいざ知らず何故佐伯組が先周りしている？」

神崎「それは、頼まれたからとか？」

龍士「頼まれたにしても時間が足りん」

先周りをするにしてもそんな簡単に行動が出来る程極道はまともな組織ではない、相手と話し考えそして決める、それを決めるのにも数日はかかるぐらいはするのにいくらなんでも佐伯組の動きが早すぎる

龍士「考えられるのは佐伯組とましてやマフィアが最初からつるんでいた事だ、最近の佐伯の行動を考えるとあり得る話だ」

佐伯組はマフィアをこの街に通し何かを考えている、それ関係でそのマフィアと関わっていたのなら出来そうな話だが

龍士「一番わからないのは何故二つの組織がそこまでしてセレナさんを追っているんだ？理由はやはり話せないのか？」

結局それに行き着くのだ、セレナを追う理由がわからないと手の施しようがない、こうやって身柄を保護出来るのだがこれでは後手に回る事が多い上に敵が誰でどういう奴らなのかの分別もつけない、せめてその理由だけは知りたかった

ラフ「それは俺にもわかんね」

それを聞いた龍士はセレナの方を見る

セレナ「すいません、私にも見当がつかなくて」

龍士「家族はいるのか？それが関わっているかもしれない」

セレナ「：姉が一人います」

龍士「その人は今何処に？」

セレナ「わかりません」

龍士「考えられるのは……いくつかあるな……遺産相続……はないか姉がいるし、一番考えられるとしたら姉が厄介事を持ってきただが真実がわからないのでは……手詰まりか……」

それを聞いた龍士はため息を漏らし頭を伏せた、神崎の方も同じような理由で行き詰っていたのでそこまで動揺しなかったがラフとセレナの方は落ち着かない様子でそれを見ていた

龍士「：取り敢えずわかったのはセレナさんがこの事件の中心にいるってことだな」

ラフ「そう言う事」

龍士「神崎、お前はいつも通り行動しろ、何かわかったら俺に知らせるんだ」

神崎「はい」

龍士は椅子から立ち上がりラフの後ろに回ると腕についてある手錠を外し自由にさせた

ラフ「いってえ〜」

龍士「ラフはセレナさんの近くにいてくれ、武器は返しとく、もし

別件で必要な事があつたら神崎を通して俺に電話をかける」

ラフ「まあこうなつた以上、言う事聞くしかないよね」

龍士「まあまだ完璧に信じたわけじゃないがな」

ラフ「はいはい」

そう手をぶらぶらさせながら返事を返す次にセレナの方を向いた

龍士「セレナさんはなるべくアパートから出ないように、ただ息抜きに出る時はだれかと一緒に行く事」

セレナ「は、はい」

龍士「こんな所だな、神崎は二人を連れて帰れ、俺は今から仕事だ」

神崎「わ、わかりました」

そういわれた神崎は二人を連れて倉庫から出る、ラフとセレナたちは安堵の息を漏らしているが神崎の方は何だか浮かない顔をしていた

セレナ「どうしました？」

神崎「いやその、何かごめんね？」

ラフ「え？何であんたが謝るの？」

神崎「情けなくてさ、あんだだけ任せろって言ってたのに最後の最後に龍士さんに迷惑かけて…」

ラフ「おいおいそんな事はないだろ、セレナを保護したのは実際お前なんだしおまえのおかげで今まで無事だったんだから」

セレナ「そ、そうです！神崎さんがいなければ私どうなっていた事か…」

そう落ち込んでいる神崎に励ましを送る二人、確かん厄介事を持ち込んだのは神崎だがそれはあまり龍士も人の事言えた義理じゃないしセレナを今まで守っていたのは神崎なのだから

神崎「…ありがとう」

それを聞いた神崎は気が楽になったのか笑みを浮かべその返事に答える、そして三人はそのままアパートまで歩き始めていった

龍士「…行つたか？」

その様子を見守っていた龍士は倉庫の中に戻る、真ん中にあつた椅子は片付けられており少し広がっていた、龍士はその真ん中に立つ

龍士「出てきて大丈夫です」

そう言葉を漏らすと奥にあつた扉が開きそこから三人の極道風の人が出てきた、その三人は龍士がよく世話になつている人でその姿を見た龍士は極道式の挨拶でその人たちを迎えた

宮本「あれが例のお嬢さんか、確かにどつかで見た顔だな」

勝又「何処かでお会ひした事があるので？」

「――古東会 黒澤組組内宮本組若頭――」

「――勝又 翔――」

最初に喋りだしたのは宮本組の組長とその若頭だ、宮本がタバコを取り出すとすぐさま勝又がライターを出し火をつける、それを一息吸い吐き出した

宮本「いやないな、ただ何処かで見たとような気がするだけだ」

黒澤「まあそれは後で調べればいいだろう」

「――古東会直系 黒澤組組長――」

「――黒澤 骸――」

そして最後に出てきたのはあの黒澤だった、どちらも龍士にはない

風格と威圧を出し見た目もかなりいかつい、まさしく極道という言葉がふさわしい顔をしている人たちだ

黒澤「よく俺たちに知らせてくれたな、でかしたぞ」

龍士「ありがとうございます」

そう言いながら龍士の肩にポンッと手を置き褒めると龍士は頭を下げたまま返事を返した

龍士「正直隠していたら駄目ですからね」

龍士がこのことを話したのはこの案件に佐伯組が関わっていたからだ、龍士だつて隠し事はするのだが私情よりも効率が高まる時はそれを優先する、神崎たちには悪いと思っているのだが人ではあった方がいいし何より佐伯組の動向を知るための事としても使えるのでどうしてもこちらの目が届く所に置いておきたかったのだ

黒澤「お前はそこらのガキと比べて隠し事が少ないからな、面倒が無くていい」

黒澤もタバコを取り出し龍士がそれに火をつける、黒澤もそれを一口吸い煙を吐き出した

黒澤「あの女の事、何でもいいから引つ掛かったやつがあつたらこの四人で共有するぞ、佐伯組やマフィア連中の事もだ」

「「わかりました」」

黒澤「佐伯の奴今まで可愛がつてやったが……凶に乗り過ぎたな」
そうタバコを吸い眉間にシワを寄せ声も低くなっておいる、顔の怖さも相まってかなり威圧のある顔が出来上がった

宮本「あの女に護衛をつけましょうか？」

黒澤「本人はあまり望んじやないだろうが、言い方は悪いが佐伯の時の切り札になる奴だ、ばれないようにやれ」

宮本「勝又」

勝又「直ぐに人を選んで送ります」

黒澤「龍士は行動範囲を広げて調査だ、間違つてももめても殺しはするなよ」

龍士「わかりやした」

黒澤「俺はさつき聞いた事をツテ使いながら探す、解散だ」

その言葉を言い終えた黒澤たちは外に出る、そこには三台車が止まっており黒澤は組員が開けた車に乗り宮本は勝又が開けた車に乗り龍士の方はどうやら自分の車らしく運転席に乗りエンジンを掛けた

龍士「まったく、面倒になつてきたな」

ため息をつきながらタバコを吸っているとスマホが鳴り出した、それを取り出し電話に出る

龍士「…なんだ？」

マスター『ああ龍士か、頼まれた例の男写真の身元がわかったぞ』

龍士「早いな」

あの組の事務所を襲っていた奴の特徴と自分で書いた絵を写真で撮りそれをマスターの方に送っていた、どうやらその返事がもう帰つて来たようだ

マスター『まあわかりやすすぎる奴だったな、ホントにこいつなのか？』

龍士「そうだ、取りあえず教えてくれないか？」

取りあえずこれを聞いたらまた頼む事になるであろう女性の事を思い浮かべる、だがマスターの言葉を聞いた途端その考えは一瞬消えてしまった

マスター『緒川慎次、ツヴァイウイングのマネージャーだ』

龍士「…：は？」

マネージャー？あのウイングの？何でマネージャーが？

龍士「えっと、確かなのか？」

マスター『ホントかどうかもよくツヴァイウイングの二人と写る時があるし間違いないよ』

思わず聞き返してしまった、そりやそんな事を言われて不思議に思わない人等いるのだろうか？

龍士（何でマネージャーが木野組襲つてんだよ、わけわからねえ）
てつきり正体不明の人間かと思いきやおもいつきり表側に出てる人間だった、しかもそれが有名ボーカルユニットのマネージャーとなれば何故襲つたのかと考えても思い当たらない筈なのだが龍士はあ

る事が引っ掛かった

龍士「…ツヴァイウイング？」

組を襲いそしてあいつが持っていた資料を基に追いかけたら二課の戦闘跡に出くわした、そこではノイズが出現した跡があった

龍士（ノイズ、二課、ツヴァイウイング、テロリスト…まさか）

何の理由も無しにマネージャーがそんな事をするわけがない、恐らくテロリストの足取りを追っていたんだ、今回の騒動を引き起こしたのなら納得できる、そしてもし前の騒動もそのテロリストがやったとしたら尚更だ

龍士「……」

こめかみに筋が浮かび目が開き始め血走っている、手の方にも力が入り拳を握りしめた音が小さく響いた

龍士（あいつらかあ、俺たちから幸せを奪ったのは）

龍士の中に激しい怒りが沸き上がり目の前の光景を睨み続ける、自分たちをこんな目に合わせた奴らとなればもはや龍士に我慢はできない、誰のせいでこうなつたと思っている？ 誰のせいで地獄を見たと思っている？ そう昔冷めたはずの怒りが沸騰し始めていたのだ

龍士（マリアとか言ったな、待ってろよ、その綺麗な顔潰してやるからよ）

あの事件の詳細を知らない人間からしたらこう行き着くのは仕方がないだろう、あの事を知っているのは二課の人間だけ、龍士の方でもまえの事件の事は調べたのだが二課の情報規制があったためかろくなものが見つからなかった

マスター『龍士？ 龍士？』

龍士「っ！わ、わりい」

マスター『どうしたんだよ、何か息荒いぞ？』

龍士「何でもねえよ」

そう頭を切り替えて次の依頼を出す

龍士「んじや次の依頼の話をしたいんだけど大丈夫か？」

マスター『別に構わねえよ、んで？ 次は誰を探せばいいんだ？』

素晴らしい龍士は近くににいる組員に指示してマスターに写真を飛ば

す

龍士「この女の事についてと、佐伯組の動向についてだ、わかる範囲でいいから調べてくれないか？」

マスター『ok』

龍士「んじやよろしく頼む」

そう言い終わり電話を切った

龍士「取りあえず街に向かうか」

そして車が出始め情報収集のために街をへと向かう、やはり情報は人が集まる場所に行きやすいので取り敢えず行く事にした

龍士（取り敢えず優先事項はこっちだな…これで集まらなかったら、知り合いに頼むか）

あまり頼りたくない人だが人探しの才能は恐らくあつてきた中でピカ一だ、もしかしたら依頼するかもしれない

龍士「…めんどくさ」

さっきの怒りも相まってまた徹夜かと愚痴を溢しながら車を走らせて行った

分からず屋

あの戦いの後峰たちは怪我により入院していた、奏の方は仕事の事もあり中々こられないがクリスと未来の二人は学校の合間を見てよく来るのだが未来たちの方は何だかよくない雰囲気の流れていた

未来「……」

峰「えっと、未来ちゃん？」

未来が顔を伏せたまま峰の方を見ず椅子に座ったまま何も喋らずそのままじっとしていた、峰の方もその光景は見慣れているのだが何だか空気がいつもよりも酷く焦って声を掛けてしまった

未来「…峰さん」

峰「う、うん」

未来「何でいつも無茶するんですか？」

峰「い、いやさその、結構やばかったからさ、全員でかからないと不味い状況で…」

未来「それで峰さんが死にかけるのはいいんですか？」

峰「そ、それは」

よくない、これは自分で思った事なのだが自分の身も守れない人間が他人を守る資格はない、これは至極当然の事で守る人間が死ぬ何て本末転倒もいい所だ、それで死ねばその人間は犬死だけで終わり残された方も跡見が悪くなる、守ろうとする方もしつかりと自分の事は考えなければならぬのだ

峰「で、でもこうやって生きてるから…」

未来「何がいいんですか？」

ようやくと上げられた未来の瞳には涙がたまっていた、今にも泣きだしそうな顔なのに力強い目が峰に向けられておりその峰の方はその顔を見て声が止まる

未来「生きてればいいんですか？それで済めば大助かりなんですか？他人を守ればそれでいいんですか？」

峰「そ、それは…」

未来「何もよくない!!」

そうまた顔を下げたと同時にそう大声を上げる、峰の方は完全に固まりもはやどう喋っていいのかわからなくなっている

未来「何がいいです!? そうやっていつも死にそうな大けがして帰って来て大丈夫!? 刀で切られたり食われかけるのが大した事がない!!? 怪我して傷つくのなんか一つもよくないじゃないですか!!?」

峰「あ、いや、そ、その…俺がやらなきゃかと思って」

未来「ツ!」

その言葉を聞いた未来の方は大きく息を吸い荒く椅子から立ち上がりそれに峰は驚いていたがそれよりも立ち上がった拍子に見えた未来の泣き崩れそうな顔を見て喉が詰まってしまった

未来「もう知らない!! 峰さんの馬鹿!!」

その場を逃げ出すように部屋から未来が出て行った、峰の方は止めようとしたが罪悪感のせいで声を掛けられずその背中を眺めるしかなかった

峰「…あゝ」

顔を手で覆い深くため息をつきその状態でしばらく固まってしまいう、峰はしばらく考え続けるがいい案が思いつかず後悔の念に釣られるため息を吐き続けた

斎藤「それで出て行っちゃったと」

その後峰は誰かに相談したかったのか斎藤の方に電話をかけていた、病室の方は峰とは別室になっており斎藤の方にはクリスが毎週四回は通っている、何か食べ物を持ってきたりただ喋りたいだけに来る時があるのだが本人は断固として拒否しているが本心はこうである、その証拠に今も少し不器用に切ったリングを電話している斎藤の口に運んでいる

峰『そうなんだよね…流石に考え無しにやり過ぎたかもな』

斎藤「まあ未来ちゃんのような反応が普通ですよね」

そりやそうだ、一般人からしてみれば斎藤たちがやっている事は少し以上だ、人は壁を壊せないし数十メートルも単身で飛ぶ事もできない、それだけは見ればすごいや怖いと言う感情で済まされるだろうが怪我をすると言う事に関して痛ましいと言う感情はその友人にとってはかなり苦痛な事であろう

クリス「ん」

斎藤「あむ…まあこればかりは謝った方がいいのでは？流石にこの怪我は笑って済ませるのはおかしい訳ですし」

峰『だよね』

そう向こうからため息交じりの返答が来た、峰さんの方も本意ではなかったであろうが今回ばかりは仕方がなかった

斎藤（あいつ…今思えば不気味過ぎだよな）

所々に生えた結晶の下から見える機械仕掛けのようなコードや装甲、今見ても普通の生き物ではなかった

斎藤（司令のパンチ喰らっても以外と平然としてやがった…俺たちで勝てるのだろうか）

こちらの攻撃が効かなかったのに対して相手はスピードもパワーも桁違いだった、司令がいなかったら恐らく自分たちは鬪り殺しにされていただろう、峰さんも自分も回復するまで時間がかかるだろうしその間に襲われたらまずいかもしれない

斎藤「今は少しそつとしておきましょう、峰さんも自分から探しにいけないでしょう」

峰『そうしようとは思う、けど夜までに帰ってなかったら誰かに探してもらわなきゃ』

斎藤「そういう時は自分の方にも声を掛けてください、協力しますよ」

峰『…ありがとう』

そう一声礼を言いその後少し雑談をして切り上げた

クリス「何だった？」

斎藤「峰さん未来ちゃんど喧嘩したみたい…まあ今回は俺たちが悪かったんだけど」

クリス「そうだったのか…」

それを聞いたクリスの方はやはり浮かない顔をする、実はクリスと未来は学校の方で交流があり仲が良く未来の性格も相まってか響と同じような対応をする事が多く接する事があった、そのためクリスにとっては数少ない友人でありクリスも優しい性格なため友人が喧嘩したと言う話を聞いて不安のようだ

斎藤「大丈夫だよ、未来ちゃんも峰さんもすぐ仲良くなるって…今回は運が悪かっただけなんだから」

クリス「…そうだよな」

斎藤「今回は相手が最悪だったからな、けどやっぱり大げがする人間を見るのは辛いよな…ごめん」

クリス「別に気にすんじゃないやねえよ、守ってもらったしな」

斎藤「そりや守るよ、だって俺にとって大切な人だからな」

自分には昔の記憶がおぼろげでほとんど覚えていない、親の顔は覚えていて、だが今まで何をしてきたのかの記憶がちぐはぐだ、だからこそ今の事を、そして自分の大事な人たちをらなきゃならない

クリス「そ、そうか、そりやよかった」

斎藤「お？照れてるのか？」

クリス「はあ!?照れてねえよ馬鹿!!」

斎藤（かわいいなあ）

クリス「むかつく顔やめろてめえ!!」

素直じゃない顔を見られるのが嫌なのか斎藤の方をポカポカ叩き出すクリス、斎藤の方はそれを手で軽く流すその光景は何だかホワホワしている、最近仕事続きでデートもできていないため久しぶり二人になったためか少し羽目が外れている、クリスの方も何だかんだ嬉しいのだ

斎藤「次のデートどうする?」

クリス「な、何でいきなり…」

斎藤「したくないのか?」

クリス「い、いや…:…する」

それを聞いた斎藤は隣の机に置いてあったスマホを取り画面を開き操作する、クリスの方は斎藤の肩に顔を乗せその画面を覗き込む

斎藤「何処がいい?前とは別のデートスポット行く?」

クリス「それもいいけどよ…:…気になる映画があるからそれ見てからでもいいか?」

斎藤「んじゃそうして最後に服とか買うか、たまには普通のデートをしてみてもいいな」

クリス「そ、そうだな」

何気に次のデートが楽しみなのかクリスの方も嬉しそうにしている、斎藤の方をチラチラ見て何かを待っているが斎藤の方はそれに気づいていないのか話を進めていった、その後この事件が終わったらデートは決定のようだがクリスの方は少し拗ねたような様子で不貞腐れ斎藤の方は最後までクリスがして欲しい事に気づかなかつたようだ

未来の方はそのまま寮の方に帰る気になれず響に一言入れ夜の街に出ていた、ネオンの光が彩る所で私服姿でぶらぶらしていた、顔の表情は暗く可愛い服装なのにただ目的もなく歩いていく

未来「峰さんのぼくか、響の方も私の気持ちを知らないでいつも無茶して…」

そう不貞腐れながら前を歩いていく、昼間なら浮きそうにない私服なのだが夜の街ではその明るい服装が少し浮いておりさらに歳の事も相まってその場からかなり浮いていた、そのせいか未来の方に幾つかの影が忍び寄る

男「ねえくお嬢ちゃん！俺らと一緒に遊ばない？」

未来「え？」

そう前から声を掛けられそれに釣られるように顔を上げると服装がチャラい大学生ぐらいの歳の男たちがいた、その男たちは未来の方を囲むように展開しそれに未来は戸惑ってしまう

男「可愛いねその服、お気に入り」

未来「いや！」

そう後ろから伸ばされた手を未来は払いのけようとするが15歳の力では20近い男の手は払いのけられずそのまま手首を掴まれ男の方に引き寄せられる

男「くいいいねその反応、初々しくて」

男「ほら行こうぜ、大丈夫だよ別に変な所に連れて行く訳じゃないからさ」

未来「い、いやあ!!」

そう暴れ出すが後ろから二人に抑えられその無理矢理連れていかれる、どの方向からも嫌な視線が向けられそれがどうしようもなく怖くて枯れた筈の涙が再び出てこようとした、周りの人も止めるのが怖いのかそのまま素通りして行き当てにできない、今にも泣きだしそう

なったその時前にいる男の肩に大きな手が置かれる

男「んだよ、今いいといててててて!!?!」

そのまま後ろに引つ張られるようにその場をどかされるとその手の持ち主の顔が見えた、そこにはとても懐かしい体形似合わない童顔をした男が現れた

未来「龍士君!」

龍士「……」

男「な、何だおまえ!?!邪魔なん」

未来の肩を抑えていた男の一人が龍士に手を出そうとした時龍士はゆっくりと腕を上げた、そしてその腕が一瞬ぶれたと思ったら男の顔が傾きそのまま力なく倒れる、龍士の後ろにいる男と未来の肩を抑えている男の方は何が起こったのかわからないのかその場で固まっていた

男「え?…え?」

男「お、おいこいつヤクザだぞ」

未来の肩を抑えている方の男が龍士の黒いスーツに付いている代紋に気づいたのかそう仲間に声をかける、どかされた男の方はそれを聞いて血の気が引いてきた

男「こちら辺って言ったら黒澤組……」

男「お、おい、もう行こうぜ」

ゆっくりと未来の肩から手を離し静かに未来から離れていく、そしてそのまま龍士の横を通り過ぎそのままもう一人の仲間と一緒にその場を立ち去ろうとした時龍士がその背中に声をかけるとその二人が振り返るとその二人の前にさつき気絶させた奴を投げつけた、二人はそのまま受け止められず三人まとめて倒れてしまう

龍士「…忘れもんだ、それ連れて消えろ」

二人は特に何も言わず龍士と顔を合わせたくないのかそのまま二人で担ぎこちらを振り向かずそのまま向こうに消えていった、龍士はその三人が消えるのを確認すると未来の方を振り向かず少し早歩きで前を歩き出しその場を去ろうとする、それを見た未来は今まで呆けていた意識を元に戻し急いで後を追いつめる

未来「ま、待って!!」

そのまま駆け出し追いかけ始める、夜の街なのに何故か人通りがな
くそのため見失うことなく追う事ができいつの間にか人通りがまっ
たくない街と街の間にある川に来てしまった、敷き詰められた砂利を
踏みながら未来は息を切らしながらついて行くと急に龍土が立ち止
まった、それを見た未来はようやくと息をつけると安心したのかその
場で止まり息を整え始める、膝に手をかけ支えるようにしながら下に
ある砂利と石を見ながら整えていると未来の周りが影で暗くなった、
それに気づいて顔を上げた瞬間軽めのデコピンが未来の額を叩いた

未来「っ!？」

軽めとは言え痛かったのか額を手で押さえその場で縮こまりなが
らも顔を上げる、そこには不満そうな顔をした龍土が腕を組みながら
未来を見下ろしていた

龍土「お前こんな時間まで何してんだ？」

とても懐かしい声だった、これが怒っている声じゃなかったらもっ
と喜んでいたのだが少し真剣な表情に押され未来は少しさらに縮こ
まってしまう

龍土「まだ16歳の高校生のガキがこんな真夜中でしかもあんな下
品な看板ぶら下げた場所にいたと言う話流されてでもみる、お前その
時点で終わりだぞ」

その言葉を聞いて未来は自分の失態に気づいた、大学生ならいざ知
らずまだ一般教養や社会常識をよく知らない高校生などいいカモだ、
しかもそうじゃ無くても今はネットがありさらに夜中には警察や補
導員が回っているのですその事を通じて教師に報告されて呼び出され
たら本人は何もしていなくても変な噂をたてられる恐れがある、それ
はここにいる二人がよく知っている事だ

龍土「俺が少し荒く人払い済ませたからいいようなものなあ言っ
た奴に力で来られたら警察がその場にいなえと誰も止めねえんだぞ、
だいたい夜中にいる連中何か他人がそんな事されても関わる訳ない
んだか…」

人は困っている人を見つけても基本的にはそれを無視する、自分に

は関りが無いと言うのもあるが最近になって免罪絡みの事もあるため少し嫌な傾向に思考が働き怖がっているのもあるのだ、これも平和が続く平和ボケして変に刺激的な考えを持った人間が出てしまったせいで少し疑り深くなってしまったせいなのもある、これは仕方がなかった、その事は未来も知っている筈なのでやる筈がないのは龍士も知っており何やら訳アリなようなのが顔にすっかりと出てしまっている、目は少し赤く頬には涙を流した痕がしっかりと残っていた

龍士「…何かあったのか？」

未来「……うん」

ため息を吐き一度叱るのをやめ砂利から離れ少し坂になっている所に腰を下ろす、夜風に煽られた草の臭いが鼻を擦り川には夜景の街がきれいに映っておりその光が移動し反射してくる光が多く目が少し痛い感じがした

未来「…その、元気だった？」

龍士「それなりにな、まあ少なくとも生きるのに必死ではなかった」
そうつけている腕時計をさし金に余裕があるように見せてるがだいたい龍士が身に着けているのは貰っている給料から考えてもかなり安い物を買っている、と言うのも龍士はそれなりの立ち位置にいます。まだ入って間もないため古参の方よりは少なく若衆よりは多い位なのでそこまでのいい物が買えないのもそうなおだがこれは龍士事態に問題があり本人は正直言って“あれ”なのでなるべく地味な物を買っていると言うのもある、そのため金には余裕がありそれの代いたいは食費や鍛錬なので消えている

未来「何で電話してくれなかったの？心配してたのに」

龍士「それは悪かったな、あの時以降からお前らが何処にいるのか何か知らなかったんだよ」

これは本当だ、龍士はあらかじめ未来たちの存在は知っていたが居場所までは知らなかった、それ以前にヤクザなので会うつもりもなかった。未来たちの悩み相談なのは峰に任せているので龍士に会う事はない筈なのだが…

龍士「そういうお前は元気なさそうだな」

未来「…峰さんが最近馬鹿なんだ」

やはり龍士が予想していた通り峰が何かやらかしたようだ、と言うより龍士はこうなる事を予測していて峰にあまり無茶をするなど言っておいたのだ、未来は響の保護者役と言う程人に対して優しくそして身内が傷つく姿を見るのがとても嫌な筈だ、そのため峰にはなるべく怪我をせずやれと言ってるのだが当の本人はその事を自覚はしているのだが少し正義感が強いためそれを無視する傾向があるのだ

龍士（後で俺が…いやこれはもう仲直りする感じで未来に言ってもらって自覚させるしかないか）

未来「無茶しないでって言っても全然聞かない、いつも帰ってくる時はその…怪我してかえってくるんだ」

龍士「お前峰が怪我する理由知ってるのか？」

未来はそれに小さく頷く

未来「何でかなあ、痛い事何か嫌な事の筈なのに…何で無理しちゃうのかな」

人は死ぬのは嫌いだ、人は痛いのが嫌いだ、心を傷つけられるのも嫌いだ、なのに峰さんはそれでも戦っているのは立派だとは思うけど…それを見る私も辛い、締め付けられている胸に手をあてる、それを見ていた龍士の方は未来から視線を外し川に視線を落とす

龍士「…まああいつの事だ、恐らく訳アリだし詳しい事は知らんから言えん…だが峰の奴も本意じゃない筈だ、怪我するのはあいつのせいで自覚も無いあの馬鹿が悪いんだが悪気はないんだ、許してやれ」
こればかりは峰が悪いともいえるがあいつがただ無理をするためだけにやっている訳ではない筈なので事情を知っていれば客観的に見て恐らく仕方ない事かもしれない

龍士「まあ何か譲れないもんがあるのかもしれないねえ、それが何なのかは知らないが…ていうか知ってるんだろ？やめろって言えないのか？」

未来「……」

龍士「…言えないっか」

それに答えるように未来が小さく頷く、未来も響きたちと同じで隠し事をする時があり表情も今やっっているように浮かぬ顔をして曇らせるのでわかりやすい

龍士「そうだと俺は口が挟みにくいが落ち着いたら会ってやれよ…多分お前もそうだろう」

未来「……」

龍士「あいつにも理由がある、お前は心配するが止められない事情つても気になるが今のお前にできるのは峰の帰りを待つてやることだ、あいつも今回で怪我には気を付けるだろうしな、今回は多めに見てやってくれ…俺の方でも峰に言っとくからよ」

未来「…ごめんね」

龍士「いいって、俺もあいつが怪我して帰ってくるのは嫌だからな、手伝いくらいはできるし未来一人に背負わせるわけにもいかないからな」

そうニシシつと歯を見せながら笑みを未来に向けた、未来はその顔がとても懐かしく感じ少し不安が晴れていき安心したのかそれに返すようにぎこちないが笑みで返した

龍士「落ち着いたか？」

未来「うん…ありがとね」

龍士「それじゃ近くまで送ってやる…」

すると龍士が立ち上がり未来の方に向かって手を伸ばした、未来はそれを手に取り立ち上がろうとすると未来の体が急に浮かび龍士に持ち上げられる形で宙に浮かんでいた、未来は何をされたのかわからずポカンとしており龍士の方は気まずそうに未来の方を見ていた

龍士「…加減ミスった」

未来「い、痛い」

龍士「…わるい」

その後龍士はタクシーを捕まえそれに未来を乗せた、自前の車で送ってもいいがそれをやったらかなりめんどくさい事になるので普通のタクシーつを捕まえたのだ

未来「今日はありがとね」

龍士「おう、もう夜中出歩くんじゃねえぞ」

未来「龍士君もだよ？いくらでかくて年齢誤魔化しやすいと言っても夜遊びは駄目だよ？」

龍士の方は仕事で夜中を出歩いていただけなのだが未来にはこの事伝えていない、今は峰の事でいっぱいっばいだろうし今自分がヤクザと言うのを明かすのは未来の不安は大きくなり過ぎてしまう、せめて話す時は未来の精神が落ち着いてからにした方がいいだろう

龍士「気を付けるよ」

未来「うん：あ、帰り道気を付けてね、最近物騒なんだから」

わかったと返事だけを返しそのままタクシーの扉を閉めた、離れていくタクシーの中から元気そうに手を振る未来を見送りながらそれに応じるように手を振り返す、そしてそれを見送った直後龍士のスマホが鳴り出した

龍士「：俺だ」

すぐに気持ちを切り替え電話に出る、するとやはり返ってきたのは聞きなれた声だった

山下『あ、兄貴、今大丈夫ですか？』

龍士「大丈夫だ、どうした？」

山下『いやそれがですね…』

龍士はそれに耳を立て冷たい夜風に当たりながら立ち尽くした、そこには未来が見慣れた龍士の姿ではなく何処か冷たい目を持った獣の姿だ

悪の前に巨悪が訪れる

空には広い青空が広がり道路には車が通り歩道では人が移動しながら目的の場所に行く、そんな中神崎とセレナの二人は歩道を歩きながら色々見て回っていた、スマホを片手に女性が好みそうな店へと移動しては中に入っていく。神崎の方も手当たり次第に行っている訳ではなくちゃんと選んで行っておりセレナのストレスを少しでも和らげようとする神崎の提案であった、ちなみにラフは別行動をしており今はおらず二人っきりの時間であった

神崎「いや美味しかったなああのクレープ、初めて食ったけど意外といけるな」

セレナ「そうですね、私も初めて食べましたが本当に美味しかったです」

神崎「それじゃ次はどうしようか、公園とかでゆっくり休む？」

セレナ「私公園と言う物には行った事がないので神崎さんが嫌でなければ行きたいですね」

神崎「それじゃ一緒に行こうか、気晴らしにもなるしさ」

それにセレナは頷き気晴らしに神崎は決めていた公園に向かう事にした。ここの地区での公園は珍しくはあまりなくその理由は人が住むことが少なくなり空き地が広がった結果不動産も扱いが困り手放す事が多くなりそれを放置する訳にも行かなかった役人が街の評判を保つためかあるいは土地に愛着を持っている人間の合同作業により半壊した公園や街の伝統を残し後の空き地は公園やデパート、または行き場を失って困っている人間たちの一時的な避難場所として扱いその間に壊れかけの住宅街や繁華街などを修繕作業を行っている。その最近修繕された公園がありそこはとても見晴らしがよく綺麗な場所と評判がよくそれを見つけた神崎は念のため近くのデパートで買い物を行っていたのだ

神崎「ここです」

綺麗な噴水にそれを囲んだ歩道にそれを囲む大きな草原と所々に木が生えとてもきれいに整えられた場所だった

セレナ「綺麗ですね……ここ」

神崎「そうでしよう、公園とか来たことはないんですけど……たまにはいいかなって」

敷かれた歩道を歩きながら適当な草原に腰を下ろし周りを見渡す、そこにはこの評判を聞きつけて来た人たちが来ておりペットの散歩や神崎と同じく休憩に来た人が置いてあるベンチ等に座っている

神崎「結構いいですねこうやって休むのって……ずっとボクシングしてたからな」

セレナ「そういえば最近通いの道場に行っていませんが本当にいいのですか？」

神崎「いいのいいの、龍土さんも認めてるし大丈夫、君の事を守らなきゃだしね」

それを聞いたセレナは顔を赤らめ顔を反らし神崎の方も自分で言ってて恥ずかしくなったのか同じく顔を反らしてしまった

神崎「ノイズによる被害が多すぎて人がかなり減ったと思ってたけど……意外といるんだな」

セレナ「それだけこの町が好きなんでしょう、思い入れがある人ほど何とかしようって頑張りますから」

風で煽られる髪を抑えながら言うその光景はとても見栄えがよく見ていた方も雰囲気当てられ直視ができなくなる、セレナの言う通り土地に愛着があったり国を愛する者等はたとえその土地が悲惨な時になっても離れずに奮闘し復興させると言うのは歴史でもよくある話だ

セレナ「神崎さんはここを離れようとは思わなかったんですか？」

神崎「正直離れたかったけどそこまで余裕なかったんだ、最初のうちなんかカツアゲとかしてたし」

セレナ「え!？」

龍土と会う前の方の自分を思い出しかなり恥ずかしい、災害によつての捻くれだったが今思えば龍土と会えてよかったと思っている。あの時会っていなければ今もきつと借金に追われる生活だったのかもしれない。

神崎「まあ今はもう借金返したし今もボクサー目指してるけど…龍士さんを見ると少し世界を見て回ってみたいな…」

龍士は父の友人と会うと同時にたまに外国に連れられた事があり回ったことがあったようでその時に言葉や文化と格闘技を学び小さい頃から色々経験していたらしい、自分よりも歳が下なのに技術も経験もしているのが正直すごいと思った。だから自分も龍士のように見て回ってからボクサーになってみるのもいいと思ったのだ

セレナ「良いと思いますよ、私もそんな旅してみたいです」

神崎「俺もやったことないけどやってみたらいいよ、大変だとは思うけどね」

ですわねと苦笑いで返されそれを見た神崎もクスッと笑ってしまいそれに釣られて何故か二人とも大笑いしてしまった、高笑いしてしまい周囲の目を引いてしまいがそれを気にせずお互いに好きに笑いあった

神崎「あーおかしい、何で笑ったんだろう」

セレナ「す、すみません、何だかおかしくて」

神崎「俺も、こうやって笑うのって久々かも」

最近夜の徘徊やら修行やらでこうやって笑いあうのは久々だったかもしれない、前の知り合いはノイズ騒動で無くなってしまい友人と遊ぶのが久々なのもあるのかもしれない

神崎「せっかくですし少し見て回りましょうよ、こういうのって穴場スポットとかあるんですよ」

セレナ「いいですねそれ、見て回りましょうか」

そう決めた二人は早速見て回る事にした、ちなみにそれを見ていた人たちはとても仲がよさそうなカップルと思ひ込み口から砂糖が出そうになっていたのかなんとか

出雲「やっぱ都会だから人が多いな、これなら紛れて逃げる事もできるな」

来栖『だな、車が使えなくなったら人込みを移動しながら行くのもありかもしれない』

出雲たちはセレナを向かいに行くための逃走手段を考えていた、セレナが追われている上に自分達も追われてはいるがその事を知っているのはごく一部、それに出雲は今街の中央にいるので人目がある以上は手は出しても来ないだろうし見つけにくいだろう

出雲「それで？そのラフと一緒にいるボクサーの奴は信用できるの？」

来栖『聞いた話で判断するしかないが、彼は人を見る目はある、心配はないだろう』

一応ラフからの方で現状どうなっているのかの報告はされておりセレナの護衛はその神崎がしているつとと言うのと保護に協力をしているヤクザがいると言う話だけは通してあった

出雲「ともかく早く連れ出さなきゃな、そのヤクザたちも可哀そうとかで保護とかはしてないだろうしな」

来栖『だな』

それはラフの方でも言われており保護をされているのは佐伯組とのつながりがあるかどうかとうとの予測がラフの考えであった、そうであればわざわざヤクザの方から首は突っ込んで来ないだろうしセレナがもし佐伯組との小競り合いの時に有利になるカードではない

と判断された場合どうされるかわからないため出来るだけ早く保護をする必要があったのだ。

出雲「それにしてもその龍士とか言う奴も頭切れるな、年からして入りたてだろうに」

ラフの見立てでは二十歳と言う事であつたが流石に実年齢はわかる訳がなかった、流石に高校生ぐらいの歳の子がタバコや酒をしながらヤクザをやっているなどと考えられる訳がない。

来栖『それにかかなりの強者と聞いた、ラフも戦闘の心得はあるのだがまるで話にならなかつたようだからな。』

出雲「ほぼゼロ距離で銃弾掴んだって話が、そいつ人間なのか？」
普通の人間であればたとえ数十メートル離れた場所から放たれた弾丸を避けるのだってほぼ無理で至近距離で避けたのであれば予測が正しいで片付けられるが、何のリアクションもせず軽く物を掴む感じで手掴みしたと言うのであればそれはただの化け物だ。

来栖『なるべく怒りは買いたくないな、頭も切れて実力も確かなど厄介この上ない。』

出雲「そうだな、取り敢えずこちら辺にいる間は騒ぎは起こさない方がいいかもな。」

もし変に怒りでも買ったらず少し不味い事になる、セレナはあつち側だしそれにこつちはこちら辺の地理をまだよく知らない、ヤクザしか知らない場所に何か潜られたら不味い事になる。こちらには人脈もなくそう言った専門的な知識がある訳でもないのだから。

来栖『取り敢えず情報収集が出来たら切歌たちを連れて早く戻つてこい。』

出雲「え？あの子たちは確か…」

来栖『聖遺物の回収だが…正直言つてあの子たちでは無理だ、元々非道な子でもないしな。』

来栖たちは格闘技や戦闘術等の心得はあるが調査できる程器用ではない、人の脅し方を知らなければどういふ手順で効率よく盗めるのか何てできる訳がない。そもそも聖遺物機関で育つた子供たちはただファイネの器となる可能性があるだけで集められた可哀そうな子

供たちなのだ。

出雲「わかった：きりのいい所で電話かけて連れてく。」

来栖『なるべく早くな、それから…』

すると突然来栖の電話が切れノイズ交じりの音だけが返って来た、出雲はそれを不思議に思いながら取り敢えず近くの路地裏に移動し電話先の来栖に呼びかける。

出雲「来栖さん？来栖さん!!：不味いかもしれない。」

今までこんな事もなかった、機材だって前の隠れ家の時に取り換えたのに壊れている訳がないしそもそも電話が通じなかっただけでこんなひどいノイズが走る訳がない。

出雲「切歌ちゃんたちを呼び出して合流、直ぐに帰ろう」

裏路地から急いで出て電話を掛けながら走って行く、人込みの中を突っ切りながら嫌な予感を取るために急ぐその姿を見た人たちはそれに一度は目を当てるも直ぐに自分の用事に専念し視線を外す、だがその中に出雲の事を見続ける男がいた、薄茶色の大きなコートを羽織りその中には白いYシャツを着ている少し年が老けた男だった、その男は吸っていたタバコを灰皿に捨てその出雲の後を追いかけた。

その時来栖たちは隠れ家に使用している港の倉庫におり拠点として使っている飛行機の中で出雲と同じように通信機で困っておりその横にはマリアが機材に問題がないかチェックしていた。

来栖「出雲！…ダメだからない。」

マリア「おかしいわね、機械に異常がある訳でもないのに何故…」
ナスターシャ「それは恐らく彼らのせいでしょう。」

そして部屋にナスターシャが入って来て部屋にあったディスプレイが起動された、そこにはここ周辺にしかけてあった監視カメラからの映像が映し出されておりそこには武装した集団がこの倉庫を囲んでいた

ナスターシャ「本国からの追ってですね。」

マリア「もうここが嗅ぎつけられたの!?!」

ナスターシャ「我々にはあの聖遺物があるからと言って所詮は素人の集団です、訓練されたプロの集団を相手では見つけられて当然です。」

ナスターシャたちが今まで逃げてこれたのはある聖遺物のおかげだ、聖遺物に関する知識についてはかなりのものだが特殊部隊を相手する力などほぼ皆無だ、証拠の消し方も雑だしなにより足跡を残し過ぎだ、そのため龍士たちのようなヤクザたちにあっさり見つかつた上に二課にいたっては緒川が一人であっさり見つける程の隠蔽工作の無さが欠点だった。

来栖「サイレンサー付きのライフルにEMP、それにミサイルランチャー…かなり本気だな」

しかもサイレンサー付きのライフルの方も問題だ、ライフルの形状から見るに对人ではなく対物使用の物でどうやらミサイルとライフルで飛べなくしたのち専用EMPで電子機器を破壊して動けなくしたあと増援を呼んで囲んで潰す気のようなだ、ランチャーは最後の手段で飛んで逃げる前に当てて叩き落とすようでこちらが透明になる事を知っているのかロックオン式では無い上に破壊を目的とした物を使用している。

来栖「私が行こう。」

ナスターシャ「いえここは Мария に任せましょう。」

それを聞いた来栖と Мария は驚き思わず Мария の方は聞き返してしまふ。

Мария 「け、けどママ、あつちはただの人間で…ガングニールの力を使つてしまえば…」

ナスターシャ 「私はそのつもりであなたに言つたんです。」

そう向けられた目には優しさはなくてただ子供を叱るように鋭くなった目が Мария に向けられた、来栖の方はいつでも出られるように部屋のドアの前で待機する。

ナスターシャ 「あのライブ会場の時もそうでした、あなたまさか自分の手を血で汚す事を恐れているのでは？」

例え非道と呼ばれようとも Мария が行った事は非効率的だ、会場では人質を取ればシンフォギア 装者たちを追い詰める事も出来ただろうに Мария はそれをしなかった、凶星を突かれたのだろうか Мария の方は目を反らしナスターシャに目を合わせようとしなない、そんな時に声を上げた者がいた。

来栖 「人を殺める行為を恐れるのの何がいけないのですか？」

Мария 「く、来栖？」

来栖 「人を殺すのは怖い、それは普通の人間だつたら思う事だ何も間違つてはいない。その事で彼女を攻めるのはやめて頂きたい。」

死ぬのは怖い、それは普通の事だ

殺すのは怖い、それも普通の事だ

だがこの二つは違う、死ぬ事は一度しか訪れないが殺す事はやろうと思えば何度でも出来るのだ、死ぬことを恐れる人間、優しい人間等はこの行為を嫌う、だがそれは戦士には当てはまらない。

ナスターシャ 「あなたたちの事は Мария が信用しているからと言って本来は部外者、私の判断には従ってもらいます。」

そう、本来なら出雲と俺は部外者、だが人殺しをしやくないのならさせる訳にはいかない

来栖 「…これ以上時間は掛けられない、ここは私が…」

『その必要はありませんよ。』

耳元にある通信機からやけにいい声が聞こえて来た、それを聞いた来栖の方はディスプレイに映っていた画面を見る、その映像にはノイズに襲われ炭素化されるFISの姿があった。

ウエル『こんな連中にマリアさんの GANG ニールを使うまでもありませんよ、二課には気付かれますがこつちの方が早いですから。』

来栖「ウエル：お前：」

ウエル『ほら早く逃げる準備をしてください、その間に片付けますから。』

不気味な笑みを浮かべながら杖からノイズを召喚していき倒していく、こうなると彼らは何もできないから別に殲滅をする必要はない、ノイズを召喚して壁にして逃げた方が全然早い、それなのにこの男ときたら笑いながら殺しをするとは：

来栖（やはり気に食わん）

だがそれでも逃げなくてはいけない、ナスターシヤの方は既に準備に入っておりマリアの方は苦い顔をしながらディスプレイを見つめ続ける、そこではもうすでに掃討を終えておりウイルは涼しい顔をしながらこちらに戻ろうとする。

少年「なあ今の音なんだ？」

「さあ？ どうせ工事とかだろう？」

その声を聞いた来栖とマリアは驚きウイルの方は足を止め直ぐに振り返った、そのまま歩いて行き倉庫から出るとそこには自転車に乗ってこちらを見る三人の野球部がいた

来栖「ウエル戻れ!! もう用事はすんだんだ!!」

だがウイルの方は止まらなかつた、杖を振りノイズを召喚する、少年たちの方はそれを見て思考が止まり寒気が走る、逃げ出したい、けど体が動かない。

マリア「やめてえええ!!!」

そのまま少年たちの襲い掛かるノイズたち、来栖はもう既に外に出て止めようとしているが出るのが遅すぎた、何かがぶつかる音が来栖の耳に響きその顔が怒りに染まりウイルの方を睨む。だがウイルの方はさつきまであつた笑みは消え不思議そうな顔で前を見ていた

来栖「あいつ、なに…」

その時だった、一瞬視界が曲がり膝が崩れた。手で地面に着かないように体を支え踏ん張る。視界に映っている手は震え全身と言う毛穴から汗が噴き出るのを感じた、そしてその後に感じたのは殺意だ

来栖「な…?」

口が上手く動かない、上手く立てない、殺意がある場所を確認できない、それを体が拒否をしている。だが人はそれでも見てしまう、好奇心が勝ったのだ。そしてそこには体に似合わない童顔の男が少年たちを抱えウイルの方を向いていた

怒龍

龍士「大丈夫か？」

そう静かに呟き抱えている三人をゆつくりと下ろす、自分でも何故ここまで穏やかなのか不思議だ。心の仲は殺意しかないのに不思議だった、だが次の言葉を言わなければそれもできない、早く言わなければ

龍士「早く行きな」

それを聞いた学生たちは我は先へと逃げていった、そして龍士はその場をゆつくりと振り返る、そこには白衣を着た男だった、銀髪で眼鏡をかけておりその顔は気持ち悪い位不気味な笑みをしている

ウエル「これはこれは、お優しいことで」

龍士「……」

？「あなたは逃げないのですか？まあ逃がしませんか」

龍士「……」

何も言わずにただ立ち尽くす、珍しく今回は冷静な頭を持った自分はいなかった、顔が少し歪み怒りが心の中を埋め尽くしていく、青筋が浮かび手に力が入り始め自分の噴火口がたまりだす。その様子を見ていた博士は伏せていて顔が見えないせいか不思議にそれを眺めていた

ウエル「そんなに見つめても何もおきませんよ？」

龍士はあの時の事件の詳細は知らない、ただ前の騒動の時に連続で同じ人が開催したライブ、その上に操っている所が世界に生放送された、それを見た龍士はもしその人間を見つけたら抑えられる訳がなかった

？「だんまりじゃ話そうにも話せないんですけどねえ……」

こいつだ、こいつのせいだ、こいつのせいで、俺は、峰は、未来は、響は

ノイズが周りを囲み始めるが龍士はそれを気にせずただ博士の方を見ていた、いやそれしか目に入らなかった、こんな奴ら周りに何人いようが今は怖くない、ただ憎悪で固められた言葉の一つに取りつか

れただ白衣の男を見続ける。

ウエル「まあ、悪いですが死んでください」

そう杖を振り飛びかからせる、後は見届けるだけだ

ウエル（馬鹿ですね）

勝てる筈もないのに馬鹿な人間だ、そう思っていた人間がノイズの中心から消えた

ウエル「！何処…」

周りの方を確認していると博士の顔が歪み拳が頬にめり込んだ、そのまま吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる

ウエル「ごへえっ！」

そして腹に膝蹴りが入りそのまま杖を持っている腕の骨を膝蹴りと肘打ちで挟み骨を粉碎、そのまま肩と腕を掴み肩の間接を外しそのまま回し蹴りを入れぶっ飛ばした

ウエル「ああああああ!!?!」

もう我慢はいらぬ、必要がない、自分たちをただ地獄に落とした人間を見つけた龍士はもはや怒り狂う獣のように、ただ押さえつけていた物を表に出す

龍士「死ねやボケがあああああ!!!」

そして壁また叩きつける前に追い付き腹に正拳突きを入れそこに追撃の肘打ち、さらに距離が離れた所に浴びせ蹴りを顔に入れ追い付きそこから後ろ蹴りを腹に入れそこからまた全体重を乗せたフックを腹に入れて壁に叩きつける。

ウエル「ご…」

悲鳴を上げる前に顔に拳が突き刺さりさらにそこからハンマーで地面に叩きつけた後足で蹴り起こし顔を掴み壁に叩きつける

ウエル「あ、おあ」

そのままはずしてない腕を掴み十字固め、そしてそのまま三角十字固めに移る、相手は白目を向くが気にせずそのままフロストチョークを入れそしてひっくり返りまたギロチンを入れそのまま掴んだ状態で起き上がると同時に叩きつけそのまま相手を蹴飛ばした、蹴飛ばされた男はそのまま地面に叩きつけられると動かなくなるが龍士はそ

の男に近寄り頭を掴み持ち上げる、そして胸ぐらを掴み壁に叩きつける

龍士「口数が減ったな」

ウエル「あ、あ」

顔が血だらけになり目も白目を向いている、意識も飛びかけのよう
で聞いているのかも怪しい

龍士「今まで好き勝手やって人殺してきたんだ、こんな目にあう覚悟ぐらいは出来てんだろ？」

ウエル「あ、ああ」

龍士はその顔が気に入らず取り敢えず景気づけに一発ストレートを入れた、歯は飛び散り血が飛び散りさんざんな顔になりながらも壁に顔が叩きつけられる、龍士はそれを冷たい目をしながらそれを眺めていた

龍士「楽には殺さねえ、このまま嬲り殺しにして…」

そう言い終える前に後ろから殺気を感じた、一度目の前にいる男から手を離しこちらに刀を振り下ろそうとしている男の腹に後ろ蹴りを入れる

来栖「ごっ!?!」

今まで感じた事のない強烈な痛みが体を支配し硬直させる、そして次に自分が目で見たのはこちらに迫る拳だった。それを何とか顔を反らして避けたが頭を掴まれそのまま膝蹴りが顔面に入る、さらに数発入れられ頭を後ろに引っ張られ無理矢理起こされると目に激痛が生じた

来栖「かつ!?!」

視界が何も移す映さなくなりそれだけじゃなく開いても周りが赤くて何も見えない、混乱している最中に体の至る所から激痛が走り始める。目つぶしから入り視界を奪いローを入れ脚を砕く、そのまま首に突きを入れ呼吸を一瞬止めさせたのち肺にフックを入れ吹き飛ばす、感触からして肺がつぶれたのは確実だった

来栖「がつごほっ!!」

そのまま倉庫にあった資材に直撃して背中に激痛が走り肺に血が

たまってうまく呼吸が出来ず起き上がれない、力により目の方はあらかた見えるようにはなったが臓器がつぶれる等の重傷は流石に治すのに時間がかかり過ぎる、だが起き上がらなければ何もできない

来栖「はあ！くうっはあ！」

何とか片方の肺に空気を入れ立ち上がる、そこには瀕死状態のウエル博士に蹴り飛ばし追撃を入れる龍士がいた、そのままきりもみをしながら突っ込んでいき壁にぶつかる両腕は折れているため受け身も取れず盛大に地面に叩きつけられる。すると龍士は来栖の方を向き歩を進めていく

来栖（ま、まずい、殺される）

自分も当然としてウエルの方が何故生きているのか不思議だがこのままではあの化け物に殺される、手にべったりと血が付いた拳を見せつけながら無表情のままこちらに近づいて来る、来栖は何か息を整え龍士に向かって構えをする。龍士はそのまま進んでいき来栖の数歩先まで近づくと来栖は突きを繰り出す、振りから入っても遅い、なら動作が少なく致命傷を入れられる突きから入れればいい、そうすれば相手は避けるか防ぐしかなくその間に追撃を入れられる、だが今回は相手が悪かった。龍士はそれをスウェイで抜けるとそのまま顎に一発入れ脳を揺らす、薄れていく意識を立て直した頃にはもう遅くそこに龍士の拳が胸に突き刺さる、その衝撃は中にある肋骨を折りながら心臓にまで達し思わず激痛に顔を歪め動きがとまってしまう。

来栖（い…しき……が）

その時何故か走馬灯が見えた、幼い自分がいた、刀を持ち知らない庭に自分はいた。何を思っただけその場に立っていたのかはわからない、何故刀を持っていたのかはわからない、だが何故かその姿をしている自分が不思議だった。自分には昔の記憶が無い、その片鱗を見ているのに懐かしいと言うよりは何故か嫌だった。

来栖（これが、走馬灯…か）

だが嬉しくもあった、ようやくと知りたかった記憶を見る事ができた、だが後悔もある、マリアを置いて行ってしまるのがとても嫌だ、何故生きているのかわからずただ剣を振っていただけの自分を止めて

くれたあの人を置いていくのは…嫌だ

来栖（あの二人が無事に会うまで、死ぬわけにはっ！）

刀を地面に刺し膝を地面につけ堪える、ここで死んでしまったら彼女まで殺されてしまう。そうなったらまた引き裂かれてしまう、それだけはなんとしても死守しなければならなかった

龍士「…随分粘るなあ、お前」

血反吐を吐きながらも堪え視線を上に向ける、肉体に似合わない童顔があつたが威圧と殺意は別物だ、人間が出していい物じゃない

来栖「な”、なぜ”ここが”」

龍士「さあな」

龍士がここを知ったのはさつきかかつて来た一本の電話だった

山下「あ、兄貴、今大丈夫ですか？」

龍士「大丈夫だ、どうした？」

山下「いやそれがですね…実は先日妙な情報が入ってきてまして、港にある内が保有してある倉庫ってわかりますか？」

龍士「黒澤の叔父兄が仕事で使う奴か？それがどうしたんだ？」

黒澤組がやるのは土地や闇金等の非合法の場合が多いがたまに外国からの密談や商談が来る時がある。そんなときの受け取り場や商談場として扱う倉庫があるのだ、保有してある数は少ないが黒澤組は外相関係にはあまり手を出さないため使用するのはいくつか少ないのだ。

山下「実はその叔父貴が所有している倉庫に何か変な物が入ったらしいんです」

龍士「何が？」

山下「何でも物騒なヘリのような物で、しかも勝手に止めている上に監視カメラも付け始めて…」

龍士「はあ？」

もちろん黒澤組だつて物をそこまで雑には扱わない、あまり使わないからと言って商談の重要施設なため管理は怠らないのだがそのヘリが入って来たと言うのは少し妙だ。そう言った話は聞いてないししかも監視カメラを付けている時点で怪しすぎる。

龍士「叔父貴は何て？」

山下『“兄貴に片付けさせる”との事です』

龍士『…わかった』

それが龍士がここまで来た理由だ、原因は来栖たちの情報戦と隠蔽工作の問題だが黒澤組の伝達網がしっかりしていたと言うのもある。それに今佐伯組と派手にやりあっているのも相まって不審な物を見付け次第報告、そして黒澤の判断のもとそれを片付けるか裏で工作して追い出すかにきまっている。今回龍士に白羽の矢が立ったのは佐伯組との関係があるかもしれないから追い出すついでに何か情報を持って来いとの意味合いもあつたのだ。

だがそれは出来そうにもない、龍士が目にしたあのノイズを操作するウイルの姿を見て豹変した、二年前に起きたあのツヴァイウイングのライブ事件の時、そして自分が行き着いた答えと照らし合わせても“あの事件と今回の事件を起こした犯人は同じ”ようにしか見えないのだ。二課の情報規制が完璧だったというのもあるが今回は龍士の勘違いで起こった事だがそう見えても仕方がなかった。

龍士（こいつ何で生きてんだ？肺は潰したし骨も刺さってる筈なのに…まあいいか）

いつもなら引つ掛かる事が何故か抜けていく、龍士は来栖の息の根を止めるために自分の脚を上げる

龍士「悪く思うなよ、因果応報ってやつだ」

そのまま天高く上げる、来栖の方は回復が追いつかず立ち上がる事も動くこともできずにただ龍士の顔を見つめるだけであった。そしてその脚が振り下ろされようとしたその時、何かが風を切る音とともに龍士に迫った

龍士「っ」

軽く舌打ちしながら動作をやめその場から離れると龍士がいた後ろから黒い槍とマリアが現れ来栖を抱えるとそこから離れる。そしてゆっくりと来栖を下ろした

来栖「すまんマリア…足枷になって」

マリア「いいのよ、あなたは休んで」

来栖「い、いかん！あれは違う！今までやりあつた奴とは完全に別

物だ！」

違う、何もかもが違う、見た目は完全に人だ、だが力が違う、戦い方が違う、いや人間の急所である目やみぞおち等を狙うのは戦い方としてはあっている、だがそれを彼がやるのが少し不思議に思ったのだ、それでも危険である事には変わりはない。そのためにも早く彼女を逃がさなければ。

来栖（く、くそ、上手く喋れん！）

肺に血が溜り上手く呼吸できないのか喋る事ができない、ただ床に血を吐き息をする事しかできずそのまま龍士と向き合うマリアを見るしかできなかった。

龍士「その顔見え覚えがあるな、確か…マリアだっけか」

マリア「覚えてもらえて光栄だわ」

龍士「まさか家の庭に入つて来たのがテロリストとはな…来たのが俺でよかった」

指を鳴らしながら前にいるマリアを威圧する、顔では無理だがさっきの惨状を見れば嫌でもこちらが怖い筈。それにどうやらこういう殺意がある攻撃を見るのも初めてのようだ、その証拠に相手の額には汗が出て顔の方も笑みで隠してはいるが不安なのがバレバレだ。心理戦は得意ではないのだろうか？それともお得意の演技での誘い出し？いやそれはないな、それだったらこんな状況になる前にやっている筈だ…

龍士「まあいい、今俺はかなり機嫌が悪くつてな…それもノイズの騒動を起こした奴ともなれば。」

マリアはただ無言で返す、だが龍士の威圧が増え殺意も大きくなっているのは嫌でも感じている。

龍士「あの坊主どもが警察に連絡したのを考えて後数十分…あまり遊んじやいられん」

そう頭を掻きながらため息を吐いた、マリアは構えた状態でこちらを見続け動作を警戒しながらも焦りを感じている、彼が言った警察が来られるのは非常にまずい事になる。来栖は重症で動けずウィルも生きてはいるのであろうがさつきから倒れてピクリとも動いていな

い。ソロモンの杖はさつき回収して基地に入れたので大乗だが問題は彼を相手にしてどうやって二人を回収するかを悩んでいた。

マリア（ギアを起動させて吹き飛ばす、いやそれだと動きづらい：なら）

龍士がいるのは飛行機とマリアの丁度真ん中だ、後ろを向けば数メートル以内に入っているのに対してこちらは倉庫の入口付近のウィルと隣にいる来栖だ、ならここは下手に攻撃はせず相手の攻撃をマントで防ぎながら二人を回収して逃げる。マムとは別行動になつてしまいが相手が飛行機に乗せてくれるとは思えない。

マリア「と言う訳なんだけど、いいかしら？」

ナスターシャ『わかりました、ではこちらも援護をいたしましょう。

あなたが二人を回収した後搭載のフレアで目くらましをして即時離脱を。』

マリア「OKマム：来栖、合図したら私に掴まって」

来栖「っ」

来栖もそれに小さく頷き身を起こしマリアの方もマントを広げ準備をする、龍士の方は特に動きは見せておらずただ周辺を見渡している。

しばしの緊張が訪れる、ここでの重要なのはタイミングだ。来栖がマリアのマントに掴まりその後ギアの展開で目くらましをした後ウィルの方に駆け寄って一目散に逃げる。フレアのタイミングはナスターシャにゆだねられるが恐らくウィルを回収する所に追おうとする龍士に対してと逃げる時に対しての二回の筈だ。

マリア（…!）

マリアが再びマントを広げそれに来栖が捕まりそれを確認した後ギアを起動する、龍士の方は何故かそれを冷めた目で見ていた、だが関係ない、このまま相手の前でぶつけて煙幕代わりにすれば：そして龍士が動いた、マリアは思わず驚き思考が一回停止してしまう。龍士がとった行動はただ一つ。

後ろを向き飛行機に向かって走ったのだ

来栖「な!？」

龍士は足を止めずそのまま直進して行く、マリアと来栖が驚くのも無理はない、見るからにわかる殺意と怒り、てつきりこちらに向けて仕掛けてくるのかと思えば殺意すら向けなかった飛行機の方に行くとは思えなかった。龍士はそのままドアを突き破って中に入りマリアの方はギアを一度しまい急いで飛行機の方に向かって走り出す。

龍士『止まりな』

マリア「っ！」

通信機から聞こえて来た声を聞いて思わず止まってしまった、早い…早すぎる。だってこの回線は

龍士『びつくりしたぜ、どんな奴が出てくるのかと思えば車いすのばあさんだとはな…いい椅子に座ってるなばあさん？』

そうさつきとは違う声が聞こえて来た、怒りに飲まれた声ではなく何処か落ち着いた雰囲気がある声が耳元に響く

龍士『にしてもズボラだな、本拠地取られそうなのに負傷した奴の回収何てな…そんな暇なぞないだろう』

龍士が直ぐに殺さず負傷者を出したのは気晴らし目的であったが今回はそれが功を制した…おかげで聞く事ができる

ナスターシャ「：望みは何ですか？」

龍士「少し聞きたい事があるてな…二年前に起こったツヴァイウイングライブ事件は知ってるか？」

ナスターシャはそれに小さく頷き返事を返す、龍士はナスターシャの肩に手を置きながらそのまま話を続ける

龍士「それじゃ聞こうか…あれを起こしたのはお前らか？」

龍士が疑問におもったのは幾つかあった、まず一つは隠蔽だ。前は何故ノイズが現れ何故あんな騒動が起こったのかの全貌がまるでわからなかったのに対して今回は白昼堂々と告白した事、前はまるで蜃気楼のように隠されてあったのに対して今回はまるで隠す気がない。たとえ告白する理由があったとしてもでもではないがリスクと釣り合わない、そんな事をするなら陰でこそそそやっていけばもつと効率がいい筈だ。隠したいのか、それとも示したいのかまるでわからない。次にマリアが会場で行った独断行動だ、何かを隠すつもりなら派手に事を起こして有耶無耶にするのがいいしそれが人質をとって国と交渉した方が早かった筈なのに観客を解放した、前起こった騒動と違う。そして最後はノイズの使い方で、前まではあれほど気分屋の如くあちらこちらに現れていた癖に今回はそれがなく二課とあるいはFISと戦う時でしか使用していない事、完全に逃走手段としてしか使っていない。

龍士（完全に人を殺す事を避けている…それに何がしたいのかわからない）

やっている事と言えばただただ逃げているだけ、ヤクザに頼っているので強力なバックもないしかと言って組織として強いと言う訳でもないのに国家の割譲だ。今までの行動をみるにそんな気はない筈だ。

ナスターシャ「：違います」

龍士「そうか…なら、誰がやった？」

だがこれは知っている筈だ、前と同じ会場での騒動だなんて都合が良すぎる。恐らく前の奴の真似をしている筈だ。

ナスターシヤ「…櫻井涼子、元二課のシンフォギア担当者です」

龍士「二課？何で二課が出てくる？」

ナスターシヤ「…二課が二年前、あの会場である実験を行っていたのです。聖遺物の起動実験でした。」

龍士「わからないな、よりにもよって何でそこなんだ？まさか灯台下暗しな訳じゃないよな？」

そう軽く威圧を掛ける、見るからに病人なのは見て取れるのだが俺は知りたいのだ。あの時何が起こったのか。

ナスターシヤ「聖遺物の起動には、フォニックゲインが必要だからです。」

龍士「もう少し平たく言え」

ナスターシヤ「…歌が必要なんです」

龍士「はあ？歌って、音楽の？」

ナスターシヤ「そうです。天羽奏、風鳴翼、二人の歌をフォニックゲインと言う物に変換しそれを聖遺物に流し込んで起動させる。今マリアがやっているように…」

そうちらりとディスプレイに映るマリアに目をやる、確かに何か言っており攻撃する時も綺麗な声が聞こえたのはわかった。

ナスターシヤ「ですが問題が起きました、その実験に参加していた櫻井涼子がソロモンの杖を使用してライブ会場を破壊、そのどさくさに紛れて聖遺物を盗まれました。」

龍士「ほお…つまりそいつがやったんだな？」

するとナスターシヤに凄まじい殺意が当てられ思わずその場に倒れそうになる、それを見た龍士は急いで支えて謝罪をする。

龍士「すまん、つい切れてしまった…そうかそいつがやったのか、んで？そいつは今何処に？」

ナスターシヤ「あの黄金の塔が建った騒動の後、亡くなったそうです」

龍士は思わず舌打ちをしよう、前回と今回の騒動の違いから薄々感づいてはいたが本当に死んでいて浮かんでいた怒りが留まってしまう。

龍士「それで？ライブ事件の後の二課の動きは？知っている範囲でいい」

ナスターシヤ「…二課はあの後隠蔽工作を行い事件を露呈させないようにした後直ぐに調査を行ったようです。」

龍士「…被害にあつた人たちには何かしたのか？」

ナスターシヤ「特に目新しい事は…」

龍士は思わず怒り狂いそうになるが我慢をする、たとえ裏切りがあつたとは言え被害にあつた連中になんの手当もなくほつといたよ
うだ、龍士はどうしてもそれが許せなかつた。

龍士（どいつもこいつも…後始末も出来なかつた奴らがあ）

自分の知り合いだけではない、かなりの被害があつたと言うのにこの体たらくだ、自分の失敗を露呈するのが恐ろしく隠蔽してそれら以外は知らんぷり。いくら被害がでようが何がおころうが自分たちにとっては対外の火事、他人事とでも言うのか？

龍士（やはり信用しなくてよかつた、こんな連中何ぞクソに決まつてる）

自分が助けなかつたらどれだけ死んでいただろうか、家族の死あるいは愛しい人に死を嘆く者がいたと言うのに、峰だつてそうだ、あんな騒動が無ければあいつだつて今頃…

ナスターシヤ「…他に聞きたい事は？」

龍士「色々あるが、もう時間が無い」

時間的にそろそろ逃げないと二課の連中に掴まる可能性がある、さつきまではめんどくさい連中と思つていたが今はもうそんな目では見れない。捕まつたら何されるかわかつたもんじゃやない。

龍士「そうだな…取り敢えず飛行機は壊していく、これ以上の面倒事はごめんだからな」

ナスターシヤ「!？」

ナスターシヤの静止の言葉も聞かずに取り敢えず外に出た瞬間プロペラへし折つてそく離脱がよさそうだ、どんな事情があるにせよ問題事を持ち込まれるのなら潰しておいた方がいい。そう決めて外の方に向かおうとした時。

黒い大きな物が龍士に向かつて突っ込んできた

龍士「あ？」

龍士はその頭を受け止めそのまま押され続ける、入口のドアに叩きつけられ少し経つとドアが開き後ろに倒れ込んでしまう、そしてそのままその黒い影はそのまま龍士に覆いかぶさろうとした瞬間、その顎が拳底突き上げられ無理矢理閉じられてしまう。

? 「■■■■!？」

そのまま起き上がりと同時に喉に拳を叩き込みその場からどかすとそのまま立ち上がり前蹴りを入れた、その蹴りめり込み過ぎてその黒い物体の背中から龍士の足がその皮で覆われてくつきり見える程でており貫通していないのが不思議であった。黒い物体はそのまま飛行機に叩きつけられその後龍士のドロップキックが顔面に炸裂した。

? 「■■■■!?!？」

顔を砕かれたせいにかくぐもった悲鳴が聞こえるが龍士はこれを無視して空中からの鼻、顎、首を狙った連続蹴りで怯ませその後着地様に思いつきり体重を乗せたブローを入れ飛行機事吹っ飛ばした。

龍士「てんめえころ…」

HORIZON † SPEAR

堪忍袋の緒が切れかかったのか手を出してきた奴を殺そうとした瞬間目の前の地面に竜巻が直撃し舞い上がった塵が龍士を覆う、龍士はすぐさま腕を振り塵を吹き飛ばすがそこには飛行機も無く黒い生物の姿もなかった、周辺を見渡すもマリアたちも見えなかった。

龍士（逃げただあ!?音もなんも聞こえなかったぞ!?)

完全隠密に特化した聖遺物の使用で流石の龍士も感知できなかつたようだ

龍士（流石に手を抜き過ぎたか? いや…冷静じゃなかったからか）
ともかくこの場所にいるのは少し不味い、もう遠くではサイレンの

音が聞こえこちらに向かってくるのがわかる。怒り狂うよりもまずはここを離れなければ、そう思うよりも前に脚が動いていた。隣にあった倉庫の上に乗るそのまま近くにある建物まで跳躍する。

龍士（さて：叔父貴にどう言った物か…）

ありのままを伝えるしかない、警察もくるだろうし何より早めに手続きを済ませて方が黒澤的にもいいだろう、取り敢えずはこの事件はここで終わりのようだ。

警察の方も龍士には気付いておらず何よりノイズの騒動として片づけられるので精密な捜査はされるだろうがそれでも龍士とわかるような証拠は残していないので大丈夫だろう。その龍士といえ脱出した後黒澤に報告を入れしばらく大人しくするように言われたので適当な屋根の上で休憩をしていた。

龍士「叔父貴には迷惑かけちゃった…」

今回は仕方がないとはいえ少し派手にやり過ぎた、いずれ倉庫の管理者として黒澤の方に二課か警察が話を聞きに行くだろう、その時に今までの事を掘り返されて捕まえられたら不味い事になる。佐伯組との抗争があるのに余計な事をされたくはない。

龍士「それにしても二課の野郎……どこか胡散臭い奴らかと思つたら案の定だった。」

今すぐにも関係者全員殺してやりたい所だが場所も知らなければ構成員が誰なのかわからな……

龍士「いや待てよ、そう言えば……」

あの佐伯の枝組を襲っていたは確かツヴァイウイングのマネージャーだ、普通のマネージャーなら襲う訳はないがもし二課の関係者だったらあり得る。ずっとこの事に引掛かっていたがこの理由ならテロリストを追う理由もわかる。にしてもマネージャーの面を剥いで見ればまさか忍者のようなボディガードだったとは予想もできなかつた。

龍士（会うのも悪くないが……後ろ盾がデカ過ぎるな。）

流星に表の連中に喧嘩を売る程馬鹿じゃないがああの時の戦犯だとわかつているのに殴る事も出来ないのは少し歯がゆい。

龍士（だがあいつらがノイズを掃討してくれているのも事実……）

それに評判も悪くない、なんせ全世界でお困りの種であるノイズを倒せるのだ。

龍士「……いや、今はこの事件を解決するのが先決だ。」

今この場で幾ら考えた所で考えは纏まらないだろうし大人しくする必要があるのでしその時考えればいいだろう。それに俺はまだ二課がどのような人たちがいるのか自分は知らないし前の事件が問題だからと言ってクソ野郎と認識するのは早計か……

龍士「ああもう考えは後だつて言つたろ。」

やはり頭の中で疑問が浮かび上がるのは気分が悪い、久しぶりの暇なんだ。勉強や体術の学習するより気分転換に町でも歩きまわるのがいいかもしれない。とは言え気分が落ち着いたらまた調べなければならぬ。思っていたより根が深すぎる事件に龍士は誰もいない屋上で冷たい風に当たられながら深いため息を吐いた。

世界は広く

龍士「気持ち悪い…」

最初に出た言葉がそうだった、ベッドに寝ていた体を起こし頭に手を当てる。何故だろうかさつきから頭痛が酷い、ベッドから立ち上がり体にジャケットを羽織る。適当に冷蔵庫を漁り何を作るのかを考える。今日は取り合えずベーコンエッグをパンに乗せる事にした。それを食べながらテレビを見る。すると何処かの学校の秋桜祭の様子が流れだした。

龍士「文化祭みたいなもんか…興味ねえ。」

そう言っただけで他の映像に切り替える、今日の天気、バラエティ、特撮番組、どれも今は気分じゃないので変え続け結局テレビは消した。今日はせっかくなのでゆっくりできる時間なのだ、体術も勉強も気分じゃないし黒いイージーパンツの中に白シャツの上に灰色のコートを羽織り財布とスマホを持って外に出た。秋の肌寒い風が頬を撫でる。

龍士（頭痛もそんなに酷くはねえし適当に歩いてれば直るだろ。）

街に向かい取り敢えず適当に見て回る、文化祭があるためか人込みの中に高校生の姿が無い。たまにさぼりで来ている奴がいるのだがどうやらまじめに学校に行っているようだ。

龍士「…今思えば俺何がしたいんだろうな。」

適当にヤクザやって適当に仕事をしていた、親父からは堅気になれと言われたがそんな事ができるのであればどうの昔にやっている。

龍士「……」

別に仕事をやるのはいい生きるためには何かしらやっていかなければならないのだから、けど別にこの仕事は楽しいと思っただけじゃない。唯一楽しいと思える戦いだって俺と互角の人物は今の所いない上に大抵起こっても自分に取っては小さい喧嘩みたいな事しか起こらない。ヤクザになったあの頃から戦いの中でスリルと言う物と目標とも言える事がなくなったように見えた。

龍士「と言うよりないんだよな今の所…」

今まで探してみた所そんな物はなかった、唯一楽しいとも言えた体

術の方も大抵探ってしまい目標が薄れていつているからこう言った愚痴が出てしまったのだろう。

龍士「…銀だこでも食うか。」

近くにあった銀だこに立ち寄り注文をする、立ち食いする場所だったので取り敢えず余分に金を置き店の直ぐ隣にある壁に体を預けながら近くの様子を見て気分を変える。

龍士「おっさんねぎ一つ、後コーラ。」

追加の物を食べコーラを飲む、ハイボールでもよかったのだが流石に昼間から酒は少し嫌だ。直ぐに食べ終わり釣りを受け取つてその場を離れる。目的はなくてただ歩くだけ、隣に人はいないためか少し寂しい。いつの間にか廃墟の方に来ていた。割れた道路、崩れかけのビル、全身ひびだらけの建物、ここを再建するのにどれくらいかかるだろうか。数年、数十年だろうかだがどの道ここに住んでいた人は引越さなければならぬだろう。すると適当に歩いていると一つの店を見つけた。

龍士「…ふらわー？お好み焼きか…そういやそばらく食つてなかったな。」

龍士は基本的に大食いだ、焼き肉何か数十皿食べるし寿司何かも食べ過ぎてこの前何か数十万を超えそうだった。その上味にも以外とこだわるので値段も高い事が多い。そのため若衆の給料では足りないので他の仕事をして何とかしている。そしてそのふらわーの中に入る。

？「いらつしやい。適当な場所に座つて。」

そう言われ取り敢えず適当に座敷に座る。その席には大きな机の上に鉄板が置かれている、机の方は体格が体格なので下に足を通せず座布団の上に座禅しメニューを取る。

？「ご注文は？」

龍士「あく、豚玉二つとネギ玉を一つ。」

？「ここで焼くかい？」

龍士「…せっかくだし焼くかな。」

？「はいよ。少し待つてね」

しばらくすると机の上に具材が置かれる、熱された鉄板の上に具材を並べていきそれが焼き終えるまでそれを眺める。下地が焼かれる音が聞こえる。

？「何かあったのかい？」

龍士「いや：何も。」

そう言うとおばちゃん下がりがり台所と思わしき場所に行った、その後龍士は焼き終えた豚玉をさらに移し食べ始める。

龍士「：なあばあさん。」

？「何だい？」

龍士「こちら辺もう人いないだろ。どうして場所、移さないんだ？」
もはやここには人が住める場所は少ない、店の規模を見る限りよくある飲食店の普通サイズだ。それに歳もあるがこちらの店もできてからかなり年季が入っている。店主であるばあさんの方は皿を洗いなから返答する。

？「そうだねえお金がないって言うのもあるけど、私はここで店をやつて行きたいからかねえ。最近少し気になる子がいるしね。」

龍士「こんな場所だ数年たつてば補修工事に入る筈だ。そんな時立ち退きさせられるぞ。」

？「そうなるかもね：そしたらまた最初から始めればいいさ。そう言う君は何をしてるんだい？」

龍士「俺はまあ：不動産かな。」

？「でも悩みの種はそれじゃないんだろ？」

それを聞いた龍士は目を見開く、ばあさんの方は龍士の方を見ておりそれを見た龍士が口を開いた。

龍士「：最近仕事をしてても楽しくないんだ。やりたい事が：見つからない。」

？「何で不動産に？」

龍士「生きていくために仕方なく、かな。」

？「やりたい事つてのは探していけば見つかるもんだよ。諦めずにね。」

龍士「そうかね：」

？「私だって元々お好み焼き屋何て想像もしてなかったからね。」

人がどうなるのか何て想像がつかない、夢を叶えてそれを続ける人間もいる。逆に夢は叶えられなかったがやりかたう事は見つけた人もいる。人生生き方それぞれだが人は自分もやりたい事がないと精を出せないと聞いた事がある。一応したくない仕事をして稼いでいる人もいるが自分はそんな事はできそうにない。

龍士「…ばあさんは楽しいからここにいるのか？」

？「そうだよ、料理を作って客に食べてもらう。たまにこうやって喋って笑い会ったり悩み相談何かをしたりするのが楽しくてね。最近は常連の子の悩みを聞く事が多いね。」

龍士「飲食店に加えて悩み相談室でもあったか、いい場所だ。常連からすれば好かれるだろうな。」

？「そうかね、私はただ話したかっただけだけどね。」

この人はただ純粋なだけなのだろう、俺のようにただ気まぐれに生きるのではなくよく自分を見ている。龍士はそれを見て羨ましいと思った、この人は生き様とても暖かく感じた。

？「まあ色々悩むといいよ。まだ若いんだからね。」

龍士「…そうだな。ありがとう、今日は良い事が聞けた。」

座敷から立ち上がり金を払い店を出た、何だか少し肩が軽くなり歩の方も歩みが早い。今日はもう少しここを歩いてみるのもいいかもしれない。だがその高鳴りも直ぐに落ちた。裏路地で見つけたものが異様だったからだ。

龍士「…せつかくいい気分なのに…」

龍士はその場で頭をかきそれを見る、腹に横の三本傷、まるで獣に引つ掛かれたような痕がありほぼ即死している。こうやって死体を見るにはまだなれないが嫌なものだ。血の跡から見るにどうやら廃墟した雑居ビルから伸びている。

龍士「ここからあのばあさんの店に近い、死なせたくないし片付けるか…」

とは言えこの傷を見るからに獣なのは間違いないのだがその痕がデカ過ぎる。それに廃墟とは言えここはまだ繁華街だった場所だ、普

通の獣じゃないとすれば龍士は一つだけ思い当たる節があった。あの廃墟病院であつたあの化け物だ。

龍士「あんな奴そこら辺にいるもんじゃない……それにあいつが現れ出したのはあのマリアとか言う奴が出てきてから以降だ。」

こうなるのだつたらその事を聞くんだつた、あの時はキレ過ぎてその事が頭から離れていたのが原因だろうとは言え今はそんな事は後回しだ、取り敢えずここに巣くっているあの化け物を探すのが先だ。取り敢えず中に入つて行く、薄暗い通路を歩いて行く、所々に割れた窓から指す光がその通路を照らし床のひび割れやほこり等がくつきり見えた。血の跡は点々と続いており不気味さが背景を支配する。そこをゆつくりと歩いて行く、まだ乾いていない血の跡を歩きその鉄の臭いが鼻を擽りながら床に当たる乾いた音が響く。

龍士「……静かだ。」

場に似合わない血があるのに不思議な程静かだ、聞こえてくるのは足音だけ、その静けさが自身の心に不安を与えてくる。部屋を一つ一つ自分の勘を信じて部屋を調べていく、埃まみれのコーヒー店、飲食店、事務作業をしていたと思われる場所の跡地がここがどんな場所だったのかを思い出させる。そのまま部屋を通り過ぎていくとある一つの部屋に行き着く、血の手形が付いた大きなドアがそこにあった。その扉に手をかけゆつくりと開く、そこには埃が舞い上がり床に血がべつとりと付いたその上には異形の存在がいた、腕には大きな爪が付いた手があり体は意外と細身の姿だった、顔はまるで焼け爛れたように黒い皮膚のような物が垂れ下がっておりそこから見える白い点のような物がこつちに向いていた。

その異形は爪から血を垂らしながらゆつくりとこちらに振り向き腕を下げ揺らしながら近づいて来る、姿による謎の威圧を感じその場で構える。窓から入る光がその異形を点々と照らすのを見ているとその異形が龍士との間を空けて止まった。背に掛かる寒気が精神を乱すがそれを理性で押し殺す。

死ぬ予感はないが何故か寒気が強い、ここまで体が震えるのは初めてだ、これを怯えていると言うのだろうか。だがこれは相手がどんな

物なのかをわかっている証拠だ。血の滴る音が耳に響き異質な空間が広がりその音に意識が少し引つ張られる。その腕が動いた。

龍士「っ！」

血の線が塗られた爪が光に当てられて出来た赤い軌跡が命を刈り取ろうとこちらに迫ってくる。下げていた右腕から繰り出された爪から繰り出されたアッパーだ。当たればただでは済まないだろう。スウエイで横に避ける、上半身を動かすだけでもよさそうだが正体不明の相手だ安全を考慮して安全に避けた方がいいだろう。そして避けたと同時に相手の顎と思われる所にフックを入れる。肉体がぶつかり合う鈍い音と共に二メートルはあるその巨体が吹っ飛ばされるが相手はその爪を地面に立てブレーキをかけ止まるとすぐさまこちらに飛びかかって来た。

龍士「最近化け物しか相手してねえ…」

そう愚痴りながら行っていると両サイドからくる爪を利用した挟みこむ攻撃が来る。常人ならほぼ反応出来ず最初ので即死、ここもこの速度では避けられないだろう。だが龍士はこんな時でも冷静だった。前に飛び乗り越えるように避けると化け物の方もそれに対応するようにすぐさま後ろに向かって爪を振るう。龍士の方はその攻撃に対して姿勢を下げる。その爪が上を通り過ぎると龍士も相手の足を払いをし体勢を崩した後そのまま勢いを乗せた後ろ蹴りを入れる。入ったのは横腹、吹っ飛びはしないが相手が怯んだ。

龍士はそのまま追撃を行う、だが異形の方も黙っておらず爪を振り抜くが懐に入られているのなら龍士が有利だ。爪が当たらないように相手の腕や手に当て防御しそのまま追撃を入れ続ける。さつきから感触が固い、前あった化け物程でもないが攻撃が骨にまで響いていない。そしてそのまま胸に一発入れようとした時相手と目が合った。赤かった、さつきとは違い赤い瞳がこちらを向いていた。その目を見ていると何故か意識がこちらに向く、理由はわからないがその場で呆けていたのだ。そして次に映ったのは相手の爪だった。

龍士「シヤア!!」

一瞬の油断で来たものだが龍士は即座に反応、それを避けると同時

にそのまま顔に向けて回し蹴りを入れる。だが相手もそのままバツクブローで反撃してきた。龍士はそれを腕でガードし受け止める。口から嘖き出る赤い血が床を汚していき龍士は後ろに下がりながら体勢を保つ。相手は血を流しながらこちらを睨み龍士は構え直して睨みつける。

龍士（あれなんだ？あの目を見た瞬間俺が呆けた：少し警戒しなければ。）

攻撃は腕にある爪の攻撃でいいだろう、足の方も使ってきたがあの腕の大きさと脚の大きさを比べると脚での攻撃は向いていないようだ。そしてあの目、何故だかわからないがあのは直接見ちゃいけない気がする。何にせよそれさえ気を付けていれば大丈夫だろう。目を見て戦わなくても肩や脚の動きをみればどうくるのかはわかる。

龍士（とは言えさつきから固い、そのせいか反撃も早い。爪の攻撃は絶対避けた方がいい、下手したらあの目より嫌な予感がする。）

まるで恐竜のような太い爪だ、大振りなのが助かるがそれでも反撃速度が速い。爪が軌跡を描きながらこちらに来るのを龍士は避け続ける。相手の方も懐に入られないように追撃が早い。そして壁際まで追い詰められると同時に化け物の攻撃を避けた瞬間壁に綺麗な三本傷が出来上がった。

龍士（豆腐かよ。）

そのまま横の大振りの攻撃が来た、それを潜り抜けるように避けるが相手の方も逆の腕を使って攻撃して来た。龍士はそのまま相手に向かって跳躍し首を脚に挟みポールダンスの容量で顔を主軸にしながら周り翻弄し相手のバランスも崩す。そしてそのまま遠心力をつけた状態で投げ飛ばした。

化け物の方も壁の方に上手く着地しそのまま部屋の壁を利用しながら龍児の後ろに回り込み全身を回転させながらこちらに突っ込んでくる。龍士はそれを避けるが化け物は着地してそのまま追撃に移る。龍士の方も隙をついて追撃を入れるが相手もそれを防いできた。

龍士（なら…）

龍士はそのまま脚を掲げて勢いよく下ろし床を砕いた。二人はそ

のまま下の階に落ちていくとそこには物が散乱していた。

龍士（ここなら…）

龍士はその場にあつた踏み抜いた床の破片を持ち相手にぶつける、砕いた物なので直ぐに砕け耐久力はないが重さはある勢いをつければダメージは通る、化け物の方はそれを気にせず攻撃してくるが龍士はそれを避けると相手の足の下にある足場を引っこ抜きバランスを崩させるとそのまま足場の床を叩きつける。化け物の方は起き上がろうとするが龍士はその場にあつた物置に置いてあつた布を取り出し相手の腕に巻き付ける。そのままもう片方の腕に巻き付け腕を一時的に封じた。直ぐにやぶられそうだが巻き方を工夫すれば力が上手く入れられず破く事をできなくすることは出来る。そしてそのまま相手の首を閉めに入りそのまま首の骨を折ろうとするが化け物が必死に抵抗する。

龍士「大人しくしやがれ。」

相手の脚はまだ自由なので後ろ側に力を入れ続ける、これで息が出來ず脚にも上手く力は入らない。化け物の方は抜け出そうとするがその場で動く事は出來ず口から泡を吐き苦しんでいる。腕を動かそうにも動かせず息も出來ないので力も入らない、その上羽交い絞めなので解こうとしても解けにくい。だが殺せる時は殺しておかねば、そのまま頭を掴み折った。だがそれでも化け物は生きており脚で龍士を蹴とばした、そして腕の関節を外し腕を前に持つてくると関節をはめ直してそのまま布をちぎった。

龍士「普通首を折つたら死ぬんだがな…生命力なら前の奴よりひどい。」

本来であれば首の骨を折られた場合大抵一緒に脊髄が損傷して即死するのだがどうやらこちらの常識は通じないようだ。化け物の方は首をはめ直しこちらに向かつて來た。

龍士「なら殴り殺す。」

何故こんな生物がいるのかはわからない、何故ここにいるのかもわからない。だが敵対するのなら潰す、もうすでに一人殺されているんだ。大きく息を吐き目標を定める、片手を振り上げて來た爪の攻撃、

その場にあつた長机を相手に叩きつけ怯ませると同時に口の中に長机の残骸を突っ込む。そのまま床に叩きつけその机を思いつきり蹴り上げた。化け物の歯と思われる物が飛び散りそのまま顔を踏みつけた。相手の方も反撃に腕を上げるが龍士はそのまま腕を掴み腕力で爪を握り潰した。そのまま追撃を加えるが相手はその場から抜け出した。龍士は逃がさないように相手の後頭部を掴んだ、化け物の方はその腕を払い残っている方で振り向きざまに攻撃するがそれを予想したのか下を掻い潜ってそのままアッパーを入れる。

龍士（砕けた。）

手に骨が砕ける感触が残りそのまま追撃を入れた。相手の方は脳が揺さぶられたのか動きが鈍くなった、龍士はその一瞬のスキを見つけて相手の胸目掛けて肘を打ち込む、頂肘と呼ばれるもので人体に直接ダメージを与える、練度次第では体格関係なく即死させる事もできる。

龍士（肺も心臓も潰れた、骨も砕けた。）

その証拠に相手の胸の中心が凹んでいる、普通の人間なら勝負ありだが流石は化け物と言ったところか、血を吐きながらこちらを睨みつけていた。龍士は大きく息を吐き構えを解いた、化け物の方は龍士の方にゆっくりと歩いて行くが龍士はそれを黙って見ている。小さな呻き声を上げながら一步一步ゆっくりとこちらに近づいて行く、そして腕を上げそのまま爪を振った、龍士はその攻撃を捻じ伏せるが如くカウンターを放った。化け物の方はそのまま吹っ飛ばされ壁を突き破り瓦礫と一緒にそのまま動かなくなった。

龍士「…終わりだな。」

背中にあつた悪寒が消え気持ちが悪くなった、安堵の息を吐き汚れを叩き落とす。そして相手の方に近づいて行きその死体を見下ろす。嫌と言う程不気味な顔だ。垂れ下がっている皮、まるで焼け爛れたような顔に白い瞳、そして人型には似合わない大きな爪。やはり見るからに不思議だった。

？「変な姿だろそいつ。」

その声に釣られすぐさまその方向に振り返った。そこには若い日

本人がいた、茶髪の髪に水色の瞳、黒いジャケットを羽織り黒いズボンを着ている少し大人びた男性だった。

？「ゾンビって奴でな？死徒とも言うんだけどよ生まれと土地の影響、死んだ人間がどんなものなのかで姿が変わるんだが今のは死んだ人間が恐竜好きとかそんなだったのかな？そんで何処かで焼け死んだと：」

不気味な笑みを浮かべながら龍士の方に近づいて行く、龍士の方は得体の知れない雰囲気を漂わせる人物に警戒をしている。男の方はそれを気にせず歩いて来る。

？「にしても普通こんな奴に喧嘩売る？こんな化け物見たいな奴見れば流石におびえると思うんだが：」

顎に手を当てそう呟く、龍士の方はさつきから警告が止まらない。長年やってきた感だろうか。

？「何でか異様に怖かったろ？それこいつの能力でな、『精神汚染』って言って死徒とか呪霊が持っている基本能力、目を見たら何か意識遠のいたろ。あれもそれ、いや〜普通対策してない奴は大抵怯えてそのまま殺されるんだが：君は違ったな。」

こいつは普通じゃない、俺らとは何かが違う。だが一つだけわかる事がある。

？「それで、お前何処の？見た限り普通の奴じゃないよな？」

龍士（コイツ、強い。）

？「そんなビクビクしなくてもいいんだ。」

止まった、相手との距離は五メートル、表情はさつきから変わらず余裕の顔を浮かべながらこちらを見下ろす。

龍士「：何者だお前？」

？「こつちの話はガン無視しといてそりやないでしょ。名乗る時はそつちから名乗るもんだろ？」

龍士「悪いが話す気はない。」

？「：ま、いいけど。」

男の方はそれを聞くと姿勢下げた、それを見た龍士いつでも動けるように集中する。

？「最後にもう一回聞くけど、話す気はないのか？」

龍士「さつき言ったろ、話す気は…」

返答をしていた時相手の姿がなかった、相手は既に龍士の懐に入っており攻撃寸前だった。龍士はすぐさま腕で防ぐ、するとまるでダンプロトラックがぶつかつたような衝撃が腕に響きそのまま吹っ飛ばされる。誰もいない廊下を高速で通りながら脚を立て何とか着地した。

？「よく防いだな、いい腕してる。」

龍士（初手が防御なのは初めてだな。）

そう腕を振り痛みを和らげる。一瞬見えたがあれは俺がさつき使った頂肘だ、あそこまで強烈なのは初めてだがまともに喰らっていたら死んでいたかもしれない。男の方はそのまま龍士の方に駆け出し追撃、龍士の方も反撃する。そして次は龍士が取った、相手の裏拳を流すと同時にブローを放つ、相手の方もそれに反応したがその体が浮かび上がった。龍士はその空中にいる相手目掛けて隣にあったドアを壊して取り外しそのまま相手目掛けて投げつける。

？「おっと。」

だが相手の方もそれに対応、身を捻る事で回避しさらに龍士の追撃を空中で受け上手く分散させながら着地する。

？「いつてえ魔術で強化してるのにかなり痛いんだけど…お前何で魔術使わないの？様子見？」

龍士「はあ？」

龍士はその言葉に思わず呆れてしまう。魔術と言うのはあれだろう、よく父さんが聞かせてくれた神話とかにある神秘の事だろうか？

龍士「何ふぎけた事言いやがる。俺にはそんな物は無い。」

？「いやいやそんな良い質の魔力持っているのに知らないは無いでしよ。」

龍士「…えっと。」

？「…え？本当に知らないの？」

それには相手の方も驚いていた、龍士の方も混乱しており何だか空気があやふやになっていく。すると相手の方が顎に手を当て何かを呟く。

？「突然変異？いやそれならギフトとかある筈、なら単純に知らされなかっただけ？」

龍士（ギフト？知らされる？何だこいつさつきから何言ってるやがる？）

龍士「何の話だ？」

？「ああちよつと待つて今考えてるから…」

よくわからないが変な宗教の勧誘だろうか？何故か相手の戦意が消えたため龍士は混乱してその場で固まってしまっている、その相手はと言うとその事に頭を必死に捻っており龍士の方にかかつていく気がしない。

？「東堂君そこまでにしといてくれないかな？」

龍士「…また増えた。」

龍士が混乱している中また一人増えたが今度はかなり印象が強かった、中に白上に赤いスーツを着込み手には金色の杖を持っている。黒髪に髭の方も綺麗に整えられておりとても威厳のある姿をしていた。

東堂「何ですか支部長、こいつ死徒を素手でぶつ殺したんですよ？もしかしたらパヴァリア連中かも知れないのに…」

？「それは無いよ。」

その人物はゆっくりと近づいて来る。龍士はそれを警戒するが相手の方はそれを気にせず近づいて来た、そして龍士の前に止まり龍士の前に手を出した。

？「握手をしてくれるかな。」

龍士は少し戸惑ったがそれに素直に応じた、敵意は無いのでできるだけ優しく握手した。

？「大きな手だ、大道君の言う通りだな。」

龍士「…何？」

その言葉に龍士は反応する。

龍士「親父を知ってるのか？」

？「その様子だとやはり聞かされていないか…」
握手をやめた、龍士の方も戦意は消えていた。

氷室「自己紹介が遅れたね、私の名前は氷室煌良。君の父親司波大道とは一緒に仕事をしていたんだ。」

龍士「氷室…」

氷室「君とは一回ゆっくり話してみたかったんだ。時間はあるかな？」

龍士は一瞬悩んでしまうが答えは決まっていた。それに小さく頷き龍士はそのままその氷室と呼ばれる人物について行く事にした。

二人の魔術師

龍士はあの後車に乗せられ移動していた、大きなリムジンで東堂と思われる人物は運転席で車を運転しており氷室と龍士は後部座席にいた。車の中だと言うのには広く龍士でも座れた、広いスペースの中心には机がありそれを囲うように座席がある。その見る限り高級品質のような雰囲気には押し寄せられ龍士が少し落ち着いていないのかキョロキョロしている。氷室の方はそれには気にせずただ座っていた。

氷室「こう言うのには慣れていないのかい？」

龍士「そりゃこんな人生しててリムジンに乗るとは思わなかったかな。」

氷室「大道君も最初そんな感じだったよ。」

懐かしいとそう吹き笑みを見せた。龍士の方はそれよりも聞いたい事があるので口を開く。

龍士「それより本題に入ってくれないか？」

氷室「：その話は屋敷についてからにしよう、まず私たちが何なのかを説明しなければね。」

そう言うと氷室は少し前屈みになり手を前に組み話を続けた。

氷室「君は魔術師と言う言葉を知っているか？」

龍士「：親父がよく聞かせてくれた童話や神話の中にあつたな、確か神話の中に存在していた魔法を解明する研究家だと：」

龍士は子供の頃大道からよく自分の旅の話や話をされたがその中に神話の話があつた。特に多かったのは北欧神話とケルト神話、その話だけは耳にタコができる程聞かされた。

氷室「その通りだ、私たちはその神秘を解明するための人たちだ。

大道君はルーンを専門として研究していた。」

龍士「ルーンであのヘンテコ文字の事か？」

氷室「そう、大神オーディンが生み出したと言われるルーンだ、その大本はかなり失われ今現代で使われているルーンはその再現、再生された物が大半だ。ルーンを研究している魔術師たちの最終目的はこのルーンを解明する。君の父もそうだった。」

龍士「親父が魔術師だったのか？」

その言葉に氷室は大きく頷いたが龍士はその言葉を信じられなかった。彼が知っているのは父が旅人だったと言う事、やっていた事何か旅行者と同じだ。ただ観光名所を回り文化の違いを楽しむ、その過程で昔の建物にまつわる話の最中にただ聞かされただけだ。

龍士「そんな訳ないだろ、親父がそんな人には見えなかった。と言うかそんな話何か一つもしなかった、ただ楽しそうに本を持って観光名所の事を聞かせてくれただけだ、その時の過程で武術家の人たちと知り合いになって……」

その言葉を聞いて龍士は思わず氷室の方を見る。

氷室「その会っていたと言う人物たちが魔術師たちだった。」

龍士「までまでんじや何でその知り合いの中に中国人やアメリカ人がいるんだ。ルーンとかいうやつのはんげんはアイランドだろ。知り合いの中にアイランド出身者はいなかったし親父も日本人だった。」

ルーンの発端はアイランド、ケルト人と呼ばれるヨーロッパ中西部にいた先住民。ケルト神話に登場するクー・フーリン、スカアハ、どれもケルト関係だ。

氷室「魔術を研究するのであれば別に国は関係ない。そもそも元々ルーンの文字はそこまで有名ではなかった、全国の魔術認識でもそこまでの知名度はなかった。誰も解明は現段階誰も解明できずにいたのだが……それを君の父大道君が解明してくれたんだ。」

龍士「俺の親父が……」

東堂『支部長、屋敷に着きましたよ。』

氷室「わかった……それじゃ続きは屋敷で。」

氷室はそう言うのと車のドアを開け外に出ると龍士はそれに続いた、視界には大きな屋敷があり周りの地面には整えられた芝生と整地された通路があった。真ん中には噴水があり木も左右対称に綺麗に植えられている。龍士はその雰囲気を押されながらも氷室たちについて行った。

屋敷の中に入った。赤い絨毯に二回に上がるための階段、そして綺

麗なシャンデリアと二階の窓から指す綺麗な日差しがその中を照らしていた。そして氷室たちはそのまま客間に行く。そこもいい景色が広がっており龍士は押されながらも氷室たちに誘導され静かに座った。

東堂「紅茶？それとも茶？」

龍士「えっと、それじゃ茶で：」

そういうと東堂は部屋から出て氷室と二人つきりになった。その時は誰も口を開かずただ無言だった、そして東堂が着てそれぞれの方に飲み物を置き氷室の横に立った。

氷室「それじゃ続きをする前に東堂君を紹介しよう。東堂 恭二、中国の魔術を専門的に研究する魔術師だ。」

龍士「中国？仙術とかか？」

東堂「おお知ってるのか？」

龍士「中国と言えばそれだろ。」

仙術とは平たく言えば仙人が使う術の事だが歴史上の人物の中にもこれを使用する人物はいる。皇帝や軍の軍師等の中にも使用できるものはただいたがそれが本当だったかどうかはわからない。

龍士「それで話を戻すが、親父と一緒に仕事をしていたと言うのは何だ？あんたもルーンの研究でもしているのか？」

氷室「いや私はルーンを専攻していない、私たちが今所属している組織に大道君と一緒にいたんだ。」

龍士「その組織って言うのは？」

氷室「魔術の研究者たちが集う魔術協会、私たちはそこに所属している。ここはその日本支部だ。」

龍士「何でそんなもんがここに：」

氷室「：聖遺物の事は知っているかね？」

龍士「：昔の神器とか、魔法道具みたいなやつのことか？」

氷室「遙か太古に存在していた英雄、神、魔術師等が持っていたとされる遺物。その元になった素材あるいは術式等によって強大な力を持っている。我々はその管理をしそして研究をしているんだ。」

龍士「はあ!?!んじやあんたら二課なのか!?!」

この日本で聖遺物を扱う所なんかそこだけの筈だが氷室はそれを顔を横に振り否定する。

氷室「二課と我々は厳密にいえば違う。彼らはフィーネと風鳴家の独断によつてつくられたごく最近の組織、本来聖遺物は我々魔術協会が研究の対象として一般の日本の上層部に情報操作を任せ我々が管理している筈なんだが：風鳴の独断で密かに聖遺物の研究をしていたようだ。」

東堂「そのせいでシンフォギアとか言う変な奴が生まれやがった。元々聖遺物はそんな物じゃないのに、しかも俺らに黙つてだぞ？」

「どうやら二人の話聞いてみた所聖遺物はあくまで」魔術会の中では文化遺産、世界遺産に等しくその研究をするのはとても名誉な事であり魔術協会の許可無しに使用してはならない。」と言うのがあるらしい。しかも魔術協会にはその聖遺物を扱うための資格と倫理観の勉強がある、そのため魔術師では聖遺物を扱ってもそこまで大きな事故にはならないらしい。だが二課やFISはそれをせず強行したため頻繁に事件を起こしているようで魔術師からはかなり嫌われているようだ。

東堂「FISはもう手が回って潰されるようだ、だが二課の方は」まだ「そんな事件が起きてないから様子見だが：そうでもないんだ。」

龍士「と言うと？」

東堂は一度氷室に視線を見る。氷室の方はそれに小さく頷き東堂が口を開く。

東堂「フィーネの馬鹿が聖遺物と人間の融合をさせた融合遺物を作りやがったからだ。どうにもそいつ遺物との相性が良くて聖遺物が細胞と融合して細胞分裂をして浸食していつてる。この事について今魔術協会からの指示を待っているんだがまず普通の人間の精神の上に暴走する危険があるこんな奴を放置する何てあり得ないから多分殺すだろうけど。」

龍士「：そんな奴がいるのか：そう言えばそれと似たような奴を見た事があるな。」

氷室「それはもしやノスカーの事かな？」

龍士「知ってんのか。前あの黄金塔が建った時にぶちのめしてな。」それを聞いた二人は顔を見合わせ何故かため息をつかれた。龍士はそれに疑問を思っていると東堂が口を開く。

東堂「…遺体の損傷が酷すぎたから誰がやったのかと思えばお前だったのか…」

氷室「ただの身体能力で不完全とは言え倒すとは…大道君の言う通り才能の塊見たいな子だね。」

龍士「ど、どうも。」

氷室「魔術協会でもそのような例はあるが成功した事がない…と言うより魔術師にとって遺物は研究対象だからまず融合させると言う発想に至る訳がないんだ。だがそれでも希少価値はある、だからそれを遺物として残し対象とするかそれとも殺し遺物を回収するか会議している。」

予定外の副産物とは言え遺物と融合を果たした成功例、聖遺物じたい完璧な状態で現存している事も少ないので保管をしたいと言う意見もあるようだ。

龍士「親父は持ってたのか？その遺物。」

氷室「もちろんあるよと言うより司波家の家宝だったのだが大道君が亡くなってから私が今預かっているのだ。」

龍士「…その家宝と言うのは？」

氷室「魔剣グラム、北欧神話に存在していた魔剣でありシグムントが持っていたとされる龍殺しの剣とも呼ばれているものだ。とは言っても大道君はあくまで研究として持っていただけだがね。」

龍士「オーデインがシグムントに抜かせた剣か…」

東堂「おおよく知ってんな。」

龍士「親父から耳にタコができる程聞いたよ。オーデインの財宝の一つだろ？」

グラム、意味は怒りでオーデインが人の中から自らの財宝の後継者を選ぶべく、ヴォルスンガ族の宴会に現れグラムを木の板に突き立て抜いて見せろと言った、その時屈強な戦士たちが挑み唯一抜くことが

できたのがシグルドの父シグムントだったのだ。シグムントが亡くなった後息子のシグルドが持つ事になった。

龍士「…ていうか親父そんなヤバい物持ってたのか。」

東堂「魔術師は魔術の過程で強くなることができるんだけど聖遺物を使用して戦う事もある。逆に研究者として扱う所もあるらしいからそんなに珍しい事じゃない。聖遺物を扱うには別に強くなくてもいいからね。」

遙か太古に存在した聖遺物、そしてそれを管理する魔術師たち。が存在としてはどちらかと言うと研究者と言うより考古学者に近い。にわかに信じられないような話ばかりだが嘘をついているようには見えなかった。

龍士「魔術師か、ただの空想人物かと思っていたんだがまさか存在していたとはな。」

氷室「一般人はそもそも我々の事すら知らない。そう思うのも仕方ないだろう。」

龍士「確か聖遺物を管理するのが仕事だって言ってたよな。この日本にそんな場所あるのか？」

氷室「それはすまないが言う事はできない、関係者以外は話す事ができないんだ。君が魔術師になりたいのだったら別にいいが。」

龍士「魔術師…ね。」

親父がしていた仕事、かなり興味はある。だが今は俺はヤクザをやっているしそれに大きな仕事がある。今の環境だって落ち着いてるし無理にやめる必要がないが…

氷室「…そうだ、せっかくだしグラムを見て見るかい？」

龍士「え？いいの？」

氷室「元々君が引き継ぐ物だったからいいだろう。それに世界に一つしかない完全聖遺物を見れるんだ。」

龍士「…まあ親父が研究してた物だし興味はある。」

氷室「では着いて来たまえ。」

そう言うと氷室は立ち上がり東堂と龍士が氷室に着いて行く。客間を出てそのまま屋敷の地下に行くところある扉が見えた。一見鉄のド

アに見えるが何かの術式のような物が書かれている。氷室がそれに手をかざすとその手と扉の間に術式が現れる。氷室がそれを操作するとその式が消え扉が開かれる。その中は綺麗に作られた石の部屋だった、所々に石の柱が立っており大きさはさまざまでその上には遺物らしき物が載っている。

氷室「ここは私が管理している聖遺物だ。東堂君のもある。」

龍土「親父のもですか？」

氷室「ああ、大道君が死んだ後相続権は君に移ったんだが君は魔術を習っていないからね。だから君の保証人だった私が一時的に預かっていたんだ。もし君が魔術師にならなかった場合私に相続権」そして奥に進んで行くとそこにはまた扉があり氷室が操作する。そしてその扉が開いた。

その部屋は通っていたさっきの場所よりは狭いがさっきの部屋よりも視線が釘付けになった。部屋の中央にある石の台座の上には大剣があった。長さ2メートル程の大剣で幅のは根本の部分も大きくそれが伸びていく事に小さくなっていき剣先が三角になっている。主は黒で塗装されており刃の部分は綺麗なエメラルドのような結晶に近い素材で作られていた。

龍土「……」

言葉がでなかった、どうせ大したことない。興味はない。空想上の物だ。そうやって勝手に勝手に楽観的に見ていたが実際に見て見るとまったく違った。魅入られている、何故だかわからないが目の前にある剣以外の事が頭に入ってこずその様子を氷室が笑みを浮かべながらある事を言った。

氷室「…持ってみるかい？」

東堂「ふえ!？」

龍土「…いいのか？」

氷室「いいとも。」

東堂「いや不味いですって！幾ら司波家の御曹司でも…」

氷室「私が責任を取る……龍土君、持ってみなさい。」

何回か二人の顔を見比べる。東堂の方は困惑しており氷室の方は笑みを浮かべてから変わっていない。そしてまた剣の方に視線を向けそれに一歩ずつ近づいて行く。台座の前に立つ、よく見ると剣の刃や柄に何か文字が彫ってあり近くで見ると見えなかった部分がよく見えた。そしてよく見終えた後その剣の柄に手を掛ける。

龍士「！」

すると何かが入って来た、色んな文字、そして何かの景色、あるいは術式などよくはわからないが何かすごいものが頭の中に入ってくるのがわかる。それに驚きながらも剣を持ち上げ剣に触りじつくりと眺める。結晶の刃の方でもよく見ると文字が掘ってあるがそれよりも中が透き通っていない。そのため刃越しに向こうの景色を見る事が出来ないがその剣から出てくる神秘のような物を五感で感じる。

この剣を持ち上げてから何故か笑顔が消えない。それよりもこんなに喜んだ事がない。本来なら人はわからない物に遭遇すると怖い筈なのだがそんな気持ちは一切起きず逆に知りたと思った。

氷室「…どうかな、持ってみて。」

龍士「すごい、いや何がすごいのかはわからないけど何かがすごい。いろんな事が頭の中に入ってきて少し気持ち悪いけど…こんなに喜んだ事がない。」

東堂「完全聖遺物を持つだけじゃなく起動させた。すごい俺でも起動させるのにかなり時間かかったのに…」

氷室「元々適正があったんだろう。魔術師の家系で聖遺物を扱う所は遺伝によって適合計数が同じだから問題なく扱う事ができる。そんなに珍しい事じゃない。」

東堂「流石は日本の名門家。」

遺伝によつて聖遺物の耐性を得ている子供は珍しくもないと言うよりそれがあるから司波家は日本の名門になる事ができたのだ。魔術師にとつて聖遺物の研究を任せられると言うのはそれほどの影響を持つているのだ。

龍士「…なあ。魔術師って今からなれるもんかな？」

東堂「なれるけど…もしかしてなりたい？」

それを聞き一度視線を外したが直ぐに東堂の方に向く。

龍士「俺は今まで色々やって来たけどここまで心が躍った事がなかった。今やっている事だつて正直、ただ不運にあて仕方なくやってきたけどそれでも今までの人生で何かをやるうとした事がなかった。初めてなんだ、戦い以外で嬉しい気持ちになったのは。」

ただただ流れるままにやっていっただけで本心ではなかった、喧嘩は楽しくないしそれにノイズの被害のせいで上手くいかない事が多すぎてイラついていたのもあった。それに正直ヤクザ何て柄じゃない、あれは脅しができなければ話にならないし何より手を出せる時なんてかなり限られていた。だがこんな風に何かを知りたいと思ったのは初めてなのだ。

氷室「良い事だと思うよ、正直君が魔術師になつてくれるのはありがたい。」

龍士「…と言うと？」

氷室「大道君がいなくなつてから人手が足りなくてね、東堂君が入ってくれたがそれでも手が足りない。今起きている騒動を収めたいのだが人手が足りないんだ。」

龍士「マリアだな。」

氷室「そうだ。」

龍士「他の魔術師は？」

氷室「魔術師はそもそも戦闘に向いていない、確かに研究の過程で強さを得る事はあるけど日本にいる魔術師のほとんど考古学者のよくな者だ。戦闘ができる魔術師何てイギリスか名門の出ぐらいしかないだろう。それにここ日本の魔術師と我々イギリスの協会に所属している魔術師とは目的が違うから協力が難しい。」

日本の魔術師は修道や陰陽師、忍者何かがそうだろう。だが今はそれもほとんど無くなつた上にあつたとしてもこつちはイギリスから来た魔術士なので協力は難しい、彼らはあくまで自分たちの技術を相続させるためにいるわけで魔術師として協会に協力していないのでこつちが何と言おうと取り合ってもらえないようだ。

龍士「なるほど、厳密に言えば氷室さんたちと日本の魔術師たちは

違うのか。んじゃここには何人いるんだ？」

氷室「支部長である私、そして東堂君に後78名いる。そのほとんどが研究家で戦闘員は東堂君と私ぐらいなものだ。」

龍士「何でそんな少ないんだ？」

氷室はそれを聞き少し顎に手を当てた、龍士は待っている間にグラムを台座に置き言葉を待つ。

氷室「実は私がここの支部長になったのはつい最近だ。前の支部長はフィーネ騒動で下ろされ今異動中なので今人員派遣を本部から待っている途中だ。私の弟子や志願者等はすぐに派遣できたのだが何分大道君や私がいいたのは研究部門だったからね。」

龍士「最悪なタイミングで来ちゃったわけだ。」

東堂「だから後を追おうにもほぼ考古学者たちの集まりに興味として戦闘術を学んだ二人の人間しかいないから行けない、かと言ってあそこから動かす訳にもいかない。」

氷室「とは言え来るまで後半月ほどかかる。移動を早くしそうにもそもそも今探している状況だからどうしようもないのだ。」

龍士「：俺が入ればどれくらい埋められる？」

氷室「グラムを持つまではあまりいい評価ではなかったが：グラムを持てる上に素の身体能力で東堂君の攻撃を受けれるのならかなり幅が広がるだろう。」

龍士「魔術の勉強は今からすれば間に合うかな。」

東堂「いやマリアたちの動きが不鮮明だ、予定を見積もって一週間はあると思うが、それまでに魔術を学習すると言っても間に合うかどうか：」

氷室「それについては恐らく大丈夫だろう。よく大道君から聞かされたよ、彼は覚えるのが早いって。流石にすべては無理だろうが：基本魔術とルーンの触りぐらいなら一週間もあれば十分だろう。」

だっそうだがと言いなながらこちらに声を掛ける東堂、正直魔術何て見た事もなければ聞いた事もない。何が起ころの何てわからないし一般人からしてみれば正直信じられなくて断るだろう。けど俺は父の事を知らななかつた事をこの

人たちから知らされた。

今での父のイメージは元気で明るくよく自分の話を聞かせてくれる旅行者だった。何故父がその魔術の事を話してくれず普通の日常をしてくれたのはわからない。自分に継がせたくなかったのかそれともただ教えるのが間に合わなかったのかは知らない。だから自分は知りたい、父が自分の人生を捧げて追いつめられたその魔術を知れば何かわかるかもしれない。それに自分も興味がある、自分がやりたい事としてノイズを倒すことができるのなら…

龍士「やろう、教えてくれないか？」

その言葉を聞いた東堂は次に氷室の方に目をやる。氷室の方はそれを見て頷き龍士の方に顔を向ける。東堂の方は大丈夫かなと心配そうな表情をしながら氷室の方を見ていた。

氷室「ではついて来なさい…大道君の蔵書に案内しよう…後それと、ようこそ魔術協会へ。」

司波家

東堂「あの子が蔵書に引きこもってからもう5日も経ちますね。」

そう客間の方でお茶を飲んでいた東堂がそう呟く、氷室たちが管理していた蔵書は幾つかある。まず氷室が専攻している魔術の本、東堂の本、そして大道が扱っていたルーンとそれに関係する本がある蔵書、そして次は日本が管理している聖遺物に関する本、そして各研究員が集まって行うための五つが存在する。

氷室と東堂、大道の蔵書は屋敷に存在し氷室のは屋敷の三階に、東堂のは屋敷の二階、大道のは同じ三階にある。本の数によって蔵書の大きさが変わるが大抵多いため蔵書を作るスペースは蔵書専用の部屋が複数存在する。今は異動途中なのである程度蔵書部屋は空いておりそのためかその部屋だけ掃除が楽だ。屋敷の広さもかなりの物で屋敷だけではなく広範囲に広がる土地も氷室の敷地内となっておりそこかしこに魔術を施した罫等が無数に存在する。

蔵書を持つ理由は聖遺物関係とある程度地位を持った魔術師の個人蔵書だが魔術師の基本的な仕事は聖遺物の管理と魔術の解明だ。それを論文等にしていきそれが結果を残せば氷室のようになんかの地位に着くことができる。とは言ってもそんな結果を残す事なんてかなりまれな事だが。

東堂「てつきりあのでかさだから勉強はしない物かと思っただけですけど、あいつヤクザだったし：人って見た目によらないんですね。」

氷室「いやそうでもない見たいだ。」

そう氷室の方は窓の景色をみながらそう返す。

氷室「13の時にヤクザの見習いになり若衆として活動、その三か月後に不動産関係で成功しある程度の地位を得る。さらに物理、神話、経済など知識にも明るく彼が担当した場所での評判は悪くないむしろ好評のようだ。その上あの格闘センスだ。それと相まって人を助ける事が多くそんなに悪い噂はない。」

東堂「本当に才能の塊みたいな奴ですね。」

氷室「流星は名門の出と言った所だろう。大道君の代から始まって

かなり浅いがそれでも魔術師としての大道君は飛びぬけていた。ルーンだけではなく魔術道具の効率化、他にも日本にある聖遺物のほとんどが彼が解明した物ばかりだ。」

魔術師の名門になるためには現代と同じでそれ相応の結果を残さなければならぬ。大道は聖遺物14個の解明と戦闘に使用するルーン89字、そして再生されたルーンが240字以上、戦闘装具の改良などの功績で日本魔術師の名門家となった。

東堂「その人がいれば今手こずっている案件も楽になったのにな
〜」

氷室「確かに大道君がいなくなったのは痛手だがその彼の息子が入ってくれたのは嬉しい誤算だった。しかも大道君とは違い研究員と戦闘員の両方を両立できるのが幸いだ。これならば最近暴走している錬金術師に対する備えができた。」

東堂「まだ使えろと決まった訳じゃありませんよ？戦闘員としてはかなりいい線を行くかもしれないませんが研究員としては成り立てるかどうかは、魔術の研究だつて楽じゃないのは知ってますでしょう？」

研究結果の論文一つ仕立てるだけでもかなり時間が掛かる。それにその研究をするための知識だつて一から習うとなると十年どころの話では済まない。それに魔術の幅も広い上に自分が研究する魔術となるとほぼ独学となる。魔術の技術は基礎魔術以外はほぼ独占されているためである。だがそれを聞いた氷室は意外そうな顔を浮かべ東堂の方に向けていた。

氷室「そうか。君はまだ龍士君の部屋を見てないのか。」

東堂「うえ？」

氷室「一度行つて見るといい、私と同じように見た方が変わる。」

それを聞いた東堂は早速大道の蔵書に向かう事にした。何部屋もある廊下を通りながらそのまま蔵書に向かう。普通の部屋より大きめの扉の前に立ち扉を開ける。その中を見た東堂は思わず驚き目が大きく開き中を注視してしまった。

中はかなり散らかっていた、開きっぱなしの本が机の上に散らかり閉じたままの本が何冊も積み上がっていた。だが龍士が座っている

机の上だけは綺麗に整頓されていた。本は積み重ねているがそれでも綺麗に並んでおり他に龍士が書いたと思われる書類の束があった。その紙にはすべてルーンの文字が書かれていた。それだけじゃない、部屋のそこら中には“ルーンの文字が浮かんでいた”

天井近く、部屋の二階の柵、机の上などいたる所に浮かんでいた。魔術の発動の仕方は何種類かあるが基本的には口で発動させる詠唱、空間あるいは体に文字や式を刻んで発動させる術式などが存在しておりルーンはすべて術式で発動する。ルーンは基本的に物に文字、式を書き魔術道具、戦闘武器に作り変えその物体に魔力を流しルーンを発動させる。だがこのように空間に文字を召喚するのはかなりの練度が必要だ。何故ならそれをするためには“召喚するルーンの文字を理解しなければできないからだ”

詠唱と術式の違いはあり詠唱は正しい発音、音量、言葉の理解をして発動させる。術式は龍士のように文字を空中で召喚するか元から物に書き魔力を流し発動させる。そのため戦闘に使用する場合詠唱は口で発音するため術式の方が早い。そのためルーンは戦闘魔術として有名であり実際に使用されている例は多い。

そしてその文字を召喚した龍士はと言うと机の上に腕を置いてその上に顔を置き静かに寝ていた。

東堂「おい龍士くくん？」

龍士「…んあ？」

机の上で寝ていた龍士は顔を少し上げ東堂を視認した。余程気持ちよく眠っていたのかまだ目が弱々しい感じがした。しばらくするとようやく気づいたのか体を起こし東堂と向き合った。

龍士「ああいや待って、今片付ける。」

すると机の上にある物を片付け始めた。とは言っても数が多すぎたため目の前にあった物を片付けたただけだがそれを軽く済ませると東堂の方に向き直った。

龍士「悪いつい寝ちまって、流石に四日間徹夜は不味かったかな。」

東堂「あんまり徹夜すんなよ。後日頭がろくに動いてないから、これ経験者の感想な。それで、色々やったらしいな。」

東堂は龍士が読んでいた本の題名を読み上げていく。どれもこれも北歐神話とケルト神話の専門書ばかりだった。

東堂「こんな難解な本よく読んだな。全部ルーンで書かれた奴もあるし。」

龍士「親父と一緒にルーンを習ってな、言葉の意味だけだったけどな。」

大道と一緒に神話の話をしていた時ルーンの文字を習った事がある。とは言え読み方と意味だけだが魔術においてその意味を知る事が重要なのでそれのおかげで何とかルーンの翻訳が出来た。とは言えそれだけじゃルーンの解読は出来ない、できたのは純粋な龍士の知識欲のおかげだがそれ以外にも理由があった。

龍士は父の事をよく知らないのだ。いやどんな人柄かは知っているが父がルーンの魔術師だったと言うのは知らずしかもそれが本業だったと言うのは氷室に聞くまで認知していなかった。何故それを龍士に話さなかったのか、それを知るためにもこうやってルーンのことを知れば父の事を知れるかと思っただけからだ。

龍士「それで何だが…親父の事何か知ってるか？ほらどんな事をしていたか…」

東堂「いやそれは俺も知らないなあ、俺がここに赴任したのはフイーネ騒動が起こった後だ。大道さんが死んだのは数年前だから俺はそもそも大道さんと会った事がない。ただ氷室さんとその研究員たちから人となりは聞いた事がある。」

東堂の話によれば大道は龍士が持っていたイメージと少しずれているようだ。龍士の印象はとても楽観的で笑顔があり普通の父親のような人だった。だが魔術協会で働いていた時は違った、とても威厳があり厳格な人だったようだ。研究している時は常に静かで多少の雑談はするのは氷室さんだけだったようだ。だが優しさはあったように教育を受けた研究員からは失敗してもそんなに厳しく怒られなかったようだ。

東堂「そうだな…知ってそうな魔術師たちは全員どっか行った、知っているのは氷室さんぐらいの筈だ。」

龍士「そうか…それじゃその…母さんは？」

東堂「母？司波紗栄子さんの事か？」

司波紗栄子、龍士の母親でもあり大道の妻である人であり魔術を使わないただの一般の人だったらいい。魔術師の家系については本来魔術師ではない人が結婚するのは稀で理由は明白だが価値観が違うためと家系を残すための魔術師が生まれづらいという理由があるためあまり見ることはない。

東堂「…悪いが知らない。多分氷室さんも知らない筈だ。」

龍士「そうか…」

詳しいことを聞くにはやはり氷室に直接聞くしかないようだ。ならそれ以外に色々聞くことにした。まだ自分は魔術師見習い、なら自分が疑問に思ったことを聞くことにしよう。

龍士「なら幾つか聞きたい事があるんだ、いいかな？」

東堂「いいぞ。」

龍士「死徒の事について聞かせてくれないか？」

死徒、龍士が5日前に戦った謎の敵、幾つかの神話の中でも似たような者は出てきたが龍士はその詳細を知らない。そのためできるだけけしっておきたいのだ

東堂「…死徒と言うのは本来魂が抜けて動かなくなった死体が何らかの理由で憑依、呪いによって動き出した体を俺らの世界では死徒と呼ぶ。お前がさつき戦ったのはその一つグールだ。

死徒にも色々あって、例えばゾンビ何かだがグールと違いがあり。グールとゾンビの違いは魂が混同していかないかどうかだ、ゾンビは元々あった魂が呪いによって感染しそれで動き出したのがゾンビ、グールは魂と他の魂が混同しその影響で肉体が変化してしまったのがグールだ。

今回ののは恐らく死霊だな。何からの原因で死んだ死体に死霊が憑依して混同し動き出したって所かな。」

グール、日本語では食屍鬼と呼ばれ死体の肉を食べ快楽を得ると呼ばれる化け物の一つ、アラビア伝承の魔物であり女の方はクラーと呼ばれるが魔術協会ではまとめてグールと呼ぶ。

東堂「死徒は人の遺伝子を栄養として生きる事ができる。だが日の光が苦手だから本来日が出ている時には出てこない筈なんだが…まあ住宅街だったし建物を伝って行つたと言うのは十分考えられるな。弱い奴は日の光に当たった瞬間太陽の光で腐敗した体が保てず一瞬で消えるがある程度耐性がある奴は少しの間なら耐えられる。」

龍士「そうか、んじゃ次なんだけど…妖精って危険なのか？何か優しそうなイメージがあるんだけど…」

それを聞いた東堂はそれに驚いたのか「はあ!？」と驚愕した顔を向けられた。

東堂「ふざけんな下手したら異生物の中で一番危険なんだぞ!?!勝手に心臓抜き取られて飽きたからとか言つてそこら辺にポイつて捨てられたり人を誘拐して笑いながら解体何かする奴らだぞ!?!フィクションの話で何か勘違いしているようだがあんなクソ生物何かぜつてえ会うんじゃねえぞ!!」

まるで子供を叱るようにまくしたてられ妖精の怖さを教えられた。それを聞いているうちにどんどん自分の妖精像が崩れていき実感はわからないが取り敢えず対抗手段が無い今は絶対に会わないと心に決めた。

龍士「そ、そうかんじや次なんだけどよ、何で錬金術師が暴れ出しているんだ？何か理由でもあんのか？」

東堂「暴れ出してんのは時代遅れの連中だよ。救世主紛いの事をして世の中のためとか言つて暴れ出してるんだよ。その筆頭がパヴァリア連中、色んな所を支援して面倒事を起こしてやがるんだ。今回来たマリア連中もそうだ。」

あいつらの後を追えばパヴァリアの連中に近づけるがあいにく今は人数が足りない、だが思ったより龍士の成長が早い、これなら二日もたてば俺が付き添えば現場に派遣できる。お前もこうなつた以上仕事してもらうから覚悟しておけよ。」

龍士「そりや楽しみだ。戦闘ルーンを使いたくてうずうずしてるんだ。基本魔術はもう覚えて試したがルーンはこんな場所じゃ試せないからな。」

そう手の上にルーンを召喚していじる、まるでトランペットを眺めている子供のようだ。東堂はそれを見て思わず笑みがこぼれてしまう。

東堂「他に聞きたい事はないのか？」

龍士「二課の事をどれくらい知ってる？」

東堂「…二課ねえ、今じゃSONGって名前らしいけど、まあ聞かせて置いた方がいいか。」

えつと確か Squad of Nexus Guardians だっけか？略称SONG、あのクソ風鳴家を作った独自機関、何の意図で作ったのかわからない聖遺物機関の一つ、お得意のシンフォギアで外交問題に突っ込みそうなヤバイ組織なんだけどそれなりに役にはたってる。何せパヴァリア連中の邪魔をしてってくれるからな。魔術協会のお偉いさんもそれが都合がいいのか放置しているようだけど…少し嫌な情報が入ったが。

正直欠陥品もいいとこだが現代科学と魔術理論を組み上げて作つたにはいい出来だ。けどそれでもかなりのリミッターの数が掛けられていて生身の人間じゃフルパワーは出せないようだ。俺たちにバレないように一般の人間から適合を選んだ結果例え破片だけの出力でも装置がなければコントロールできないようだ。」

龍士「それ危なくないか？だつて確か聖遺物持つのだつて専門家の人と一緒にやらないと駄目なんじゃ…」

東堂「SONGのようなニワカ連中がそこまでやるわけないだろう。ただフィーネの真似事して、それで適合者見つけてやらせるだけ、あいつらがやれる事何かお国の面倒事を片付けさせられるだけだよ。その癖適合者の連中お国の政治事情にかなり疎いんだよな…」

しかもそれだけじゃない。つい数日前その適合者の一人が暴走しかけた。例の融合例だ、今は反動で寝こけているようでそれを聞いた魔術協会は風鳴家と“お話し合い”をするようだ。」

こえくと口に出しながら頬をかく東堂だが龍士の顔は厳しかった。それを聞いた龍士は今まで持っていたSONGの嫌悪感がさらに強くなったからだ。調べた結果戦っているのは自分と歳が変わらない

子供のようだ。その子供に無理をさせた結果暴走させ怪我をさせた
何て情けないにもほどがある。とは言えその子供も納得した上での
協力だろうがそれでも嫌な感じは取れなかった。

東堂「おいおいそんな怖い顔すんなよ。SONGも悪いが一番悪い
のはそんな状態なのに無理してる子供だ。大人しくしとけばいいの
に大人の忠告無視した結果返って来ただけだ。大人もしつかりして
るのよ。」

龍士「…その子何とか治せないのか？ほら、こっちの魔術師で治し
てもらおうとか…」

東堂「そんな事した瞬間そいつ実験台に上げられるだけだぞ。魔術
師が赤の他人のためにそんな事する訳ないしそんな事するなら解剖
して研究した方がいいだろ。」

魔術師の生きがいは研究であり人助けではない。それにただえさ
えめんどくさすぎるSONGの連中何かと関わる訳がない。東堂た
ちは仕事上人助けはするが面倒事になる場合は助けないし大事に
なった場合巻き込んで死なせる場合がある。それが仕事ならばまた
話は別だろうがSONGがこちらを知らない以上こちらから接触し
なければ無理だろう。

東堂「支部長の独断で今マリアたちの動向を探り変な事をする前に
潰す必要がある。フィーネの事もあるから協会から何か来そうだが
その場合は俺たちは動かなくてよくなる。」

龍士「日本の事は日本支部が対応するんじゃないのか？」

東堂「だつてお前が戦力になるなんて予想してなかったんだもん。
今現状戦力の戦闘員がいらないから支部長が協会に援軍を送るよう
に要請した、それが届くのが多分三日後ぐらいで早ければ一週間後ぐら
いでそれまで時間稼ぎしようとしたが、その必要無くなったし。」

「どうやら龍士と言うイレギュラーのせいで予定が大幅に変わって
しまうようだ。そこまで過大評価されても困るんだが…と言うか俺
だけでそこまで話が大幅に倒れる物なのだろうか？と一瞬思ったが
つい先週にその一派をボコボコにしたので違うとも言い切れなかつ
た。」

東堂「最悪おれ一人で潰す予定だったがお前がいれば何とかなるだろう。前とは別人のように変わってるしこれなら余裕だろ。シンフォギアとは言え俺ら魔術師にかなう訳ないしな。もっと早くいればかなり早く潰せたんだがな。」

そうチラリと龍土の方を見る東堂、とは言え龍土もそこまで暇では無かったのでそんな事を言われても困るが…

龍土「仕方ないだろ、俺も忙しかったんだよ。」

東堂「まあ別にもういい、味方になってくれれば心強いしな。他に聞きたい事は？」

龍土「マリア一派の連中の事を教えてくれないか？」

マリアたちとは会ったがその一派の詳細を龍土は知らない、聞いたのはあくまで二課の事でしかも触り程度、だが敵対する以上詳細は知っておきたい。

東堂「やつらは米国の聖遺物研究機関「F. I. S.」から離反した連中だ、構成員は七人、子供二人、学者二人、マリアの構成、シンフォギアを扱うのは子供たちとマリアだけだ。後正体不明の人間が二人いる。」

学者はナスターシャとウエルの二人で大本はこの二人だと思われる。そしてシンフォギアの三人は「F. I. S.」のフィーネの魂を選別するための観測対象「レセプターチルドレン」だろう。」

龍土「フィーネ？レセプターチルドレン？」

東堂「フィーネって言うのは先史文明の巫女だ。とうの昔に死んでる筈なのに諦めが悪い女でさ、遺伝子の中に特殊なパターンの魔力に触れたフィーネの子孫がいた場合、フィーネの魂を呼び起こす何て言う馬鹿げた事をしやがった。レセプターチルドレンはその子孫たちの事だ。つまりフィーネの魂を呼び起こして実験しましょうってやつさ。」

龍土「…その子供たちは今何処に？」

東堂「さあな、FISを解体し魔術師が選別した連中で固めたがその連中がどうなったかまではわからん。けどあまり考えない方がいい。」

それを聞いた龍士はあまりいい心地ではなかった、勝手に集められた上に無下に扱われしかも恐らくあまり良い終わりではない筈だ。とは言え今はどうしようもないし恐らく手遅れだろう。今は東堂の説明を聞く事にしよう。

東堂「暁切歌、イガリマの装者で年齢は今15歳、月読調同じく15歳、このこはシウルシャガナだな。」

龍士「ザババ神：メソポタミア神ニンギルス関係が持っている神器だな。」

東堂「流石は勉強熱心なだけはあるな。よく知ってる。」

シウルシャガナ、ニンギルスの長男が持っていたとされる。イガリマはニンギルスの息子が持っていた物だ。

東堂「マリア・カデンツアヴナ イヴ、グングニルを使用する装者？とか言う奴で戦闘力はまあお前も知ってるんだろうし別に説明しなくてもいいだろう。」

龍士「よりもよつて神殺しの槍かよ。そんな貴重な物よく持ち出せたな。」

東堂「ちなみに完璧な状態の現物あるぞ。」

龍士「はあ!?え、あんの!？」

東堂「魔術協会本部 現ルーン魔法使いとも呼ばれているアラリス・アバカロス。その人が今所持している。」

龍士「うわあ、俺よりすごい人じゃないか。」

アラリス・アバカロス、今から二十年程前から魔術協会の本部にいた魔術師。300年も以上前から存在し続けルーンの再生、存続をし続けた人物。龍士の父大道に後押しされる形で進出していき現代の地位についた。

東堂「そう謙遜しなさんな、お前の親父さんのおかげでルーンの家系は大幅に成長する事ができたんだ。逆にその人お前に会いたいと思うぞ? いったら、魔術師にとっては研究結果こそがもっとも価値がある物だと。」

ルーンの家系がここまで進出できたのは大道のおかげとも言える、今までルーンの解説が難しく技術は秘密にされていたのだが大道が

その幅を広げてくれたおかげで協会学校でも専門科目として扱われ家系の成長した。

龍士「そうかねえ……と言うかこれじゃ現存している聖遺物かなりありそうだな。」

東堂「正確な数字はわからないが有名なやつは結構残ってるぞ。ちなみにイガリマとシウルシャガナも他の支部に保管されてるぞ。」

龍士「…魔術協会ってすごいんだな。」

流石は魔術を研究するために世代をすらかける人たちだ、親父もすごいが他の人たちもこの様子だとすごそうだ。

東堂「おつと話が反れたな、装者のリーダーは恐らくこのマリアだろう。年齢は確か二十歳ぐらいか？コイツが装者の中で一番強い。」

後二人程いるがこっちは情報があまりない、一人は日本人の男性で不思議な刀を使いもう一人は足技を使う格闘家こいつも多分日本人かな？わかるのは日本人と言うこと以外であんまりわからない。」

龍士「ああ、確か一人はボコボコにしたぞ。」

東堂「……え？」

それを聞いた東堂は思わず間抜けな声が出てしまった。ノスカーの話しは聞いたがマリアたちの話しは龍士から聞いていない、東堂たちは後処理に追われていたため調べる暇がなく最近のマリアたちの動向を追えなかったため龍士が最近マリアたちを襲った龍士の事を知らなかったのだ。

東堂「お前なんでそれ言わなかった!？」

龍士「す、すまん。素で忘れてた。」

そして龍士はその事の詳細を話した。

東堂「お前怖いもの知らずだな。そう言うのは逃げていいんだよ何テロリスト相手に喧嘩売ってんだよ。」

龍士「俺はヤクザなんぞでな、組の邪魔をするやつは始末するのは当然だ。いちいちテロリストだからとか言って引けるか、ヤクザは舐められたら終わりなんだ。」

半人前とは言え親から片付けろと言われてた以上きちんと片付けなければいけない。例えどんな理由だろうが親の命令は絶対である。

東堂「…お前おかしいぞ？ヤクザとは言えそんなことしないだろ。」
龍士「そうか？」

東堂「そうだよ、普通自分の命が危険なのに何戦おうとしてんだよ。銃弾が当たれば死ぬし刀で切られれば死ぬ、命の危険が迫っていると言うのに何戦ってんだって聞いてんだよ。」

龍士「……」

東堂の言葉は正論だった、例え龍士がいくら強いからと言ってあまり良い事ではないがこれは龍士が選んだ事だからという理由ではそれはただ自分の命を軽く見ているだけだ。

東堂「一つ言っておく、魔術師の家系でまだ未熟な魔術師が戦うのはそんな珍しい話じゃないが俺は少し嫌だ。お前を戦わせる時は誰かと一緒だし一人前になるまでは一人では戦わせる訳にはいかない。」

龍士「……」

東堂「なあ聞かせてくれ、お前は どうして戦う？」

俺が戦う理由、そんな事考えた事もなかった。

戦う時は大抵自分の気まぐれ、興味があつたから、言われたから、明確な理由はなくただ何かをぶつけるように戦い続けた。

ノイズを倒せない怒り？それとも……自分の今の姿が気に入らないから？

戦うのは好きだ、だが理由をもったことはない。ただ自分が立つ障害に戦いがありそれを風払うために力を使った。自分が力を入れたのはただ知識欲を埋めたいがためだ。それには戦闘も含まれておりそれをしていけば自分の空白の部分が埋まる気がしていた。

ただあの時響とあって変わっていった。彼女と会うと今まであつた知識欲が薄れ人と話すことが楽しくなつていった。未来と会えたこと、峰と会えたこと、人と話す事になればじめいつしかそれが嬉しくなつていった。

龍士「俺が……戦う理由。」

自分が戦うのは…自分のためであり人のためでもあつた。だが今はどうなんだ？どつちなのかもうわからない。けど…

龍士「今でもわからない。けど人が死ぬ所は見たくない。それに例えあんな事があつたとしても俺は力を知ることと助ける事を放棄したくない。」

東堂「…まあ子供だから曖昧な理由だが、今の所妥当な理由かな。」すると東堂はこちらに真つ直ぐな目を向け指を指す。

東堂「無理はしないこと、俺たちの指示には従うこと、それが守れるならお前をお願いを少しだけだが聞いてやるよ。」

龍士「お、おう。」

東堂「子供なんだからはいと言いなさい。この際だから礼儀を教えよう。」

龍士「…わかつ…わかりました。」

東堂「よし、それじゃまずは礼儀作法からやるか、魔術師としての作法も教えてやる。」

龍士「それはもう本に書いてあつたからいい。」

東堂「よくねえ、読んでそのままにするなどやるのとじゃぜんぜん違う、取りあえずやるからこころ辺片付けるぞ。」

龍士「はいはい。」

東堂「はいは一回。」

それを聞いた龍士は東堂に言われた通り片付ける事にした。東堂も仕方なさそうに手伝いながら多少の雑談をすることにした。

東堂「まさかテーブルマナーも知らなかつたとはな…」

龍士「いやだつて、飯何て食えればそれでいいかなつて…」

東堂「覚えが早い子でよかつたよ。」

そう愚痴るように紅茶を飲み教えられた通りの飲み方をする龍士、ちなみにこの紅茶は龍士が入れた物で正直入れた事がなかつたため

自分で飲んでも不味い。「客に飲み物を出せないんじや駄目」と言われたので教えられた通りやったんだがそれでもかなり不味い。

東堂「…まあ最初はこんなものか、料理はできるのか？」

龍士「…一般的な物なら」

東堂「ならそれも教えなきゃかな、品質、種類とかは言えるようになっておかないと…まあどうせ使用人が作るようになるからいいんだが料理の名前は覚えておかないとな。」

人に出す料理は魔術師の家系や裕福層における基本も覚えておかないと笑われる原因になる、一般的な市民でも社会人としてのマナーを知っておかないといけないように魔術師にも覚えるべきマナーが存在しその中に高級ホテルで行いそうなマナーなどを覚ええないといけない。龍士なら一応見れば覚える事ができるのだがそれでもやはり時間をおかないと中々身につかないのだ。

龍士「親父がいた場所ってホントにすごかったんだな。でも親父の家ここまですごくなくなかったけどそれはどうしてなんだ？」

東堂「何でも幼少期や青年期の息子には普通の生活を送ってほしくかったそうだ。」

龍士「魔術師ってそんな事するのか？」

東堂「魔術師の家系において大道さんのように一般層で育てるのはそんなに珍しい事じゃない。例え一般から離れた俺らでも一般的な知識は必要だからな。そうなった場合魔術師としての基本は青年期の頃から教えられる筈だ。」

龍士「そうか…そう言えば本部の魔術師いつ来るんだ？」

東堂「それがなまだ来ないんだ、どうやら実行員が全員でばらつて変わりの人を探しているようだ。」

龍士「実行員？」

東堂「魔術師や異種が問題を起こした時にそれを片付ける専門家の事だ。支部の人間が片付けられない問題が起こった場合等に派遣される魔術師だ。彼らは研究よりも戦闘を専門としているため支部の人間や名門の人たちよりも強い。」

龍士「強いつてどれくらい？」

東堂「すくなくとも俺より強いぞ。」

そうなると恐らく自分よりも強いと言う事になる。だがそれは当たり前だ。研究の過程で得られる魔術でもかなりの力を持つ事できるのにそれを戦闘に特化させたとなると強いのは当然だしそんな仕事をしているのだから当たり前だろう。

龍士「そんな部門があるのか…と言うかそんな人達が全員派遣されるってどんな事件が起こってるんだよ。」

東堂「いや支部の魔術師は本来管理が仕事だし動くのも基本的に駄目なんだ。もし動くとなるとそれは実行員でも手が足りなくなつたらの話だ。」

龍士「それじゃ東堂がいる理由は？」

東堂「主な仕事は支部長の手助けだが日本に来た違反者と戦うのが俺の仕事だ。実行員が派遣されるのだっていつになるのかわからないかもしれない場合の代わりをやるために俺がいるんだよ。」

龍士「何かあやふやだな、どちらか片方にできないのか？」

東堂「そうか？もし支部の人間が失敗した場合のカバー役が彼らなんだよ。実行員が片付けるのもよし、支部の人間が片付けるのもよし、両者と一緒に片付けるのもよし。要人に越した事はないしこっちの方が確実だからな。とは言え実行員の派遣は本来直ぐ終わる物だから今回は単純に運がなかったただけだな。でもまあ二課が時間稼いでくれているから多分何とかなりそうだが…」

龍士「そうなのか…運が無いのは何処も一緒か…」

そう紅茶を入れてあったティーカップを片付ける。もし支部の人間が変わらなかつたらこうもならなかつただろうがもう済んだ話を掘り返しても仕方ない。それに氷室たちだつてまさかこんな連続で狙われるとは思わなかつただろう。

龍士「となると今日の予定は？」

東堂「特にないな、マリアの動向を探ってはみたがどうやら聖遺物を使って移動しているため動きが読みづらい。だがあいつらもFISに追われている以上何かしらの行動を起こす筈だ。それがわかるまでお前は休憩してていいぞ。流石に働き過ぎだしな。」

龍士「わかった。今も眠いし休息を取るよ。」

東堂「おうんじや明日の朝八時にお前を連れて仕事教えるからそれは覚えておいてくれ。」

眠気を抑えながら龍士は軽く返事を行い自分の部屋へと戻った、それを見た東堂は深いため息をついた後自分の裾をただし目を細めた。

東堂「…許してくださいよ支部長、今回だけですから…」

そう申し訳なさそうにしながら居間から退出した。彼のスマホにはあるタワーの周りでノイズが発生している場面が映し出されていた。

サブストーリー

サブストーリー No.1 司波道場 峰

峰「んじゃよろしく」

龍士「急に道場に來たと思つたら技教えろなあ？」

龍士は峰に呼ばれた、内容は技を教えてほしいと言わないようだった、そして集合場所は龍士の道場だった

峰「ああ、多分これから先も俺は力が必要になってくる、だから頼む」

龍士「……」

龍士は顎に手を当て峰の目を見つめる、目は真つ直ぐにこちらを見つめている、龍士はそれを見るとため息を吐きやれやれと頭を振った

龍士「……いいだろう」

峰「ほんとか!？」

龍士「仕方ないからな、俺の技、教えてやる」

峰「よっしゃ!」

そう小さくガッツポーズをする、龍士はそれを見ると少し笑みを見せ立ち上がる

龍士「まあその前に、やってみようか」

峰「え、いきなり?」

龍士「そりやお前の目付きが変わったからな、少し興味がある」

そう言うと龍士は少し離れ間を取ると峰に振り返え構える

峰「俺もあれから腕を上げたんだ、びつくりすんなよ」

峰もそれに答えるように構えた

龍士「やる気は十分か、こい!」

――古東会 黒澤組組内宮本組 若衆――

――司波 龍士――

龍士が先に仕掛ける、脚を狙った下段蹴りが来る、峰はそれを手で止めるすると龍士は脚を引っ込め前蹴りが腹に来る、それを身を少し屈め手で抑える、それを払いのけ腹に蹴りを入れようとする、だがそれを龍士は手で虫を落とすが如く叩き落とした

峰「うえ!?!」

峰はそれに驚きつつも体制が崩れないようにし直ぐに顔にジャブを放つ、龍士はそれを手で受け止め峰は次にその手を潜り抜け顎にアッパーを入れようとするが龍士はその手を掴み捻り投げる

峰「おわつ!?!」

峰は荒く着地すると峰の顔に拳が迫る、峰はそれを見ると後ろに倒れるように避けると直ぐにその顔に足が迫る、それを横に転がるように避け立ち上がると同時に腹にバックブローを放つ

峰「おらあ!」

龍士はそれをすり抜けるように避けるとこちらに膝蹴りを放つ、峰は苦し紛れに手を盾にして後ろに飛び衝撃を和らげる、そしてまた荒く着地し体制を立て直す

龍士「…なるほど、確かによくなってるな」

峰（嘘だろ、力使ってるのにこれか!?!）

峰はとことん驚く、あの超人的な力を使ってもこの様だ、本気をだしたらどれぐらい強いのだろうか

龍士「これぐらいでいいか」

龍士はそう言う構えを聞いた、それを見た峰も構えをとく

龍士「前とそう変わらんかったらやる気が失せるが、いい感じになつたな」

峰「はあつはあつ、まったく、疲れるぜホントに、それで?どんな技教えてくれるんだ?」

龍士「そうだな……」

3 極み技

龍士（ちよつと小技を教えるか）

龍士「お前、今思ったがやつぱり技に捻りがないな」
峰「うぐ」

龍士「ほぼ基本通りの動き方だ、雑魚にはそれでいいんだろうが強敵相手にそれを続けるのは辛いんじゃないの？」

峰「た、確かに」

実際フイーネの時もボクサースタイルがなかったら辛かったし何よりパターンを読まれていた、一つの流派で上り詰める人はだいたい技に捻りを持っている

龍士「そこでだ、ある技を教えてやる」

峰「何だよ」

龍士「お前、防御特化の相手にはめっぼう弱いよな」

峰「まあね」

龍士「そこで今回俺が教えるのはそれを破る方法を教えてやる」

峰「おお」

そしてその説明をする

? 「おい!」

そう声ができる方を振り向くとそこには少し体格がいい男がいた

? 「司波つてのはあんたか？」

峰「え? いや俺じゃないよ」

龍士「俺の事?」

そう龍士が前にでると男が下がった

? 「な、中々でけえじゃないか、だが! 鉄壁の守りを持っている俺に勝てるかな!」

龍士「おお、ちょうどいい練習相手じゃねえか、いいか峰、さっき言った通りにするんだぞ」

峰「お、おう」

? 「な、なにいつて」

峰「よっしや、行くぞ!」

? 「な、なんで?」

——チンピラー——

そして案の定男は防御に徹する、峰は言われた通りにやってみる、

まずは顔を腕で防御してる場合まず正中線の水月、つまりみぞおちを突く、すると相手の腕が下がり頭が出る、そこに蹴りを入れた

? 「ぐへえ!？」

峰 「おらどうした? 鉄壁の防御とやらは」

? 「な、なめやがって」

すると案の定男は腹と顎に防御を固める、峰は横からの裏拳で頭を叩き怯ませその内に脚に下段蹴りを入れバランスを崩させまたもや痛みで腕が下がった所に頭に正拳突きを喰らわせた

? 「ごお!？」

そのまま男は吹っ飛ばされた、そしてそこに龍士が近づいていく

? 「ば、ばかな俺の防御が」

龍士 「いいからとつと出てけこんにやろ」

龍士は彼が言い終える前に男を蹴飛ばし道場から出ていかせた、そしてこちらに振り返る

龍士 「よくやったな、最初にしては上出来だ」

峰 「ああ、これ使えるぞ」

龍士 「防御がされていない他の急所を軽く叩き怯んだ所に一発入れる、これは速さが大事だぞ、覚えとけよ」

峰 「おう」

〃突破の極み 空手〃

サブストーリーNO. 43 不運な少年

龍士「相変わらずだねえこの街は」

龍士は少しため息をついている、目の前にはチンピラがカツアゲしている様子だった、チンピラ三人が青年につめかかっていた

男「おらさっさとだせやこらああ!!」

青年「だ、だから、ないんだって」

男2「この町に来ていてそれはないだろ、いいからさっさとだせよ」

青年「ほ、ほんとなんだよ!」

男3「嘘つくくなって」

青年「嘘じゃない、そんなに金が欲しかったら働けばいいだろ!」

男「な」

龍士「おお、言うねえ」

龍士はそのことは黙って静観していた、あんまり手を出すのはあまりよくない、出すときは相手がやめる気配がないときだけだ

青年「あんたたちそんな歳になつたのなら働けばいいだろ?少なくともカツアゲする何かよりは手にはいるよ!」

男「て、てめえ」

どうやら言い返せないようだ

龍士「……………そろそろ出番かねえ」

男のほうは今にも手を出しそうだ、どうやら頭にきたらしい、まあもつともものごとを言っただけなのだが

龍士「さて、行くか、お?」

龍士が行こうとした時に向こうから近づいてくる人達が見えた、どうやら警官のようだ

龍士「やべ」

龍士は姿を確認すると直ぐにそのばから離れた

警官「こら!君たち!なにやってるんだ!」

男「やべ、サツだ!」

男2「お、おい、逃げようぜ」

男たちは走りだす

警官「こらあ！待ちなさい!!」

警官も走りだしチンピラたちを追う、どうやら一難去ったようだ

龍士「…………… まあ、一件落着かな？」

龍士は隠れながら見届けもう大丈夫だと思いその場を離れた

龍士「かあく寝つむ」

川の近くにある少し急な坂で腕を枕にして寝っ転がっている、シノギも終わりどうしようか決まらず取り敢えず適当に過ごすことにしたのだ

龍士「特にやることねえしな」

こうしてみると表の人達がいかに大変なのがよくわかる、よく毎日残業やらなにやらやれるものだ

龍士「まあ、こっちも大変なだけどさ」

内の組が主にやっているのは町の建物の管理、修復、営業や、ケツモチなんかだ、町のことは組長と若頭がやり、龍士はある程度優遇されているので少しばかりの経営をさせてもらっている、峰何かがそうだ

龍士「ん？」

龍士はそれを取り体を起こし確認する、どうやら野球のボールのようだ

青年「すいませーん、それ投げてくださいませんか？」

龍士（ん？あいつはさっきの）

どうやら岸辺で遊んでいた青年たちのものようだ、龍士はそれを手の中で転がし返すことにした

龍士「おう」

さて、どう投げようかね

1 全力の一級入魂

2 普通に返す

龍士（普通に返すか）

龍士「ほれ」

龍士はそのボールを相手に投げる、青年はそれをキャッチした
青年「ありがと」

龍士「どういたしまして、こちら辺でよくやるのか？」

青年「そうだよ、よくここで遊ぶんだ」

龍士「そうか」

青年は笑いながらこちらにボールを見せつけてくる、楽しそうだ

男「おい！おまえ！」

そんなときに横からデカイ声が聞こえてきた、そちらを見ると前に

青年にたかっていたチンピラたちだ

青年「ち、また会っちゃった」

龍士「知り合い？」

青年「こちら辺じや有名なやつだよ」

龍士「そうなのか？」

男「へへ、俺もこちら辺じや有名だからな、名前ぐらいは知ってる
だろ」

龍士「名前か……」

1 しらんそんなの

2 ギャングか？

3 焼き鳥屋か？

龍士「知らんそんなやつ」

男「な、俺だよ俺！こちら辺で喧嘩で有名な俺だよ」

龍士「だから知らん、いちいちチンピラの名前なんか覚えきれるか」

男「な、なんだと？」

龍士「だから、喧嘩だけしか脳がねえチンピラ何か覚えねえって
いってんだよ」

男「こ、このくそやろう、ぶつ殺せえ!!」

——チンピラ——

三人いる男たちがかかってきた、三人同時に突っ込んでくる
青年「あぶない！」

青年はそう声をあげるが龍士にとっては余裕だった、まず構えてから相手が接近するまでまつ、相手がある程度近づくと真ん中の男が殴りかかってきた、龍士はその腕の手首少し後ろに手を起き無理矢理間接を曲げて自分を殴らせた

男「ぶへええ!?!」

相手は鼻を押さえながら何をされたのかよくわかってないようだ、他の男たちはそれを見て少し困惑していたがリーダー格の男は仕切り直した

男「この!」

左からくる攻撃がくる前に掴んで止めた、そして相手の襟と服の真ん中を掴み足が開いている相手の足の間に自分の脚を侵入させそして後ろに向かつて体をひねり投げて背中から叩きつけた

男「ごへえ」

龍士「・・・ほんとに強いのか?」

男「な、なんだと?」

龍士「正直そこらへんのやつとあんまりかわらん」

男「こ、このお、なめやがってえええ!!」

男が真つ直ぐに突っ込んでくる、龍士は左腕を前に出し少し下げ構える、そして相手が間合いに入った瞬間、左のジャブを放つ

男「ぶへええ!?!」

男が鼻を押さその場で止まっている、龍士はその腹目掛けて蹴りを放った

男「があ!?!」

龍士「・・・ほんとに強いのか?」

龍士はそう疑問に思う、他の二人はと言うとリーダーがやられているのを黙って見ていた、どうやら近づくのが怖くて手を出さなかったようだ

龍士「おい」

男2「は、はいなんでしょうか?」

龍士「こいつ引つ張っていけ、しばらくは動けんと思うしな・・・それとも」

龍士は二人の方を睨む

龍士「こいつの代わり、やるか？」

男2「い、いえ、結構です！」

男がそう言うのと二人が動きだし、倒れている男を引きずって行った
青年「あ、あんた、強いんだな」

龍士「まあな」

青年「出来ればお礼がしたいんだけど、何か奢らせてよ」

龍士「いや、いいよ、今から少し仕事あるし」

青年「そつか、それじゃ会ったときにでもいいか？」

龍士「まあ、いいけど」

青年「んじやまたなく」

青年はそう言うのと友達の所に走っていく、友達は今の光景が信じられず青年に色々聞いているようだ

龍士「つまんなかったなく・・・まあ行くか」

龍士はそう呟き歩き出した

翌日

龍士は町の方に来ていた、シノギの件で顔を出していたようだ、すると横から怒鳴り声が聞こえた

男「おらさっさとだせえ!!」

青年「だくかくら、ないんだってば！」

男「嘘つけこらあ！」

どうやらまたあの青年が絡まれているようだ

龍士「・・・運のないやつ」

思わずため息がでる、取り敢えずまた助け出すことにした
ちなみに助けたがその翌日にまた絡まれているまた助けることになるのは内緒

サブストーリーリーN o. 50 予測不可能

龍士はシノギを終わらせた後夜の街でブラブラと歩いていた、これは馬鹿が余計な事件を起こしていないか見て回るものでようはお巡りの見回りのお手伝いだ、龍士が歩いているのはデートスポットで回りにはカップルがよく見かけられる、火をつけたタバコを加えながら裏路地を等を覗く

龍士「流石にサルはいないか」

裏路地の奥も覗き人がいないか確認する、それを繰り返しながら街を歩いていくとある場面に出くわした

男「ねえねえ、これからどっかいかない？」

男2「楽しい場所紹介するよ？」

ナンパだ、しかもしつこいやつの方だ、相手の女性は身なりがよく顔も美人だ、だが龍士はその顔に何処か見覚えがあった

龍士（よく見れば、あいつ女優じゃね？）

確かテレビを見ていた時に見かけたような気がするのだ、名前は覚えていないが確か新しく公開される予定の映画に出る人だった筈だ

龍士（まあ何にしても止めるか）

タバコを捨てその三人に近づく、そして女性は二人に頭を下げこう言った

女「お願いします！」

男「…え？」

龍士「……………は？」

流石の龍士も脚が止まりその場に立ち尽くす、すると勝手に女性が喋り始めた

男「えつと、え？」

女「私あるヤクザ映画に出るのですがヤクザと言う人とあつた事があります、ですからそれに近い人たちに教えて貰いたいです」

龍士（馬鹿かこいつ？）

失礼だと思うのだが言っても仕方がない、世間知らずにも程がある男「ま、まあそれはホテルでゆっくりね」

男たちの表情が変わり女性を連れていこうとした、流石にこれは止めなければと思い割ってはいる

男「いででで?!」

龍士「はいはいそこまで、世間知らずのアホにそう言うことすると自殺するからやめましょうねー」

そう男の腕を捻り上げ軽く突き飛ばす

男「んだてめえは!」

男2「邪魔すんなよ、ちゃんと同意は得てんだよ!」

龍士「その女性が求めているものだったらよかつたけどお前らするきないだろ、今帰るのなら見逃してもいいぜ」

男「こんのやろお」

男2「こんな上玉見逃せるか!」

ーチンピラーー

龍士が先に仕掛ける、相手の顔にジャブを入れ怯ませた後リアアツトをかまし地面に叩きつける、そしてそのまま追撃に拳を振り下ろした

男2「え?」

そして呆けている男にバックブローでぶつ飛ばし地面に倒れた後頭を蹴り上げた、二人はそのまま動かなくなった

女「す、すごい」

龍士「何がすごいだ」

龍士は女に詰め寄る

龍士「世間知らずなのはいい、だが次からはよく考えてから行動するんだな」

女「す、すみません」

龍士「たく」

女「あの、警察の方ですか?」

龍士「あ?ちげえよ」

そう胸の大門を見せる

女「や、ヤクザ!？」

龍士「そう言うことだ、次からは気を付けろよ」

そう言い残しその場を去ろうと後ろを振り返り歩こうとする

? 「いや、相変わらず容赦ないのお」

乾いた笑いとともに聞こえてくる声、それを聞いた龍士は苦虫を噛み潰したような顔をするが直ぐに声のする方に振り返る、そこにはキングショットに白いシャツの上にこれまた派手な赤なスーツを着ているがボタンを全部外しているため体に入れてある刺青が見える

龍士「お久しぶりです、鬼頭の兄さん」

鬼頭「にしし」

――古東会直系 黒澤組若頭補佐――

――鬼頭 成亮――

そう歯を見せながらこちらに笑いかける男、気持ち悪い程に口が三日月状になっている

龍士「お勤めご苦労様です」

鬼頭「おう、でもまあつまらんかったのお、留置所も」

龍士「まあ兄さんの事を知っていて喧嘩を売らなかつたんでしょ、ね」

鬼頭「せや、全員俺の噂しつとつての、誰も喧嘩こうてくれんかつたんや」

そうガクンと頭を下げ力を抜きブラブラする、龍士は少し引き気味になっている

龍士「ま、まあそのお陰でこうして早く出られたわけですし」

鬼頭「何がええんや! つまらん過ぎて夜も眠れなかつたわ!」

龍士「い、いやでも、仕事はあつたでしょ?」

鬼頭「あ? あんなん楽しみのうちに入らんわ」

龍士は話していて嫌な予感がしてきた、何故鬼頭がここにいるのか謎だからだ

龍士「ま、まあ放免祝いには呼んでください、では」

こんな所には入れないのでさっさと立ち去ろうとする龍士

鬼頭「おう、ちよつと待てや」

そう呼び止められる龍士、龍士はそれを聞き振り返る

龍士「えつと、何か？」

鬼頭「何かって、何のために俺が来たと思うとるんや」

そう懐からドスを取り出した、灰色をしたそのドスには青い稲妻の絵が入っている、そのドスを前に突き出す

鬼頭「俺がここに来たんはお前と喧嘩するためや」

やっぱりとため息をつく龍士、なんとかそれを断るとする

龍士「いや、こんな人が集まっている所では流石に」

鬼頭「今さつきしとつたやないか」

龍士「うぐ」

それを言われるとその通りだが流石に直系の若頭補佐と喧嘩をするのは抵抗がある

龍士「でも黒澤の叔父貴の人と喧嘩するわけには」

鬼頭「二年前さんざんしたやろが」

龍士「いやあのときは荒れていたと言うか何と言うか」

鬼頭「あの時の司波ちゃん怖かったわ、俺が喧嘩吹っ掛けた時は目がやる気まんまんだったわ、あん時まさか歳が十も離れとるガキにやられるとは思わなかった、あかん何かムカムカしてきた」

表情がコロコロ変わりよくわからないが最終的に龍士を見始めた

鬼頭「お前で怒り発散させろや！」

龍士「できるか！」

鬼頭「ええやろうが少し、ちよつとだけやから！」

龍士「そう言っただけ最後までですよあんだ！」

龍士「それにほら、女性もいるわけですしやるわけには…」

女「いえ、お願いします！」

龍士「ほら、だか…ん？」

その言葉を聞いた龍士はまた固まりその場に立ち尽くした、だが直ぐに戻り女の方を向いた

龍士「いや何でだよふざけんなよお前!」

女「私、ヤクザ同士の喧嘩は見たことがありません、参考にしたいのでお願いします!」

鬼頭「よっしゃわかった!早速やろうや司波ちゃん!」

龍士「やるわけないでしょ!」

女「それに私がいれば撮影だと思つて怪しまれない筈です」

龍士「いや、そういう問題じゃなくてだな」

女「お願いします、こんな機会滅多にないんです」

そう頭を下げられた、龍士はどうしようかと考えていたら後ろから声をかけられた

鬼頭「司波ちゃん、女に頭を下げさせるとは、見損なつたわ!」

龍士(この人、絶対内心で笑つてるよ)

後ろにいるため表情は見えないがおそらくニコニコしてるだろう、龍士はその場でため息をつき頭をガクンと下げる

龍士「…参考になら」

女「!」

龍士「ホントに参考にしたいならやつてやる」

頭を上げこちらを見る女性、顔に花が咲き笑顔がある

女「ありがとうございます!」

鬼頭「よっしゃ!」

もはや聞くまいと頭をかき後ろを振り向く、そこにはもうやる気まんまんの鬼頭が構えていた

龍士「羅豪のドスは使わないので?」

鬼頭「最初は素手でやろうと思つての、ドスは次の機会や」

龍士(何かもう次やるって決めてないか?)

お互いにならみ合いながらその場を回る、そして元の位置に戻るとお互いに構えた

鬼頭「ええでこの威圧や、やる気が出てくるわ!」

龍士「行きますよ、兄さん!」

鬼頭「行くでえ、司波ちゃん!」

お互いに駆け出し鬼頭の拳を受け止めそれを突飛ばし回し蹴りを

放つ、それを鬼頭は掻い潜り振り向き様にバックブローを放つが龍士はそれを振り返り腕で受け止めた

——古東会直系 黒澤組 若頭補佐——

——鬼頭 成亮——

鬼頭は直ぐ様腕を掴みどかすとフィンガージャブを放つ、龍士は掴まれた腕を逆に掴み捻り上げる、そのためジャブがそれる

鬼頭「いででで?!」

そして逆の手で胸に拳を放つが捻り上げられた腕を回転して飛び解かせると同時に蹴り上げた

鬼頭「おりや!」

そのまま腹に蹴りを入れる、龍士は手を離しそれを手で受け止め脚払いをする、鬼頭はそれで倒れそうになるが先に腕をつき体を逆さまにしてブレイクダンスの要領で蹴りを入れてくる、それを後ろに下がりにながら省いていくと地面に手をつき姿勢を屈め回し蹴りを体に放つ、鬼頭はそれをまともに喰らった

鬼頭「ぐへえ」

間拔けな声を上げながら吹っ飛ぶが受け身を取り立ち上がりまた龍士に駆け出し姿勢を下けている龍士の顔に蹴りを放つ、龍士はそれを手で受け止めるが鬼頭は直ぐに脚を下げ踵落としに移る、それも受け止めるが鬼頭は直ぐに地面に手をつき龍士の顔に逆の脚で蹴りを入れてくる龍士はそれを後転し体制を立て直す

鬼頭「相変わらずそのでかさでどっからその器用な動きができんねん」

龍士「まあこれでも武道派黒澤組の枝組織ですから」

鬼頭「三次団体におんのが不思議なくらいや」

龍士「黒澤の叔父貴に助けられました、まだ親父に恩を返してませんから、それに今から黒澤の叔父貴に世話になるなんて出来ませ

ん」

鬼頭「いいわくその古臭い考え、俺好みやあ！」

鬼頭が左のローを放ち龍士はそれを姿勢を下げ右手で受け止める、すると蹴りを上段に切り替え替えたそれも右手で止めるそして右手のジャブは顔をそらして避け拳を引き避けた先にまたジャブを放つ、それを左手で弾き裏拳を打つ

鬼頭「甘えでえ！」

それを姿勢を低くして避け腹に頭突きを放つ、それを見た龍士は右手で受け止める、鬼頭はそのまま龍士に抱きつくそして後ろに脚を上げ龍士の顔に蹴りを入れようとする、それを右手で弾くと鬼頭は直ぐに脚を戻すと同時に体を掴んでいる手を離しそのままサマーソルトに移る

龍士「っ！」

龍士は横に避けると鬼頭が直ぐにこちらに裏拳を放つ、龍士はそれを避けるとそこに回し蹴りが来る、身を屈め避けそしてそこに鬼頭の後ろ回し蹴りが頭に迫る、それを腕で防ぐと鬼頭はそのまま拳を振り下ろす、龍士はそれをダッキングで避けるとそのまま鬼頭の顎に向かってアツパーを入れた

鬼頭「ぐおおお!!」

そのまま頭を上に入れられ地面に叩きつけられた、龍士はそこに追撃に顔面に下段突きを入れようとする、それを見た鬼頭は顔を横に避けると拳が地面に突きささる、凄まじい音とともに地面にヒビが入るが鬼頭はその腕に脚を絡めそのまま三角十字固めを行う、だが龍士はそのまま腕を無理矢理振りかぶり鬼頭を投げ飛ばした

鬼頭「うおおお!」

そして投げ飛ばした鬼頭に走って追い付きそのまま顔面に体重を乗せたフックを放ってきた、鬼頭は空中のまま受け止めようとするが自分の手越しに殴り飛ばされ地面に叩きつけられる、だが鬼頭はまた起き上がってくる

鬼頭「え、ええパンチや」

龍士「なんであんだ起き上がるんだよ」

アツパーを喰らってしかも手で防いでいたとはいえ龍士のフックを入れられたのに何で立てるのか不思議だ

鬼頭「まだまだ行くでえ！」

龍士「まだ来んの？」

姿勢を低くしながらこちらに駆け寄ってくる、そしてそのまま下から顔に向けてフィンガージャブを放ってくる、それを避け様に拳を鬼頭の顔に振りかざす、鬼頭は後ろに頭を横にやりよけそのまま顔に膝蹴りを放ってきた、それを脚払いで崩させ鬼頭を倒すとそのまま顔に蹴りを放つが鬼頭は後ろに転がりまたダンスの要領で蹴りを入れてくる、龍士はそれを受け止め弾き飛ばす

龍士「おんらああ!!!」

古牧流 弾き返し

脚が吹き飛ばされバランスが崩れる、脚が地面に叩きつけられたと同時に鬼頭の顔に蹴りを入れられた、蹴飛ばされそのまま追撃に腹に蹴りを入れられた飛ばされる、鬼頭は何とか立ち上がろうとするが蹴りを入れられたせいか少しふらついているそこに蹴り上げられ顔を無理矢理上げられる、そして肩を掴まれ頭を振りかぶりそのまま頭突きを入れ地面にまた叩きつけた

鬼頭「い、いい頭突きやな」

龍士「あんたまじ、しつこいぞ」

そう鼻から血を流しながらこちらに笑みを見せる鬼頭、龍士はそれを気持ち悪がったが手を差し伸べた、鬼頭はそれを見ると起き上がり手を取り起き上がった

鬼頭「久々にええ喧嘩が出来たわ」

龍士「自分もです、流石に兄貴並にしぶとい人は中々いませんでしたから」

鬼頭「いやあくええ攻撃やったわ、やっぱり司波ちゃんと喧嘩するのは楽しいな」

ニヤニヤしながら喋っているが鼻血を出しながら喋っていて何だ

か怖い

鬼頭「どうや嬢ちゃん、参考になったか？」

女「ひい!？」

龍士「あの鬼頭の兄さん？流石に怖がっちゃいますから…」

鬼頭「おお、そうやな」

鬼頭が手を叩くと遠くから人が鬼頭に駆け寄りタオルを渡してくるそれを受け取ると鼻を拭く、どうやら組員が近くにいたようだ

女「あ、は、はい、参考になりました」

龍士（あれが参考になるのか？）

正直何の参考になるのかわからないがまあそうならそれでいいのだが

鬼頭「くそおまた負けてもうた、次は絶対に勝つからな！」

龍士「え？ちよつと？」

こちらに指を指しながら鬼頭は去っていった、やるだけやつといて

龍士「あの人相変わらずだな」

女「あ、あの」

あの女性から声をかけられた

女「ありがとうございます、やはりヤクザの本場の喧嘩は違いますね」

龍士（そりやそうだろ）

今のご時世こんな派手な喧嘩することも出来ないしたら警察沙汰だ、だがこの街では警察に通報するよりその場で見て煽り立てる奴しかないのでこんなことが出来るわけだが

龍士「と言うかヤクザで参考になるのは組織図とか専門用語だろ、喧嘩なんて対してやくに立つわけないのに」

だいたい調べるのならそこら辺が妥当だろう、喧嘩はその専門の人が考えるわけだし見ても感想しかでないだろう

女「そうでした！すっかり忘れてました」

龍士「え？」

女「それ教えてください！お願いします！」

龍士「今から!？」

スマホの時計を見るともう深夜を回っている、それに場所が場所だから警察もいるだろうし見つかったら終わりだ

龍士「今からは、無理だな」

女「そ、そこを何とか」

そう一生のお願いみたいな頼み方をされる龍士、ため息をつく、すると女性のスマホが鳴り出した

女「はい、私です、すみません、いま戻ります」

龍士（よかった、やっと解放される）

そう安堵をしたのもつかの間、目の前にいる女性が紙を取り出しなにかを書きこちらの前に出してきたのだ

女「これ、私の連絡先です」

龍士「は？」

女「私暇なときここに顔を出しますので見つけたらまた聞かせてください！それでは」

龍士「は？おい！」

まるでミサイルのように何処かへ消えてしまった女性、龍士はこめかみに怒りが浮かびあがった

龍士「どいつもこいつも、わからねえ奴だわ」

そう紙をくしゃくしゃにした気持ちは抑えポケットに入れ酒を飲んで忘れるために行きつけの居酒屋に行くことにした

サブストーリーリーNO. 63 鬼の未来

未来「こんばんわ峰さん」

響「こんばんわー！」

店の中に元気ないつもの二人が入ってくる、制服じゃなく私服であるように、響はオレンジの明るい色、未来は落ち着いた色が中心みただ

峰「おう、らっしやい」

いつも通りに声をかける、二人はカウンター近くに座ると峰が近くによる

峰「いつもの？」

未来「はい、いつものでお願いします」

それを受け早速準備にかかる、まず麺を湯につけ茹で上がる間スープ作りと餃子の下準備、そして炒飯を作り始める、いつも通りに作り始めるとまた誰かぎ入店してきた

峰「へい！らっしやい！」

女「どうも〜」

人数は二人で二人とも女性だ、そしてその女性は峰の方を見ると目を見開き指を指した

女「あー！やっぱり峰さんだー！」

女「ほんとだ」

峰「水越ちゃんたちじゃん、どうしたの今日は？」

どうやら知り合いのようだ

水越「峰さんが店開いてるって聞いたから来ちゃったぞ☆」

古地「ホントにこんな場所で開いてたんだ」

峰「うぐ」

それを聞いた峰は心に少しばかりのダメージを受けてしまう

峰「はは、まあ座って」

水城「はーい」

そう言う二人もカウンターに座りニヤニヤしながら峰を眺めている

峰「ご注文は？」

水城「何にする？」

古地「私醤油派だけど、オススメ何ですか？」

峰「豚骨と塩ラーメンに、そうだなレモン豚骨ラーメンとかどうかな？」

水城「あ！それ食べてみたい！」

古地「んじゃそのレモン豚骨二つと餃子二つお願いします」

峰「あいよ」

それを受けまずは未来たちの注文を片付ける、餃子と炒飯が出来たので響たちの前に置きラーメンを湯から上げている時に未来から声をかけられる

未来「…あの」

峰「どしたの？」

未来「あの人たちとはどういう」

峰「ああ彼女たちは俺がよく行くキャバクラの子達、かわいいでしょ？」

それを聞いた未来の目から光が消え謎の威圧が出てくる、何故だがわからないがそれを感じた瞬間未来の方を見てられなくなった

未来「へえ、そうなんですか」

峰（あ、あれ、何か寒気が）

響（や、やばいよこれ、未来が怒ってる！）

峰は必死に顔をそらし、響は隣に般若が現れたことに恐れ、キャバの二人はそれに気づかず峰を眺めている

未来「……」

峰（なんだろう、キャバの子が来たあと何かものすごく怖いんだけど）

水城「おいしーレモン豚骨とか初めて食べた」

古地「意外と行けますね、また来る？」

水城「いいねそれ、次はさもつと連れてこない？」

未来 ピクピク

響（はわわわ、まずい、未来レベルが上がっていく!?)

未来レベル15

峰（どうしよう、話題でも降るか?）

1 理由を聞く

峰（ちよつと聞いてみるか）

怖いが本人に聞かないとわからない

峰「あのく、未来ちゃん？」

未来「何ですか？」

峰「いやさ、何か機嫌悪そうだけど、大丈夫？」

ピク

未来「それって、言わなきや駄目ですか？」

峰「いやあの」

未来「言わなきや駄目ですか？」

峰「いえ、そのまま結構です」

峰（ま、間違えたな、怒らせてしまった）

響（ひえく怖いよく）

水城「ねえねえ峰さん今日来るー?」

峰「今日は来ないかな、ちよつと予約を入れてる団体さんがいてね」

水城「えくそれじゃ明日は?」

峰「明日は、どうだろ、暇だけどあんまり持ち合わせが」

未来「明日は私とお買い物ですもんね」

峰「え? いや」

未来「そうですよね?」

峰「は、はい」

峰（何か勝手に約束が出来てしまった、どうしよ）

水城「〜♪〜♪」

未来「……」

未来レベル35

峰（まだ不機嫌だ、どうすりやいいんだ）

水城「そうだ峰さん、次来たらさ私とアフターしない？いいお店知ってるんだ〜」

峰「ん〜そうだな」

峰（流石に断ろうか）

峰「いや〜ちよつと仕込みがあつて無理かな〜」

水城「え〜そんな〜」

峰「ごめんごめん、また今度ね」

水城「仕方ないなく峰さんは」

そう言うのと二人は食べ終わつたのか立ち上がる、峰はレシートを二人の前にやると水城と古地がそれぞれ半分ずつだした

水城「んじやまた来るね〜」

古地「失礼しました」

そう言うのと二人は入り口から出ていった

未来「……」

響（少し機嫌はよくなったかな）

峰（う〜ん根本的な解決になつてないような、どうすりやいいんだ？）

そう考えながら未来の機嫌をどう取ろうか考えていると外から声が聞こえてきた

水城「ちよつと離してよ！」

峰「ん？」

響「この声」

その声を聞いた峰は直ぐにカウンターから出て入り口に向かい外に出る

男「いいから来い！」

水城「離してよ！誰よあんたら！」

古地「警察呼びますよ？」

二人の男がさっきの二人の腕を無理に掴んでいる、そこに峰が割つて入る、それと同時に響たちも入り口から出てきた

峰「そこまでだ」

その声を聞いた男たちは峰の方を見る、すると女の手を乱暴に離し峰に詰め寄った

男「おう、前は世話になったな」

峰「：何の話で？」

男「とぼけんな！お前が邪魔したせいでみかじめ取れなかったじゃねえか！」

峰「店の人が可哀想だったからね、人として助けてやっただけだよ？それなあんたら大政の所でしょ？宮本組でもないのなシマ荒らしちや駄目でしょ」

男「うるせえ！覚悟しやがれ」

峰「仕方ないな、下がってて」

周りにそう言い下がらせ目の前のヤクザに向けて構えた

「……ヤクザ……」

ヤクザが大きく振りかぶり殴ろうとする、峰はそれを手で流し顔を殴り付けようとするが隣から別の奴の拳が迫ってきたので一旦やめそれを腕で受け止めそのまま顔にフックを入れた

？「ぶ！」

相手はそれでふらついている所に下段蹴りを入れ膝を折らせるとそのまま顔に向けて後ろ回し蹴りを入れた、すると流した相手が後ろから殴りかかる峰はそれを確認すると身を屈め振り向き様に腹にストレートを入れた

？「かはっ!？」

峰はそのまま腹に膝蹴りを入れそして下がっている頭に拳を振り下ろした、相手は地面に叩きつけれる

峰「終わりっつと」

ヤクザ「く、くそお」

峰「もう来ないでよ、これ以上来たら次は容赦しないよ」
ヤクザ「っ！」

悔しそうに顔を見ると二人はフラフラしながら帰っていった、それを見届けた水城たちが駆け寄った

水城「さっすが峰さん！もうホントに惚れちゃいそう」

古地「ありがとうございます」

峰「いやそれ程でもないよ、怪我はない？」

水城「うん大丈夫、峰さんは？」

峰「ほぼ流してたから平気だよ、ごめんね変な事に巻き混んで」

二人は頭を横に振る

水城「悪いのはあいつらなんだから気にしないの」

古地「そうですよ、気にしないでください」

峰「そうか、次何か会ったら言っただけね、飛んでくるからさ」

水城「え！ホントに！」

峰「迷惑かけたお礼」

水城は連絡先が手に入ったのが嬉しいのかピョンピョン跳ね嬉しそうにし古地も笑みを浮かべている、一方未来は頬を膨らましそれを羨ましそうに見ており響はそれをなだめている

響「ほ、ほら未来、あれは峰さん悪くないし」

未来「わかってるもん」

響（これは怒っていると言うより純粹に羨ましいだけかな）

そう頬をかき安堵する響、峰の方は水城たちと別れた後こちらに駆け寄る

峰「ごめんね騒がせちゃって」

響「別に大丈夫ですよ、ね未来」

未来「…うん」

だが未来の方は何か考えているのか下を向いている、そして顔を上げ峰を見ると彼に近寄る

未来「峰さん、確か人手が足りないとか言っていましたよね？」

峰「え？確かに言ったけど」

未来「なら私を雇って下さい！」

峰「うえ？」

峰はそれを聞き困惑する、どうしようかとそわそわと左右を見て考えたがやはりどうかと思いい未来にそれとなく伝えてみようとした

峰「いやでも、うちはだいたい夜のお客が多いし、それに酒を頼む人が多いから」

未来「だ、大丈夫です、ちゃんと働きます」

峰「そう言うことじゃなくてだね、めんどくさい人もいるし、それにこころじゃ通うのに遠いんじゃない？」

峰は遠回しに断ろうとする、だがそれは未来の奥の手で弾かれる事になる、未来は目元に涙をため上目遣いで峰を見上げた

未来「うう、駄目ですか？」

峰「いや、えっと」

何だか断っている自分が悪く感じたが流石に働かせる訳にはいかない

峰「ほ、ほら、労働基準法もあるし、夜遅くまでやらせるわけには」

未来は顔を下げ手を顔に当て声を漏らし始めた

未来「だって、峰さんがいいもん」

峰（ぐぬ）

これも峰はたまらずに折れる事にした

峰「：お昼だけなら」

未来「ほんとですか!？」

峰「まあ夜は無理だけど、お昼なら」

それを聞いた未来は嬉しそうに笑いながら峰の手を掴んで縦に勢いよく振っている、それを見た響は苦笑いしながらみていた

響「未来も以外と現金だな」

そうして未来は休日の昼だけではあるが働くことになった